山形県埋蔵文化財センター調査報告書第223集

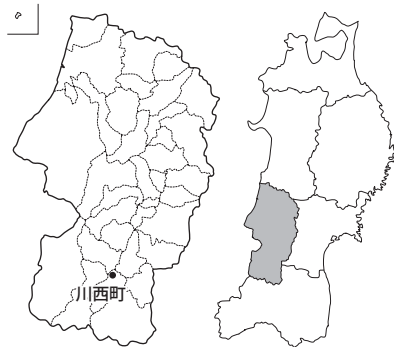
元宿北遺跡発掘調査報告書

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

元宿北遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 223 集



2015

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

もとじゅくきた

元宿北遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 223 集

平成 27 年

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

遺跡遠景（北から）

SD1 河川跡遺物出土状況（東から）

SD1 河川跡出土須恵器

須恵器円面硯・墨書土器

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、元宿北遺跡の調査成果をまとめたものです。

元宿北遺跡は、山形県南部の置賜地方に位置する川西町にあります。川西町は置賜の米どころの一つで、国史跡の下小松古墳群などの著名な古墳や、平安時代の置賜地方の郡衙と考えられる道伝遺跡などがあり、古くからこの地が開発されていたことがうかがわれます。

遺跡は川西町西大塚に位置し、最上川に合流する元宿川の東岸に立地し水田地帯となっています。周囲の遺跡には大塚城など中世の城館跡が多く分布し、古代から中世の複合遺跡である治兵衛館遺跡がすぐ南に立地します。

この度、一般国道113号梨郷道路事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、元宿北遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、奈良・平安時代の河川跡、井戸跡、竪穴状遺構、土坑などが検出されました。河川跡を中心に8世紀後葉を主体とする須恵器がまとまって出土しました。また円面硯が3点出土し、周辺に官衙や寺院に関連する施設の存在が想定されます。中世では、井戸枠が良好な状態で残存した井戸跡が確認され、曲物や陶器などの遺物が出土しました。調査事例が少なかった当地方の鎌倉時代の様相を把握することができるなど、多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　菅野　滋

凡　例

1　本書は、一般国道113号梨郷道路事業に係る「元宿北遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日に財団法人から移行）が実施した。

4　本書の執筆は、菅原哲文・髙柳俊輔が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、伊藤邦弘、斉藤敏行、須賀井新人が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SK…土坑　SD…河川跡・溝跡　SE…井戸跡　SP…ピット　SX…性格不明遺構

RP…登録土器　RQ…登録石器　RW…登録木製品　RM…登録金属製品

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

8　遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、拓影断面図の配置は左から内面・外面の順に掲載した。

9　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

10　発掘調査、整理作業および本書を作成するにあたり、下記の方々から御指導と御助言をいただいた。（敬称略）

新潟県埋蔵文化財調査事業団　髙橋保　春日真実　新発田市教育委員会　田中耕作　鶴巻康志

米沢市教育委員会　佐藤智幸　佐藤公保　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　中原義史　中川佳三

木村孝一郎　福井県一乗谷朝倉氏遺跡資料館　櫛部正典　山形考古学会　川崎利夫

11　本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章　菅原哲文・髙柳俊輔

第Ⅱ章　菅原哲文

第Ⅲ章　第1節　菅原哲文・髙柳俊輔

第Ⅲ章　第2～4節　菅原哲文

第Ⅳ章　第1節　パレオ・ラボAMS年代測定グループ

第Ⅳ章　第2節　小林克也（パレオ・ラボ）

第Ⅳ章　第3節　株式会社吉田生物研究所

第Ⅳ章　第4節　株式会社東都文化財保存研究所

第Ⅳ章　第5・6節　パリノ・サーヴェイ株式会社

第Ⅴ章　菅原哲文

調査要項

遺跡名	元宿北遺跡						
遺跡番号	382 ー 193						
所在地	山形県東置賜郡川西町大字西大塚字元宿北						
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所						
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター						
受託期間	平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日						
	平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日						
現地調査	平成 25 年 5 月 20 日～9 月 20 日						
調査担当者	平成 25 年度	調査課長	斉藤敏行				
		考古主幹	伊藤邦弘				
		主任調査研究員	菅原哲文（調査主任）				
		調査員	髙柳俊輔				
	平成 26 年度	整理課長	伊藤邦弘				
		主任調査研究員	菅原哲文（整理主任）				
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課						
調査協力	川西町教育委員会						
	山形県教育庁置賜教育事務所						
	大塚地区交流センター「治平館」						
	北斗幼稚園						
業務委託	基準点測量業務　有限会社大地測量設計事務所（平成 25 年度）						
	地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務　株式会社パスコ（平成 25 年度）						
	理化学分析業務　株式会社パレオ・ラボ（平成 25 年度）						
	理化学分析業務　パリノ・サーヴェイ株式会社（平成 26 年度）						
	遺物（木製品）保存処理業務　株式会社吉田生物研究所（平成 25・26 年度）						
	遺物（木製品・金属製品）保存処理業務　株式会社東都文化財研究所（平成 26 年度）						
発掘作業員	井上芳子	歌丸美津夫	江袋伸一	大武繁	小倉幸次	金子雄一	菅野孝作
	小関雅彦	小林宏	紺野輝子	齋藤公一	齋藤政彦	佐藤哲朗	佐藤昌一
	佐藤美秋	島貫三喜男	東海林桂子	髙橋和夫	髙橋貞夫	竹田國夫	武田孝
	二宮民夫	橋田慶子	長谷部勝廣	長谷部健	船山健	舟山たみ子	前柳長栄
	渡部健一						（五十音順）
整理作業員	鏡幸枝	小林美喜	林真世	堀浩子			
							（五十音順）

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経緯……1
　2　発掘調査の経過と方法……1
　3　整理作業の経過……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……2
Ⅲ　遺構と遺物
　1　遺跡の概要と層序……9
　2　奈良・平安時代の遺構と遺物……9
　3　中世・近世の遺構と遺物……12
　4　その他の時期の遺物……16
Ⅳ　理化学分析
　1　放射線炭素年代測定（1）……70
　2　出土木製品の樹種同定（1）……72
　3　出土木製品の樹種同定（2）……74
　4　出土木製品の樹種同定（3）……80
　5　放射性炭素年代測定（2）……82
　6　須恵器・中世陶器の胎土分析……83
Ⅴ　調査のまとめ……92

報告書抄録　　巻末

表

表1　遺跡地名表1……7
表2　遺跡地名表2……8
表3　須恵器・土師器観察表1……62
表4　須恵器・土師器観察表2……63
表5　須恵器・土師器観察表3……64
表6　須恵器・土師器観察表4……65
表7　陶磁器・土製品観察表1……65
表8　陶磁器・土製品観察表2……66
表9　木製品観察表1……66
表10　木製品観察表2……67
表11　木製品観察表3……68
表12　木製品観察表4……69
表13　金属製品観察表……69
表14　石製品観察表……69
表15　測定試料および処理……70
表16　放射線炭素年代測定および暦年較正の結果……71
表17　木製品樹種同定1……72
表18　木製品樹種同定2……74
表19　木製品樹種同定3……81
表20　放射性炭素年代測定……83
表21　暦年較正結果……83
表22　胎土分析試料一覧……84
表23　ガラスビード作成条件……84
表24　蛍光X線装置条件……84
表25　蛍光X線定量測定条件……84
表26　蛍光X線分析結果……86

表 27 剥片観察結果 …… 87
表 28 SD1 出土須恵器・土師器重量 …… 97
表 29 SD1 出土須恵器・土師器出土点数 …… 97

図　版

第 1 図　調査区概要図 …… 4
第 2 図　地形分類図 …… 5
第 3 図　遺跡位置図 …… 6
第 4 図　遺構配置図 …… 17
第 5 図　遺構配置詳細図 1 …… 18
第 6 図　遺構配置詳細図 2 …… 19
第 7 図　遺構配置詳細図 3 …… 20
第 8 図　遺構配置詳細図 4 …… 21
第 9 図　調査区基本層序 …… 22
第 10 図　調査区基本層序・SD1 河川跡断面 …… 23
第 11 図　SD1 河川跡 …… 24
第 12 図　SD1 河川跡断面図・遺物分布図 1 …… 25
第 13 図　SD1 河川跡遺物分布図 2 …… 26
第 14 図　SX3 竪穴状遺構 …… 27
第 15 図　SE4 井戸跡・SD8 溝跡 …… 28
第 16 図　SE7 井戸跡遺物平面図 …… 29
第 17 図　SE7 井戸跡平面図・断面図 …… 30
第 18 図　SE7 井戸跡立面図（東面・北面） …… 31
第 19 図　SE7 井戸跡立面図（西面・南面模式図） …… 32
第 20 図　SE9 井戸跡・SK5・6・9・10 土坑 …… 33
第 21 図　SK17 ～ 20 土坑 …… 34
第 22 図　SK21 ～ 23・25 土坑 …… 35
第 23 図　SP11 ～ 16・24 柱穴 …… 36
第 24 図　SD1 河川跡出土須恵器 …… 37
第 25 図　SD1 河川跡出土須恵器・土師器 …… 38
第 26 図　SD1 河川跡出土須恵器 …… 39
第 27 図　SD1 河川跡・SX3 竪穴状遺構・SD8 溝跡出土須恵器・土師器・陶器 …… 40
第 28 図　SD4・7 井戸跡・SK5 土坑出土須恵器・土師器・陶器 …… 41
第 29 図　SE7・9 井戸跡・SD8 溝跡・SK18・20・23・25 土坑出土須恵器・土師器・陶器 …… 42
第 30 図　SK25 土坑・遺構外出土須恵器・土師器 …… 43
第 31 図　遺構外出土須恵器・土師器・陶磁器 …… 44
第 32 図　遺構外出土陶磁器・土器・土製品 …… 45
第 33 図　SE7 井戸跡出土木製品（曲物） …… 46
第 34 図　SE7 井戸跡出土木製品（曲物） …… 47
第 35 図　SE7 井戸跡出土木製品（曲物） …… 48
第 36 図　SE7 井戸跡出土木製品（曲物・加工材・板材） …… 49
第 37 図　SE7 井戸跡出土木製品（板材・井戸枠材） …… 50
第 38 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 51
第 39 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 52
第 40 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 53
第 41 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 54
第 42 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 55
第 43 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 56
第 44 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 57
第 45 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 58
第 46 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材） …… 59
第 47 図　SE7・9 井戸跡出土木製品（井戸枠材・板材） …… 60
第 48 図　金属製品・石製品・参考資料 …… 61
第 49 図　各試料の暦年較正結果 …… 71
第 50 図　木製品の光学顕微鏡写真 1 …… 73
第 51 図　木製品の光学顕微鏡写真 2 …… 75
第 52 図　木製品の光学顕微鏡写真 3 …… 76
第 53 図　木製品の光学顕微鏡写真 4 …… 77
第 54 図　木製品の光学顕微鏡写真 5 …… 78
第 55 図　木製品の光学顕微鏡写真 6 …… 79
第 56 図　木製品の光学顕微鏡写真 7 …… 80
第 57 図　木製品の光学顕微鏡写真 8 …… 81
第 58 図　胎土化学組成散布図 …… 86
第 59 図　中世陶器胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成 …… 88
第 60 図　中世陶器胎土の破屑物・基質・孔隙の割合 …… 88
第 61 図　胎土剥片顕微鏡写真 …… 89
第 62 図　時期別遺構分布 …… 95
第 63 図　須恵器の出土重量分布 …… 96
第 64 図　土師器の出土重量分布 …… 96
第 65 図　中世陶磁器の出土重量分布 …… 97
第 66 図　SD1 出土須恵器・土師器・遺跡内出土中世陶磁器集成図 …… 99

写真図版

巻頭写真 1　遺跡遠景・SD1 河川跡遺物出土状況
巻頭写真 2　SD1 河川跡出土須恵器・須恵器円面硯・墨書土器
写真図版 1　遺跡遠景・調査区全景
写真図版 2　1 区調査状況・北西壁断面・井戸枠取上げ作業
写真図版 3　1 区遺構検出状況・1 区 SD1 河川跡検出状況
写真図版 4　1 区完掘状況・1 区東側完掘状況
写真図版 5　2 区 SD1 河川跡検出状況・1 区北西壁断面
写真図版 6　1 区 SD1 河川跡南側断面・RP 出土状況
写真図版 7　1 区 SD1 河川跡遺物出土状況
写真図版 8　1 区 SD1 河川跡遺物出土状況・完掘状況
写真図版 9　1 区 SE4 井戸跡断面
写真図版 10　1 区 SE4 井戸跡・SX3 竪穴状遺構完掘状況・遺物出土状況
写真図版 11　1 区 SE7 井戸跡断面・井戸跡内木製品出土状況
写真図版 12　1 区 SE7 井戸跡曲物・RW103 出土状況
写真図版 13　1 区 SE7 井戸跡完掘状況・西面井戸枠
写真図版 14　1 区 SE9 井戸跡断面・完掘状況
写真図版 15　1 区 SE7・9 井戸跡完掘状況・SK5 土坑
写真図版 16　1 区 SK19・20・21・23 土坑・SK11 土坑砥石出土状況
写真図版 17　SK25 土坑・SP11 ～ 16 柱穴
写真図版 18　SP24 柱穴・1、2 区 RP 出土状況
写真図版 19　SD1 河川跡出土須恵器
写真図版 20　SD1 河川跡出土須恵器
写真図版 21　SD1 河川跡出土須恵器
写真図版 22　SD1 河川跡・SX3 竪穴状遺構・SD8 溝跡出土須恵器・土師器・陶器
写真図版 23　SE4・7 井戸跡・SK5 土坑出土須恵器・土師器・陶器
写真図版 24　SE7・9 井戸跡・SD8 溝跡・SK18・20・23・25 土坑出土須恵器・土師器・陶器
写真図版 25　SK25 土坑・遺構外出土須恵器・土師器
写真図版 26　遺構外出土須恵器・土師器・陶磁器
写真図版 27　遺構外出土陶磁器・土器・土製品
写真図版 28　SE7 井戸跡出土木製品（曲物）
写真図版 29　SE7 井戸跡出土木製品（曲物）
写真図版 30　SE7 井戸跡出土木製品（曲物）
写真図版 31　SE7 井戸跡出土木製品（曲物・加工材・板材）
写真図版 32　SE7 井戸跡出土木製品（板材・井戸枠材）
写真図版 33　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 34　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 35　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 36　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 37　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 38　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 39　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 40　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 41　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）
写真図版 42　SE7・9 井戸跡出土木製品（井戸枠材・板材）
写真図版 43　金属製品・石製品

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

元宿北遺跡は、一般国道113号梨郷道路事業ににより、平成24年度の遺跡詳細分布調査で確認され登録された遺跡である（山形県教委2014）。梨郷道路は、長井市今泉を起点とし南陽市竹原に至る7.2kmの自動車専用道路で、地域高規格道路「新潟山形南部連結道路（延長約80km）」の一部として計画され、長井市内の今泉交差点の渋滞緩和や事故削減、地域間交流の促進や置賜地方の活性化等の効果が期待される。

調査に至る経緯であるが、事業区内の「可能性地４」を県教育委員会が平成24年11月22日・12月５日に試掘調査を実施した。設定した10本の試掘トレンチの内、３本から溝跡や小柱穴群などの遺構が確認され、奈良・平安時代の須恵器・土師器等の遺物が出土したことから、当該期の集落跡であることが明らかになり遺跡登録された。遺跡の扱いについて関係機関と調整を行った結果、事業区内について記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが国土交通省山形河川国土事務所より委託をうけ、平成25年度に実施した。

2　発掘調査の経過と方法

発掘調査の経過について述べる。調査区は、遺跡にかかる事業区内の3,000㎡が対象である（第１図）。調査区北側の水田・畑地に地権者が出入りする道路を確保する必要があり、この部分を２区として後半に調査することとし、最初に調査を実施する部分を１区とした。発掘調査は、平成25年５月20日より開始した。重機により１区の表土除去を５月22日～５月29日の期間で実施し、併行して遺構の検出を進めた。

６月３日～７日に１区、８月26日に２区について委託業務により基準点測量と格子杭の設置を実施した。グリッド（地区割り）の設定は、世界測地系を基に、平面直角座標系第Ｘ系：Ｘ＝－216576.000、Ｙ＝－67176.000を原点Ｘ＝Ａ、Ｙ＝０とし（Ａ－０）、南北軸（Ｘ軸）は南から北へ、東西軸（Ｙ軸）は西から東へ、４ｍ毎に昇順でアルファベットとアラビア数字でグリッド番号を割り当てた（第１図）。

検出された遺構は、番号を登録後精査を行い、必要に応じて平面・断面図の作成を行った。併行して主にデジタルカメラと一部中判カメラによる写真撮影を実施した。調査区西側は旧河川跡と考えられるSD1が検出され、東岸を中心に須恵器がまとまって出土した。また、１基の古代の井戸跡SE4、２基の中世の井戸跡SE7・９が検出された。８月９日に１区の空中写真撮影を実施した。８月10日に発掘調査説明会を開催、30名の方が参加した。残っていた道路部分の２区は、８月20～23日より表土の掘削を行い調査に着手した。SD1河川跡の南側の続きが確認された。２区で検出された遺構の精査や、１区の井戸跡の精査を進め、９月12日に２回目の空中写真撮影を実施した。現地調査は９月20日に終了した。

3　整理作業の経過

平成25年は、発掘調査終了後、出土遺物の洗浄、注記、接合・復元、木製品や須恵器・土師器の一部実測を行った。注記は、遺跡名･地区･出土遺構と層位、出土グリッドを記載した。また保存処理が早急に必要な曲物などの木製品の保存処理を委託した。また、新潟県埋蔵文化財センターで土師器の資料比較検討を、新発田市教育委員会にて中世陶器を中心に資料比較検討を行った。

平成26年は、残った遺物の実測図作成と拓本作成を完了し、木製品・金属製品の保存処理を業務委託した。また、遺物の年代測定、樹種同定、胎土分析など理化学分析を業務委託した。掲載遺構と遺物実測図はデジタルトレース作業を行い図版編集を行った。遺物は主にデジタルカメラで写真撮影を実施し写真図版を版組した。また米沢市教育委員会にて大神窯跡出土須恵器の資料比較検討、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで越前焼の資料比較検討を実施した。遺構・遺物の分析を進め報告書の文章を執筆し、平成27年３月に報告書を刊行した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

川西町が所在する米沢盆地は、東部は奥羽山脈に属する豪士山、駒ヶ岳や栗子山、西部は飯豊連峰よりゆるやかに連なる玉庭丘陵、南部は吾妻山系、北部は南陽市の山々によって挟まれた断層陥没盆地である。その形状は、北に広く開き、南に狭い菱形状で周囲の山々と接している。南北の長さは約 24km、幅は北部で約 18km、南部で約 6 km である。中央部を、吾妻連峰を源とし米沢、山形、新庄の各盆地を抜け、庄内平野を流れ日本海へと注ぐ最上川が北上し、広大な後背低湿地は古くから豊かな穀倉地帯となっている。町の面積は 166.46 km²、人口は約 1 万 6 千人、主な産業は豊かな自然を利用した農業が盛んで、庄内平野に次ぐ米どころである。良質な米ときれいな水から生まれる地酒や、米沢牛の生産も高く評価されている。町内の「川西ダリヤ園」は、10 万本のダリヤを咲かせ、観光の名所となっている。歴史的遺産としては、古墳時代前期の前方後方墳で著名な天神森古墳や、200 基におよぶ群集墳により構成される下小松古墳群（2000 年に国指定史跡）があり今後の史跡としての活用が注目されている。

元宿北遺跡は、川西町中心部から約 5km 北西の、西大塚字元宿北に所在する。標高は 206 m を測り、松川と元宿川との間に形成された低地の谷底平野に立地する。遺跡の西側 100m には、元宿川が北流し、北へ 1 km の地点で松川に合流する。遺跡および周囲は水田となっている。

2　歴史的環境

元宿北遺跡が所在する川西町は、旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が分布している。

旧石器時代では、尼カ沢遺跡・千松寺遺跡が確認されている。旧石器時代後期である。

縄文時代であるが、下小松に所在する千松寺遺跡は、県内でも検出例が少ない縄文時代早期の住居跡が検出されている。その他、尼カ沢遺跡・塩ノ沢遺跡・平谷地遺跡などが確認されている。一方、弥生時代の遺跡については、町内でまだ確認されていない。

古墳時代に入ると、前期では米沢盆地平野部に比較的大型の古墳が分布するようになる。米沢盆地中央に位置する前方後方墳の米沢市宝領塚古墳、盆地北部の南陽市には前方後円墳の稲荷森古墳、川西町では前方後方墳の天神森古墳が築かれる。川西町西部の玉庭丘陵には 6 支群約 200 基にわたる大古墳群である下小松古墳群が存在する。古墳時代前期の永松寺支群、中期の鷹待場支群・薬師沢支群・尼カ沢支群、後期の小森山支群・陣が峰支群が継続して築造されている。町では明治大学の協力を得て継続的に調査を実施している。7 世紀から 8 世紀初めになると、高畠を中心とする東部で横穴式石室をもつ古墳が築造され続ける。黒川左岸の低位段丘上には穴塚墳丘群がある。未調査のため詳細は不明であるが、終末期古墳の可能性も考えられている。

町内の古墳時代集落跡であるが、治兵衛館遺跡で前期から中期の 4 棟の竪穴住居跡が検出された（川西町教委 1999）。後期では、太夫小屋 2 遺跡で竪穴住居跡 37 棟が検出された。内 21 棟からは炭化材や焼土が確認され焼失住居と考えられる。祭祀遺構からは手捏ね土器やミニチュア土器がまとまって出土した（山形県埋文 2001）。他に後期ではカノウ壇遺跡がある。

置賜の地名が所見されるのは、日本持統天皇三年条（689）の「陸奥国優嗜雲郡城養蝦夷脂利古男麻呂云々…」で、その内容から 7 世紀後半段階において、ある一定規模の城柵あるいは郡衙の存在が推定される。奈良・平安時代では、本遺跡から南西 2.5km に、置賜郡衙の比定地の一つとして川西町下小松に所在する道伝遺跡がある。9 世紀後半から 10 世紀前半頃の置賜郡衙と考えられており、囲堯施設や大規模な建物群が検出され、風字硯のほかに大溝からは寛平 8 年（896）銘の木簡が出土している。中郡という旧村名は置賜郡に由来すると考えられている。また、南へ 5.5km には、筏地業を施した建物が検出された太夫小屋 1 遺跡がある。当遺跡は、8 世紀末から 9 世紀中頃における置賜地方の中心的官衙と

推定されている。布掘筏地業建物跡３棟、及び大型の礎板を敷設した掘立柱建物跡６棟を含む規則的配置をとる建物跡が 13 棟確認された。軟弱地盤における大型建物の沈下を防ぐ工夫と考えられる。円面硯 34 個体、風字硯 14 個体が出土し、県内最多の陶硯の出土数である（山形県埋文 2001）。本遺跡から北へ約 8.7km の丘陵には、８世紀中葉から須恵器を生産していた壇山窯跡・大神窯跡があり、10 基あまりの窯跡が確認されている。これらの窯跡で焼成された須恵器は、米沢盆地内の官衙関連遺跡から多く出土しており、置賜郡衙の官窯的な窯跡の可能性がある。また、北西約 2.4k mに加賀塚窯跡、北西約 2.6km には蛇崩窯跡がある。加賀塚窯跡は長井市教育委員会によって調査が行われ、９世紀第３四半期頃の操業と考えられている。蛇崩窯跡は県埋蔵文化財センターにより調査が実施され窯跡１基が検出された。９世紀後半の操業と考えられる（山形県埋文 2006）。

奈良・平安時代の集落跡では、本遺跡に近接する治兵衛館遺跡で９世紀代と考えられる竪穴住居跡、溝跡、土坑が検出されている。太夫小屋２遺跡では、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、太夫小屋３遺跡では竪穴住居跡２棟が確認され、８世紀後半から９世紀後半の時期になる。

中世に入ると、荘園経営の発展さらには武士の進出とともに農地の拡大がはかられていった。文治元年（1185）に源頼朝は平家を壇ノ浦で滅亡させた。平泉の藤原氏を奥州征伐で討ち奥羽を平定した。鎌倉幕府設立の功労者であった大江広元は出羽国寒河江の庄と長井郷（置賜）を与えられたとされる。長井郷は二男時広が領有し、長井氏を名乗った。鎌倉幕府滅亡後も、長井氏は足利氏の側近として代々室町幕府の要職につく。

天授６年（1380）陸奥伊達郡の領主、伊達宗遠は置賜へ侵攻しこの地域を制圧した。十五代晴宗の代に、天文 17 年（1548）九月に米沢城へ本拠を移した。伊達家の天文７年（1538）九月三日御段銭古帳には、川西町の各村落（大塚・上小松・下小松など）の名称が記載されている。晴宗公采地下賜録の天文 12 年（1584）下長井段銭帳には、伊達家臣の知行地が記載されている。文書には川西地区の郷村名に「さいけ」（在家）とついたところが数多くみられ、その名称が現在も地名に残っている所が多い。伊達氏の一般家臣は地頭として村に居住し百姓を支配した。地頭の所領は居住する居屋敷、在家、領地から成り立っていた。在家は、屋敷・田・畑をまとめての呼称であり、家の周囲を農業用水をかねた館堀で囲み、その中は大体一町歩程の面積があり菜園が含まれていた。

川西町内には多くの城館跡があるが詳細がわかるのは、伊達氏の時代である。長井氏以前は詳細不明が多い。

主な城館跡について述べる。川西町史によると林崎館は現在の大塚城に相当し、伊達氏の天文の乱以後に、功労者の重臣であった大塚将監が大塚下総守の知行の林崎館をつぎ、大塚氏を継いだとされる。城の規模は東西 120 間（216 m）、南北 80 間（144 m）にわたる。町指定文化財である牛谷家の門は、大塚城の大手門であったが、貞享３年（1686）牛谷氏が松森から現在のところに移った時、その大手門を移したものであるという。

洲島館は、東西 120 m、南北 150 m、現在も館跡として残り、畑・水田（幅 20 mの堀跡）、城主の記録が残る。

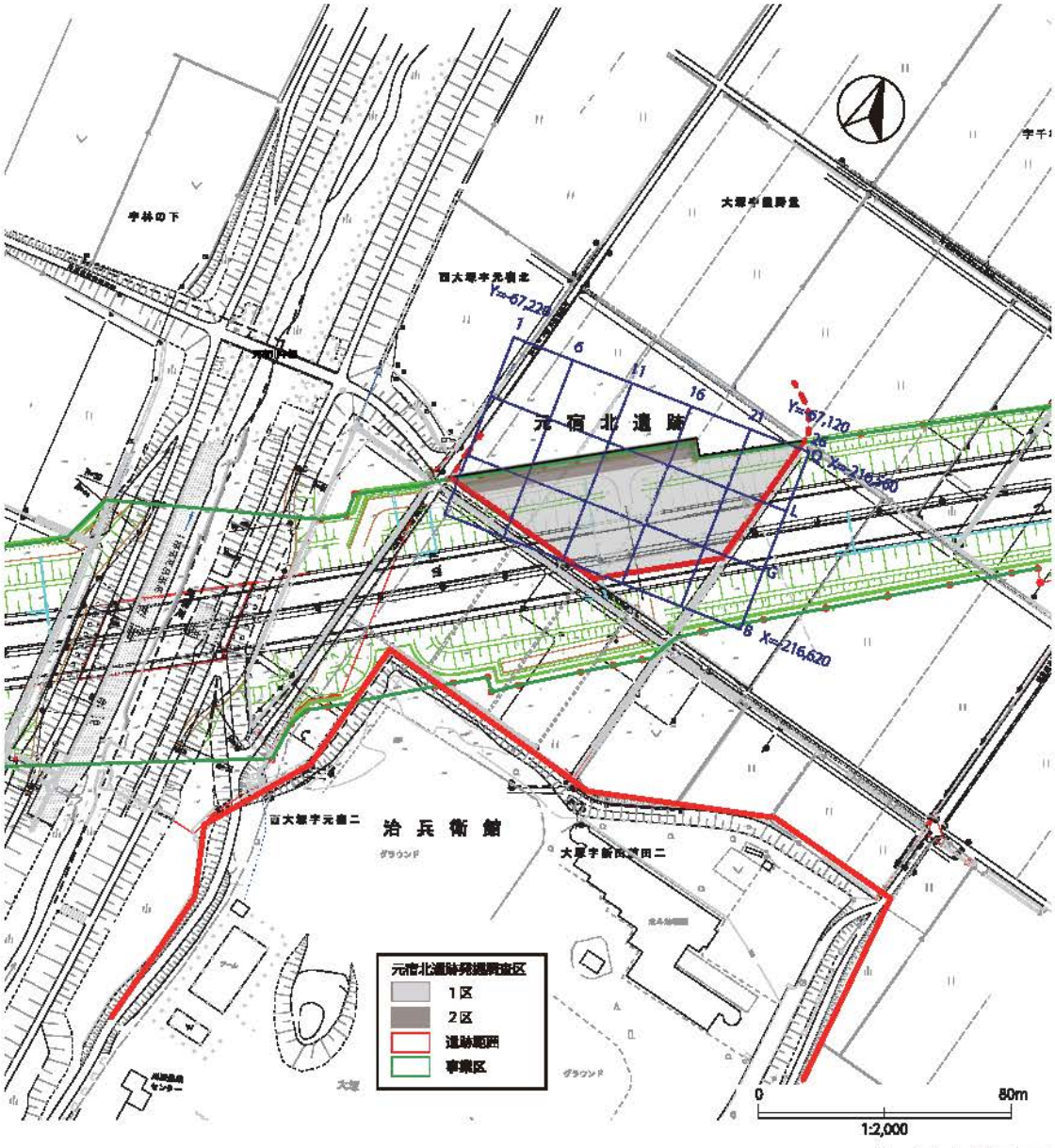
小松城は犬川右岸に築かれた平城で、現在は町立新山中学校の跡地となっている。伊達氏以前の長井氏時代にすでに築城されたと考えられている。天授６年伊達宗遠が置賜に侵入した時に小松城にいたのが長井氏の家臣であった船山因幡守であったとされる。伊達氏支配後の最初の城主は大町修理亮貞継である。享禄２年の大円寺棟札には、桑折播磨守景長とあり小松城主とされる。天文の乱以後桑折へ移動し、牧野弾正左衛門久仲が城主となったが、元亀元年（1570）奉行中野宗時の反乱の際、鎮圧後の処理のため再び城主となっている。

原田城は現在ダリア公園の敷地になっている。伊達氏の原田甲斐守の城とされる。本郷館は洲島字本郷に所在し、伝承では洲島城主湯目肥前守の甥であった尾島左馬丞という人物が居たとされる。尾長島館は、伊達氏の臣従五位甲斐守の居城とされる。

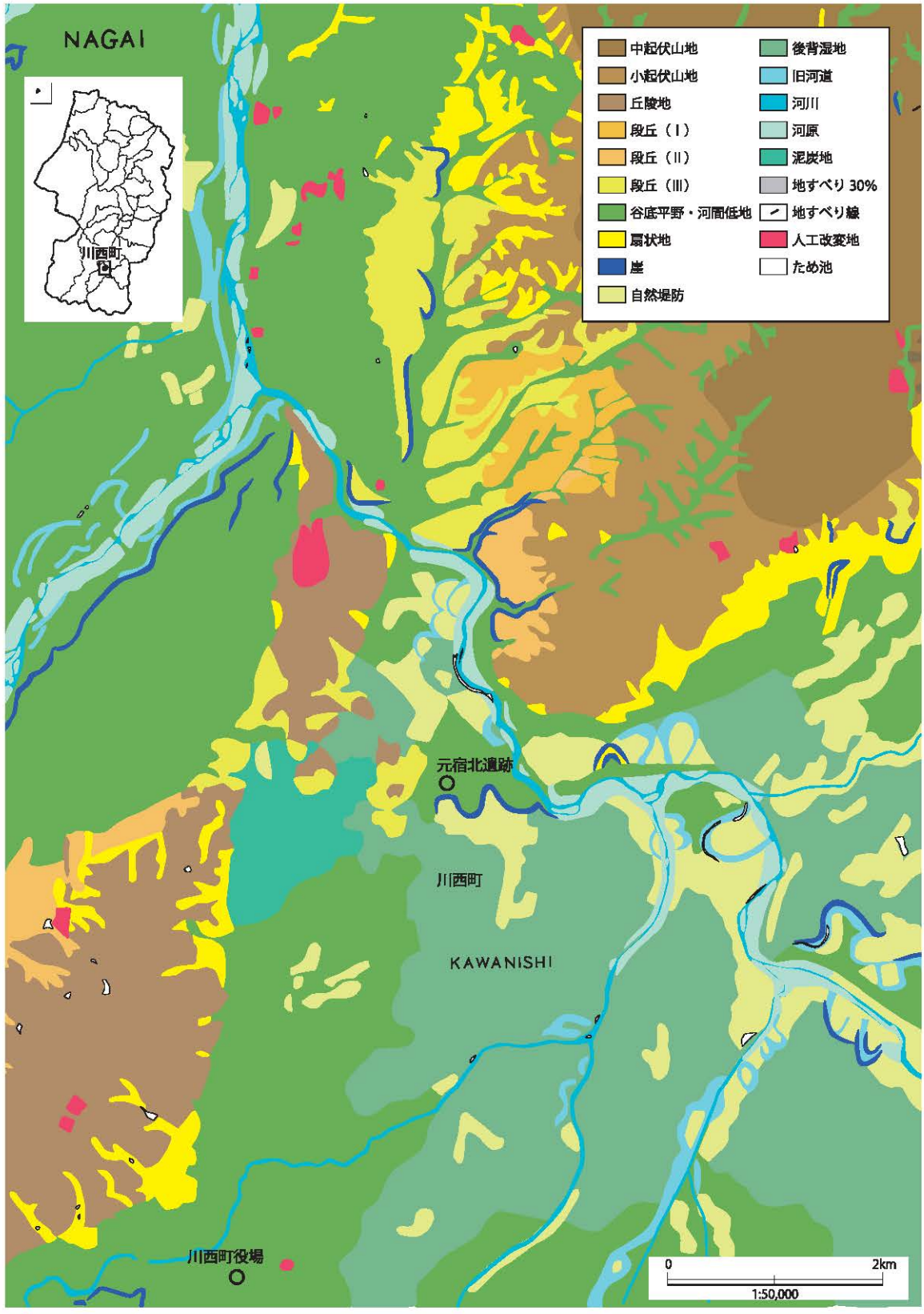
治兵衛館は、西大塚元宿、現在の大塚小学校の敷地に所在する。規模は「天正年間屋敷一町歩　石高六百石」とされる。伊達政宗の時代、大塚氏に仕えた那須治兵衛の居館とされる。那須氏は、天正 19 年（1591）の伊達氏移封の時、この地で帰農し開拓を行ったとされる。大塚村には帰農した武士が多い。大塚城主大塚宗頼は帰農したが、子供たちは政宗に随行したとされる。

天正 19 年、伊達政宗は岩出山に移り、置賜は蒲生氏

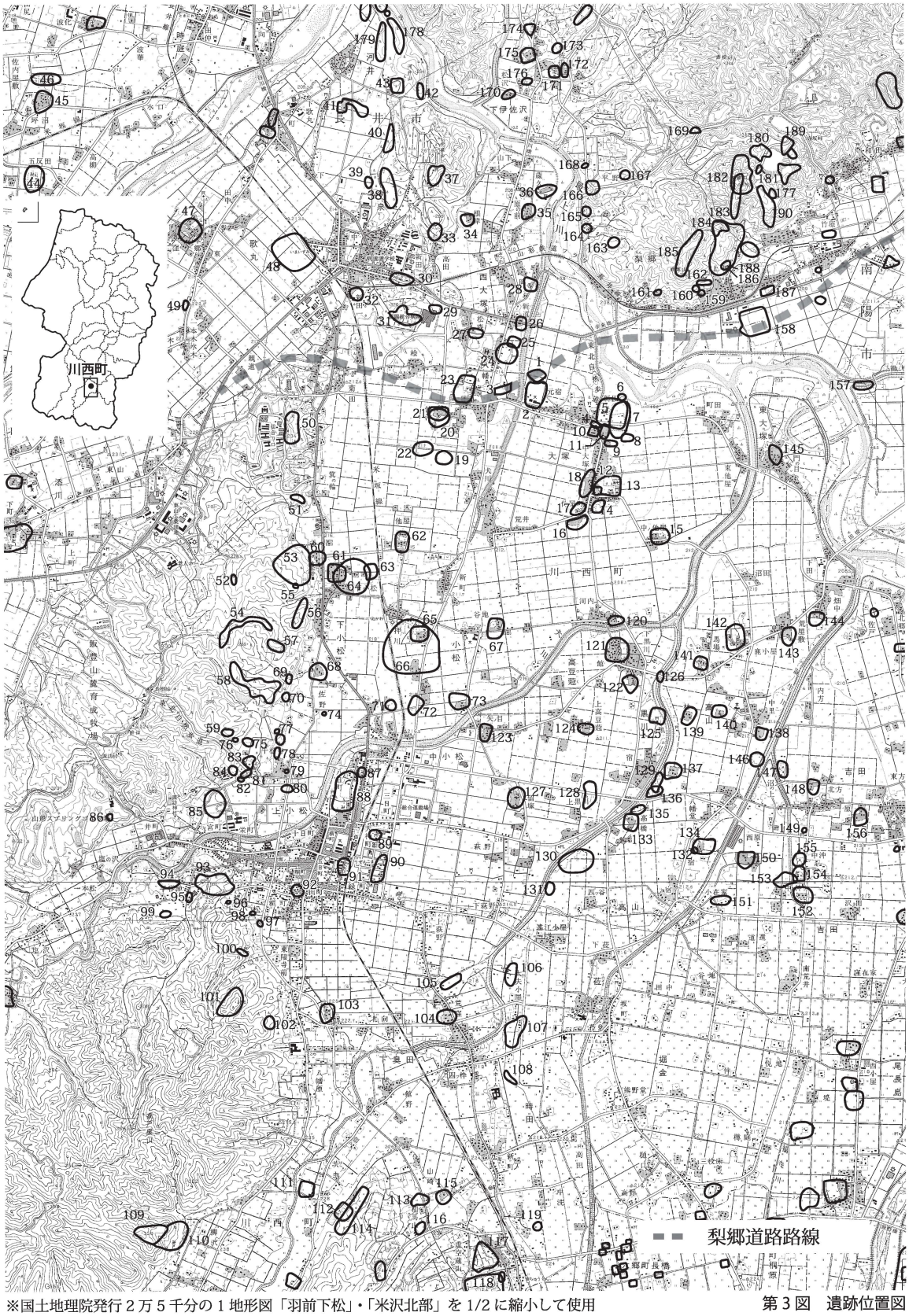
郷の領地となった。豊臣秀吉は伊達氏の所領であった伊達・信夫・置賜を蒲生氏郷に与えた。蒲生氏が宇都宮に転封となった後、置賜は上杉氏の領地となる。慶長５年（1600）関ヶ原の戦以後、慶長６年に上杉氏は徳川から領地の大半を取り上げられ、伊達・信夫・長井（置賜）の三郡三十万石を上杉領とした。上杉景勝は米沢に入部し城下の整備を行った。以後、川西町は江戸時代を通じて米沢藩領となった。米沢の城下にいた家臣により開拓が進められた。大塚では、他屋町・中ノ他屋・東ノ他屋などの部落名が残っている。新たに用水堀が開削され新田開発が行われた。代表的なものとして、寒河江源兵衛が中心となり慶長14年（1609）から18年までかかって完成した大塚堀、川西町西部の長堀堰、鬼面川から取水した堀金堀、高山堰などがある。米以外の特産として、青苧や漆があり、米沢藩の重要な特産品であった。上杉鷹山公の頃から生産が奨励された。江戸時代、小松は宿場町として発展した。上小松・中小松は越後街道によって人々の往来が多く、物資輸送の拠点をなす場所であった。上小松は伊達時代に金子備前によって町割りされ、江戸時代には伝馬が配置され宿場として整備され、馬市



第１図　調査区概要図


NAGAI
川西町
中起伏山地
小起伏山地
丘陵地
段丘（Ⅰ）
段丘（Ⅱ）
段丘（Ⅲ）
谷底平野・河間低地
扇状地
崖
自然堤防
後背湿地
旧河道
河川
河原
泥炭地
地すべり 30%
地すべり線
人工改変地
ため池
元宿北遺跡
川西町
KAWANISHI
川西町役場
0
2km
1:50,000

第２図　地形分類図



※国土地理院発行２万５千分の１地形図「羽前下松」・「米沢北部」を 1/2 に縮小して使用

第３図　遺跡位置図

表１　遺跡地名表１

番号	遺跡名	種別	時代
1	元宿北遺跡	集落跡	奈良・平安・中世
2	治兵衛館遺跡	集落跡・館	古墳・平安・戦国
3	八幡一遺跡	集落跡	奈良・平安・中世
4	牛谷館	館	戦国
5	大塚遺跡		中世
6	八幡館遺跡		縄文
7	大塚城	館	鎌倉
8	伊勢屋敷	館	中世か
9	坂井屋敷	館	中世か
10	藤内屋敷	館	中世か
11	平館	館	中世か
12	加藤館	館	戦国
13	林崎館	館	室町
14	嶋津館	館	中世か
15	寺嶋館	館	戦国
16	皆川館	館	戦国
17	寒河江館	館	戦国
18	黒沢館	館	戦国
19	荒小屋遺跡	包蔵地	古墳
20	仲沖遺跡	散布地	平安
21	仲沖館	館	戦国
22	龍蔵北遺跡	集落跡	奈良・平安
23	八幡西遺跡	散布地	奈良・平安
24	大林遺跡		旧石器・縄文・平安
25	土白館	館	戦国
26	朽谷館	館	中世か
27	菅原館	館	戦国
28	梅津館	館	中世か
29	田制館	館	安土・桃山
30	清六清水遺跡	包蔵地	奈良・平安
31	安海壇遺跡	墳墓	中世
32	壇場遺跡		
33	南八ヶ森遺跡	祭祀跡	不明
34	根岸館	館	中世か
35	原前屋敷	館	中世か
36	大津賀館	館	中世か
37	北八ヶ森遺跡	散布地	旧石器
38	今泉広窯跡群	窯跡	平安
39	加賀塚窯跡	窯跡	平安
40	蛇崩窯跡	窯跡	平安
41	源徳原館跡	城館跡	中世か
42	河井山古墳群（河井山遺跡群）	包蔵地・古墳	旧石器・古墳
43	東峯山遺跡	集落跡	旧石器・奈良・平安
44	黒沢中館	館	室町
45	黒沢館	館	室町
46	黒沢北館跡	城館跡	室町
47	歌丸館跡	城館跡	戦国
48	今泉館跡	城館跡	戦国
49	二ツ壇跡	塚跡	不明
50	陣ヶ峰館	館	平安
51	下小松古墳群（陣が峰支群）	墳墓	古墳
52	下小松山墳丘群（永松寺支群）	墳墓	古墳
53	下小松山墳丘群（永松寺支群）	墳墓	古墳（4 世紀）
54	下小松山墳丘群（中間支群）	墳墓	古墳
55	下小松山墳丘群（永松寺支群）	墳墓	古墳
56	下小松山墳丘群（薬師沢支群）	墳墓	古墳
57	下小松山墳丘群（中間支群）	墳墓	古墳
58	下小松山墳丘群（小森山支群）	墳墓	古墳
59	下小松山墳丘群（尼カ沢支群）	墳墓	古墳
60	根岸屋敷	館	中世か
61	内館	館	中世か
62	玉館	館	中世か
63	古館	館・居館	室町
64	道伝遺跡	官衙	奈良・平安
65	招城	楯	中世か
66	押川遺跡	集落跡	平安
67	谷地在家	館	戦国
68	佐野屋敷	館、居館	鎌倉
69	小森山、舞台山古墳群	墳墓	古墳終末・飛鳥・奈良
70	佐野遺跡	集落跡	平安
71	六角遺跡	集落跡	平安
72	片町東遺跡	集落跡	平安
73	小松嶋貫屋敷	館	中世か
74	飛行壇遺跡		中世
75	尼カ沢遺跡		旧石器・縄文
76	尼カ沢土壇遺跡	墳墓	中世
77	尼カ沢経塚遺跡	経塚	中世
78	下小松山墳丘群（尼カ沢支群）	墳墓	不明
79	カノウ壇遺跡		中世
80	千松寺南遺跡		平安
81	尼が沢古墳郡	墳墓	古墳終末・飛鳥・奈良
82	尼カ沢南遺跡		中世
83	千松寺遺跡	集落跡	平安
84	正安寺古墳群	墳墓	古墳終末・飛鳥・奈良
85	下小松山墳丘群	墳墓	古代～中世
86	塩の沢遺跡	散布地	縄文
87	井上館	館	戦国
88	小松城	館	南北朝期
89	天神森古墳	墳墓	古墳前期
90	天神南遺跡	散布地	縄文・平安
91	船山館	館	戦国
92	大内屋敷	館	中世か
93	原田城	城砦	中世か
94	平野地遺跡	集落跡	縄文
95	平谷地古墳群	墳墓	古墳・飛鳥・奈良
96	大光院経塚遺跡	経塚	中世
97	東陽寺遺跡	散布地	平安
98	置賜山土壇遺跡	墳墓	中世
99	平谷地遺跡	集落跡	縄文中期
100	金堀清水洞窟遺跡		中世
101	羽山館	館	戦国
102	八幡原遺跡		縄文
103	北館南館	館	戦国
104	緒形館	館	中世か
105	穴塚墳丘群	墳墓	奈良？
106	太夫小屋１遺跡	官衙関連	平安
107	太夫小屋２遺跡	散布地	古墳・平安
108	太夫小屋３遺跡	集落跡	奈良・平安
109	柳沢館	城砦	戦国
110	柳沢館	城砦	戦国
111	茨虫屋敷	館	中世か
112	飛尻坂館	館	鎌倉
113	相馬山遺跡		
114	西相馬山遺跡		縄文
115	大西屋敷	館	中世
116	南相馬山遺跡		
117	虚空蔵山遺跡	集落跡	縄文・奈良
118	壇山古窯群	窯跡	平安・奈良

表２　遺跡地名表２

番号	遺跡名	種別	時代
119	中洗遺跡		縄文
120	与惣兵衛屋敷	館	中世か
121	高豆蔵館	館	戦国
122	平賀屋敷	館	中世か
123	長谷部屋敷	館	戦国
124	近藤屋敷	館	鎌倉
125	茗部屋敷	館	戦国
126	黒川遺跡	集落跡	平安
127	樋口館	館	鎌倉
128	十左衛門屋敷	館	鎌倉
129	黒川遺跡	集落跡	平安
130	岡崎御殿	館	鎌倉
131	四谷遺跡		平安
132	大坊遺跡		中世
133	伊藤伝屋敷	館	鎌倉
134	大坊屋敷	館	平安
135	黒川遺跡	集落跡	平安
136	長澤屋敷	館	鎌倉
137	八日町屋敷	館	鎌倉
138	大河原屋敷	館	中世か
139	林在家	館	中世か
140	青木館	館	中世か
141	馬場屋敷	館	戦国
142	布施館	館	戦国
143	津右衛門屋敷	館	戦国
144	畑中館	館	戦国
145	角ノ目館	館	戦国
146	高山島貫屋敷	館	中世か
147	庄左衛門屋敷	館	中世か
148	瀬兵衛屋敷	館	中世か
149	地蔵塚遺跡		中世
150	三十郎屋敷	館	室町
151	善之丞屋敷	館	鎌倉
152	吉田館	館	戦国
153	吉田中遺跡	集落跡	古墳
154	主計館	館	戦国
155	吉野在家	館	中世か
156	孝右衛門屋敷	館	中世か
157	北徳田遺跡	散布地	縄文
158	梨郷南館跡	城館跡	戦国
159	小山Ｂ遺跡	散布地	縄文（晩期）
160	小山西遺跡	散布地	平安
161	経塚山南遺跡	散布地	縄文
162	小山Ａ遺跡	散布地	縄文
163	平野古窯跡	窯跡	奈良・平安
164	梨郷古墳群	古墳群	古墳（終末期）
165	中島平遺跡	集落跡	縄文（前期）
166	平野Ａ遺跡	集落跡	縄文
167	平野Ｃ遺跡	散布地	縄文
168	平野Ｂ遺跡	散布地	縄文
169	長峰遺跡	散布地	縄文
170	竹の俣遺跡	散布地	奈良・平安
171	小関館跡	城館跡	戦国
172	稲荷前遺跡	散布地	縄文
173	水上遺跡	散布地	縄文
174	菅沢遺跡	散布地	縄文
175	下伊佐沢館跡	城館跡	戦国
176	中屋敷遺跡	散布地	縄文
177	ヌゲッポ遺跡	集落跡	縄文（早・前期）
178	河井山Ⅱ遺跡	集落跡	旧石器
179	西前遺跡（河井山遺跡群）	包蔵地	縄文
180	蕗畑遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安
181	雨沼Ｂ遺跡	集落跡	縄文（後・晩期）・奈良・平安
182	龍樹山館跡	城館跡（噴堡）	中世か
183	竜樹山古墳群	古墳群	古墳
184	稲荷山古墳群	古墳群	古墳
185	経塚山古墳群	古墳群	古墳
186	宮城遺跡	集落跡	縄文（早・前・中期）・奈良
187	松木壇遺跡	散布地	平安
188	宮城墳墓	火葬墳墓	平安
189	梨郷小館跡	城館跡	戦国
190	天王山古墳群	古墳群	古墳

が立った。

徳川幕府は慶応３年（1867）徳川慶喜の大政奉還により終焉を迎えたが、その後、旧幕府軍と官軍による戊辰戦争に米沢藩もまきこまれていく。明治元年（1868）に米沢藩は官軍側に降伏、明治４年（1868）に廃藩置県により米沢藩は廃止され米沢県となった。同年11月に置賜県となる。明治９年には、山形県・鶴岡県・置賜県が合併統合し現在の山形県となる。明治11年(1878)に郡制をしき川西地区は東置賜郡に入ることとなった。明治22年（1889）町村制施行により新しく村が誕生した。大塚地区は大塚村、西大塚村、東大塚村が合併し大塚村となり村役場が置かれた。太平洋戦争後、昭和30年１月１日より、小松町、大塚村、犬川村、中郡村、玉庭村が合併し、川西町となり現在に至っている。

引用・参考文献

川西町史編さん委員会　1979 『川西町史　上巻』 川西町
川西町史編さん委員会　1983 『川西町史　下巻』 川西町
川西町教育委員会　1999 『治兵衛館遺跡発掘調査報告書』 川西町埋蔵文化財調査報告書第17集
長井政太郎・工藤定雄　1967 『中郡村史』 中郡村史編さん委員会
那須信一　1972 『大塚村史』
山形県教育委員会　1995 『山形県中世城館遺跡調査報告書第１集（置賜地域）』
山形県教育委員会　2014 『分布調査報告書（40）』 山形県埋蔵文化財調査報告書第218集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2001 『太夫小屋１・２・３遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第81集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2006 『蛇崩窯跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第155集

Ⅲ　遺構と遺物

1　遺跡の概要と層序

検出された主な遺構は、井戸跡が３基、竪穴状遺構が１基、溝跡、土坑、河川跡である。昭和30年代に行われたほ場整備の影響で、旧地表面は削られている箇所が多く、調査区の東端や南端にかけては深く撹乱が入り遺構が検出されない。また、北東から南西方向に現代の暗渠が複数入り遺構を切っている箇所がある。遺構の分布であるが、調査区の西側にSD1河川跡が南北方向に流れ、河川跡のすぐ東側に土坑がまとまって分布する。また、河川跡から東側へ約20～40ｍやや離れた地点には、SE4・7・9などの井戸跡が構築されている。河川跡の西側は、SP11～16・24などの小柱穴群が分布するが、そのほかは近代以降と思われる耕作跡などが多い。この地区は遺構の分布が希薄となり、遺跡西側の縁辺になると思われる。

基本層序を第９・10図に掲載した。大別層は、Ⅰ～Ⅳ層を設定した。Ⅰａ層は表土（耕作土）で褐灰色シルトである。Ⅰｂ層も内容は同様であるが、酸化鉄を多く含む。Ⅱ層は表土の下層である。ａ～ｃに細分される。Ⅱａ層は褐灰色の粘質シルトである。部分的にグライ化する。Ⅱｂ層は褐灰色シルト層で、にぶい黄橙色シルトブロックを含む。Ⅱｃ層は、灰黄褐色砂質シルトで表土と地山の漸移層である。遺構が検出される面をⅢ層とした。地点によって２つに分層される。Ⅲａ層は、灰黄色砂質シルトである。Ⅲｂ層は黄褐色砂質シルトである。Ⅳ層は褐色砂質シルトで、1mm以下の砂を20％含む。Ⅲ層の一部の可能性もある。SD1の検出面となっている。

2　奈良・平安時代の遺構と遺物

A　河川跡

SD1 河川跡（第11～13図）

1・2区のC-7～10、D-5～11、E-6～11、F-8～11、G-8～12、H-8～13、I-8～13、J-9～13、K-11～13、L-13グリッドで検出された。長さ41.1ｍ、幅11.4～12.5ｍ、南西から北にかけてゆるやかに曲がる。覆土は、F1a、F1b、F2、F3層を設定した。F1aは灰黄褐色シルト層で、遺物の出土は少ないが、下層のF1b層との境界より遺物が出土する。F1b層は、褐色シルト層で当層より奈良・平安時代の須恵器がまとまって出土する。F2は灰白色粘質シルト層で、無遺物層である。F3層は黄灰色シルト層で、無遺物層である。SD1は深さ約40cmを掘り下げたが、F2・3層より遺物の出土がないため、F3層の下面で掘り下げを止めている。いずれの堆積層もシルト層であり、ほとんど流れがない状態で堆積が進んだものと思われる。他遺構との重複関係であるが、埋没後にSD2に切られる。また、南端は撹乱を受けている。

遺物は、東岸を中心にD-10、E-11、G-11・12、H-11・12、I-11～13、J-11～13、K-11～13から出土している。遺存状態が良好で摩耗したものはほとんど認められない。河川跡が概ね埋没して流れがなくなった後に、東側から廃棄されたと思われる。

SD1出土遺物を第24図１～第27図64に示した。１～４・７～９は須恵器坏である。底部がある資料は、全て回転ヘラ切りになる。器形であるが、１・３は底部付近ややや丸みをもち口縁にかけて直線的に外傾する。２は底面に「井」と思われる刻書が確認される。９は底部のみ残存し、底面に墨書が確認された。文字はちょうど割れ口にかかる位置にあるため、「×」とも見えるが、欠損部にも文字が展開する可能性もあり断定はできない。５・６は口縁部のみ残存する資料で、須恵器坏と推定される。10・15は高台付坏、11～14・16～18は稜碗である。10は底部から体部にかけて丸みをもって立ち上がり口縁部が少し外反する。高台が剥落する。稜碗はいずれも底部から体部にかけての資料で、口縁まで接合する個体はない。底面の調整が確認できるものは、すべて回転ヘラ切りと思われる。19は須恵器双耳坏の把手部分である。両面にケズリ調整が認められる。20は土師器の坏と思われ、体部中央のみが残存する。遺存状態は良くなく、器面が荒れている。内面黒色処理が

施される。21～31は須恵器蓋である。天井部が残存するものは回転ヘラ切り後に、ヘラ削り調整を施すものが主である。21は、ほぼ完形となる。蓋の末端のカエリは直になるもの（21・22・24・30）、折り返しになるもの（23）、カエリがないもの（29）などバリエーションがある。32は体部のみの破片で全体の形状は不明であるが、須恵器鉢と思われる。33～36は須恵器壺である。33は口縁部を欠くが短頸壺と思われる。外面・内面に自然釉がかかるが被熱により残存状態が良くない。34は体部上の外面にタタキの痕跡が認められる。35は口縁部で焼成は良好である。36は壺の体部上半で胎土や焼成が良く外面に自然釉がかかる。37～52は須恵器甕と思われる。37は口縁部、38以下は体部である。内面のアテ痕にバリエーションがある。同心円状のアテ痕（38・39・41・44・50）・平行のアテ痕（40・48）・格子目状のアテ痕（46）、小石状のアテ具の痕が認められるもの（42・43）など多様である。土師器の出土は少ないが、土師器鍋（53）・甕（54～59）などが出土している。破片資料で全体の形状が復元できるものはない。60・61は土師器の支脚と考えられる[1]。出土グリッドは同じで同一個体の可能性もあるが接合しなかった。輪積みによる成形で、部分的に積み上げ痕が認められる箇所がある。外面にケズリ、内面にナデが入る。被熱により赤変している。62は須恵器のこね鉢である。体下半から底部が残る。底部内面には、直径約5mmの穿孔が入るが、下まで貫通しているのは少なく貫通孔もきわめて小さい。底部中央は焼成後に穴があけられている。63は須恵器円面硯で、圏脚部破片のみの残存である。中央に器面を一周すると思われる沈線と、19×10mmほどの方形文が描かれ、断面には透かしの痕跡が確認される。方形文と透かしが交互に入ると思われるが、単位や透かしの形状は不明である。

B　性格不明遺構

SX3 竪穴状遺構（第14図）

1区のH-13・14、I-13グリッドで検出された。平面形は隅丸の不整方形を呈し、長軸354cm、短軸290cm、深さは49cmである。覆土は3層に分かれ、覆土2層中から須恵器などの遺物や礫が出土する。覆土2～4層より出土した礫は、被熱により赤変したり煤で黒変しており、カマドなどに使用されたものが廃棄されたものと思われる。最下層は、黒褐色の貼土と思われる層が確認されている。西半部分は掘り込みが深いが、東半分は浅く平坦になる。削平により上面が削られており、本来は東側を中心に平面がより広がっていた可能性がある。出土遺物は、第27図66須恵器高台付坏・67須恵器蓋・68（RP55）・69須恵器甕である。遺構の時期は奈良・平安時代と考えられる。遺構の性格は不明であるが、貯蔵施設などの役割が想定される。

C　井戸跡

SE4 井戸跡（第15図）

1区のM-18・19、N-18・19グリッドで検出された。掘方の平面形は円形を呈し、長軸358cm、短軸324cmの規模である。中央に井戸枠を据えたと思われる掘方は、1辺約115cmの方形を呈する。深さは138cmである。外側の円形の浅い掘方は、井戸が使用されなくなった際に、井戸枠などの抜き取りを行った際に形成されたものと思われる。覆土であるが、F1～6層は黒褐色シルトを基調とし、地山由来のにぶい黄褐色シルトブロックを多く含み、人為的に埋め戻された様相がうかがわれる。4層以下は含有物をあまり含まない層である。井戸内には、井戸枠や杭材などは残されていなかったが、構造は井戸枠を据えていたものと想定される。他遺構との重複であるが、SD 8に切られる。

遺物は第28図71～87が出土した。71～74は須恵器坏である。71・73の底部は回転ヘラ切り、74は回転糸切り、72は底径がやや小さく、磨滅し底部の調整等は不明である。75はやや深身の坏類と思われる。76・77は須恵器蓋である。小破片のため全体の形状は不明である。78・79は須恵器甕の体部破片である。80は土師器坏類の口縁部で、内面黒色処理が施される。81は土師器坏の底部と思われるが磨滅している。82～84は土師器甕である。82は口縁部、83・84は体部破片である。85～87は中世陶器である。85は赤褐色の無釉の瓷器系陶器で、甕の体部破片と思われる。86は、須恵器系陶器甕類の体部破片である。87は無釉の瓷器系陶器で甕などの体部中央付近の破片と思われる。遺構の時期は覆土より中世陶器が出土するが須恵器・土師器の出土が集中しており、奈良・平安時代と考えられる。

D　土坑

SK5 土坑（第 20 図）

1 区の F-20 グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 90cm、短軸 66cm、深さは 85cm である。断面の立ち上がりは急で，南西壁は垂直に近い。覆土は 6 層にわかれ、黒色シルトが主体である。覆土 3・5・6 層は炭化物や植物遺体の含有が多くなる。出土遺物は第 28 図 88 須恵器坏の口縁部・89 土師器坏である。遺構の時期は覆土中の遺物を考慮すれば奈良・平安時代に帰属される。

SK10 土坑（第 20 図）

1 区の K-17・18、L-17・18 グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 112cm、短軸 106cm、深さは 108cm である。底面は比較的平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 9 層に分かれる。1～6 層は自然堆積と考えられる。9 層は黒色が強く有機質を含む。覆土 1 層より土師器甕の小破片が出土している。遺構の時期は奈良・平安時代と考えられる。

SK17 土坑（第 21 図）

1 区の J-14 グリッドで検出された。平面形は隅丸方形を呈し、内側にオーバーハングする。長軸は 100cm、短軸は 96cm、内部の最大径は 130cm、深さは 48cm である。覆土は 8 層に分かれ、黒色シルトが主体である。遺物は覆土 1 層より土師器甕の小破片が出土している。遺構の時期は奈良・平安時代と考えられる。

SK18 土坑（第 21 図）

1 区の G-13・14 グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸 182cm、短軸 128cm、深さは 75cm である。覆土は 6 層に分かれ、黒褐色～褐灰色シルトが主体である。壁面の立ち上がりは急である。遺物は覆土中から第 29 図 109 須恵器甕の体部破片が出土した。遺構の時期は奈良・平安時代と考えられる。

SK19 土坑（第 21 図）

1 区の F-14 グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 112cm、短軸 96cm、深さは 62cm である。壁面の立ち上がりは急である。覆土は 7 層に分かれ、黒褐色シルトが主体である。1～5 層は自然堆積層、6 層は地山由来のブロックを含み、人為堆積層と考えられる。遺物は須恵器坏類の体部破片が出土しているが詳細な時期は不明である。遺構の時期は奈良・平安時代と考えられる。

SK20 土坑（第 21 図）

1 区の F・G-15 グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 160cm、短軸 146cm、深さは 30cm である。壁の立ち上がりは緩やかで断面形は皿状を呈する。覆土は 4 層に分かれる。黒色シルトを主体とし、地山由来のにぶい黄橙色シルトブロックを含み、人為堆積と考えられる。出土遺物は覆土 1 層から第 29 図 110 須恵器双耳坏が出土した。遺構の時期は奈良・平安時代と考えられる。

SK21 土坑（第 22 図）

1 区の F-14 グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 88cm、短軸 82cm、深さは 21cm である。覆土は 2 層に分かれ、黒色シルトが主体である。断面形は皿状を呈する。遺物は土師器の小破片が出土している。遺構の時期は奈良・平安時代と考えられる。

SK23 土坑（第 22 図）

1 区の K-19 グリッドで検出された。平面形は不整形を呈し、長軸 92cm、短軸 66cm、深さは 18cm である。覆土は 3 層に分かれ、黒褐色シルトが主体である。出土遺物は第 29 図 111（RP63）須恵器高台付坏が出土している。底部のみの残存で、底部は回転ヘラケズリ調整で高台は打ち欠かれている。遺構の時期は奈良・平安時代と考えられるが、撹乱の影響が及んでいる。

SK25 土坑（第 22 図）

2 区の L-15 グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸 130cm、短軸 100cm、深さは 49cm である。壁面の立ち上がりはやや急で断面形は台形状である。覆土は 9 層に分かれ、上層は黒色シルトが主体で遺物が出土する。下層は、黒褐色～褐灰色シルトが主体である。遺物は覆土 F1 層からの出土が多い。第 29 図 112 須恵器坏・113～116（RP156）須恵器甕・第 30 図 117・118 土師器甕が出土した。113（RP155）須恵器甕は底部で外面に平行タタキ、内面にアテが施される。114 は口縁部で、外面に波状文が施される。遺構の時期は、廃棄された遺物より、奈良・平安時代に帰属すると考えられる。

E　遺構外出土遺物

須恵器・土師器（第 30・31 図）

遺構外から出土した奈良・平安時代の遺物は、須恵器 119 ～ 125・127 ～ 131、133 ～ 151、土師器 126・132・152 である。以下、器種別に内容を述べる。

119・121 は、須恵器坏類の口縁部破片である。120a・b は須恵器坏で、同一個体であるが接合しない。焼成はあまり良くなく調整が不明瞭である。123 ～ 125 は須恵器坏底部で底面は回転糸切り調整である。126 は土師器坏の口縁部破片で内面黒色処理が施される。127 は須恵器双耳坏である。把手や底部は欠けている。128 は須恵器稜碗である。底部は回転ヘラ切り調整である。129 は須恵器高台付坏で、高台は剥落している。130 は須恵器高台付坏で底部は回転糸切りである。131 はやや大型の須恵器高台付坏であるが、焼成不良の個体である。132 は土師器高台付坏で内面黒色処理が施され、やや磨滅する。133 ～ 136・138 は須恵器蓋である。133・134 にはカエリが付く。138 は内面縁が磨滅剥落しており、カエリがあった可能性もある。137 は須恵器壺の口縁部破片である。139・140 は円面硯である。139 は、圏脚の上半部と一部硯面が残存する。体部上には突帯がつき突帯上には二本の平行沈線が施される。硯面には外堤の痕跡があるが剥落している。破片の縁辺は細かく欠けており二次的な撹乱の影響と思われる。140 は小型の円面硯で圏脚部の破片のみが残存する。141 は須恵器壺としたが、他の器種の可能性もある。丸く膨らみをもつ形状で体部上半と思われる。横方向に 1 本の突帯を貼り付け、突帯の上下に沈線を添わせる。破片下部には把手などを貼り付けたと考えらえる剥落した痕跡が認められる。胎土は緻密である。142 ～ 151 は須恵器甕である。142 は口縁部で、幅 1.5 ～ 2mm の沈線の波状文を施す。焼成は良好で堅固である。143 も口縁部で幅 2mm ほどの浅い波状文が施される。144 ～ 147・150・151 は須恵器甕の体部破片である。外面には平行タタキメが、内面には平行のアテ痕（144）・同心円状アテ痕（145 ～ 147・150・151）が施される。148・149 は須恵器壺と思われる。148 は底部破片である。149 は体部破片で外面にナデ調整が認められる。152 は土師器甕の底部で、底面に木葉痕が認められる。

3　中世・近世の遺構と遺物

A　井戸跡

SE7 井戸跡（第 16 ～ 19 図）

1 区の E-20 グリッドで検出された。井戸枠が残存しており、縦板組隅柱横桟留の井戸である。掘方の平面形は隅丸方形を呈し、長軸 148cm、短軸 136cm、深さは 186cm である。覆土は 5 層以上に分かれ、掘方覆土は 2 層以上に分かれると思われる。当初、土坑と認識し半截して掘り下げたが、覆土 4 層中で井戸枠を検出したため、井戸枠に直行するように断面を取り直した。南東壁断面の覆土であるが（第 17 図）、1 ～ 3 は円礫や地山ブロックを含む。4 も小礫を多く含み、地山ブロックを含む。人為的な埋め戻しと考えられる。5・6 は掘り方覆土である。井戸枠は、一辺 75cm の方形を呈していたと思われるが、検出時には南東隅が土圧により内側に傾斜し不整方形になっていた。井戸枠材は隅柱である角材（202 ～ 205）、縦板、横桟などで構成される。隅柱の角材は、横桟を差し込む臍穴があけられる。縦板は、幅 5.6 ～ 42cm、残存長は 24 ～ 118cm である。井戸枠の東・西・北辺は立面図を掲載した（第 18・19 図）。南辺は検出時に土圧により変形し内側に傾斜しており、調査中に崩落したため立面図の作成を行えず、替りに模式図を掲載した（第 19 図下）。井戸枠の構造をみると、東・西・南・北面とも、縦の隅柱に 2 段の横桟をいれて井戸枠を形成しているが、上部は腐食で欠損していることを考えると横桟は 3 段以上あったことが想定される。また、井戸底面にも隅柱を留める木製の枠上の施設があったが、木材が腐食し原型を留めていなかった。縦板は、6 ～ 7 列みられ、2 枚重ねにしているが、部分的に 3 枚重ねて補強していた部分も認められた。

出土遺物は以下のものがある。第 28 図 90 須恵器坏は、底部が回転糸切り調整である。91 は須恵器甕の体部破片、92 は内面黒色処理された土師器坏の体部下半の破片である。第 29 図 93・94・95 は中世陶器となる。93（RP57）は瓷器系陶器鉢の底部と思われ、産地は不明である。胎土に大粒の石英粒や長石粒が目立つ。94（RP32）は、須恵器系陶器で甕と考えられる。外面に細かな平行タタキが施される。95（RP95）は瓷器系陶器

甕と考えらえる体部破片である。

遺構の時期は、井戸枠縦板の第45図262について放射性炭素年代測定を行ったところ、11世紀前半～12世紀後半の可能性がある年代が得られている（第Ⅳ章第1節を参照）。計測した板材は転用財の可能性も考えられ、覆土中の陶器の時代を考慮すれば、平安時代末から鎌倉時代にかけての可能性があると考えたい。

井戸跡出土の木製品であるが、第33図188～第47図276が出土している。内訳は、188～195が曲物である。196～198は板材、199板状の木製品、200・201板材、202～205は井戸枠隅柱、206～276は井戸枠を構成する縦板、横桟、横板、楔である。詳細については後述の木製品の項目で述べたい。

SE9 井戸跡（第20図）

1区のE-21グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸198cm、短軸182cm、深さは102cmである。底面は平坦で湧水する。覆土は7層に分かれ、1層は砂層、2層以下は黒色シルトを主体とし、人為的に埋め戻された様相を示す。壁面の立ち上がりは急である。井戸枠やその痕跡は確認されなかった。素掘りの井戸の可能性がある。

出土遺物であるが、覆土7層から板材（第47図277）が出土している。第29図106～108の土師器が出土しているが、古い遺物の混入と思われる。106は内面黒色処理されたロクロ土師器の体部、107は甕の口縁部破片、108は甕の体部破片である。遺構の時期であるが、277の板材は、放射線炭素年代測定により、鎌倉時代頃の年代が得られている（第Ⅳ章第1節参照）。

B　土坑

SK6 土坑（第20図）

1区のG-20グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸118cm、短軸110cm、内部はオーバーハングし、内部最大径は182cmになる。深さは79cmである。覆土は人為的に埋め戻された形跡を示し、黒色シルト層を主体に、地山の黄灰色シルトブロックを多く含む。出土遺物は須恵器や土師器の破片が出土している。遺構の時期は、覆土中より出土した籾殻について放射線炭素年代測定を行ったところ、現代の値が得られているため近代以降などの新しい遺構の可能性があると考えられる。

SK22 土坑（第22図）

1区のK-19グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸42cm、短軸38cm、深さは12cmである。覆土は褐灰シルトを主体とする。遺物は第48図284（RQ19）の砥石が出土している。また、大きさ約10～15cmの礫が出土し、砥石と一緒に廃棄されたものと思われる。覆土の状況から、遺構の時期は中近世以降と考えられる。

C　溝跡

SD2 溝跡（第11図）

1区、2区のC～F-9、D～H-10グリッドで検出された。検出長は18.2 m、幅25～64cm、深さは8cmである。南南西から北北東に向かってのびる。覆土は黒褐色シルトが主体の単層である。他の遺構との重複関係であるが、SD1を切っている。また溝の中央は現代の暗渠や、南端は撹乱に切られる。遺物は第27図65の小坏と思われる陶器が出土した。遺構の時期は江戸時代以降と考えられる。

SD8 溝跡（第15図）

1区M・N-19、O-19のグリッドで検出された。長さ7.08 m、幅80～36cm、深さは40.5cmである。覆土は3層に分かれ、黒褐色シルトを主体とする。当初、暗渠の一部と考えたが、平面や断面の状況より判断して暗渠以前に掘られた溝跡と判断した。重複関係は、SE 4を切る。出土遺物は、第27図70瓷器系陶器甕、第28図96・97須恵器坏、100・101須恵器甕、98土師器坏、99・102・103土師器甕、104瓷器系陶器甕、105近世陶器擂鉢・第48図283砥石が混在する。溝の時期は江戸時代以降と思われ、SE4に由来する須恵器・土師器が混入している。

D　柱穴

1区西側のE～H－8、G-7グリッドを中心に分布する。遺構登録したものは7基である。SD1の西岸に近い地点であり、河川跡が埋没した後に構築されたものと考えたい。遺構覆土の状況より、時期は中世や近世以降になると考えられる。

SP11 柱穴（第23図）

1区のG-8グリッドで検出された。平面形は円形を呈

土は、黒色シルトの単層である。断面形はU字状である。遺物の出土はない。

SP12 柱穴（第 23 図）

1区のG-7グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 18cm、短軸 16cm、深さは 14.5cm である。覆土は、黒褐色シルトである。断面形状は SP11 に類似する。遺物の出土はない。

SP13 柱穴（第 23 図）

1区のG-8グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 20cm、短軸 18cm、深さは 11cm である。覆土は黒色シルトの単層である。遺物の出土はない。

SP14 柱穴（第 23 図）

1区のF-8グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 28cm、短軸 23cm、深さは 8cm である。覆土は黒色シルトの単層で、浅く遺存状態は良くない。遺物の出土はない。

SP15 柱穴（第 23 図）

1区のE-8グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 26cm、短軸 22cm、深さは 6.5cm である。浅く遺存状態は良くない。覆土は黒色シルトの単層である。遺物の出土はない。

SP16 柱穴（第 23 図）

1区のD-5グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 24cm、短軸 22cm、深さは 15.5cm である。覆土は黒色～黒褐色シルトが主体である。柱痕は確認されない。遺物の出土はない。

SP24 柱穴（第 23 図）

2区のH-8グリッドで検出された。平面形は円形を呈し、長軸 31cm、短軸 26cm、深さは 20cm である。覆土は、黒褐色～褐色シルトである。遺物の出土はない。

E　遺構外出土の陶磁器

陶磁器類はほとんどが遺構外出土である。時代は、中世と江戸時代に分かれ、近現代の遺物も認められる。

中世陶磁器について述べる。第 31 図 153 ～ 157 は中国産の青磁である。153 は青磁碗で鎬蓮弁文が施される。胎土は緻密で焼成は良好である。154・155 は青磁碗の体部破片で、内面に劃花文が施される。156・157 は、青磁碗の体部破片である。残存部には文様は認められない。158 は、須恵器系陶器の甕と思われる破片である。外面の平行タタキ目は密に施される。159 は、瓷器系陶器鉢と思われる。やや内湾する器形で無釉であり内面には太いロクロ目が見られる。160 は、越前焼の甕と考えられる体部破片である。外面には自然釉がかかり、内面には指頭痕が残る。161 は瓷器系陶器甕と思われる体部破片で、外面に印花が施される。162 は越前焼の甕と思われる体部破片で無釉である。

近世以降の陶磁器について述べる。163 は肥前陶器の皿である。底部付近が残存し、底面は無釉、内面に灰釉がかかる。164 は肥前陶器の碗で、高台が付き呉器手と呼ばれる類である。165 は高台が付く陶器皿で内面に鉄絵と思われる絵の一部と目跡が 1 か所認められる。166・167 は陶器皿である。166 は厚い作りである。167 は焼成が良く焼しまっている。168 は陶器の小坏と思われ、口唇部に鉄釉がかかる。169 は、陶器壺の肩部破片と思われる。外面に灰釉がかかり内面は無釉である。胎土は緻密である。170 は陶器の土瓶と思われる。白色の胎土に透明釉が施され底部付近は露胎となる。171 は徳利の口縁部である。白化粧土の上に透明釉が施される。172 は陶器徳利の体部下半と思われる。内面には鉄釉が、外面には藁灰釉と思われる白濁した釉が施される。173 は陶器火入の口縁部破片で、内外面に黒褐色の釉を施す。174 は成島焼の切立と思われる。内外面に黒色釉を施す。175 は陶器擂鉢で内外面に薄い鉄釉が塗られる。卸目は密でない。176・177 は陶器擂鉢で内外面に鉄釉が施される。

178 ～ 185 は近世から近代の磁器である。178 は肥前系の染付磁器皿である。179 は肥前系の染付磁器碗で、外面に網目文状の文様がある。180 は磁器染付皿である。残存部が少ないが、外面に草花文と思われる文様が、内面の底面には圏線が描かれる。181 は染付碗の破片と思われる。内面には圏線が、外面に植物文と思われる文様がある。182 ～ 185 は近代以降の磁器である。182・183 は外面に染付の型紙摺絵が施される。184 は色絵磁器の小坏で、外面に赤色の文様が描かれる。185 は染付磁器の蓋である。天井部に染付の植物文が描かれる。

186 は土器で焜炉などの体部破片と思われる。縦に突帯が貼り付けられ両脇に沈線が沿う。187 は土製の人形で頭部のみ残存する。型による成形で表と裏の型に粘土を入れて中央で合わせて製作している。

F　木製品

木製品は90点を図示した（第33～47図）。277のみSE9の出土で、他はすべてSE7出土遺物である。曲物は側板が脆弱で取り上げの際に底板が外れてしまったものがほとんどであり、図化の際には側板と底板を分けて図化した。井戸枠材は、隅柱、横桟、横板は図化し、縦板は遺存状態が良い材を選択して図化を行った。大きさなどの詳細は表9～12に記載している。

曲物（188～195）は8点を図示した。188は柄杓で188aは側板、188bは底板である。側板の下部には底板を固定するためと思われる釘穴が確認される。189は曲物底板で1/4程度が残存する。190は側板190aと底板190bが残る曲物である。側板は上部が破損する。底板は2片に破損しているが割れ面に沿って2対の穿孔が見られるため、破損後に補修孔をあけて綴り使用したと思われる。底板の側面には釘痕が残る。191a、191bは2枚重なった状態で出土した。191aは縁辺の対向する2か所を長さ12～15cmにわたり削りを入れて薄くなるように整形している。191bは中心を横切るように木釘が打たれ、側面にも釘が残る。中央の釘列に沿って幅2.5cmの範囲以外には黒色の付着物がつく。釘列部分には把手などが取り付けられた可能性があり、その場合は蓋になると思われる。側板は遺存が良くないため図化していない。192は側板と底板が残る。側板（192a）は部分的に上下の縁辺を欠くが全体が遺存する。厚さ3mmの材を用い樹皮により留める。内面には黒色付着物が認められる。底板は一部破損するが9割程度残存する。内面には黒色付着物が見られる。193は側板が残る大型の曲物である。側板は厚さ3mmの材を使用している。破損し1/2程度が残存する。内面には製作時に入れたと思われる縦方向の切れ込みが連続してみられ、側面には釘穴がある。内面は黒色付着物が見られる。底板は、側面に釘穴が連続してみられ、縁辺にも6か所の釘穴が確認される。194は側板･底板が残存する。194aは、厚さ2.5mmの材を使用し樹皮により留めている。内面には製作時に入れた斜方向の切れ込みが連続して入り、黒色の付着物が全体に見られる。底板の内面は黒色の付着物が全体にみられ、外側には一部炭化したと思われる痕跡がある。側面には側版を留めたと思われる釘穴が残る。195は底板のみで、縁辺を2か所薄く加工する。縁辺に一か所穿孔が確認される。内面・外面に多方向の直線的な傷が見られ内面が特に多い。まな板として転用されたと考えられる。

196～201は井戸枠内の堆積層内から出土した板材や加工材で、井戸枠に関連するものと思われる。196は断面三角形状の角材で末端部のみが残存する。197は断面台形状の角材で大部分を欠く。198は板材で一方を斜めに切断している。199は板材と思われるが、一端を丸く加工しており磨滅がみられる。へら状の製品であった可能性も考えられる。200・201は板材で、井戸枠の縦板として利用されていたが、井戸内に崩落したものと思われる。

202～205は井戸の隅柱として使用されていた角材である。残存長は、202.4～117.2cm、断面形は長方形である。各材には臍穴があけられ、井戸枠の横材が組まれていた。これらの角材の上端は腐食している。下端であるが、202・203は平坦に加工され、204・205は斜めに切断された状態になっている。

206～225はSE7井戸枠東面を構成する井戸枠材である。206は井戸枠の縦材で幅広の板材である。207は横桟と隅柱を留めるのに用いられた楔である。208は横材あるいは横桟と思われる角材であるが腐食が進み原形をとどめていない。211・212は東面の上部に設置された横材の板である。209は東面上段の横桟材となる。両端を細く整形している。210は東面下段の横桟材である。両端を細く整形し、端には楔を打ち込んだ割口がある。片側には打ち込まれた楔が残る。213～225は、東面井戸枠の縦板に用いられた材である。いずれも上部は腐食のため欠損するが、下端は原形をとどめている。大半は板の端部を平坦に整形しているが、216はV字状に、221・223は斜めに切断している。

226～243は井戸枠の北面を構成する井戸枠材である。226は、横材などに用いられた板材と考えられる。3辺が腐食で磨滅している。227・228は北面上段と下段の横桟である。両端を細く整形している。227は中央部に割れが入る。228は両端に切り込みを入れ、楔が残存する。229～243は井戸枠の縦板である。229は幅24.5cm、厚さ2.4cmで、他の板材よりも強固な材である。230も、他の板材よりも厚手である。腐食に

である。230 も、他の板材よりも厚手である。腐食により加工痕は不明瞭である。231 ～ 243 は板材であり、234 は厚さが 2.3cm あるが、他は厚さ 1cm と薄い材である。

244 ～ 256 は西面の井戸枠材である。244 は楔である。247・248 は横桟である。247 は上段に、248 は下段に使用されていた。両端を細く整形しホゾ穴に入るようにしている。248 は両端に楔が打ち込まれた状態で残存する。245・246・249 ～ 256 は井戸枠の縦板である。厚さは 0.7 ～ 2.9cm、幅は 9.8 ～ 15.2cm である。

257 ～ 276 は南面の井戸枠材である。257 は南面井戸枠横桟二段目西側の楔、258 は二段目横桟東側の楔である。259 は上段の横桟材で、中央が折れて破損する。両端を細く整形する。260 は二段目横桟材で、両端を細く整形し、楔を打ち込んだ際の割れ口が残る。261 ～ 276 は井戸枠縦板である。262 は幅 38.5cm と幅広の板材である。他は、幅 8.5 ～ 18cm、厚さは 0.6 ～ 1.9cm の板材で、端部は斜めになるものや V 字状になるものがある。

277 は SE9 より出土した。板材の端部と思われるが大部分は欠損する。

G　金属製品

金属製品は 5 点を図示した（第 48 図 278 ～ 282）。全て遺構外の出土である。278 は周囲が磨滅しており刀子としたが、別の製品の可能性もある。279 は煙管で金属部分のみが残存する。中央部が圧迫されて変形している。280 は釘で断面は四角形である。281 は釘状の鉄製品で断面形は円形であり、頂部は曲げられ環状になる。282 は輪状の鉄製品で用途は不明である。

H　石製品

石製品は砥石が 2 点出土している（第 48 図 283・284）。時期が判別する遺物と共伴しておらず時期的な位置づけの詳細は不明である。283 は SD8 出土で、全体の 1/3 程度を欠く。284 は完形で使用により摩耗が進んでいる。

調査区出土の遺物ではないが、参考資料として第 48 図 285 の板碑を掲載した。地権者の牛谷氏が耕作時に現調査区外の南東側で発見し、現在北斗幼稚園の敷地内に安置されている。遺跡と関連ある遺物と考えられるため北斗幼稚園に許可を得て図示したものである。凝灰岩製で上半部が残存し下半部分を欠く。破損後の再利用の痕跡は確認されない。碑の上部に幅 0.7 ～ 1cm ほどの平行沈線を施している。沈線の深さは約 3 ～ 4 mm で浅い。沈線下端ははっきりしない。線の左側が磨滅のためか不明瞭である。左側が欠けている。碑面に窪みが認められるが、文字か風化によるものなのか不明である。

板碑を研究されている川崎利夫氏に当遺物を実見いただき以下の所見を得た。

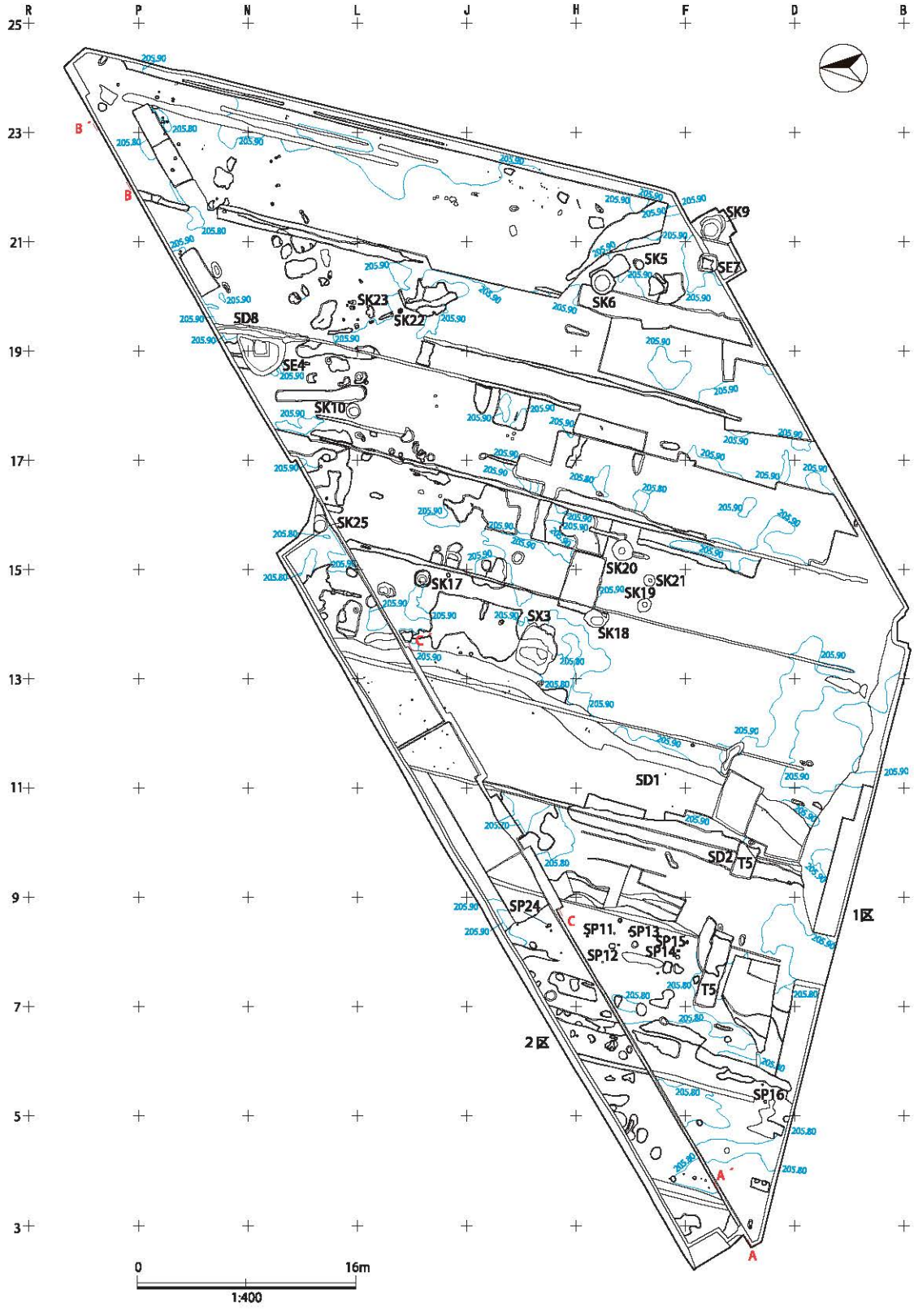
1 m程度の小型板碑である。額上の上部が残存し、二条線もあることが明らかであるが、頭頂部が明瞭に三角形であるので南北朝期 14 世紀後半頃のものと推定される。二条線も比較的上部にあり、15 ～ 16 世紀のものとは異なる。14 世紀の前半から頭頂部が正三角形に近いものになり、前代のような富士山型の側面に湾曲をもつものから、湾曲のない三角形に変化し、さらに低三角形に変化してゆくようである。前代の例として、川西町の龍蔵神社の弘安の板碑があり、また 14 世紀代の典型例として南陽市松沢八幡の元弘の板碑がある。小型にすることを考えれば、14 世紀後半以後に位置付けるのが妥当と考えられる。

4　その他の時期の遺物

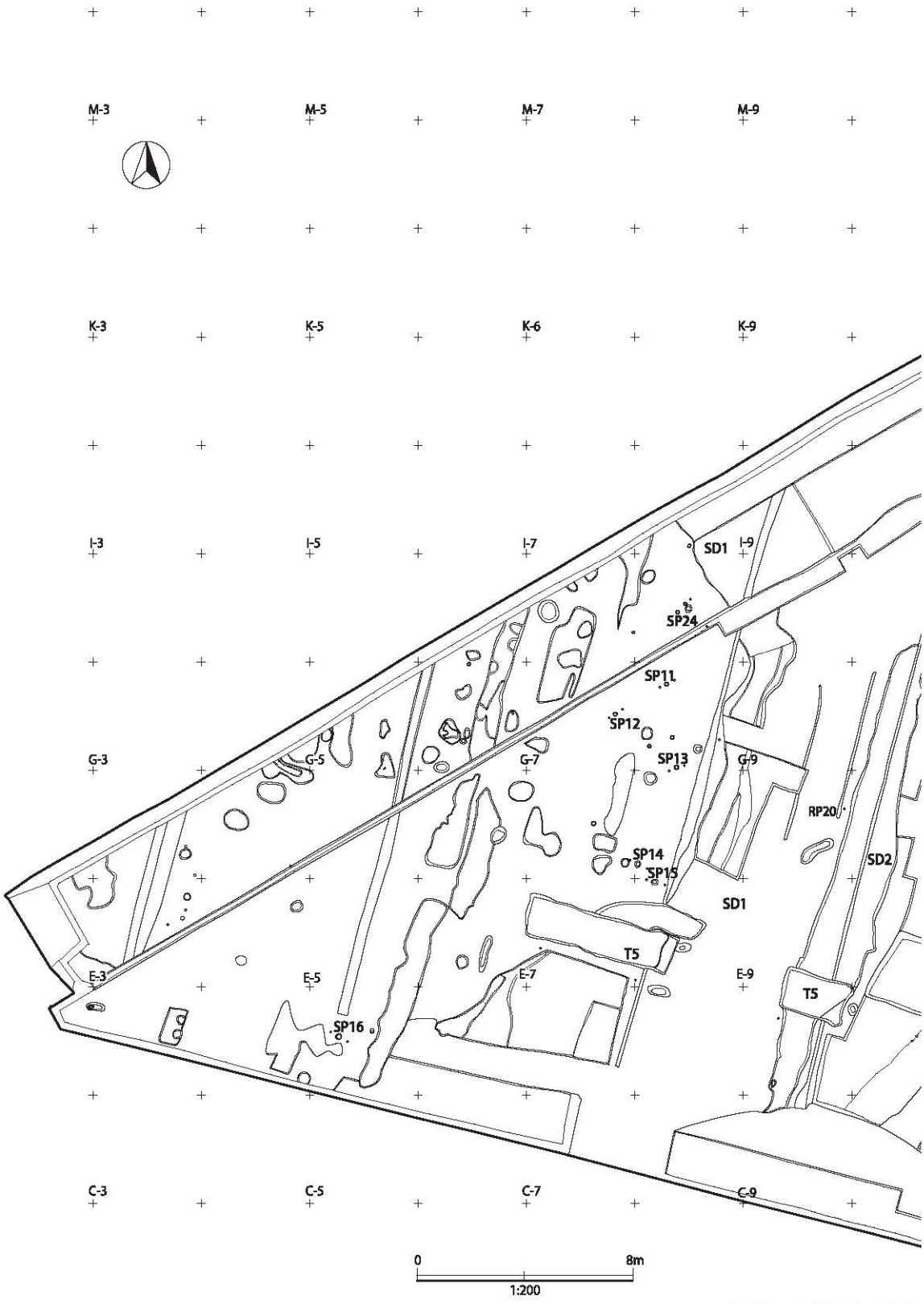
古墳時代の土師器と考えられる遺物が 1 点出土している（第 27 図 64）。内面中央に孔があることから、古墳時代前期の器台と考えられる。磨滅しており調整の状態は不明である。なお、調査区内では古墳時代の遺構や包含層は検出されていないが、当遺跡の南に位置する治兵衛館遺跡は古墳時代前・中期の集落跡が報告されており、これらに関連するものと思われる。

註

1)　当遺物「無文で輪積痕を残す土師器」の用途について新潟県埋蔵文化財センター所蔵の資料をもとに比較検討を実施している。当初、形状から製塩土器の可能性も考えられたことから、新潟県内より製塩土器を出土している梯子谷窯跡、下沖北遺跡Ⅱ、沢田遺跡Ⅱ、山岸遺跡から出土した製塩土器との検討を行った。その結果、小型製塩土器には類似するものの、輪積み痕の状態が元宿北遺跡資料では部分的にしか確認できないことや、時期的に小型製塩土器がより後出の平安末から中世に主として認められることから、製塩土器よりも円筒形の土製品やカマドの支脚などに相当すると思われるという所見をいただいた。


R
P
N
L
J
H
F
D
B
25
23
21
19
17
15
13
11
9
7
5
3
SK9
SK5
SE7
SK6
SK23
SK22
SD8
SE4
SK10
SK25
SK20
SK21
SK19
SK17
SX3
SK18
SD1
SD2
T5
SP24
SP11
SP13
SP15
SP12
SP14
T5
SP16
1区
2区
A
A'
B
B'
C
C'
0
16m
1:400

第４図　遺構配置図

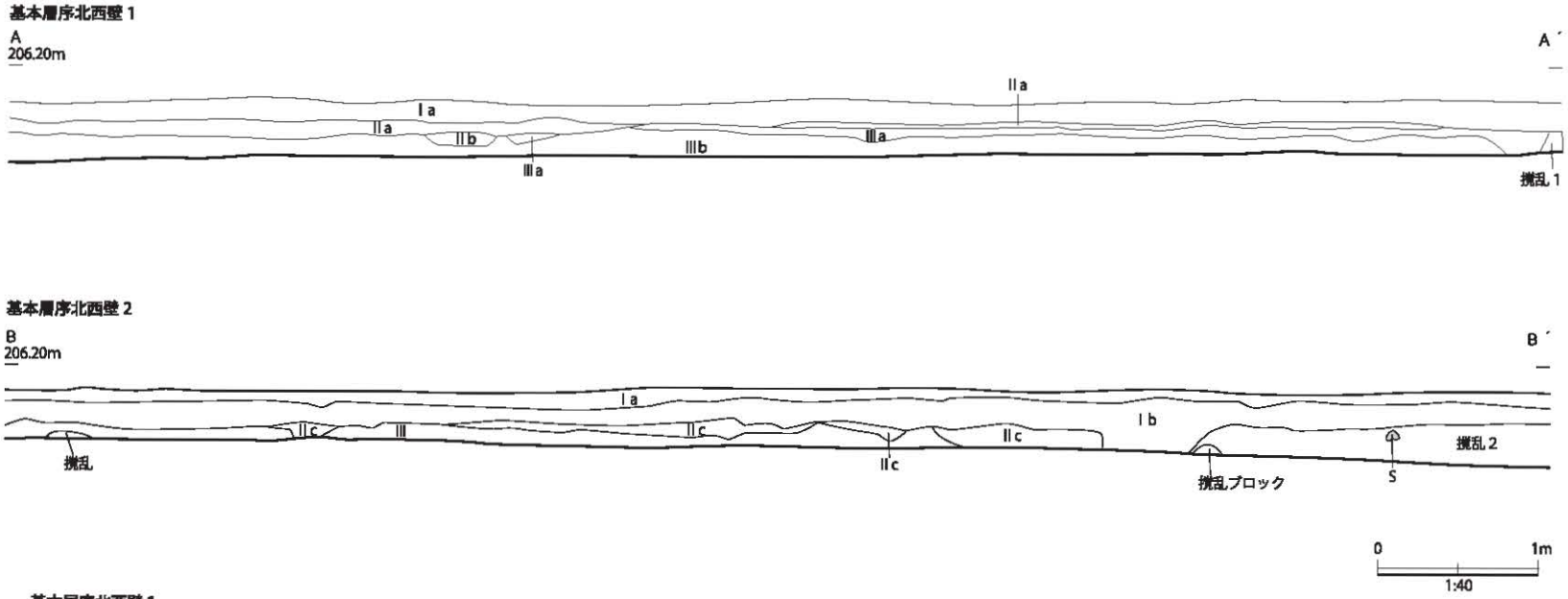


第５図　遺構配置詳細図１

第６図　遺構配置詳細図２

第７図　遺構配置詳細図３

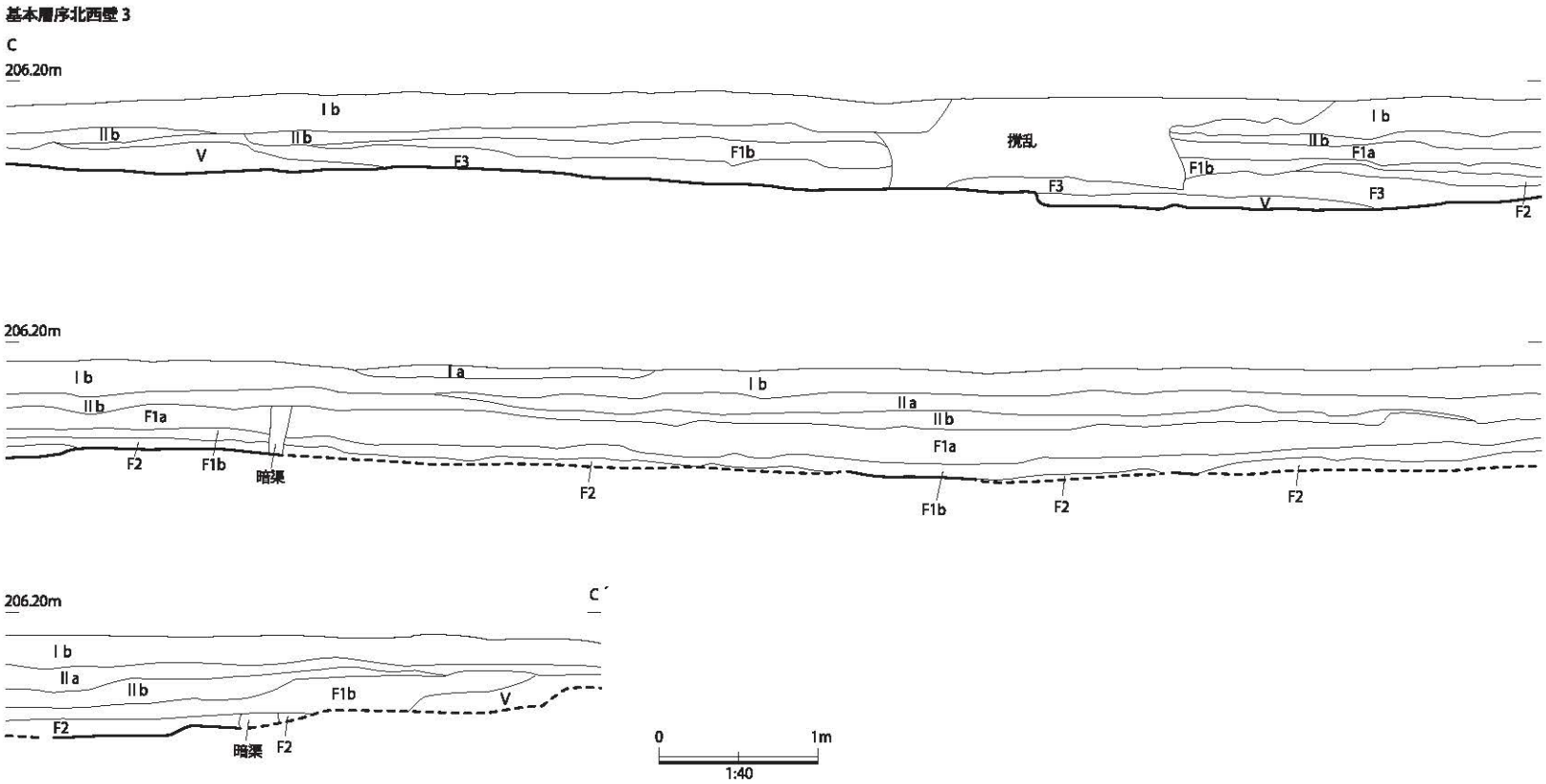
第８図　遺構配置詳細図４



基本層序北西壁 1
Ⅰa 1.10YR4/1 褐灰色シルト　粘性弱、しまり弱、表土
Ⅱa 2.10YK5/1 褐灰色粘質シルト　粘性中、しまり弱、Ⅱb 層、Ⅲa 層がまだらに混じる（攪乱）
Ⅲa 3.2.5YR5/2 灰黄色砂質シルト　粘性中、しまり弱
Ⅲb 4.10YR5/2 黄褐色砂質シルト　粘性中、しまり弱、地山土
攪乱 1.10YR3/1 黒褐色粘質シルト　粘性弱、しまり弱、攪乱、暗渠か

基本層序北壁 2
Ⅰa.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　しまり中、粘性中程度、表土
Ⅰb.10YR5/1 褐灰色シルト　しまりやや強い、粘性中程度、表土、酸化鉄を含む
Ⅱc.10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性中程度、10YR3/1、黒褐色シルトブロックを 10% 含む、表土と地山の漸移層、酸化鉄を含む
攪乱 2.10YR5/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、10YR3/1、黒褐色シルトブロックを 30% 含む
Ⅲ.10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、酸化鉄を含む

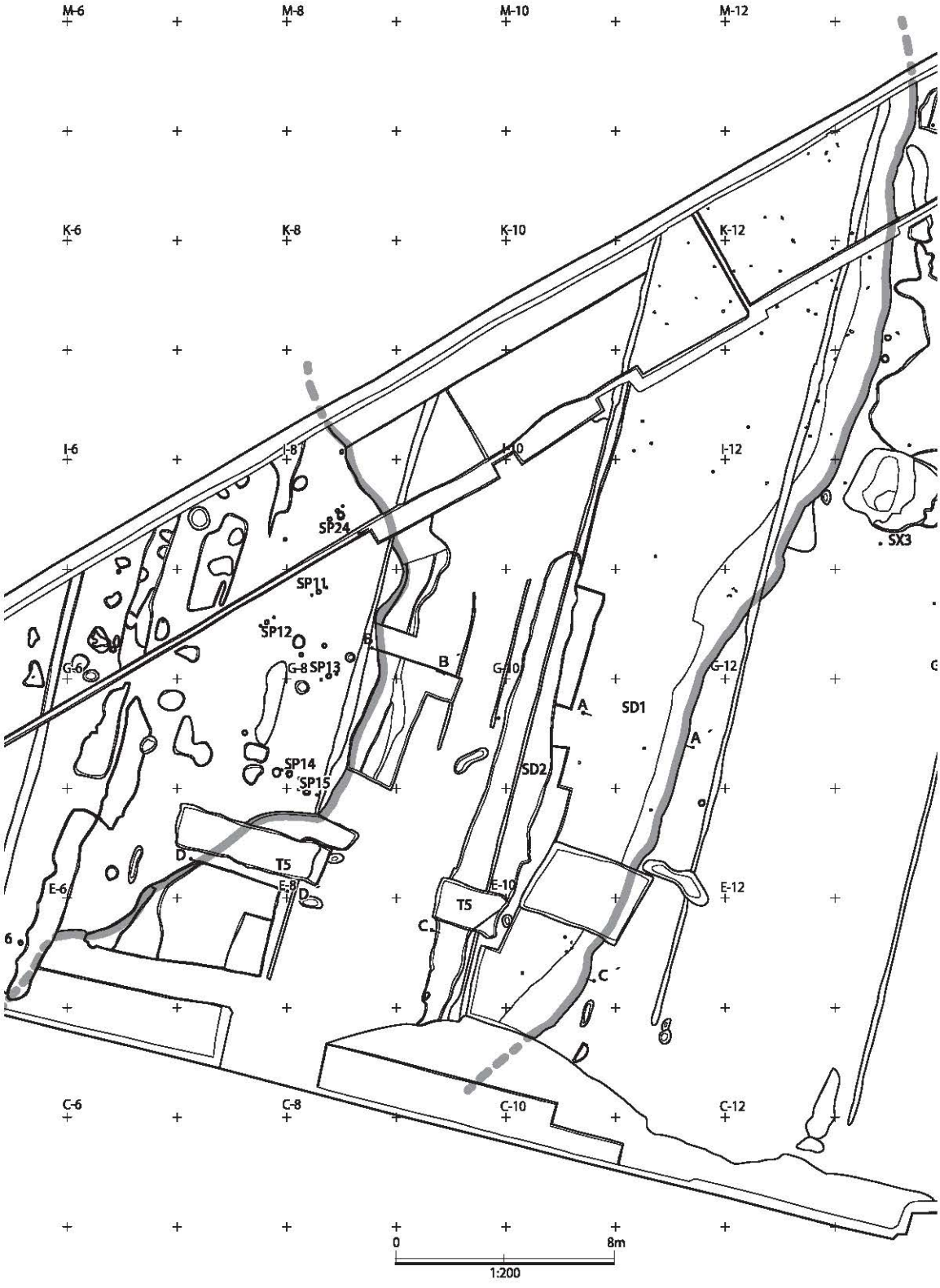
第 9 図　調査区基本層序



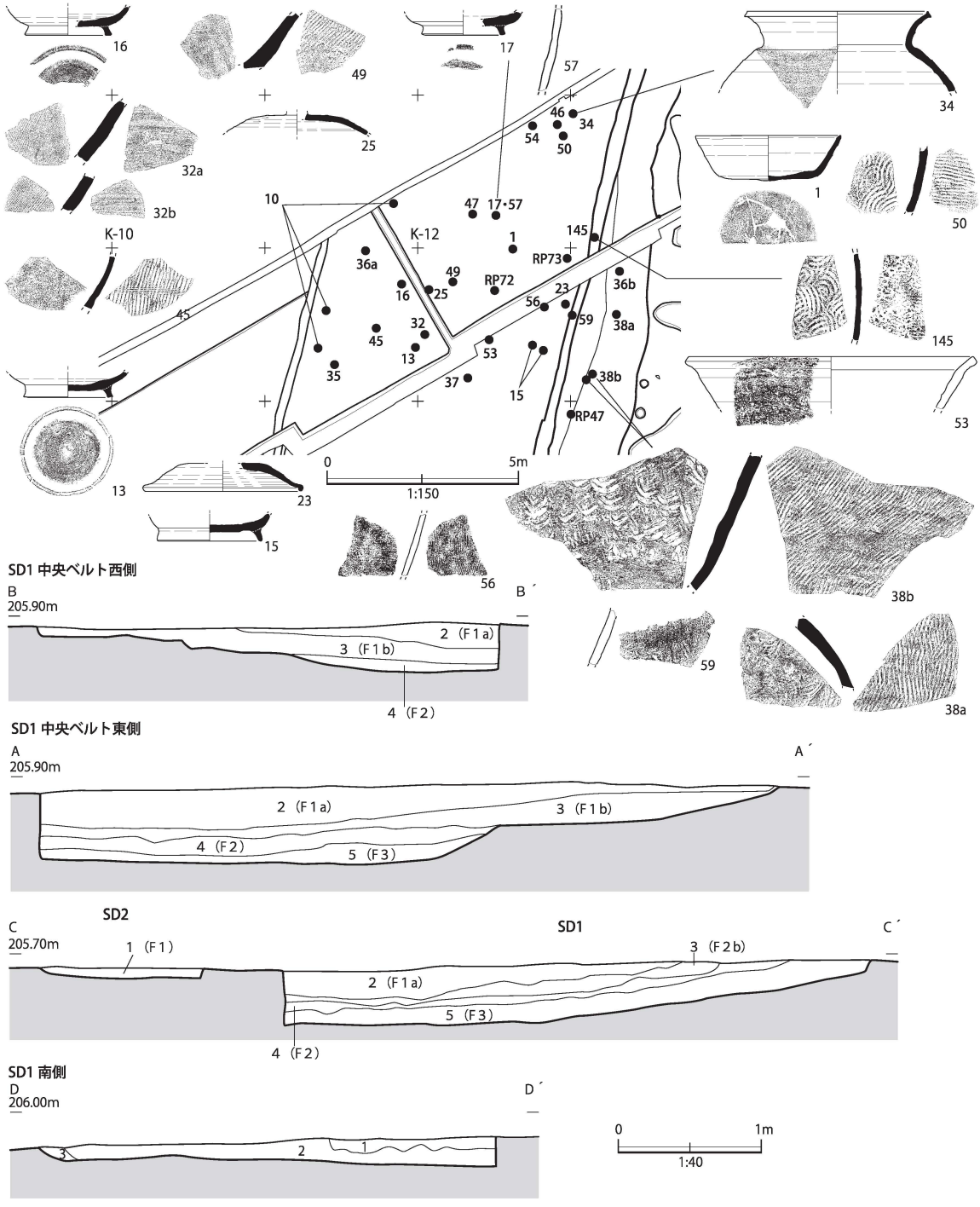
基本層序北西壁 3

Ⅰa.　10YR6/2 灰黄褐色シルト　粘性中、しまり弱い、表土
Ⅰb.　10YR4/1 褐灰色シルト　粘性中、しまり弱い、表土
Ⅱa.　10YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱い、しまり弱い、水田のグライ土
Ⅱb.　10YR5/1 褐灰色シルト　粘性中、しまり弱い、10YR6/2、にぶい黄橙シルト土を 10% 程度含む
F 1a.　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト　粘性中、しまり弱い、SD1 覆土
F 1b.　7.5YR4/1 褐色シルト　粘性中、しまり中、10YR6/3、にぶい黄橙シルトを 7% 程度含む、SD1 覆土
F 2.　10YR8/1 灰白色粘質シルト　粘性中、しまり中、SD1 覆土
F 3.　2.5YR4/1 黄灰色シルト　粘性中、しまり弱い、1 mm以下の砂を 3% 含む、SD1 覆土
Ⅳ.　7.5YR5/1 褐色砂質シルト　粘性中、しまり弱い、1 mm以下の砂を 20% 含む

第 10 図　調査区基本層序・SD1 河川跡断面


M-6
M-8
M-10
M-12
K-6
K-8
K-10
K-12
I-6
I-8
I-10
I-12
SP24
SP11
SP12
SP13
SP14
SP15
SX3
G-6
G-8
G-10
G-12
SD1
SD2
A
A´
B
B´
C
C´
D
D´
T5
T5
E-6
E-8
E-10
E-12
C-6
C-8
C-10
C-12
0
8m
1:200

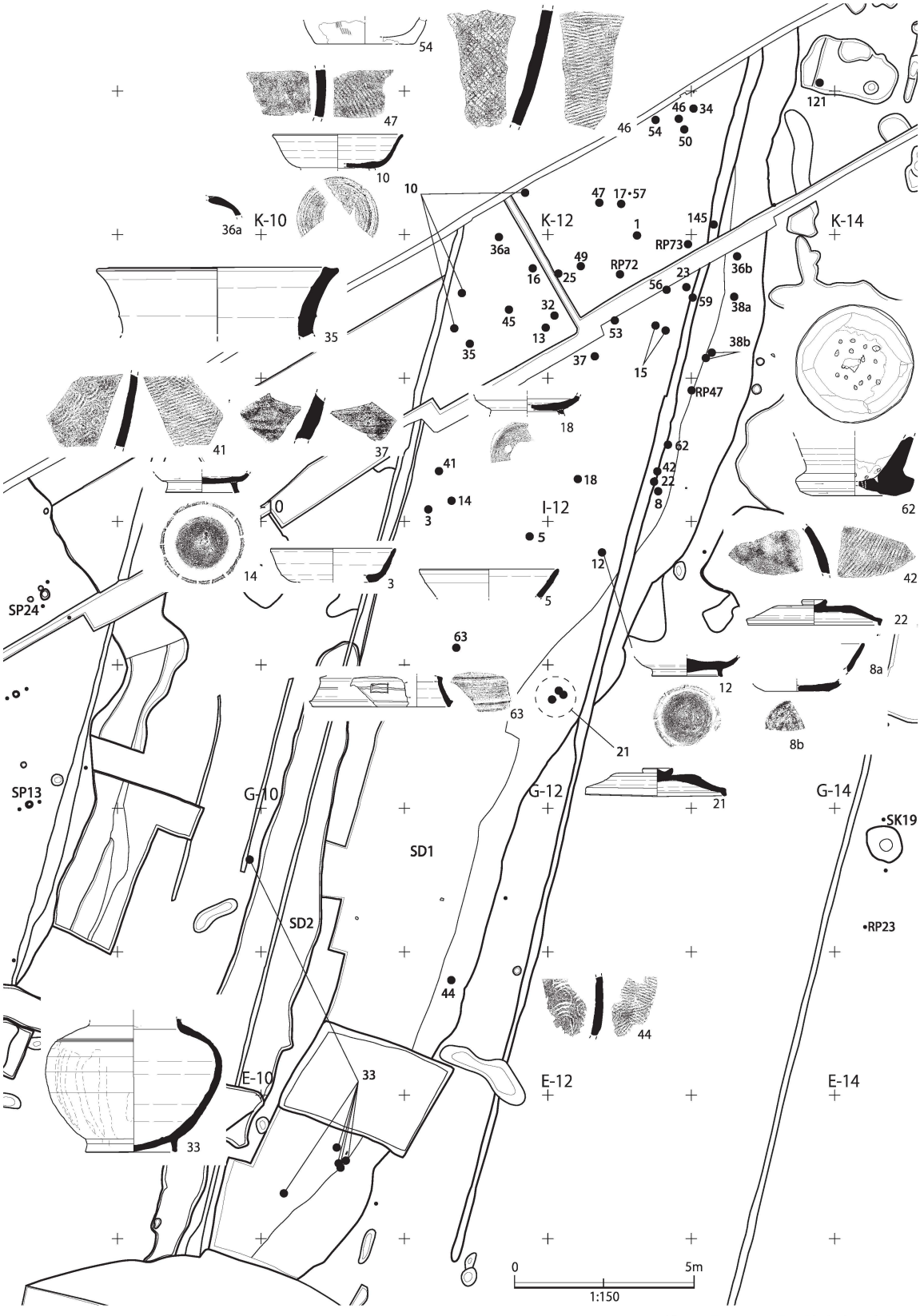
第 11 図　SD1 河川跡



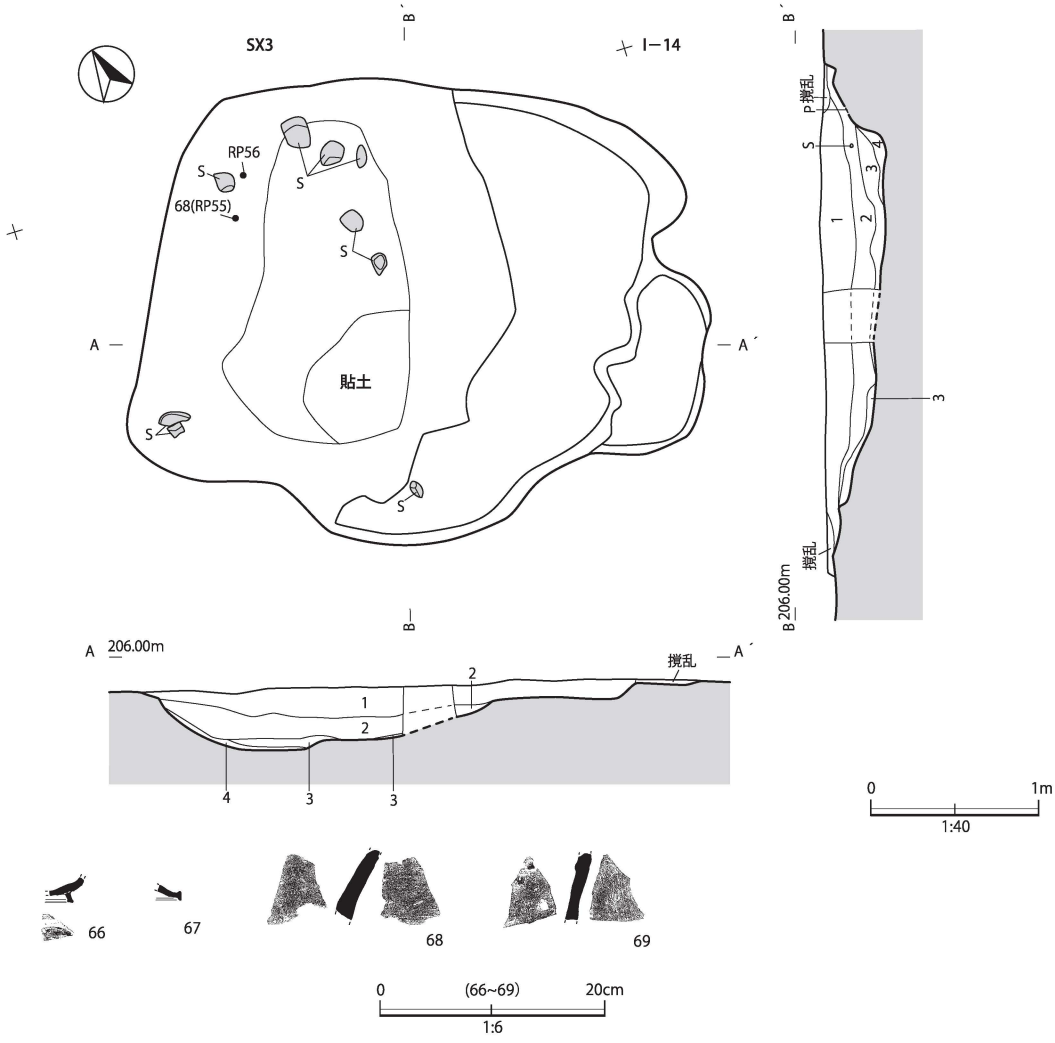
SD1 南側
1．10YR3/1 黒褐色シルト　粘性中、しまり中
2．10YR1.7/1 黒色シルト　粘性やや強い、しまり弱い、10YR3/2 黒褐色シルトブロックを 10% 含む
3．10YR3/1 黒褐色シルト　粘性中、しまり中

SD1・SD2
1．10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、酸化鉄を含む、SD2 覆土 1 層
2．10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト　しまり強い、粘性強い、酸化鉄を含む、SD1 覆土 1a 層
3．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄を少量含む、SD1 覆土 1b 層
4．10YR4/2 灰褐色砂質シルト　しまり強い、粘性強い、酸化鉄を含む、黒褐色シルトブロック（径 5 ㎜）を 3% 含む、SD1 覆土 2 層
5．10YR1.7/1 黒色粘質シルト　しまり強い、粘性強い、酸化鉄を多く含む、SD1 覆土 3 層

第 12 図　SD1 河川跡断面図・遺物分布図 1



第 13 図　SD1 河川跡遺物分布図２

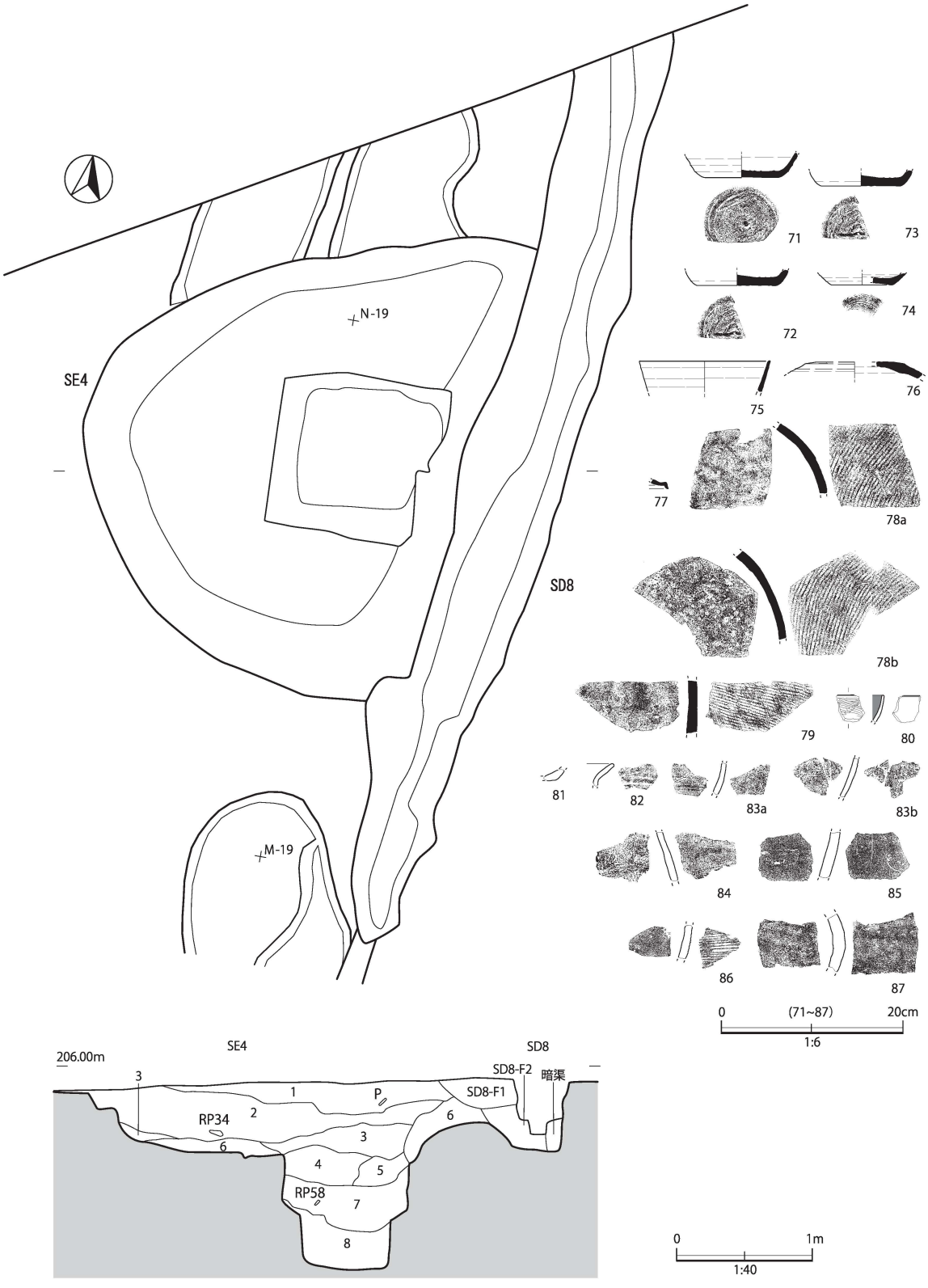


SX3
1.　10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、酸化鉄を含む、炭化物（直径 5 ㎜）を少量含む
2.　10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中程度、10YR6/4 にぶい黄橙シルトブロック（直径 5 ～ 10 ㎜）を 1％含む
3.　10YR3/1 黒褐色砂　しまり中、粘性弱い
4.　10YR5/2 灰黄褐色砂　しまり中、粘性弱い、地山
撹乱．10YR4/6 褐色砂質シルト　しまりやや強い、粘性やや弱い、10YR3/2 黒褐色シルトブロック（直径 10 ～ 30 ㎜）を 10％含む

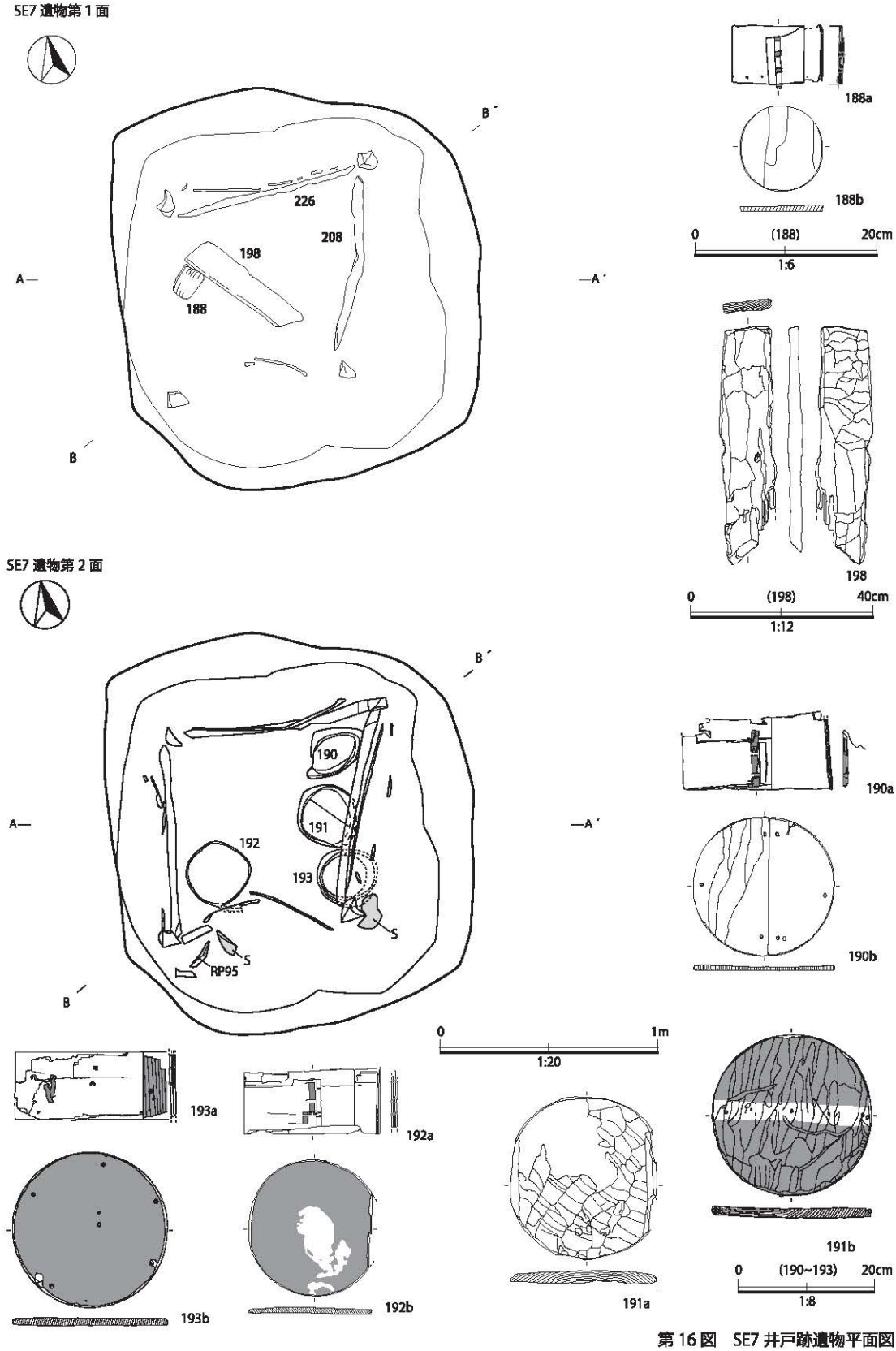
SE4
1.　10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中、10YR6/3 にぶい黄橙シルトブロック（直径 5 ～ 50 ㎜）を 20％含む、炭化物（直径 5 ㎜）を微量含む、人為堆積
2.　10YR3/1 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性中、10YR6/3 にぶい黄橙シルトブロック（直径 10 ～ 50 ㎜）を 40％含む、埋戻し人為堆積
3.　10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、10YR2/1 黒色シルトブロック（直径 5 ～ 20 ㎜）を 10％含む、10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック（直径 5 ～ 10 ㎜）を 5％含む
4.　10Y3/1 オリーブ黒シルト　しまりやや弱い、粘性中、5Y6/1 灰シルトブロック（直径 10 ～ 20 ㎜）を 5％含む
5.　10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中、10YR5/2 灰黄褐シルトブロック（直径 10 ～ 30 ㎜）を 10％含む
6.　10YR5/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性中、10YR3/2 黒褐色シルト（直径 5 ～ 10 ㎜）を 2％含む
7.　2.5Y2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中、10YR3/2 黒褐色シルト（直径 5 ～ 10 ㎜）を 2％含む
8.　2.5Y2/1 黒色砂質シルト　しまり中、粘性やや強い、2.5Y4/1 黄灰シルトブロックを 10％含む

SD8
F1.　10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中、10YR5/4 にぶい黄褐シルトブロック（直径 5 ㎜）を 1％含む
F2.　10YR3/2 黒褐色シルト　しまり中、粘性中、10YR5/4 にぶい黄褐シルトブロック（直径 10 ～ 30 ㎜）を 15％含む、人為堆積
暗渠．10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、粘性やや強い

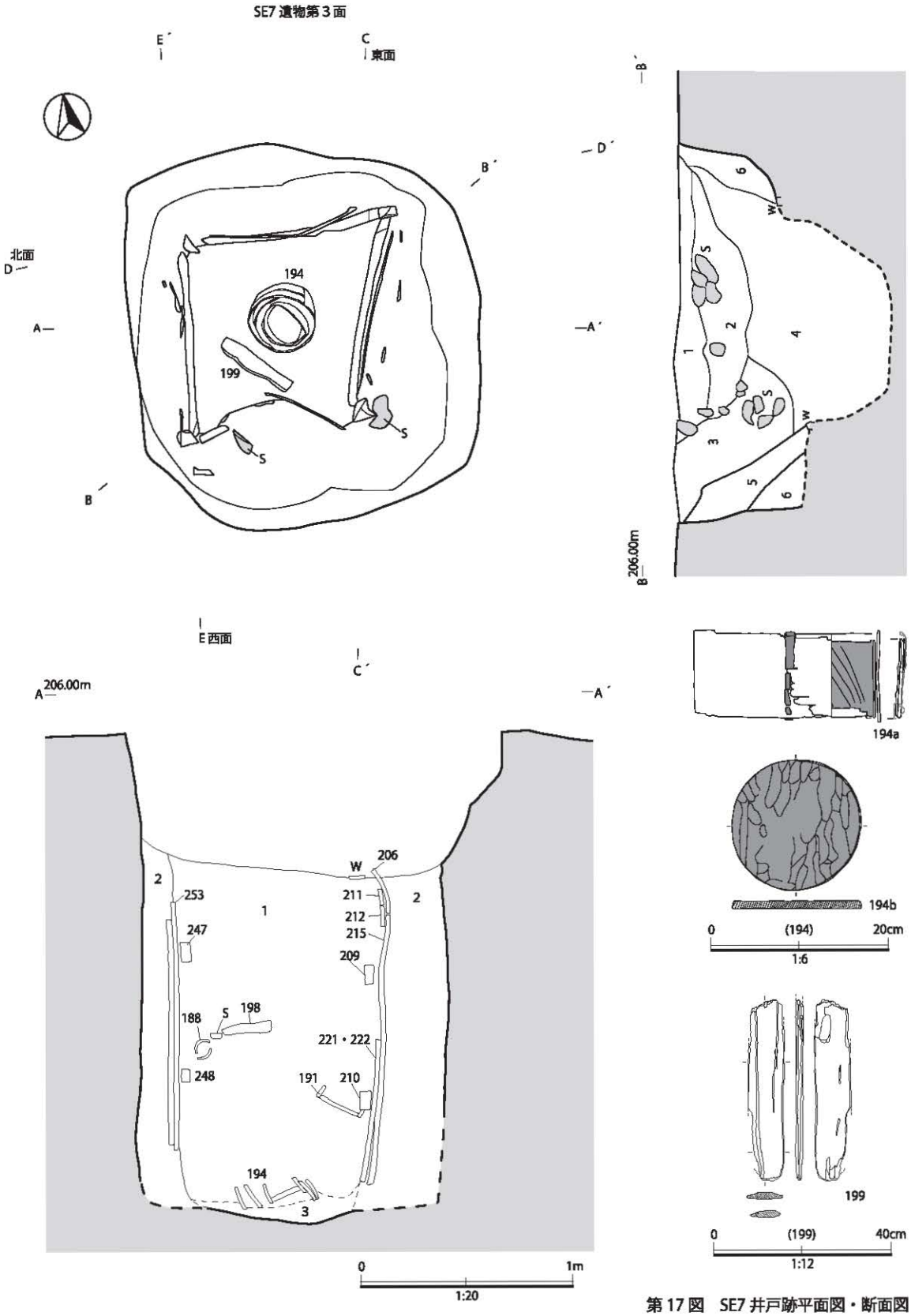
第 14 図　SX3 竪穴状遺構



第 15 図　SE4 井戸跡・SD8 溝跡

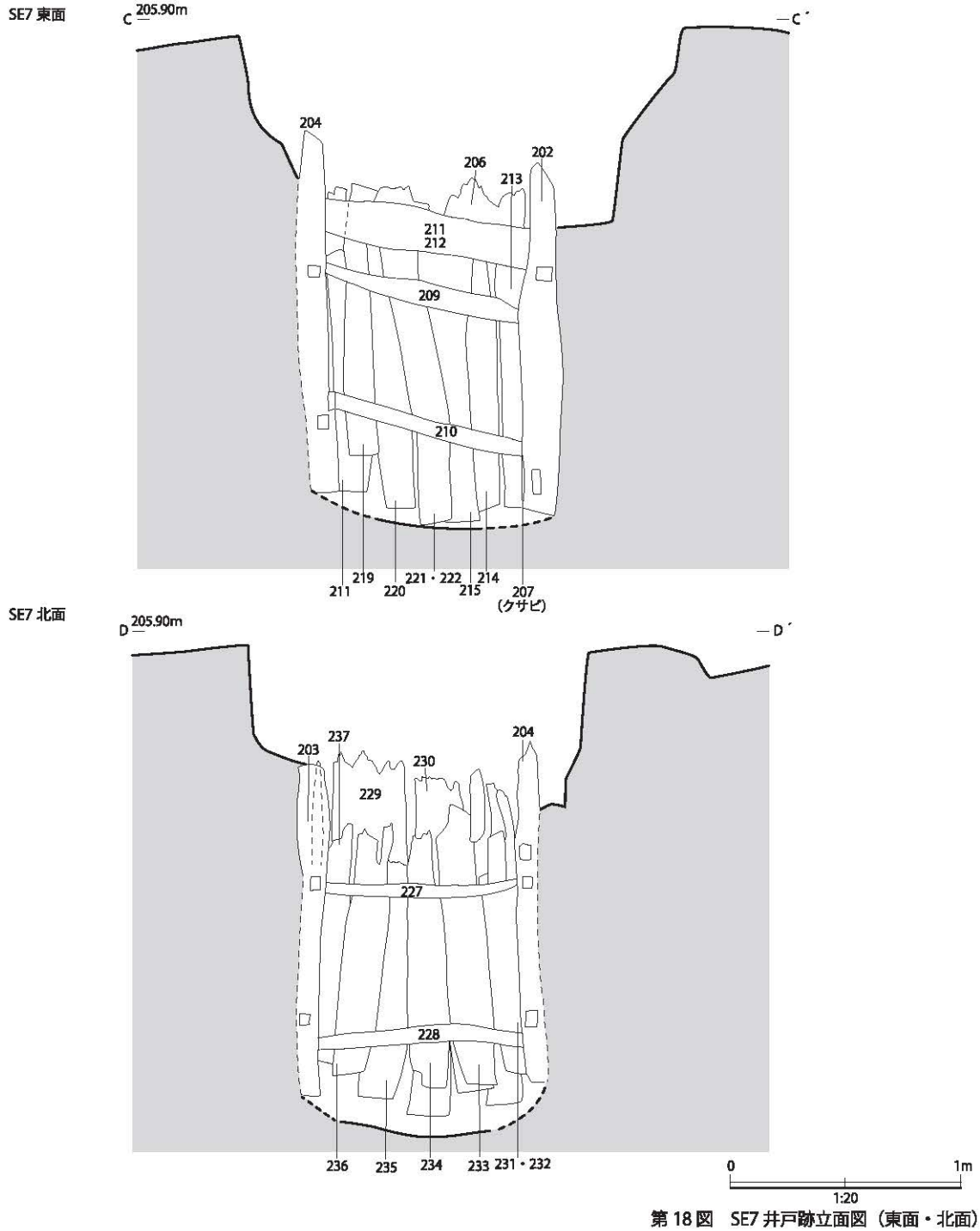


第 16 図　SE7 井戸跡遺物平面図



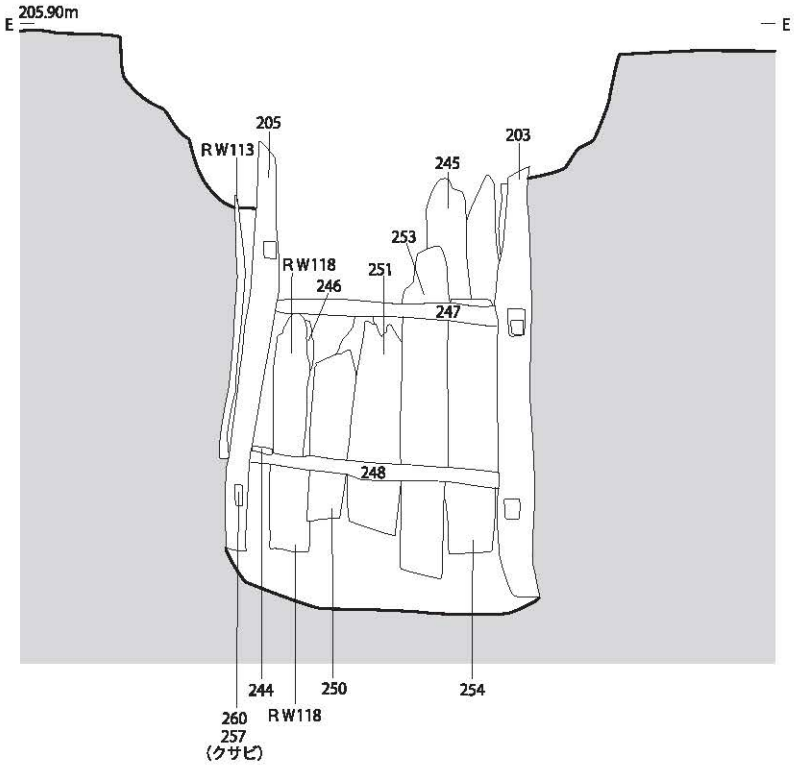
第 17 図　SE7 井戸跡平面図・断面図

SE7（A－A´）
1．10YR2/1 黒色シルト　しまりやや弱い、粘性中、2.5 Y 5/2 暗灰黄シルトブロック（直径 10 ～ 30 ㎜）を 10%含む、覆土
2．10YR3/1 黒褐色シルト　しまりやや強い、粘性中、10YR5/1 褐灰シルトブロック（直径 20 ～ 50 ㎜）を 30%含む、掘り方
SE7（B－B´）
1. 10YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱、しまり弱、2 ～ 5 ㎜の炭を 7%含む、10 ㎜以上の円礫を 10%含む
2. 7.5YR3/1 黒褐色シルト　粘性中、しまり中、10 ㎜以上の円礫を 15%含む、2 ～ 5 ㎜の礫を 30%含む
3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　粘性中、しまり弱、10 ㎜以上の円礫を 30%含む、10YR7/2 にぶい黄橙の砂を 40%含む
4. 10YR4/1 褐灰色シルト　粘性中、しまり中、木枠の出土あり、10 ㎜以上の円礫を 5%含む、2 ～ 5 ㎜の礫を 30%含む
5. 7.5YR2/1 黒色シルト　粘性中、しまり弱、10YR7/2 砂を 20%含む
6. 10YR2/1 黒色シルト　粘性中、しまり中、石・礫を含まない、10YR7/2 砂を 50%以上含む

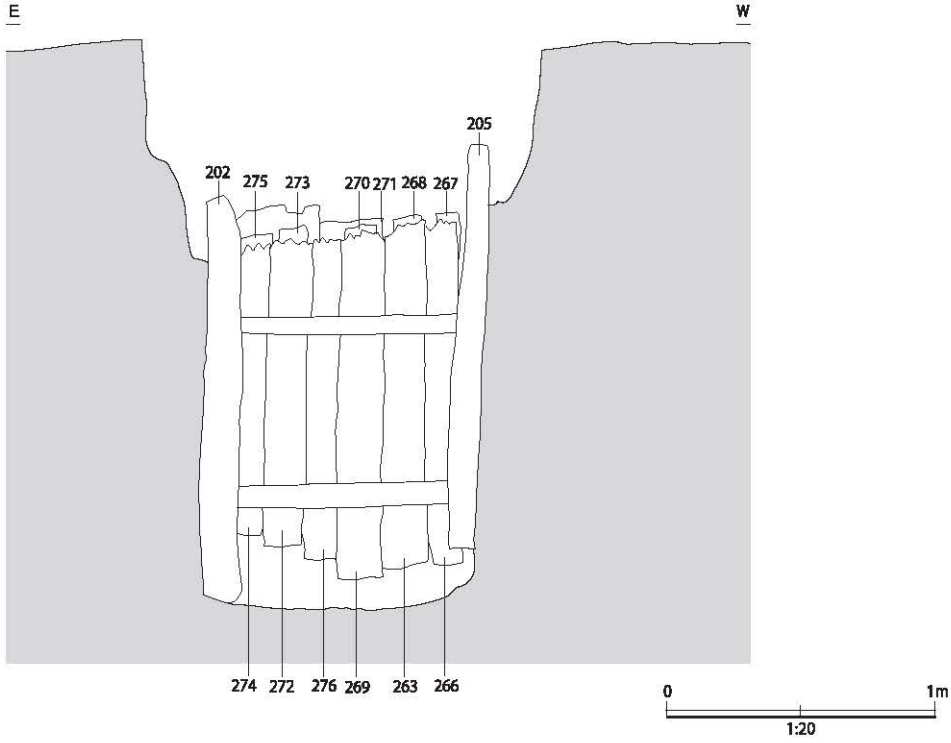


第 18 図　SE7 井戸跡立面図（東面・北面）

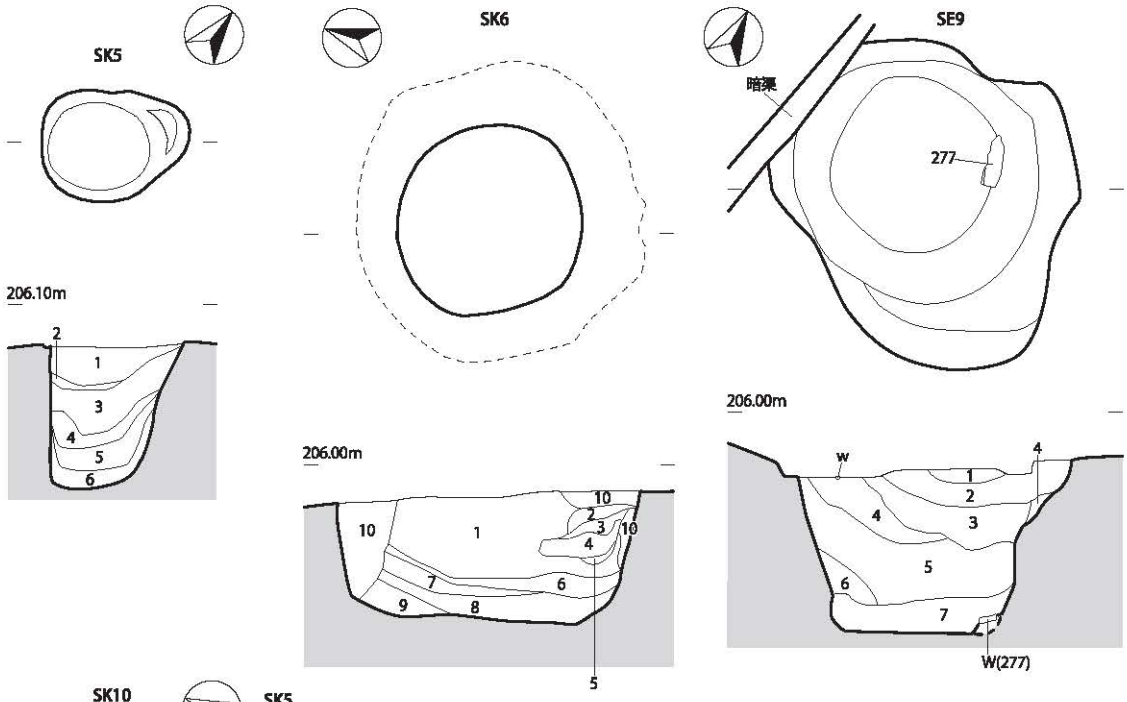
SE7 西面

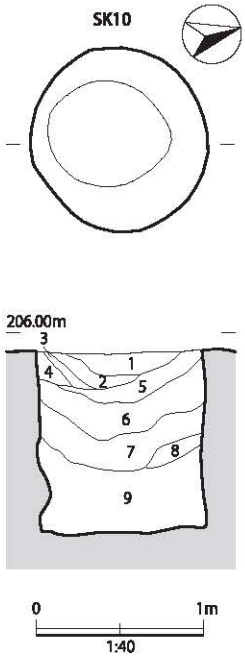


SE7 南面模式図



第 19 図　SE7 井戸跡立面図（西面・南面模式図）





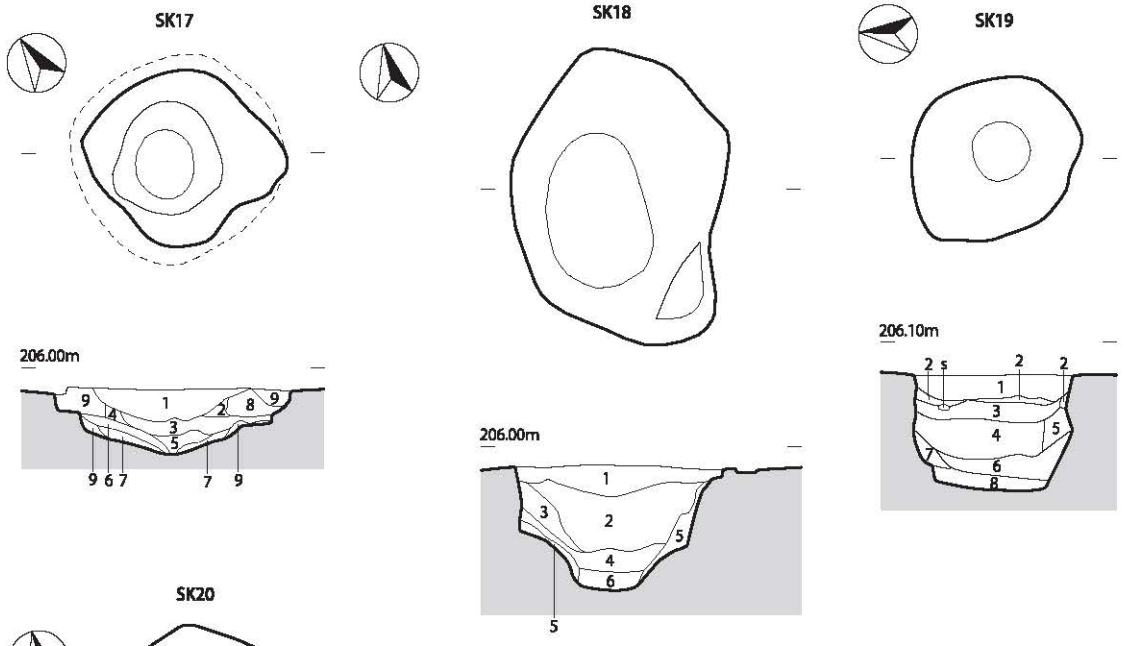
SK5
1. 10YR3/1 黒褐色シルト　粘性中、しまり中、10YR6/4 にぶい黄褐色の地山土を 15％含む
2. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性弱、しまり弱
3. 10YR2/1 黒色シルト　粘性中、しまり弱、5～10 ㎜の地山礫・炭を 50％以上含む
4. 2.5YR6/1 黄灰色シルト　粘性中、しまり弱、5～10 ㎜の地山礫を 30％含む
5. 7.5Y2/1 黒色シルト　粘性弱、しまり弱、植物遺体を 50％以上含む
6. 5BG7/1 明青灰色粘土　粘性弱、しまり弱、2～5 ㎜の炭を 20％含む、2.5Y2/1 黒色土を底部に 2 ㎜～5 ㎜板状に含む

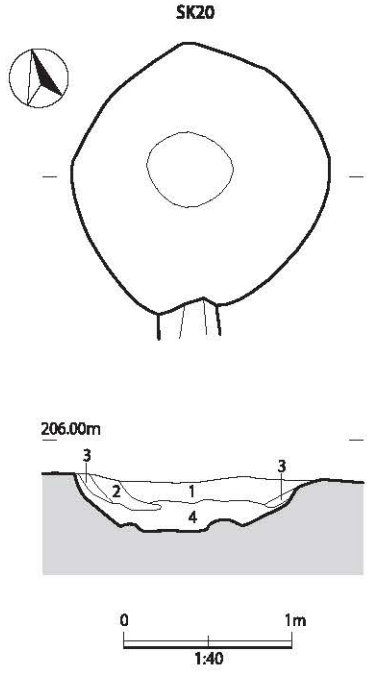
SK6
1. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性弱、しまり弱、2～5 ㎜の地山礫を 40％含む
2. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性中、しまり弱、10 ㎜以上の地山ブロックを 50％以上含む
3. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性中、しまり中、5～10 ㎜の地山土を板状に含む
4. 2.5Y6/1 黄灰色シルト　粘性中、しまり中、酸化鉄を含む
5. 2.5Y6/1 黄灰色シルト　粘性弱、しまり弱、酸化鉄を含む
6. 7.5YR7/2 明褐灰色シルト　粘性中、しまり中、酸化鉄を含む
7. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性中、しまり弱、2～5 ㎜の地山礫を 30％含む
8. 7.5Y4/1 灰色シルト　粘性中、しまり中、2～5 ㎜の炭を 20％含む
9. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　粘性中、しまり中、2～5 ㎜の炭を 10％含む
10. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト　粘性中、しまり中、酸化鉄を含む、地山土

SE9
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色　しまり強い、10YR2/1 黒色シルトブロック（直径 10～50 ㎜）を 7％含む、人為
2. 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中、10YR4/1 褐灰砂ブロック（直径 10～30 ㎜）を 40％含む、人為
3. 10YR1.7/1 黒色シルト　しまりやや強い、粘性中、10YR4/1 褐灰シルトブロック（直径 10～50 ㎜）を 3％含む、人為
4. 10YR1.7/1 黒色シルト　しまりやや強い、粘性中、10YR4/1 褐灰シルトブロック（直径 10～30 ㎜）を 1％含む、人為
5. 10YR1.7/1 黒色シルト　しまりやや強い、粘性中、10YR4/1 褐灰シルトブロック（直径 10～50 ㎜）を 15％含む、人為
6. 10YR1.7/1 黒色シルト　しまりやや強い、粘性中、10YR4/1 褐灰シルトブロック（直径 10～30 ㎜）を 20％含む
7. 10YR2/1 黒色シルト　しまり弱い、粘性中、7.5Y6/1 灰色シルトブロックを 5％含む、下から湧水する

SK10
1. 10YR2/1 黒色シルト　粘性弱い、しまりやや強い、10YR7/4 にぶい黄褐色砂質シルト粒を 7％含む、自然堆積
2. 10YR3/1 黒褐色シルト　粘性中、しまりやや強い、10YR7/4 にぶい黄褐色砂質シルト粒を 7％含む、10YR7/4 にぶい黄褐色砂質シルト（直径 5～10 ㎜）をスジ状に 40％含む、自然堆積
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性弱い、しまりやや弱い、10YR6/8 明黄褐色砂質シルトを 15％含む、自然堆積
4. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト　粘性やや強い、しまり中、10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトを 10％含む、自然堆積
5. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性やや弱い、しまり中、10YR6/1 褐灰色砂をスジ状に 50％以上含む、10YR6/1 褐灰色シルト粒（直径 2～5 ㎜）を 40％含む、自然堆積
6. 7.5YR2/1 黒色粘質シルト　粘性中、しまり中、10YR6/1 褐灰色砂を 40％以上含む、自然堆積
7. 10YR7/3 にぶい黄色橙細砂　10YR7/8 黄橙色細砂を 50％以上含む
8. 2.5YR6/1 黄灰色砂質シルト　粘性強い、しまり弱い
9. 5Y4/1 灰色砂質シルト　粘性強い、しまり弱い、黒色強い有機質

第 20 図　SE9 井戸跡・SK5・6・9・10 土坑





SK17

1. 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中、10YR4/2 灰黄褐砂ブロック（直径 5 ～ 10 ㎜）を 3%含む、酸化鉄を少量含む
2. 10YR2/1 黒色シルト　しまり中、粘性やや弱い、上記の砂ブロックを 30%含む
3. 10YR2/1 黒色シルト　しまりやや強い、粘性やや強い、10YR5/3 にぶい黄褐シルトブロック（直径 5 ～ 10 ㎜）を 5%含む、酸化鉄を少量含む
4. 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり中、粘性やや弱い、10YR4/2 砂を 40%含む
5. 10YR1.7/1 黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、10YR4/3 にぶい黄褐シルトブロック（直径 5 ㎜）を 3%含む
6. 10YR1.7/1 黒色シルト　しまり中程度、粘性中程度、10YR4/2 砂をしま状に含む
7. 10YR3/2 黒褐色砂　しまり、粘性弱い、黒褐シルトブロック（10YR3/2）を 20%含む
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり、粘性弱い、部分的に 10YR3/2 黒褐シルトブロックを含む
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり、粘性弱い、地山砂

SK18

1. 7.5YR3/1 黒色褐色シルト　粘性弱、しまり中（１０YR7/3 砂を粒状に 30%含む）
2. 7.5YR5/1 褐灰色シルト　粘性中、しまり中（1 ㎜以下の炭を板状に含む）
3. 2.5Y3/1 黒褐色シルト　粘性中、しまり弱、10YR7/2 にぶい黄橙砂質シルトブロックを 50%以上含む
4. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト　粘性強、しまり中（2.5Y5/1 黄灰色砂ブロックを 40%含む）
5. 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルト　粘性弱、しまり弱、地山土
6. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性弱、しまり弱

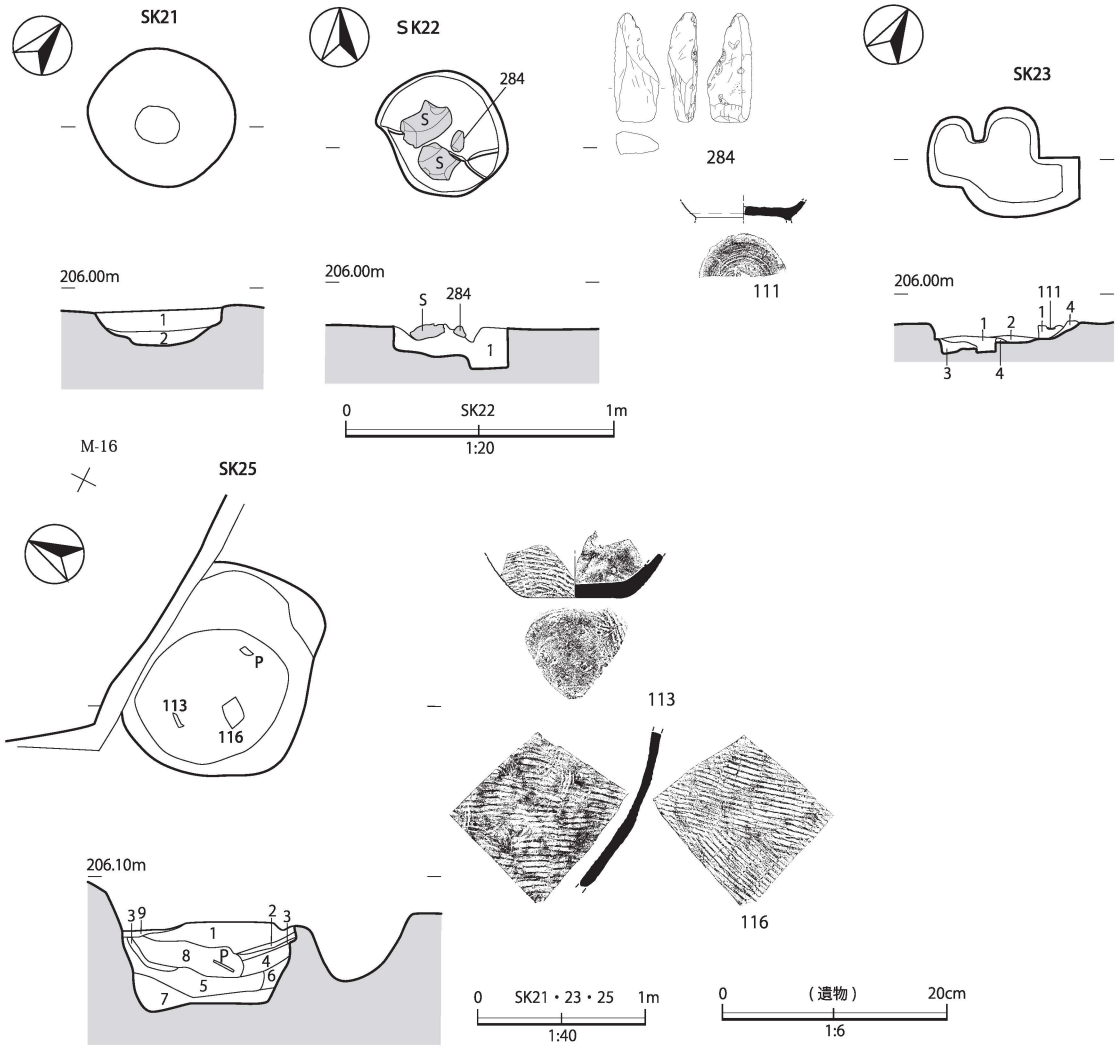
SK19

1. 10YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱い、しまり中、10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルトブロックを 3%含む、自然堆積
2. 10YR2/1 黒色シルト　粘性中、しまり弱い、1 ㎜～ 2 ㎜の炭を 5%含む、7.5YR6/3 砂を 10%含む、自然堆積
3. 10YR4/1 褐灰色シルト　粘性強い、しまりやや強い、自然堆積
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　粘性強い、しまり弱い、粗砂、自然堆積
5. 7.5YR3/1 黒褐色シルト　粘性中、しまり弱い、粗砂を 7%含む、自然堆積
6. 10YR2/2 黒褐色粘質シルト　粘性中、しまり弱い、10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルトブロックを 20%含む、人為堆積か
7. 10YR1.7/1 黒色砂質シルト　粘性弱い、しまり弱い
8. 10YR7/2 にぶい黄橙色砂　5 ㎜～ 10 ㎜のレキを 50%以上含む、地山土

SK20

1. 10YR2/1 黒色シルト　しまりやや強い、粘性中、10YR6/4・10YR7/2 にぶい黄橙シルトブロックを（大きさ 10 ～ 100 ㎜）レンズ状に 7%含む、人為堆積
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂　しまり中、粘性弱い、10YR2/2 黒褐シルトブロック（直径 5 ～ 10 ㎜）を 5%含む、人為堆積
3. 10YR2/1 黒色シルト　しまり・粘性やや強い、10YR7/2 にぶい黄橙シルトブロックを縞状に 5%含む、人為堆積
4. 10YR2/1 黒色シルト　しまり・粘性やや強い、10YR6/2 灰黄褐シルトブロックを（大きさ 10 ～ 70 ㎜）縞状に含む（10%）、人為堆積

第 21 図　SK17 ～ 20 土坑



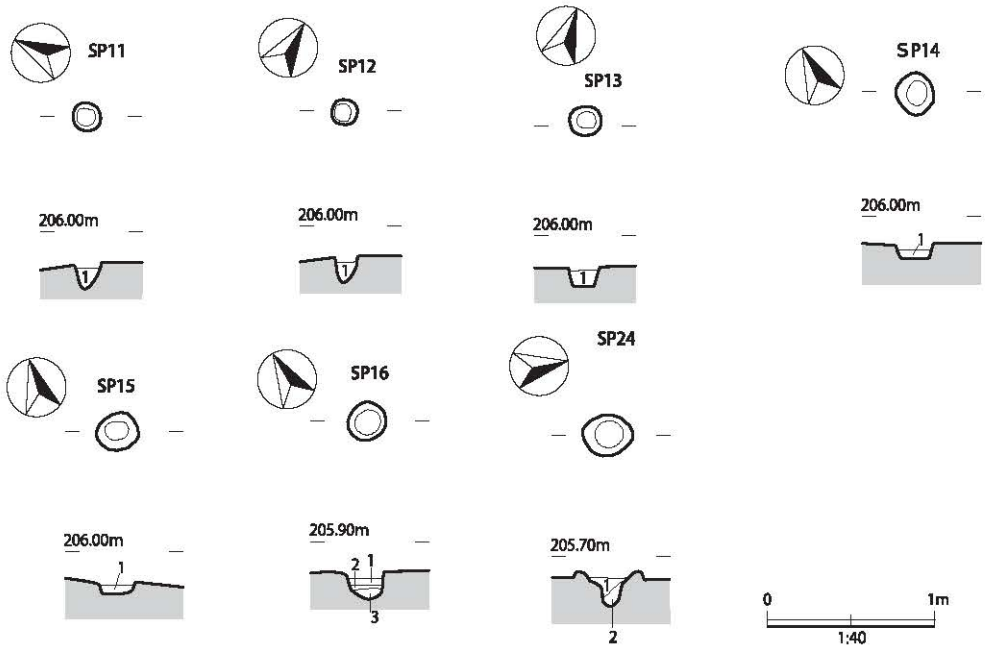
SK21
1. 10YR2/1 黒色シルト　しまりやや強い、粘性中程度、10YR5/3 にぶい黄褐砂質シルトブロック（直径 5 ～ 50 ㎜）を 7%含む。炭化物（直径 5 ㎜）を微量含む
2. 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中、10YR5/3 にぶい黄褐シルトブロック（直径 5 ～ 10 ㎜）を 2%含む

SK22
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、粘性中、酸化鉄を含む、10YR5/3 にぶい黄褐シルトブロック（直径 50 ～ 100 ㎜）を 5%含む

SK23
1. 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中、酸化鉄を含む
2. 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中、酸化鉄を含む
3. 10YR5/2 灰黄褐シルト　しまり強い、粘性中、10YR3/2 黒褐色シルトブロックを 30%含む
4. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト　しまり強い、粘性中、地山

SK25
1. 7.5YR2/1 黒色シルト　粘性中、しまりやや強い、直径 3 ～ 4 ㎜の 10YR5/1 褐灰色土粒を 20%程度含む
2. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性中、しまり中、細砂含む
3. 10YR1.7/1 黒色粘質シルト　粘性中、しまり中
4. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性中、しまり中、細砂を含む、2 層に同じ
5. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト　粘性中、しまりやや弱い、細砂、直径 5 ～ 10mm の 10YR5/1 褐灰色土粒を 20%程度含む
6. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　粘性中、しまり中、10YR1.7/1 黒色土を 10%程度含む
7. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト　粘性中、しまりやや弱
8. 7.5YR2/1 黒色シルト　粘性中、しまりやや弱い、直径 5 ㎜～ 10 ㎜の 10YR5/1 褐灰色土粒を 50%程度含む
9. 10YR8/6 黄橙色シルト　粘性弱い、しまり弱い、地山土

第 22 図　SK21 ～ 23・25 土坑



SP11
1.　10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、10YR3/2 黒褐色シルトブロック（直径 10 ～ 20 ㎜）を 10％含む

SP12
1.　10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、酸化鉄を含む

SP13
1.　10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中、炭化物（直径 3 ㎜）を微量含む

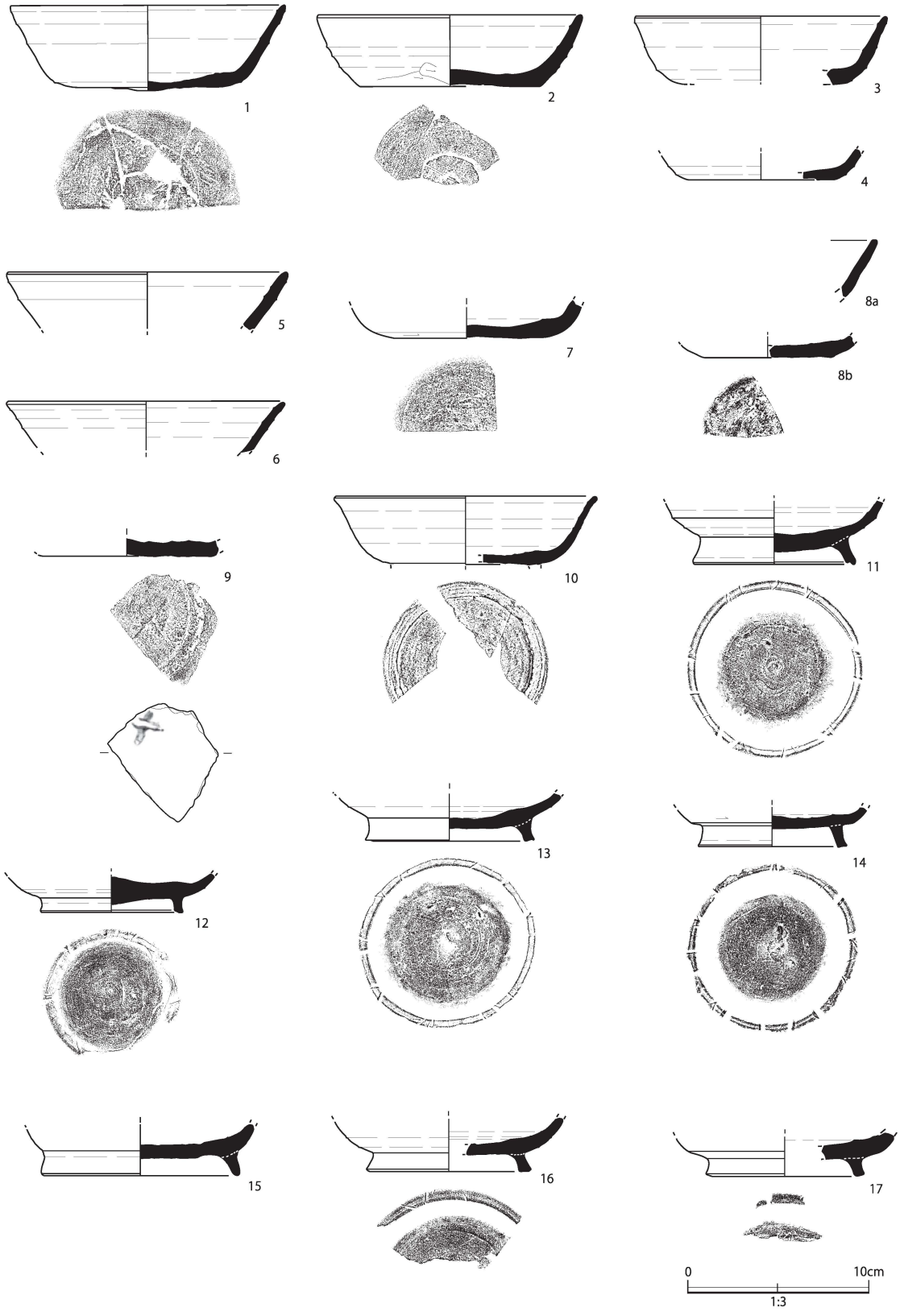
SP14
1.　10YR2/1 黒色シルト　しまり中、粘性中、10YR3/3 暗褐色シルトブロック（直径 10 ～ 20 ㎜）を 5％含む

SP15
1.　10YR2/1 黒色シルト　しまり中、粘性中、10YR2/3 黒褐色シルトブロック（直径 10 ～ 20 ㎜）を 7％含む

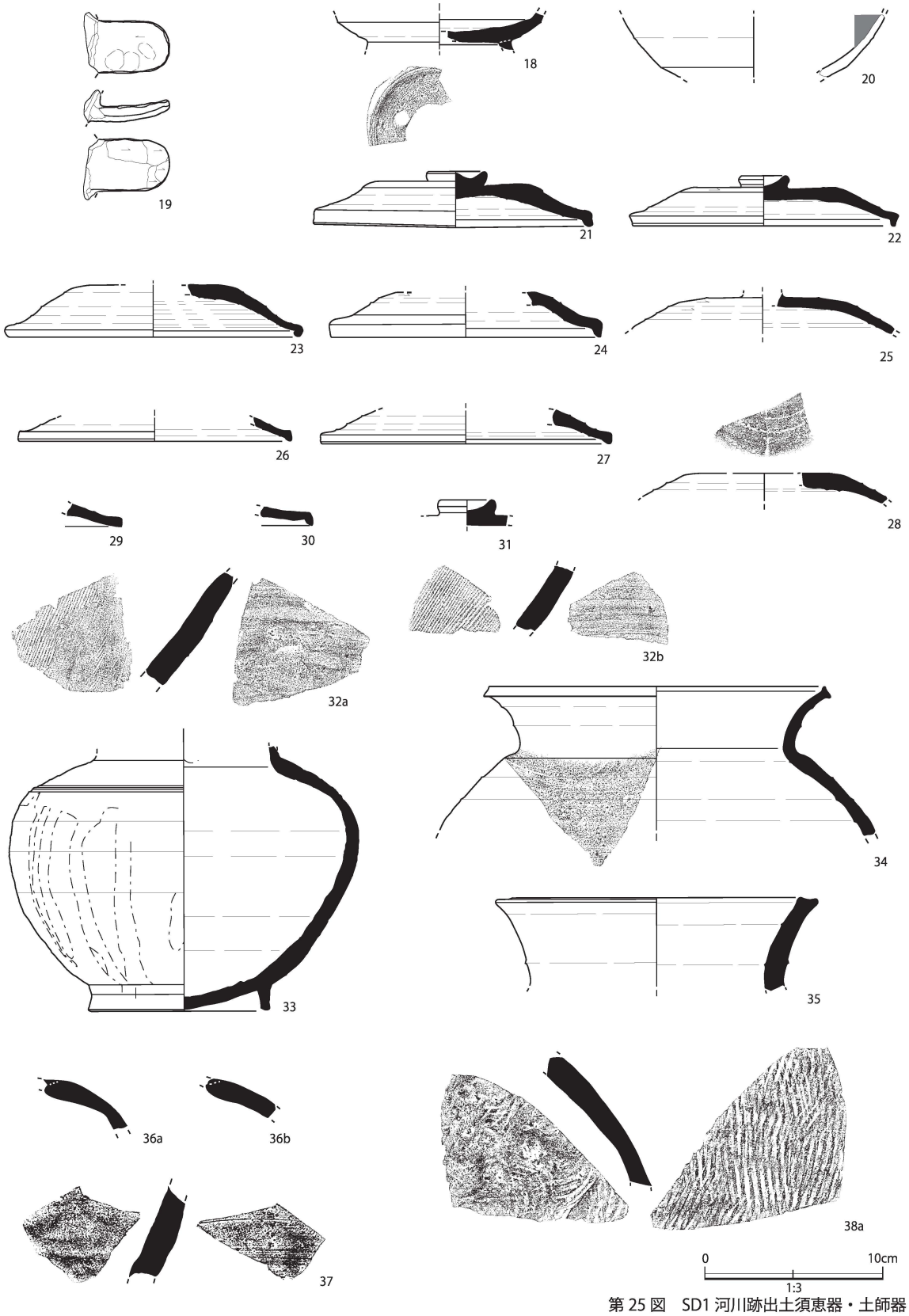
SP16
1.　10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中、炭化物（直径 3 ㎜）を 1％含む。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック（直径 5 ㎜）を 3％含む
2.　10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中、炭化物（直径 3 ～ 5 ㎜）を 1％含む。にぶい黄褐色シルトブロック（直径 5 ㎜）を 5％含む
3.　10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中、酸化鉄を含む

SP24
1.　10YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱い、しまりやや弱い
2.　10YR4/1 褐灰色シルト　粘性中、しまりやや強い

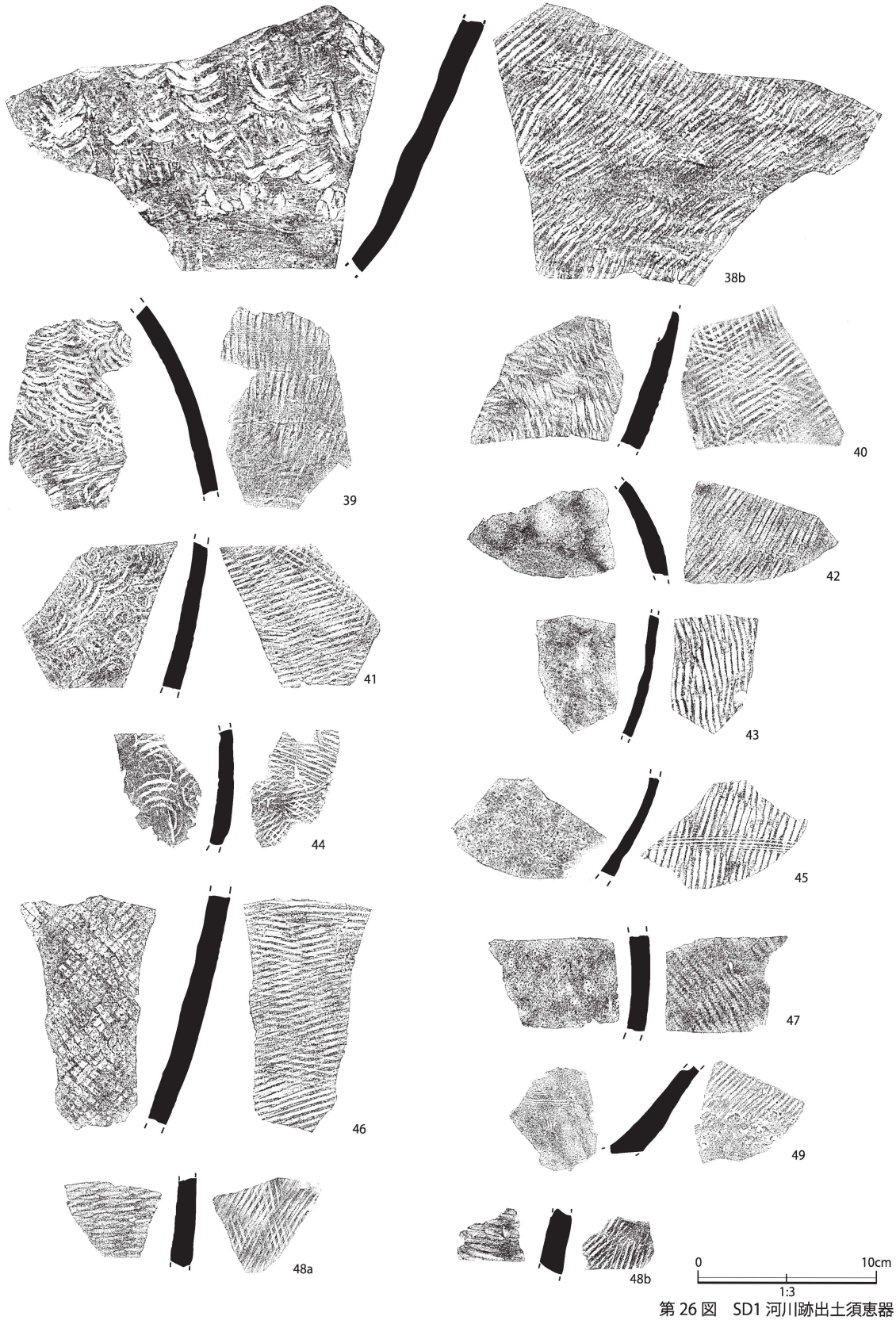
第 23 図　SP11 ～ 16・24 柱穴



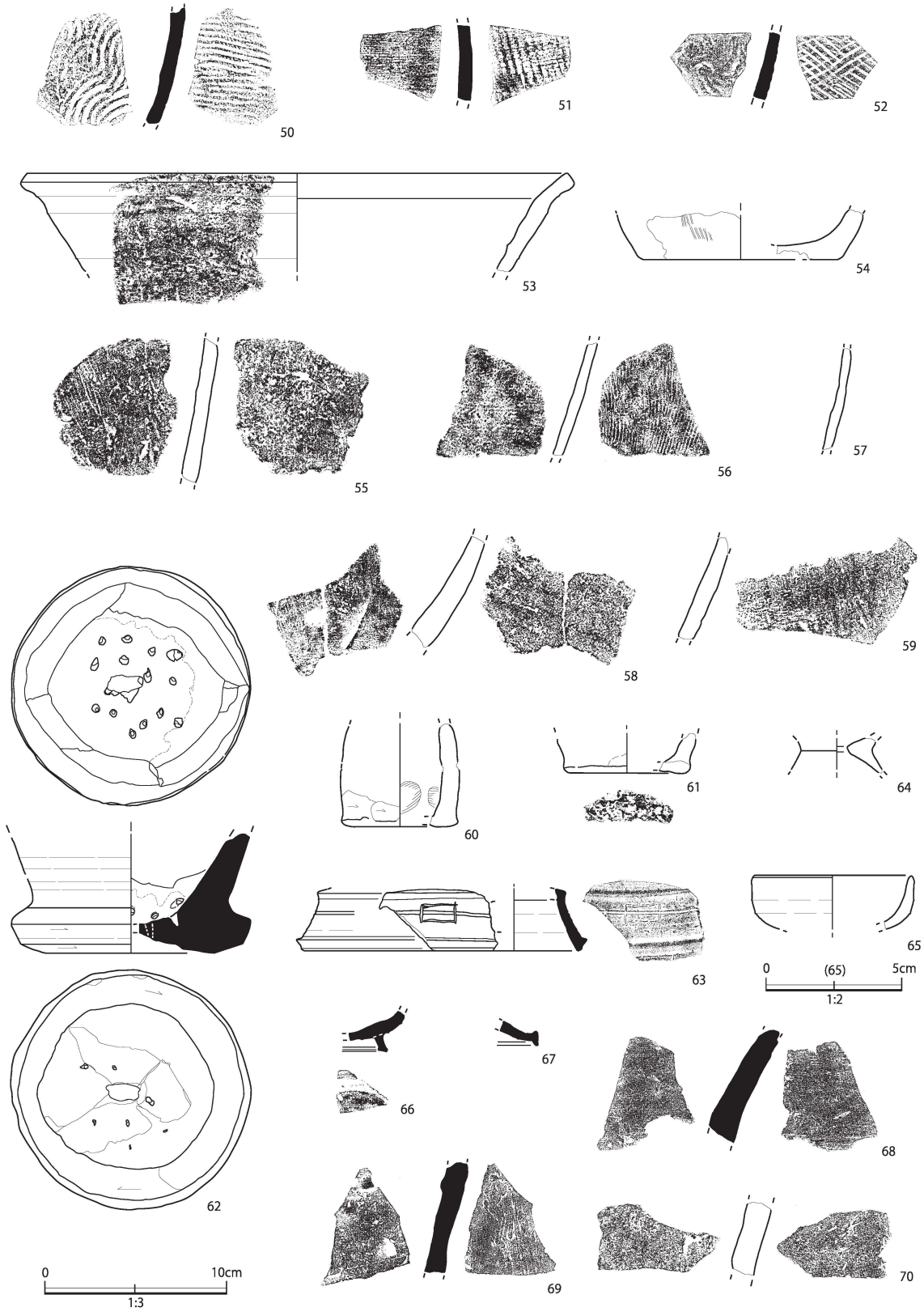
第 24 図　SD1 河川跡出土須恵器



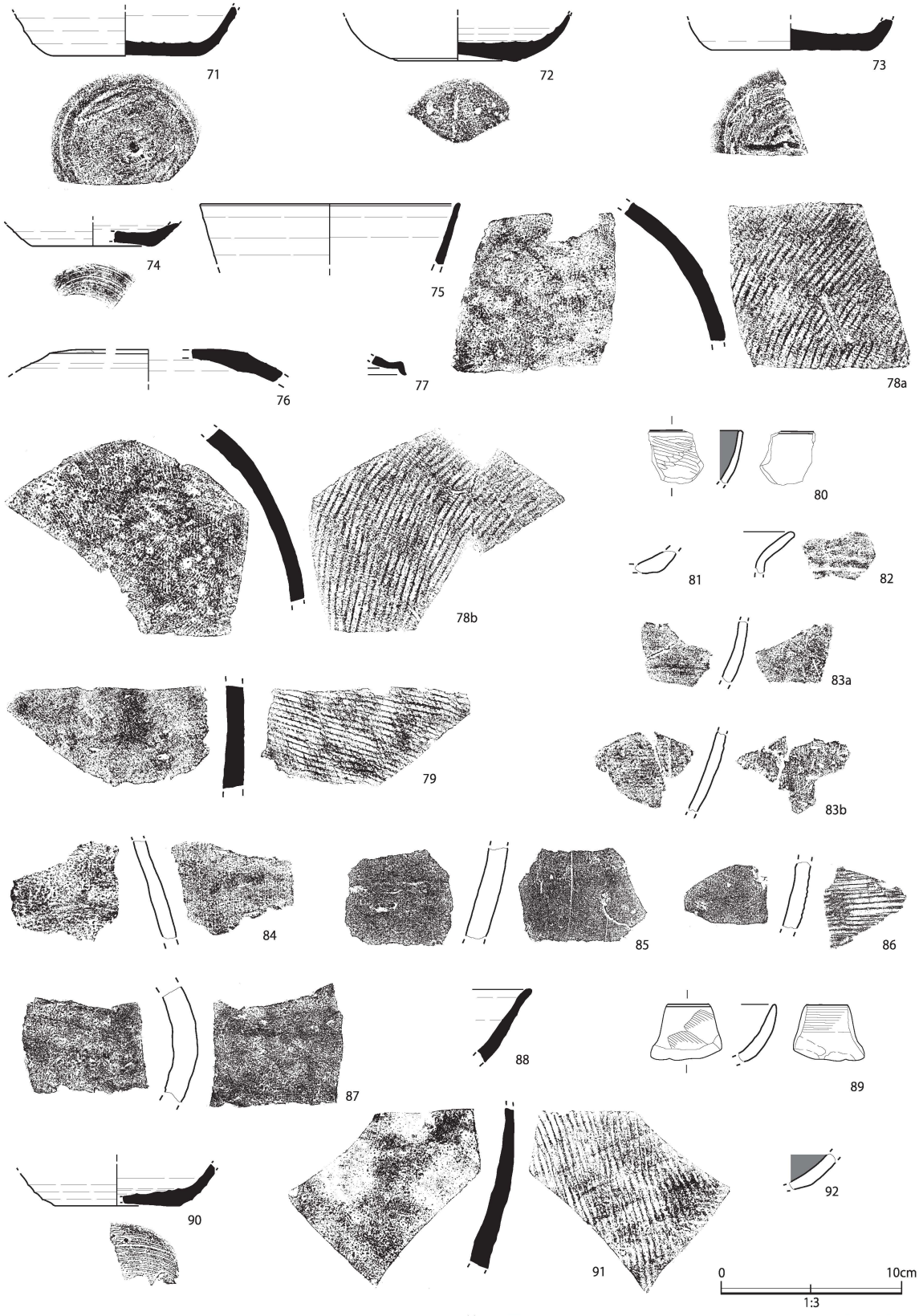
第 25 図　SD1 河川跡出土須恵器・土師器



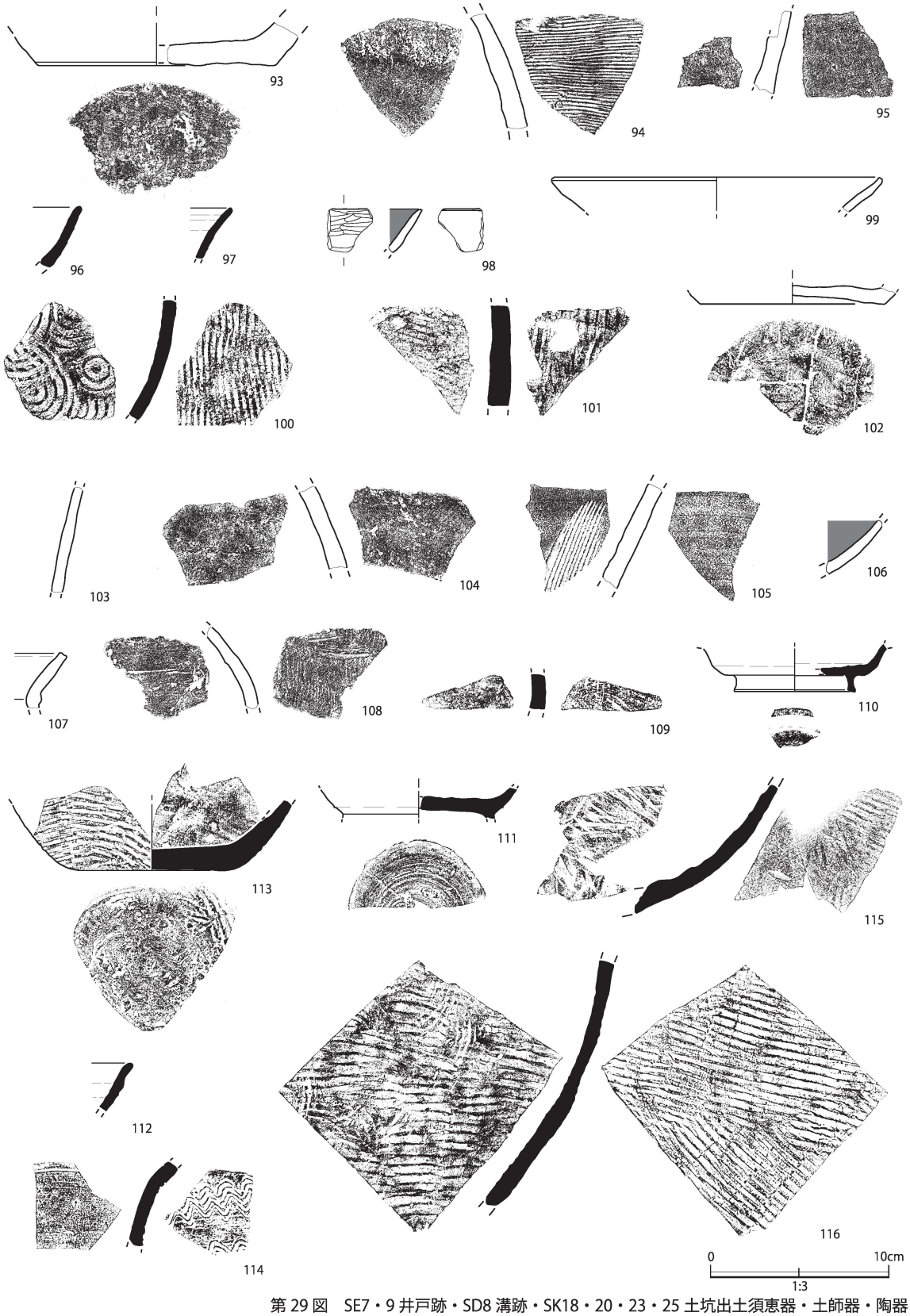
第 26 図　SD1 河川跡出土須恵器



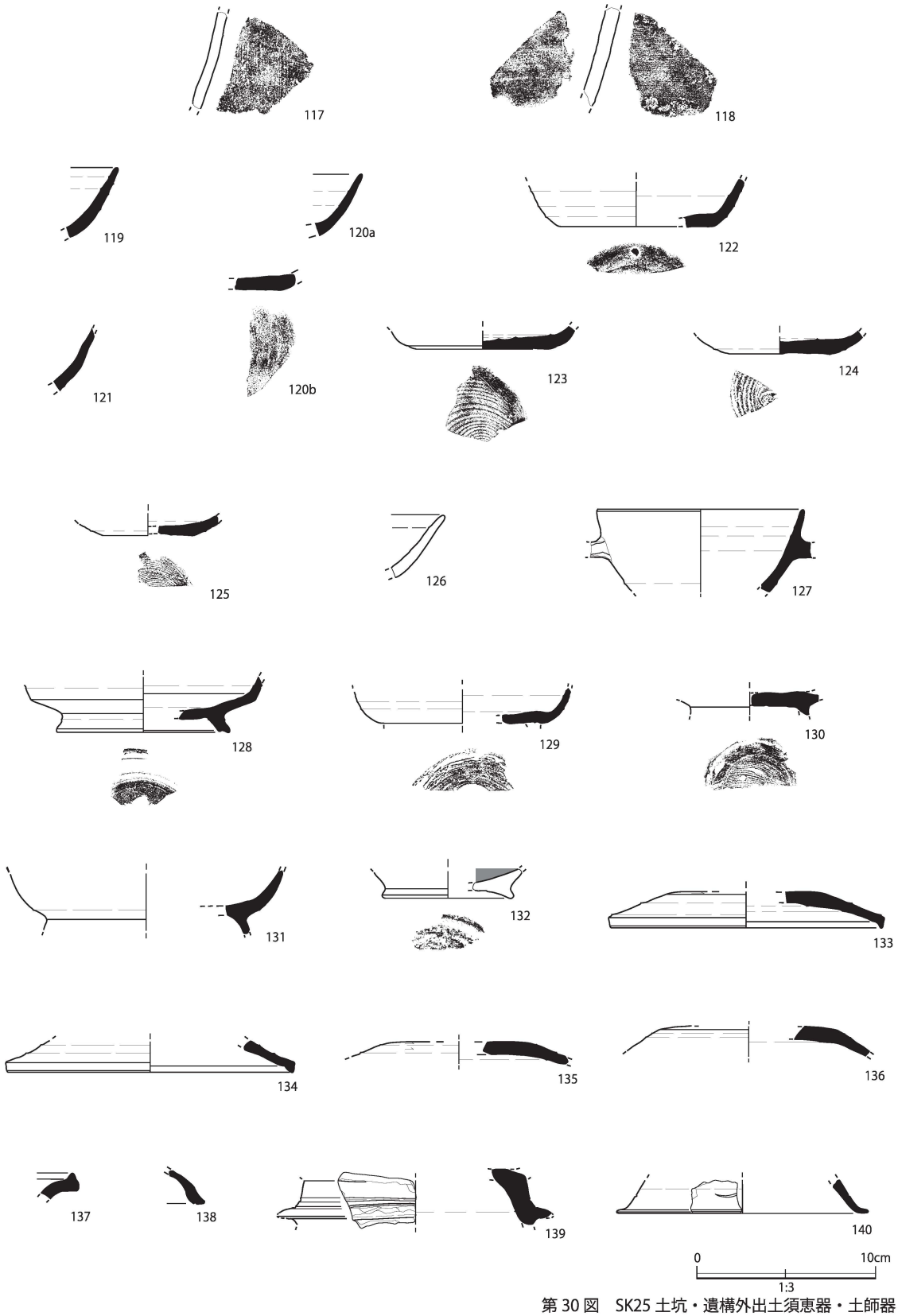
第 27 図　SD1 河川跡・SX3 竪穴状遺構・SD8 溝跡出土須恵器・土師器・陶器



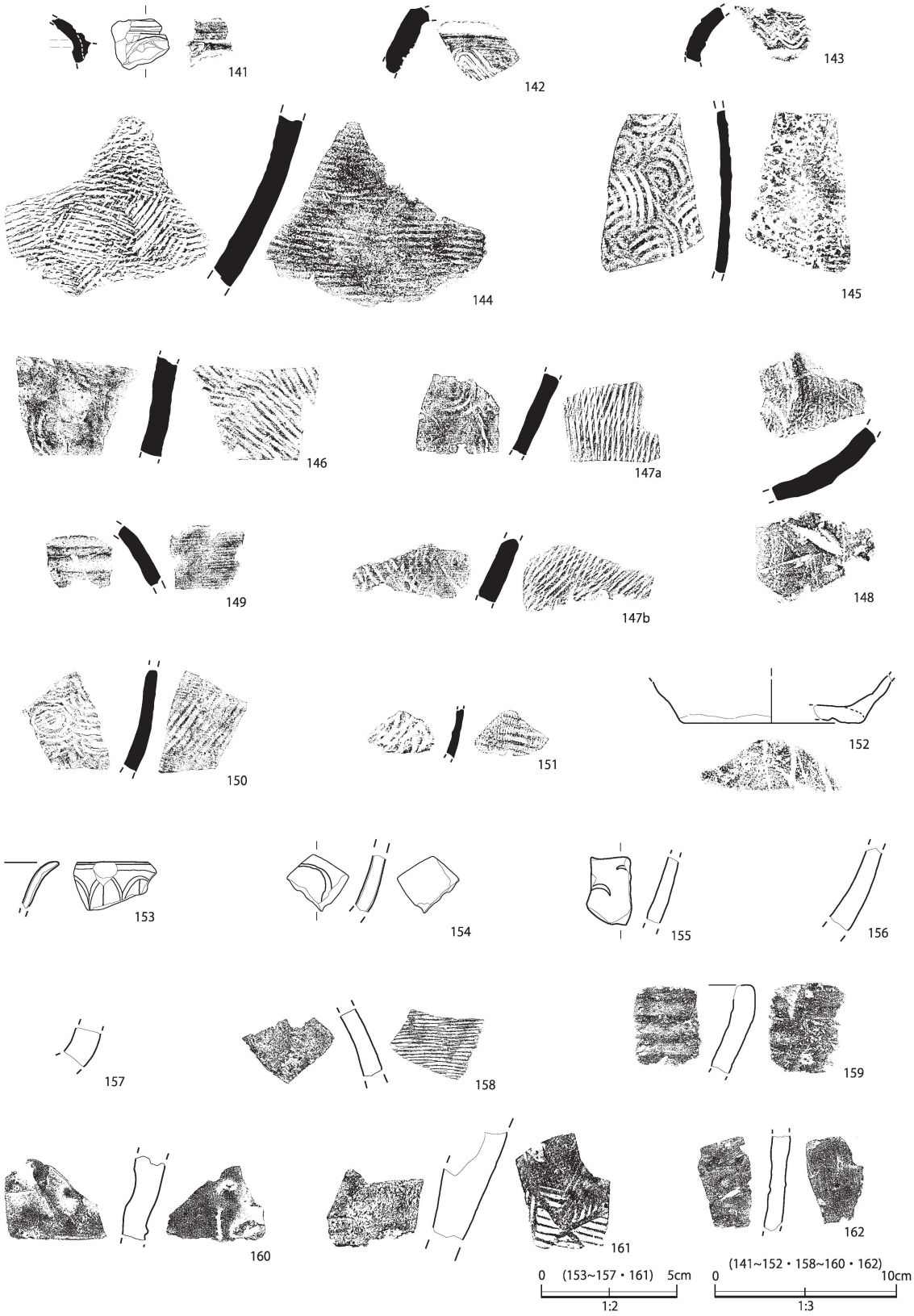
第 28 図　SE4・7 井戸跡・SK5 土坑出土須恵器・土師器・陶器



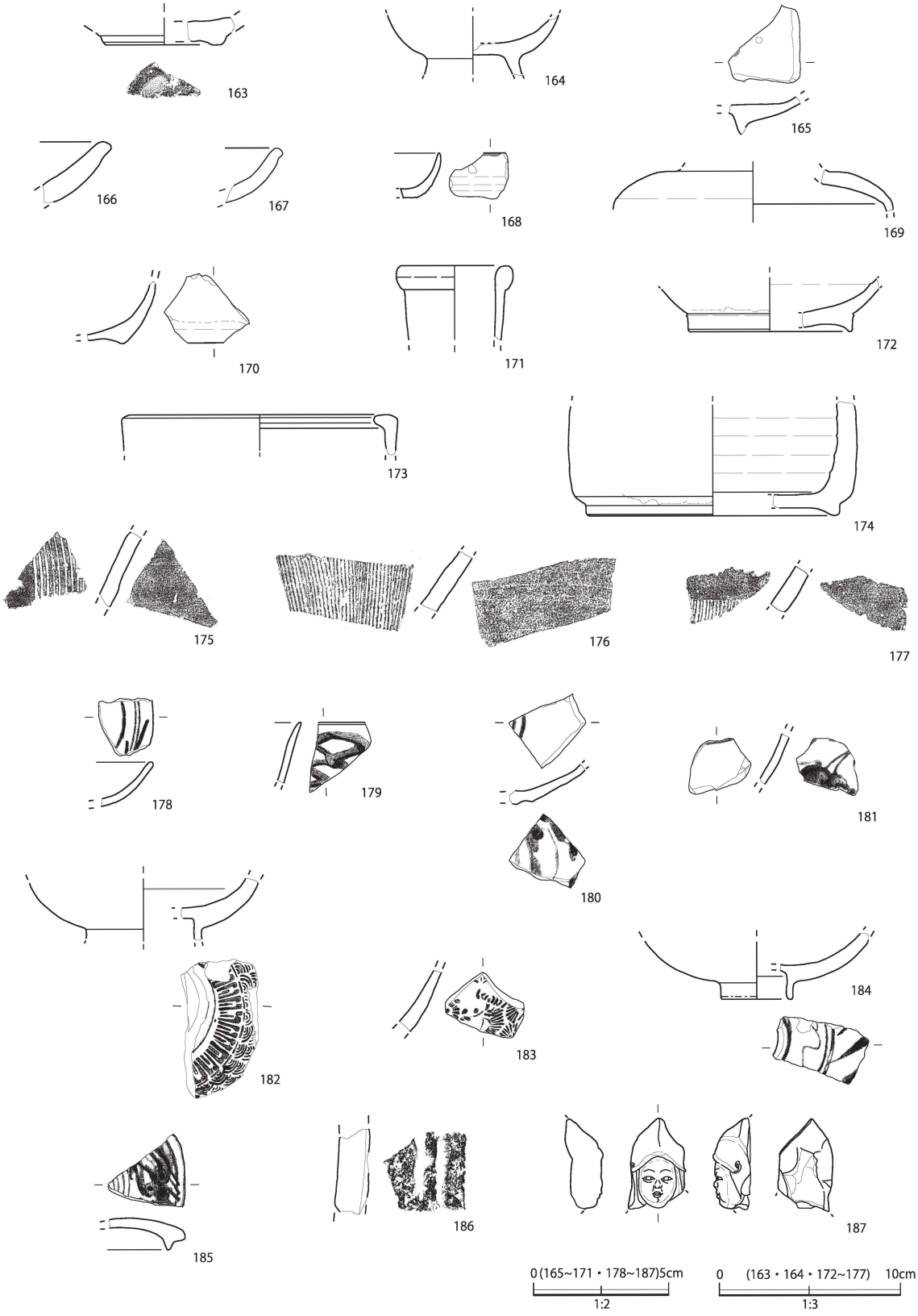
第 29 図　SE7・9 井戸跡・SD8 溝跡・SK18・20・23・25 土坑出土須恵器・土師器・陶器



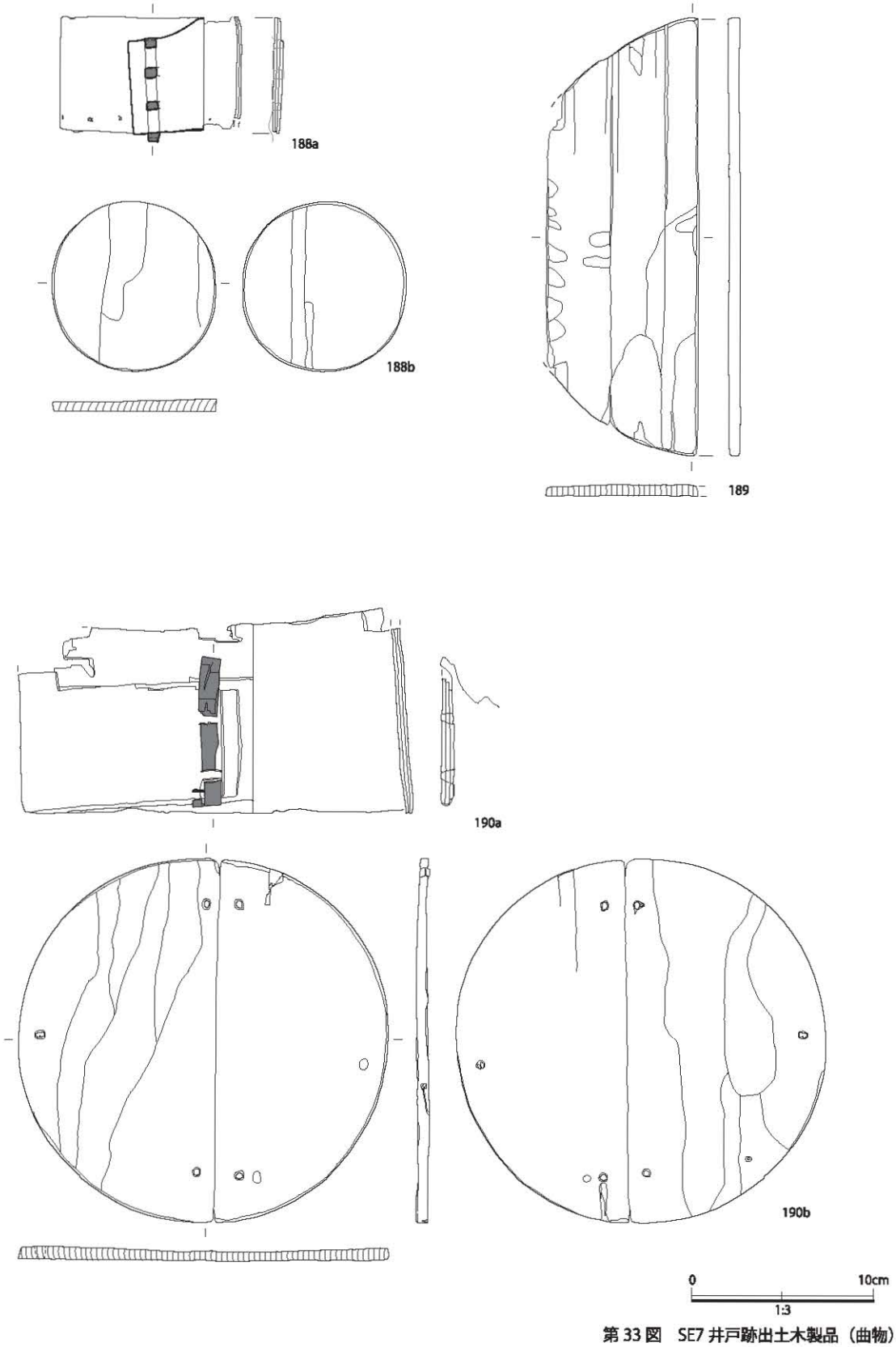
第 30 図　SK25 土坑・遺構外出土須恵器・土師器



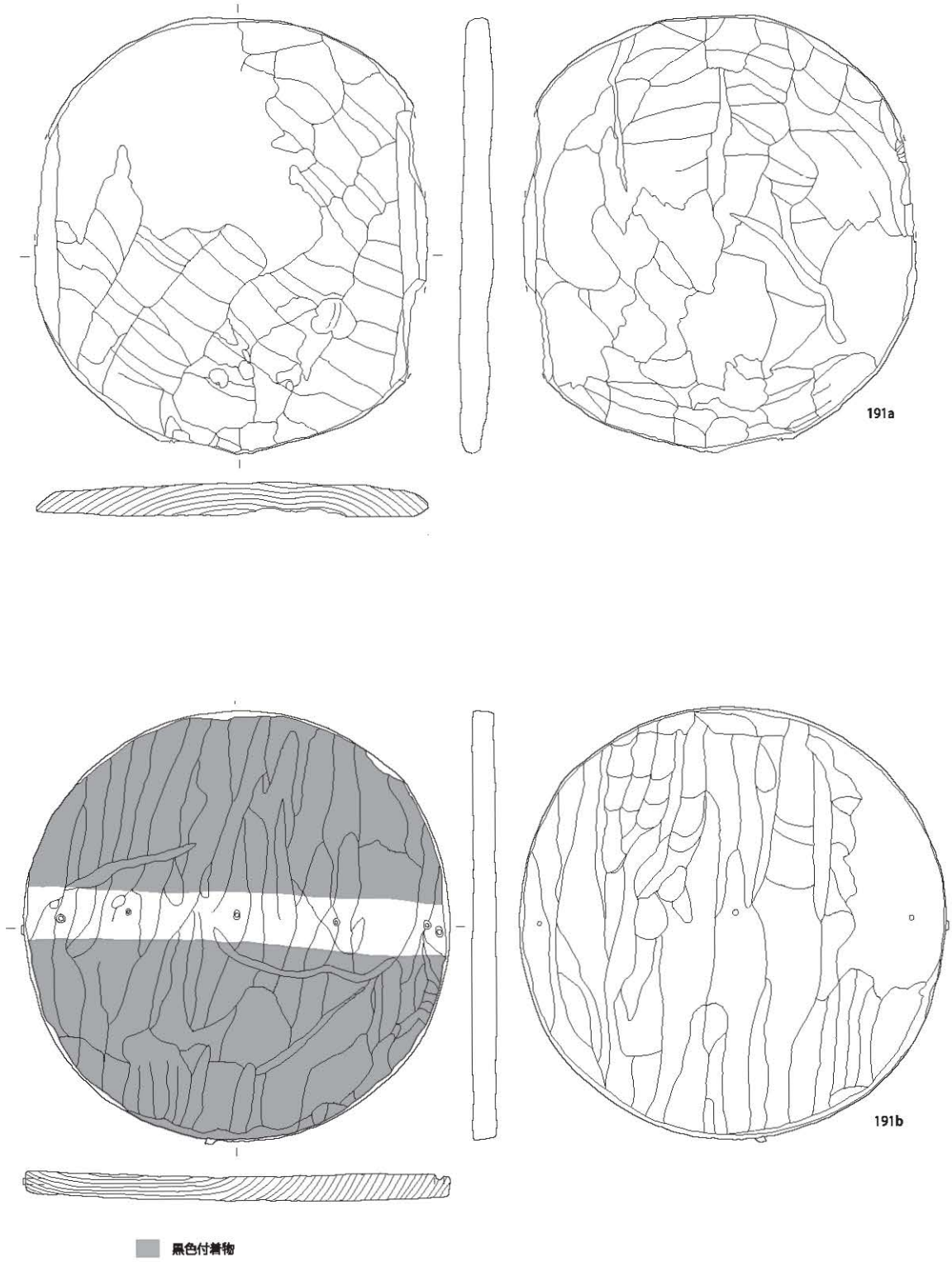
第 31 図　遺構外出土須恵器・土師器・陶磁器



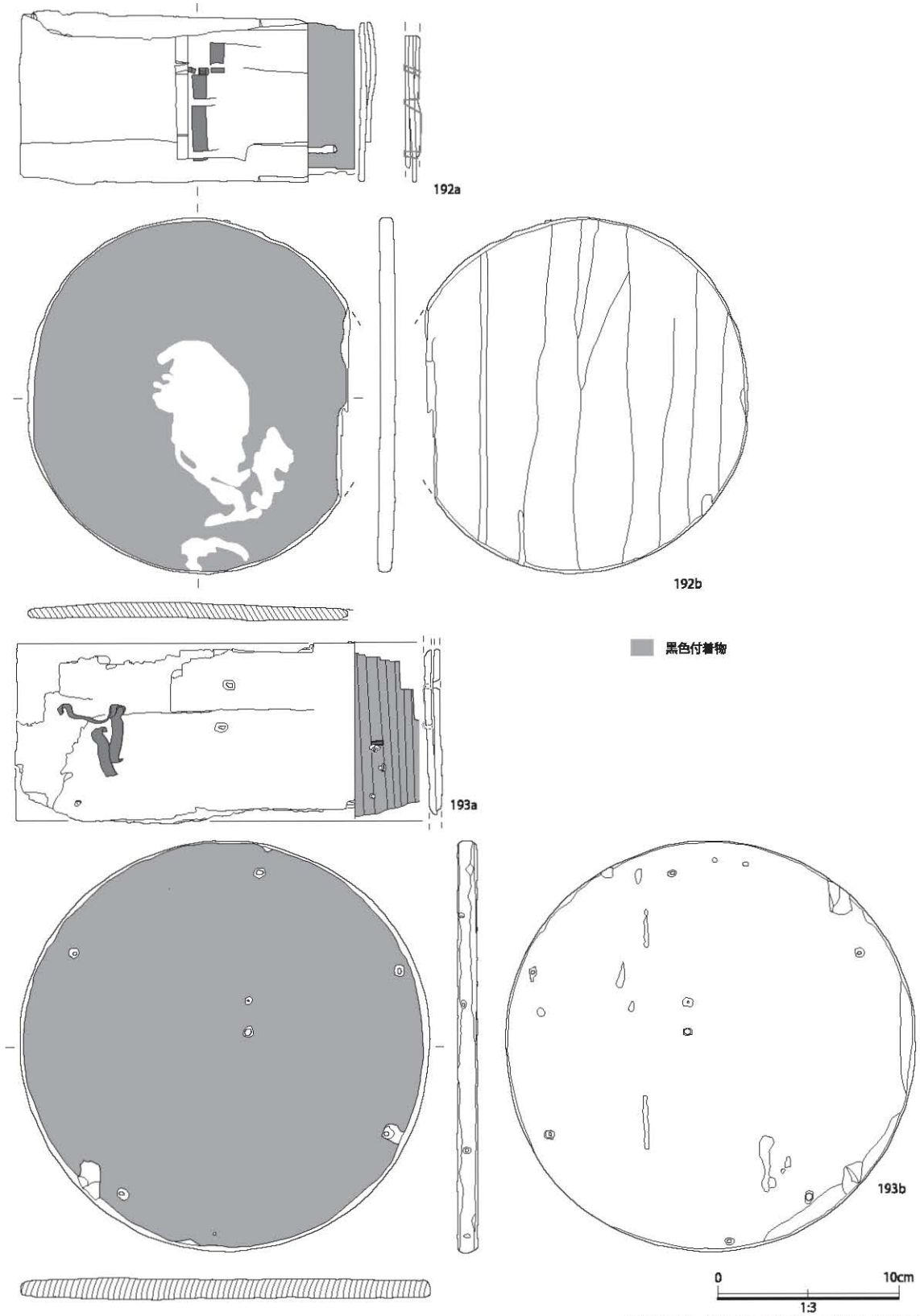
第 32 図　遺構外出土陶磁器・土器・土製品



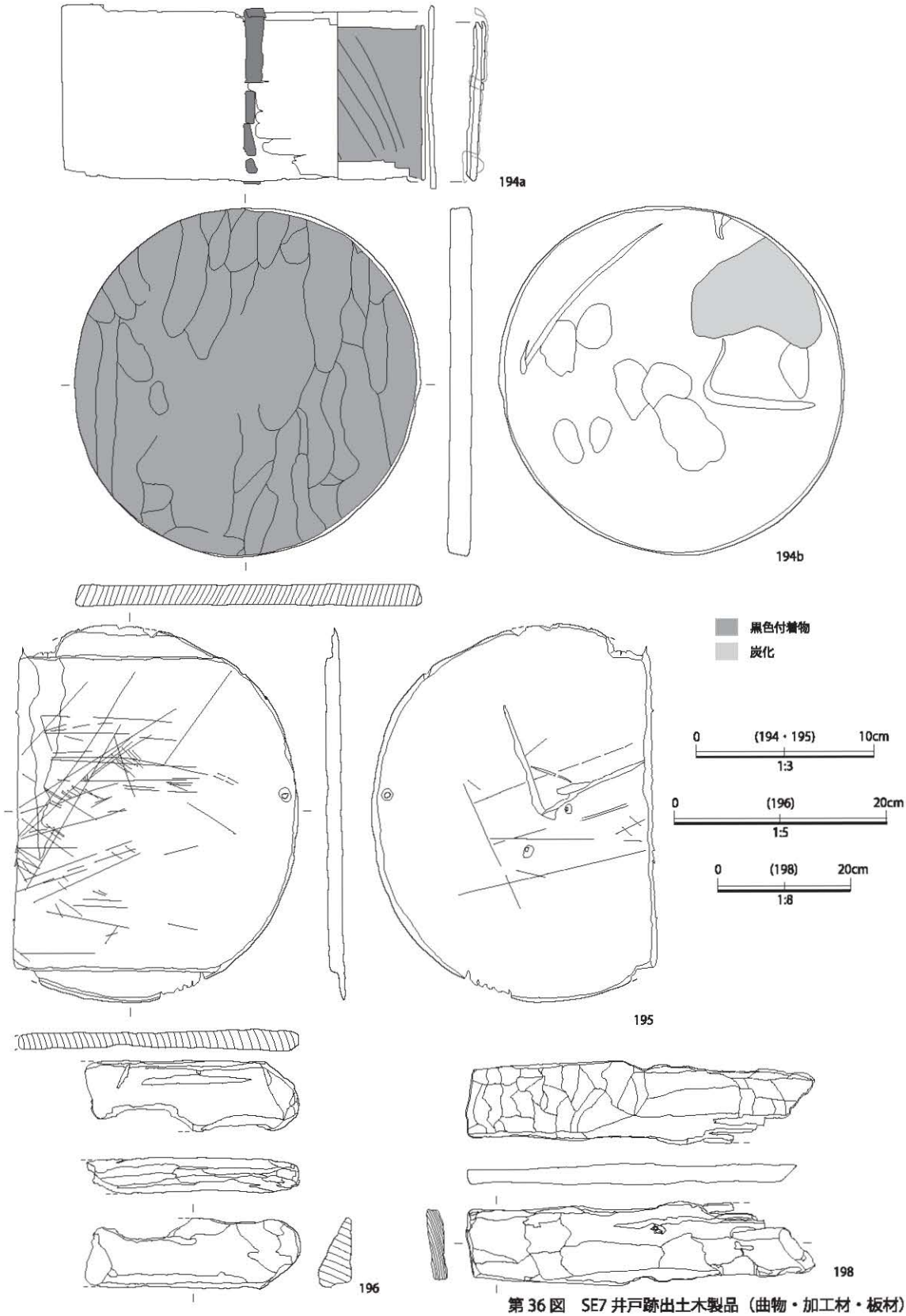
第 33 図　SE7 井戸跡出土木製品（曲物）



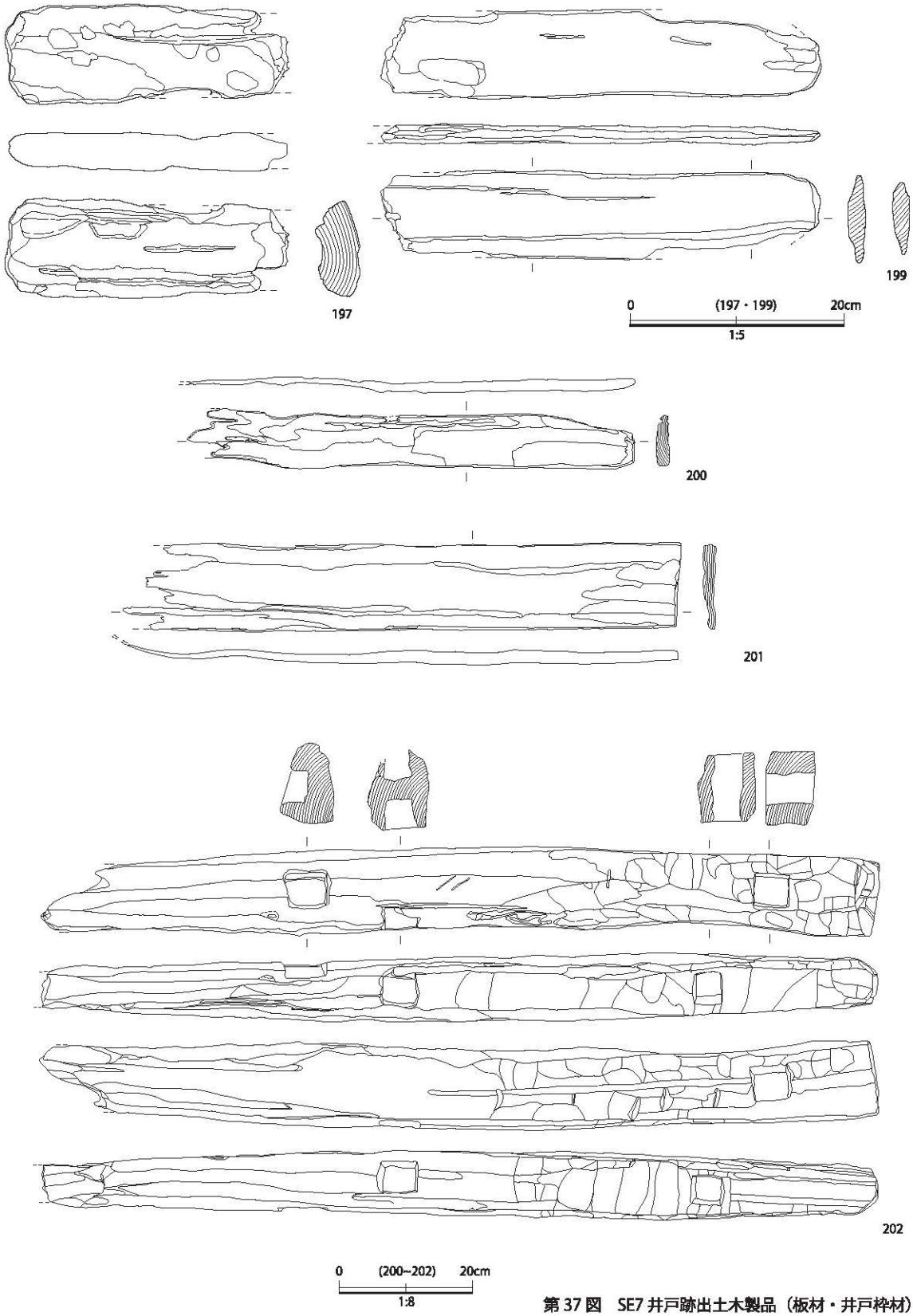
第 34 図　SE7 井戸跡出土木製品（曲物）



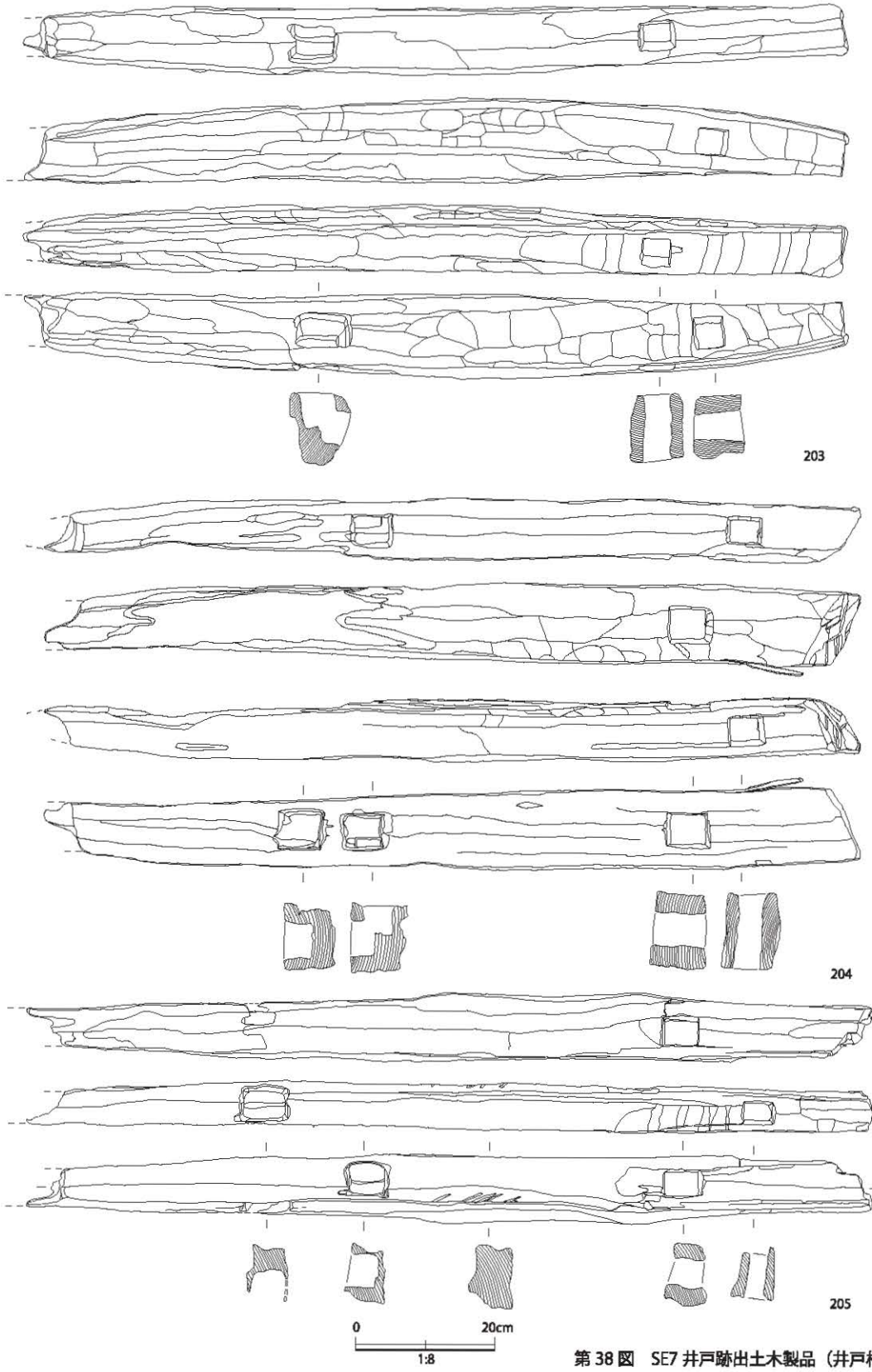
第 35 図　SE7 井戸跡出土木製品（曲物）



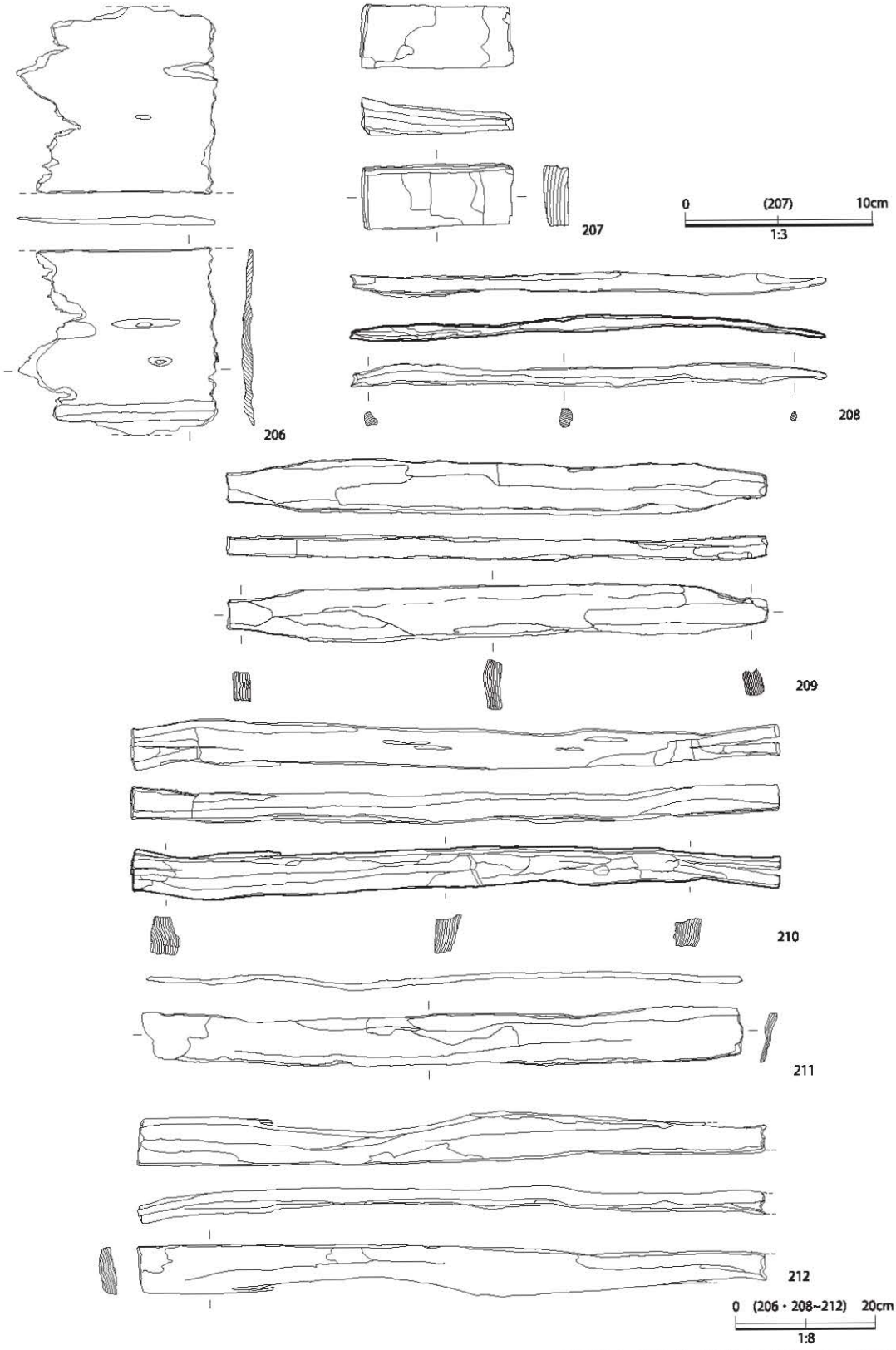
第 36 図　SE7 井戸跡出土木製品（曲物・加工材・板材）



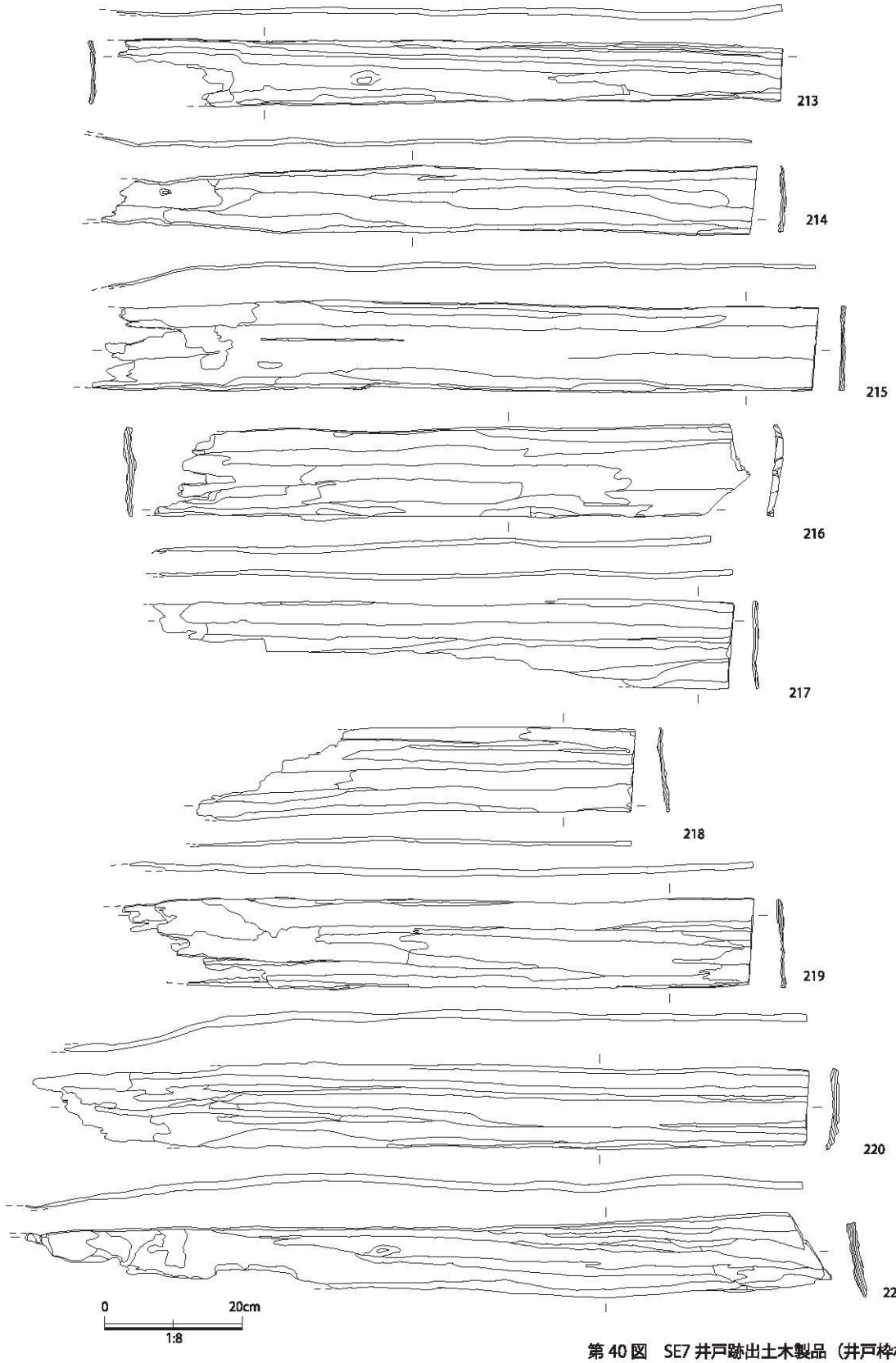
第 37 図　SE7 井戸跡出土木製品（板材・井戸枠材）



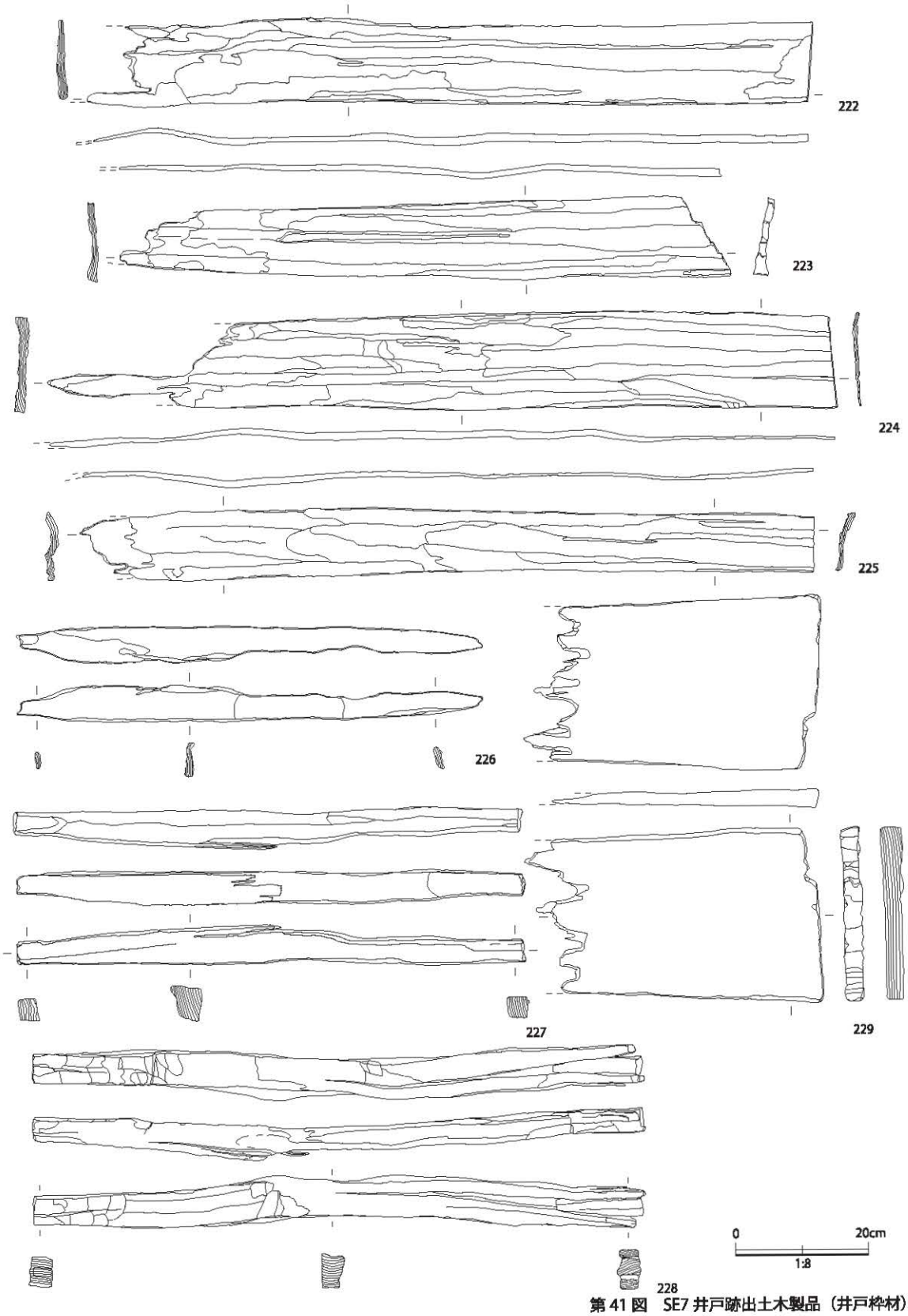
第 38 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



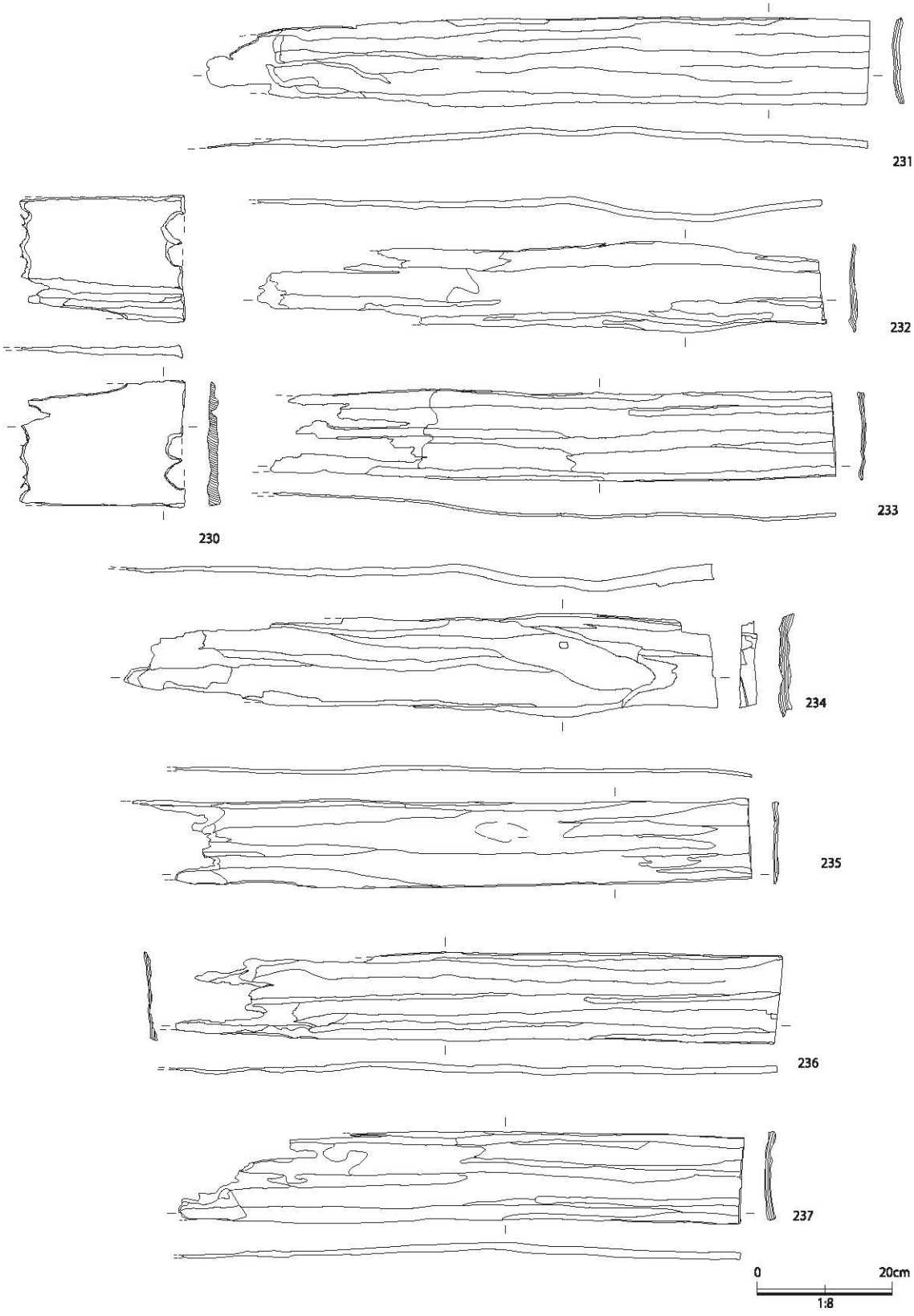
第 39 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



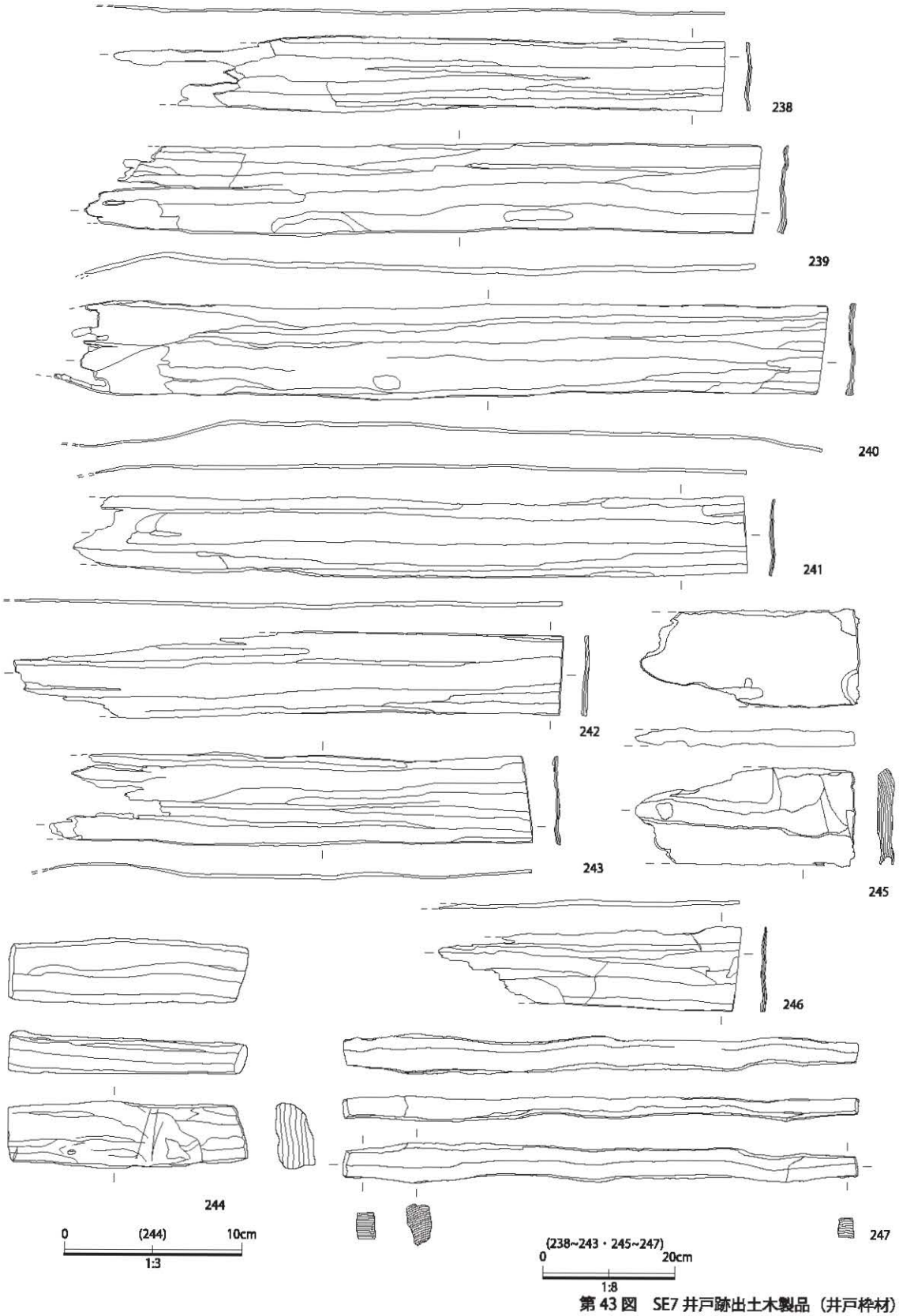
第 40 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



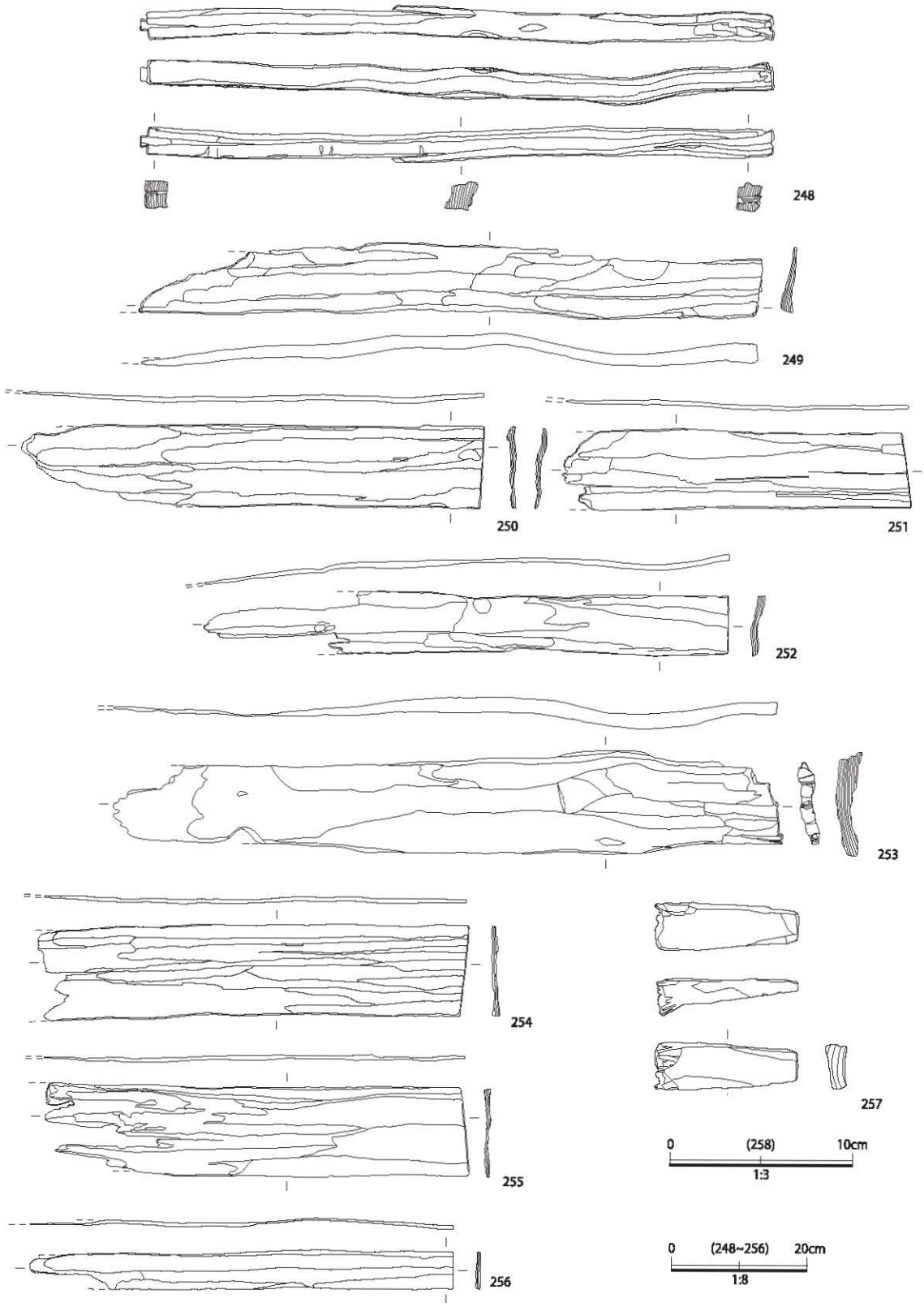
第 41 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



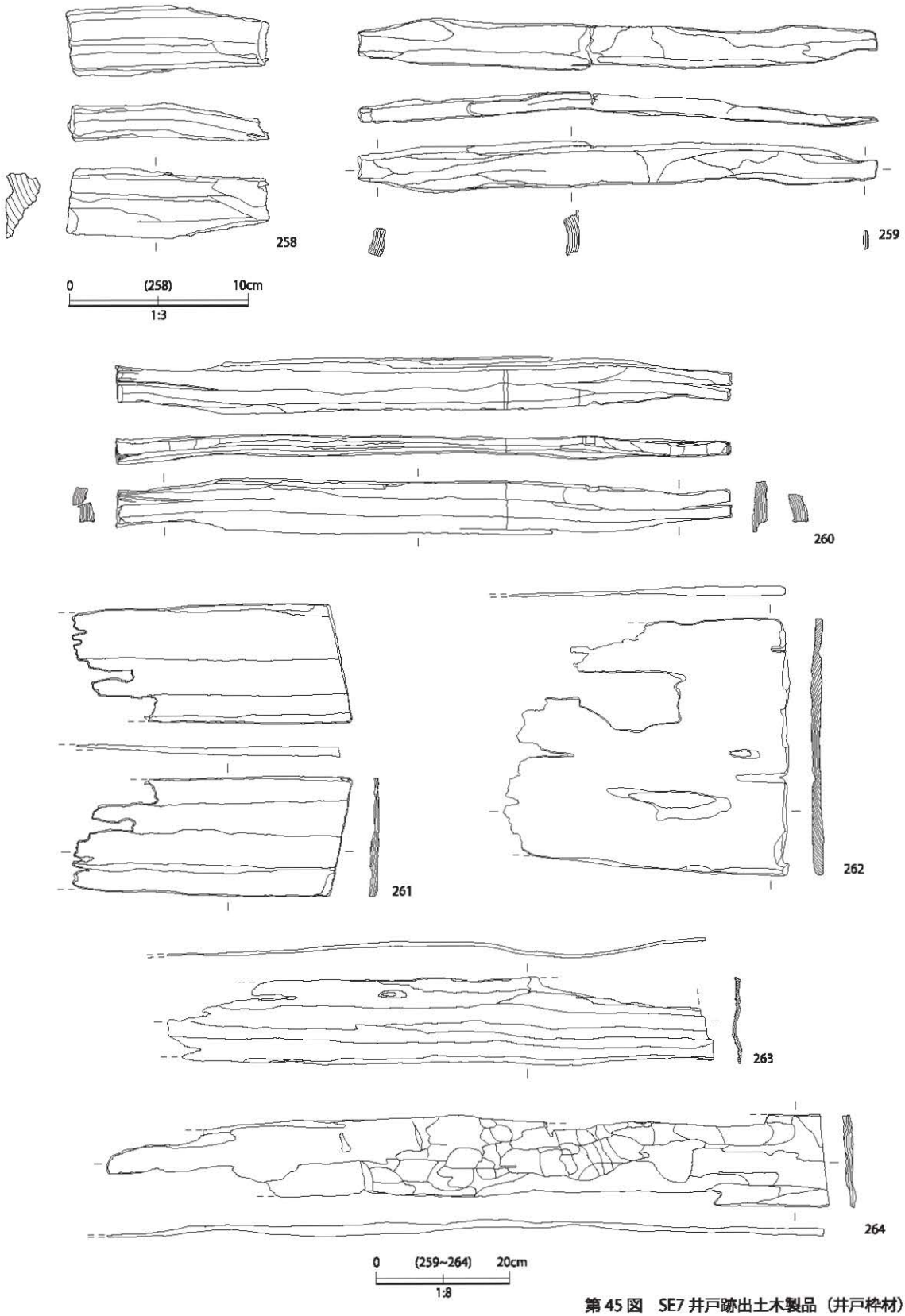
第 42 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



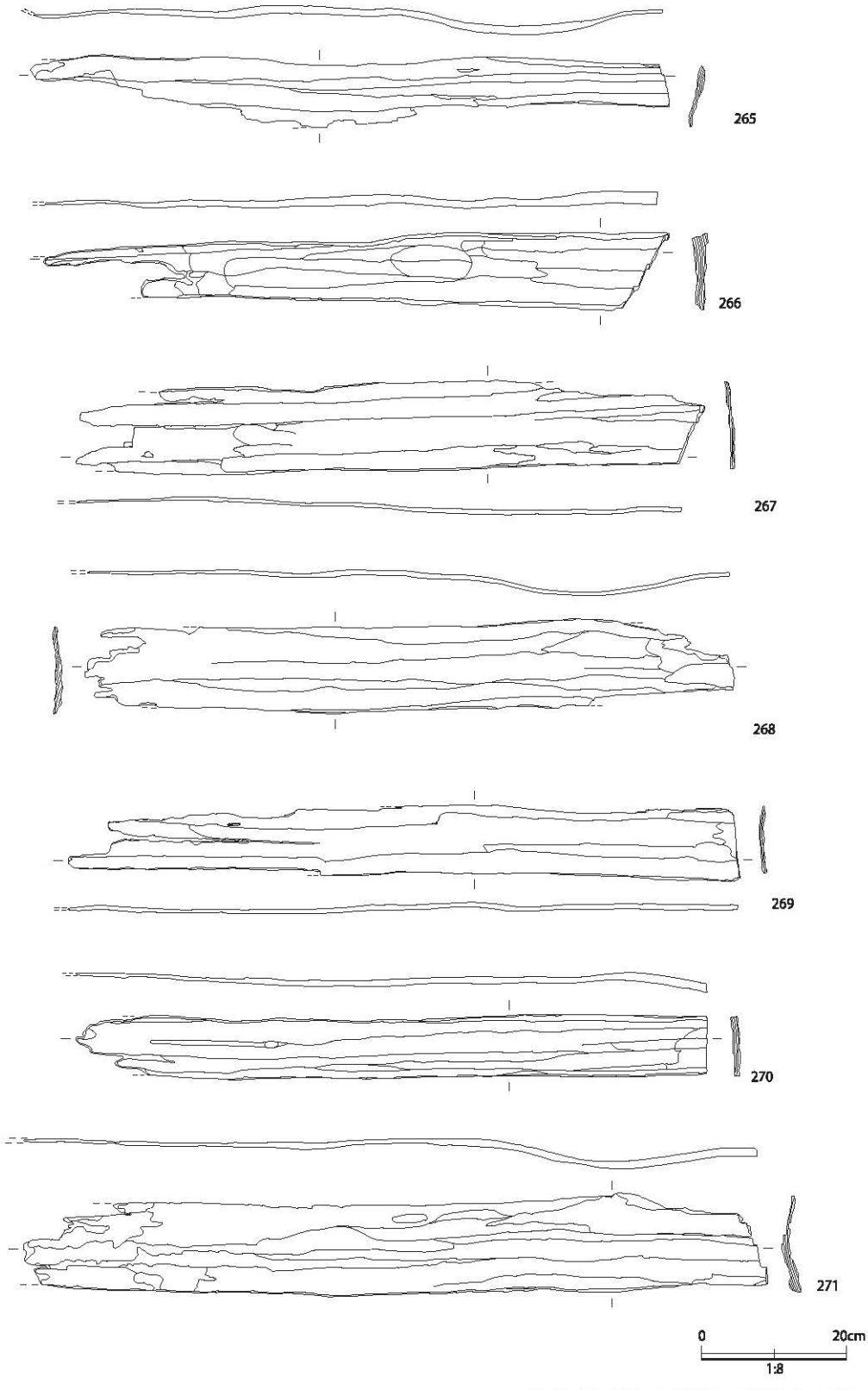
第 43 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



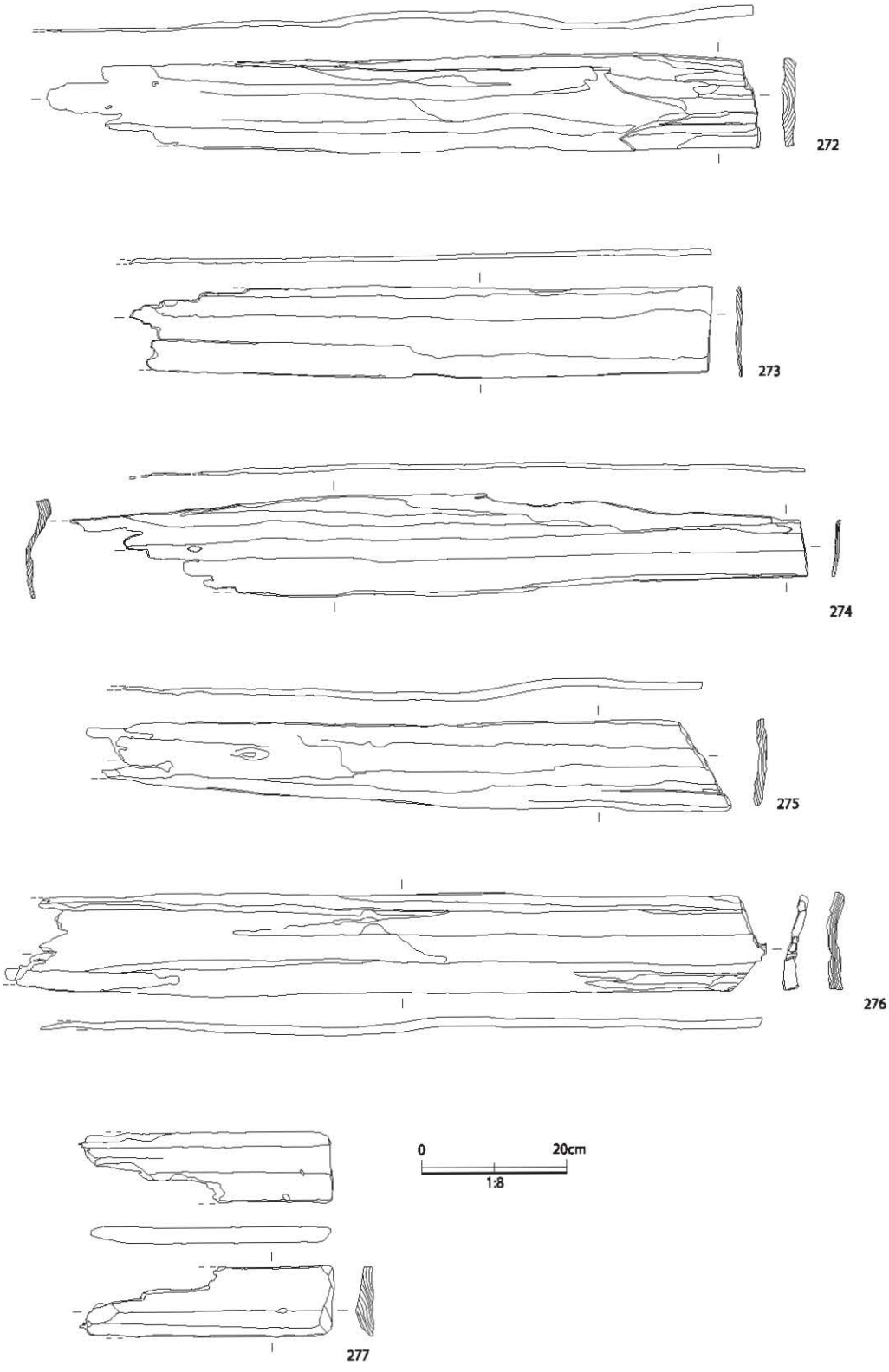
第 44 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



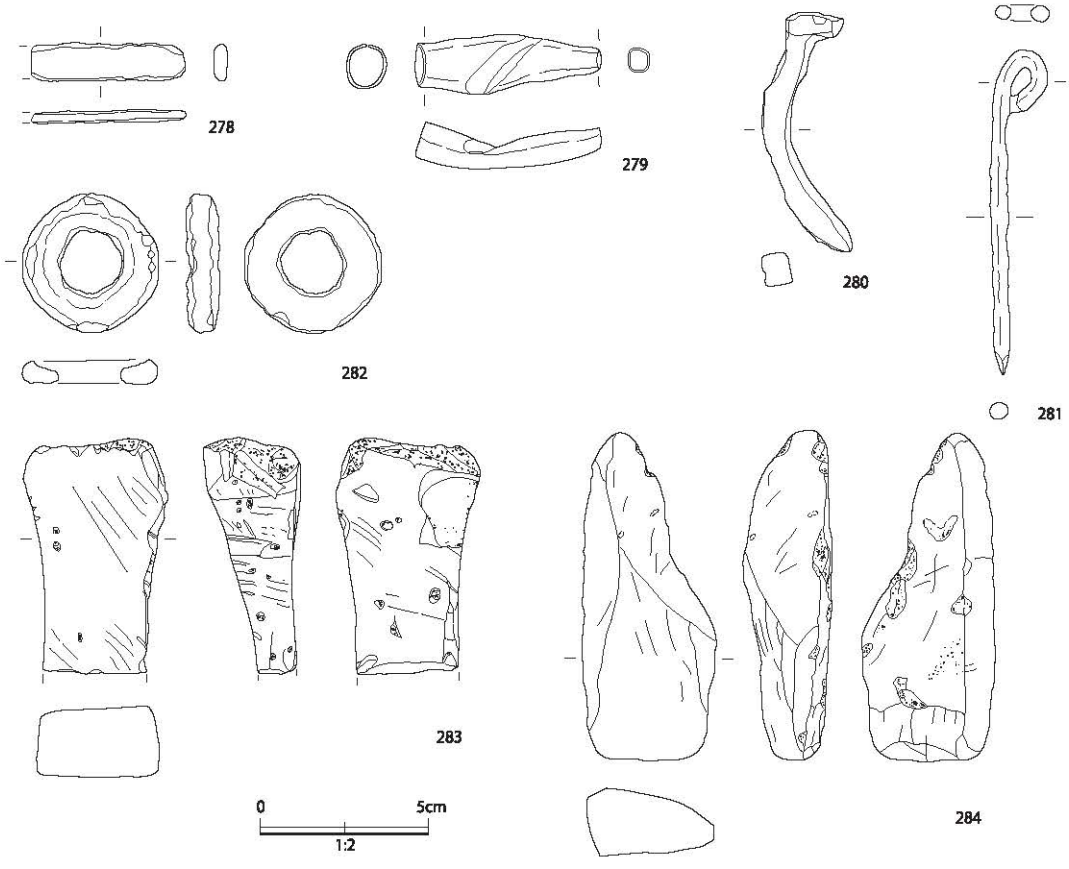
第 45 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



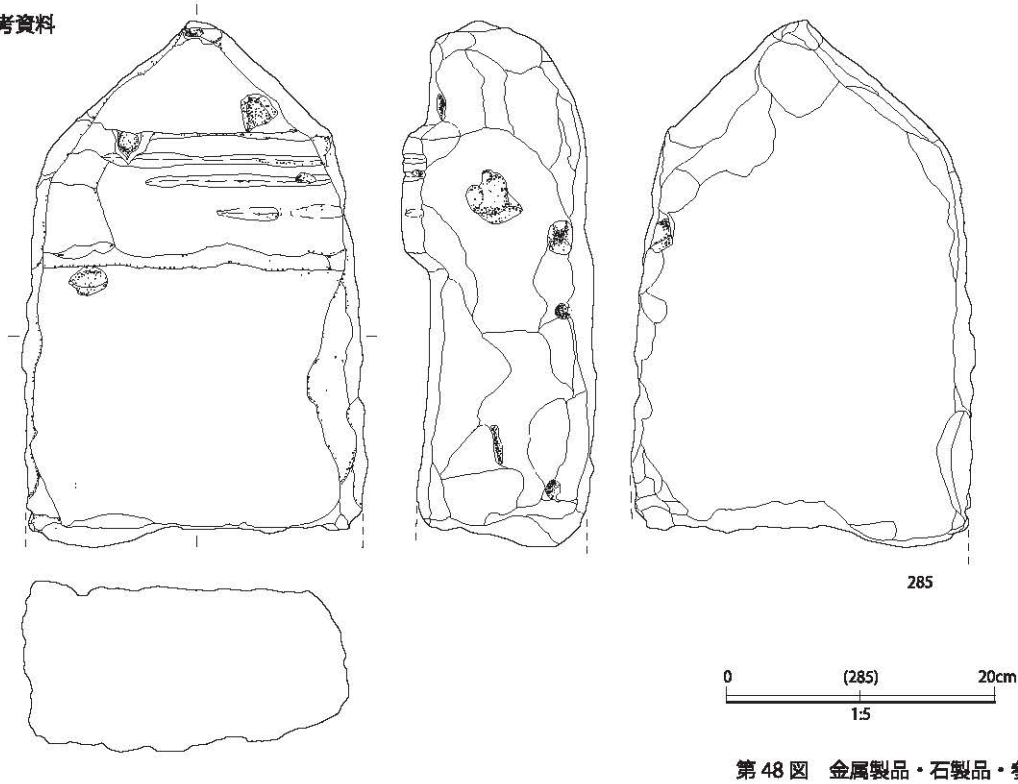
第 46 図　SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



第 47 図　SE7・9 井戸跡出土木製品（井戸枠材・板材）



参考資料



第 48 図　金属製品・石製品・参考資料

表３　須恵器・土師器観察表１

図版番号	遺物番号	写真図版	地区	出土地点	種別	器種	計測値（mm）				調整・成形	胎土・焼成・備考
							口径	底径	器高	器厚	内面 / 外面 / 底部	
24	1	19	2 区	SD1-F1a-J12	須恵器	坏	(152)	(86)	47	5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	粗砂混（白色粒）・良好・RP82
24	2	19	2 区	SD1-F1b-K12	須恵器	坏	(146)	(100)	40	6.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切	粗砂（石英粒）含む・良好・底面にヘラ書き「井」か
24	3	19	1 区	SD1-F1b-I11	須恵器	坏	140			6	ロクロ / ロクロ / ナデ	砂粒混・白色礫少量・海綿骨針・普通・RP108
24	4	19	1 区	SD1-F1b-I12	須恵器	坏		(82)		4.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切	粗砂・やや不良
24	5	19	1 区	SD1-F1a-H11	須恵器	坏	(144)			5.5	ロクロ / ロクロ	粗砂（白色礫）・普通・RP69
24	6	19	2 区	SD1-F1b-K12	須恵器	坏	(154)			3	ロクロ / ロクロ	砂粒少量混・良好
24	7	19	1 区	SD1-F1b-K13	須恵器	坏		(85)		7	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒少量混・良好
24	8	19	1 区	SD1-F1a-I12	須恵器	坏		(72)		4.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	粗砂混・やや不良・RP53
24	9	19	2 区	SD1-F1a-K13	須恵器	坏		(92)		7.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→一部ナデ	粗砂混・良好・墨書「×」カ
24	10	19	2 区	SD1-F1b-J11	須恵器	高台付坏	(144)	[83]	[37.5]	3.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	粗砂混・白色粒・良好・RP86・87・110
24	11	19	1 区	SD1-F1b-G10	須恵器	稜碗		(88.5)		4.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	緻密・良好・RP132
24	12	19	1 区	SD1-F1b-G12	須恵器	稜碗？		(77)		3.8	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒少量混・良好・RP46
24	13	19	2 区	SD1-F1b-J11	須恵器	稜碗？		(85)		4	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒少量混・良好・RP99
24	14	19	1 区	SD1-F1b-I11	須恵器	稜碗？		76		4	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒少量混・海綿骨針多い・良好・RP93
24	15	19	1 区	SD1-F1b-J12	須恵器	高台付坏		107		6	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切	粗砂混・不良・RP90・91
24	16	19	2 区	SD1-F1b-J11	須恵器	稜碗？		(88)		6	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	粗砂少量混・やや不良・RP85
24	17	19	2 区	SD1-F1b-K12	須恵器	稜碗？		(88)		9	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	粗砂混・白色粒・良好・RP83・内面磨滅
25	18	20	1 区	SD1-F1b-I12	須恵器	稜碗				6	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	細砂混・良好・RP92
25	19	20	2 区	SD1-F1a-K13	須恵器	双耳坏	長 48	幅 34		8	ロクロ / ロクロ	粗砂混・良好・把手部分
25	20	20	2 区	SD1-F1b-J13	土師器	坏				5	ロクロ・黒色処理 / ロクロ	砂粒少量混・普通
25	21	20	1 区	SD1-F1a-G12	須恵器	蓋	155	86	31	6.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	粗砂混・白色粒・良好・RP43・44・45
25	22	20	1 区	SD1-F1b-I12	須恵器	蓋	(147)		28	6.5	ロクロ / ロクロ・ヘラ削り / 回転ヘラ切→ヘラケズリ	砂粒少量混・良好・RP52
25	23	20	1 区	SD1-F1b	須恵器	蓋	(165)	(73)		4	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒少量混・良好・RP65
25	24	20	1 区	SD1-F1b-K12	須恵器	蓋	(152)			6	ロクロ / ロクロ・ケズリ	粗砂少量混・普通
25	25	20	1 区	SD1-F1b-J12	須恵器	蓋				5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ケズリ	緻密・良好・RP84
25	26	20	1 区	SD1-F1-I12	須恵器	蓋	(144)			4	ロクロ / ロクロ	粗砂混・良好
25	27	20	1 区	SD1-F1b-I13	須恵器	蓋	(162)			5	ロクロ / ロクロ	砂粒混・普通
25	28	20	1 区	SD1-F1b-I12	須恵器	蓋		(76)		6	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切	砂粒多混入・良好
25	29	20	1 区	SD1-F1-J12	須恵器	蓋				4.5	ロクロ / ロクロ	細砂混・海綿骨針・普通
25	30	20	2 区	SD1-F1a-K13	須恵器	蓋				4.3	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好
25	31	20	1 区	SD1-F1b-I13	須恵器	蓋				5.3	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好
25	32	20	2 区 1 区	SD1-F1a-J12 西辺溝	須恵器	鉢？				11	ナデ / ロクロ	粗砂混・普通・RP70
25	33	20	1 区	SD1-F1b-E10	須恵器	短頸壺		102	[149]	7.5	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好・RP20・40・41・42・61・112・自然釉
25	34	20	2 区	SD1-F1a-K13	須恵器	壺	(188)			7.5	ロクロ / ロクロ・タタキ・ナデ	粗砂混・良好・RP107
25	35	20	2 区	SD1-F1a-J11	須恵器	壺	(180)			10	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好・RP88・内外面自然釉

表４　須恵器・土師器観察表２

図版番号	遺物番号	写真図版	地区	出土地点	種別	器種	計測値（mm）				調整・成形	胎土・焼成・備考
							口径	底径	器高	器厚	内面 / 外面 / 底部	
25	36	21	２区	SD1-F1a・F1b-K12	須恵器	壺				9.5	ロクロ / ロクロ	細砂混・良好・RP105（36a）・RP51（36 b）
25	37	21	１区	SD1-Ⅱb-J12	須恵器	甕				13	ナデ / ナデ	粗砂混・良好・RP22
25 26	38a 38b	21 21	１区	SD1-F1b	須恵器	甕				10	アテ / タタキ→ナデ	粗砂混・良好・RP50（36a）・RP48・49（36 b）
26	39	21	１区	SD1-F1b-G11	須恵器	甕				8.5	アテ / タタキ	砂粒混・白色粒・良好
26	40	21	１区	SD1-F1a-G12	須恵器	甕				11	アテ / タタキ	粗砂少量混・不良
26	41	21	１区	SD1-F1a-I11	須恵器	甕				8.2	アテ / タタキ	粗砂混・良好・RP94
26	42	21	１区	SD1-F1b-I12	須恵器	甕				8.5	アテ / タタキ	粗砂混・良好・RP54
26	43	21	１区	SD1-F1b-H12	須恵器	甕				5	アテ / タタキ	砂粒混・良好
26	44	21	１区	SD1-F1-E11	須恵器	甕				9	アテ / タタキ	細砂混・良好・RP21
26	45	21	２区	SD1-F1b-J11	須恵器	甕				5.1	アテ / タタキ→カキメ	砂粒混・良好・RP100
26	46	21	２区	SD1-F1a-K13	須恵器	甕				12	アテ / タタキ	粗砂混・良好・RP76
26	47	21	２区	SD1-F1a-K12	須恵器	甕				9	アテ / タタキ	粗砂混・良好・RP89
26	48	22	２区	SD1-F1a-K13	須恵器	甕				10	アテ / タタキ	砂粒混・良好
26	49	22	２区	SD1-F1a-J13	須恵器	甕				14.5	ナデ / タタキ	粗砂混・良好・RP71
27	50	22	２区	SD1-F1a-K12	須恵器	甕				7	アテ / タタキ	砂粒混・良好・RP75
27	51	22	２区	SD1-F1b-K13	須恵器	甕				6.5	カキメ / タタキ	粗砂混・良好
27	52	22	１区	SD1-F1b-H11	須恵器	甕				6.5	アテ / タタキ	砂粒少量混・良好
27	53	22	１区	SD1-F1b	土師器	鍋	(295)			9	ロクロ？ / ロクロ？	粗砂混・普通・RP68・外面少し赤変
27	54	22	２区	SD1-F1a-K12	土師器	甕		(108)		13	ナデ / ハケメ	粗砂混・良好・RP106
27	55	22	１区	SD1-F1b-H11	土師器	甕				7.5	ハケメ / ケズリ	粗砂混・良好
27	56	22	１区	SD1-F1b	土師器	甕				6.5	カキメ / ハケメ	粗砂混・普通・RP67
27	57	22	２区	SD1-F1b-K12	土師器	甕				5.5	不明 / ハケメ	粗砂混・良好・RP83・被熱による赤変
27	58	22	２区	SD1-F1a-K13	土師器	甕				14	ハケメ / ケズリ	粗砂混・良好
27	59	22	１区	SD1-F1b	土師器	甕				10	ナデ / ケズリ	粗砂混・良好・RP66
27	60	22	１区	SD1-F1b-I13	土師器	支脚？		(54)		9.5	黒色処理 / ケズリ	粗砂混・良好・外面被熱による赤変
27	61	22	１区	SD1-F1b-I13	土師器	支脚？		(65)		8.5	黒色処理 / ナデ / ケズリ	砂粒混・良好・外面被熱による赤変
27	62	22	１区	SD1-F1a-I12	須恵器	こね鉢		90		12	ロクロ / ロクロ / ケズリ	粗砂混・良好・RP111・底部穿孔 12 ヵ所・自然釉・焼成後に底部が破損
27	63	22	１区	SD1-F1b-H11	須恵器	円面硯		(150)	[34]	4	ロクロ / ロクロ	粗砂混少量・白色粒・良好・RP109・格子文・透かしあり
27	64	22	２区	SD1-F1a-K12	土師器	器台				6		砂粒少量混・普通・磨滅する・古墳時代
27	66	22	１区	SX3-F1	須恵器	高台付坏				5.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切	砂粒少量混・良好
27	67	22	１区	SX3-F1	須恵器	蓋				4.5	ロクロ / ロクロ	砂粒少量混・良好
27	68	22	１区	SX3	須恵器	甕				13	ナデ / ナデ	粗砂混・海綿骨針・良好・RP55
27	69	22	１区	SX3-F	須恵器	甕				10	ナデ / ケズリ	粗砂少量混・良好
28	71	23	１区	SE4-F7	須恵器	坏		82		4	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒混・良好・RP58
28	72	23	１区	SE4-F	須恵器	坏		(66)		4	ロクロ / ロクロ / 磨滅不明	砂粒混・良好・RP36・外面磨滅
28	73	23	１区	SE4-F4	須恵器	坏		(88)		9	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切	砂粒混・良好・RP33・火襷
28	74	23	１区	SE4-F2	須恵器	坏		(66)		7	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	砂粒少量混・良好・RP37
28	75	23	１区	SE4-F4	須恵器	坏	(144)			4	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好・自然釉・双耳坏の可能性
28	76	23	１区	SE4-F7	須恵器	蓋		(110)		7	ロクロ / ロクロ・ケズリ / 回転ヘラ切→ナデ	粗砂混・良好
28	77	23	１区	SE4	須恵器	蓋				3.3	ロクロ / ロクロ	細砂混・良好
28	78	23	１区	SE4-F2・F7	須恵器	甕				8	アテ→ナデ / タタキ	粗砂混・良好・RP60（78 b）・RP34（78a）

表５　須恵器・土師器観察表３

図版番号	遺物番号	写真図版	地区	出土地点	種別	器種	計測値（mm）				調整・成形	胎土・焼成・備考
							口径	底径	器高	器厚	内面 / 外面 / 底部	
28	79	23	1 区	SE4-F4b	須恵器	甕				10	アテ / タタキ	粗砂混・良好・RP35
28	80	23	1 区	SE4-F	土師器	坏				4	ロクロ・ミガキ・黒色処理 / ロクロ	砂粒混・普通
28	81	23	1 区	SE4-F2	土師器	坏				6	ロクロ / ロクロ	砂粒混・やや不良
28	82	23	1 区	SE4	土師器	甕				5.5	ハケメ / ハケメ	粗砂混・普通
28	83	23	1 区	SE4	土師器	甕				5.5	ロクロ→ハケメ / ロクロ→ハケメ	粗砂混・普通
28	84	23	1 区	SE4-F1	土師器	甕				7.5	ハケメ / ハケメ	粗砂混・普通
28	88	23	1 区	SK5-F1	須恵器	坏				5	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好
28	89	23	1 区	SK5-F1	土師器	坏				6	ロクロ→ナデ / ロクロ	砂粒少量混・やや不良
28	90	23	1 区	SE7 黒色土	須恵器	坏		(68)		5	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	砂粒少量混・良好
28	91	23	1 区	SE7 掘り方	須恵器	甕				8.5	アテ / タタキ	粗砂混・良好・RP95
28	92	23	1 区	SE7-F1	土師器	坏				6.5	ミガキ・黒色処理 / ロクロ・ミガキ	砂粒少量混・良好
29	96	24	1 区	SD8	須恵器	坏				5	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好
29	97	24	1 区	SD8-F1	須恵器	坏				3	ロクロ / ロクロ	砂粒少量混・良好
29	98	24	1 区	SD8-F	土師器	坏				4.5	ミガキ・黒色処理 / ロクロ	砂粒混・普通
29	99	24	1 区	SD8-F	土師器	甕	(183)			4.5	ロクロ / ロクロ	砂粒混・普通・RP39
29	100	24	1 区	SD8-F	須恵器	甕				6	アテ / タタキ	砂粒混・良好
29	101	24	1 区	SD8-F	須恵器	甕				11	アテ / タタキ	粗砂混・良好
29	102	24	1 区	SD8-F	土師器	甕		(104)		8	ケズリ / ケズリ・ナデ / 木葉痕？・ナデ	砂粒混・良好・RP38
29	103	24	1 区	SD8-F	土師器	甕				6.5	ハケメ / ハケメ	粗砂混・普通・磨滅
29	106	24	1 区	SE9-F1	土師器	坏				5	ロクロ→ミガキ・黒色処理 / ロクロ	砂粒少量混・良好・被熱による焼けはじけ
29	107	24	1 区	SK9-F	土師器	甕				6.4	ロクロ / ロクロ	砂粒混・普通
29	108	24	1 区	SK9-F1	土師器	甕				7	ナデ / ハケメ	砂粒混・普通
29	109	24	1 区	SK18-F	須恵器	甕				7.5	アテ→ナデ / タタキ	砂粒混・良好
29	110	24	1 区	SK20-F1	須恵器	双耳坏		(68)		4	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好
29	111	24	1 区	SK23-F	須恵器	高台付坏		[85]		7	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒少量混・良好・RP63
29	112	24	2 区	SK25-F1	須恵器	坏				5	ロクロ / ロクロ	緻密・良好
29	113	24	2 区	SK25-F1	須恵器	甕		(83)		11	ナデ / タタキ / ケズリ	粗砂少量混・良好・RP155
29	114	24	2 区	SK25-F1	須恵器	甕				7	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好・外面に波状文
29	115	24	2 区	SK25-F5	須恵器	甕				7.5	アテ / タタキ	細砂混・普通
29	116	24	2 区	SK25	須恵器	甕				7.5	アテ / タタキ	細砂混・白色粒・良好・RP156
30	117	25	2 区	SK25-F	土師器	甕				5.5	ナデ？ / ハケメ	砂粒混・普通
30	118	25	2 区	SK25-F1	土師器	甕				8	カキメ / カキメ	砂粒混・普通
30	119	25	1 区	O-22　攪乱	須恵器	坏				5	ロクロ / ロクロ	粗砂混・普通
30	120	25	1 区	西辺溝	須恵器	坏				4.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切	砂粒混・白色粒・不良
30	121	25	2 区	K-14　攪乱	須恵器	坏				4.5	ロクロ / ロクロ	砂粒少量混・普通・RP77
30	122	25	1 区	M-19　攪乱	須恵器	坏		(86)		4.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切	砂粒少量混・良好・RP31
30	123	25	1 区	H-13 攪乱	須恵器	坏		(76)		5.5	ロクロ / ロクロ / 回転糸切→ケズリ	砂粒少量混・良好
30	124	25		X-O	須恵器	坏		(56)		5	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	砂粒混・白色粒・良好
30	125	25	1 区	N-19 攪乱	須恵器	坏		(50)		6	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	砂粒少量混・普通
30	126	25	1 区	N-22 攪乱	土師器	坏				5	ロクロ / ロクロ	砂粒混・普通
30	127	25	1 区	県試掘 T10・O-23	須恵器	双耳坏	(115)			4.5	ロクロ / ロクロ	粗砂混・良好
30	128	25	1 区	I-13 攪乱	須恵器	椀		(90)		5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒少量混・良好
30	129	25	1 区	J-15 攪乱	須恵器	高台付坏		[88]		3.5	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切→ナデ	緻密・良好・RP26・高台剥落
30	130	25	1 区	G-15 攪乱	須恵器	高台付坏		[66]		4.5	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	砂粒少量混・良好・RP24
30	131	25	1 区	県試掘 T10	須恵器	高台付坏				6	ロクロ / ロクロ / 回転ヘラ切？	砂粒混・不良・生焼け

表６　須恵器・土師器観察表４

図版番号	遺物番号	写真図版	地区	出土地点	種別	器種	計測値（mm）				調整・成形	胎土・焼成・備考
							口径	底径	器高	器厚	内面 / 外面 / 底部	
30	132	25	１区	H-13　攪乱	土師器	高台付坏		(70)		6	黒色処理・ミガキ / ロクロ / ケズリ	砂粒混・普通
30	133	25	１区	M-21　攪乱	須恵器	蓋	(152)			6.5	ロクロ / ロクロ・ケズリ / 回転ヘラ切→ナデ	砂粒少量混・良好
30	134	25		X-O	須恵器	蓋	(160)			4	ロクロ / ロクロ	粗砂混・白色粒・海綿骨針・良好
30	135	25	１区	試掘　T4	須恵器	蓋		(85)		5.3	ロクロ / ロクロ・ケズリ / 回転ヘラ切→ヘラケズリ	砂粒混・良好
30	136	25	１区	西辺溝	須恵器	蓋				5	ロクロ / ロクロ	砂粒混・白色粒・やや不良
30	137	25	１区	J-14　攪乱	須恵器	壺				6.5	ロクロ / ロクロ	細砂混・良好
30	138	25	１区	J-14　攪乱	須恵器	蓋				3	ロクロ / ロクロ	緻密・良好
30	139	25	１区	表土	須恵器	円面硯				9	ロクロ / ロクロ	砂粒混・良好
30	140	25	１区	L-19　攪乱	須恵器	円面硯		(141)		4	ロクロ / ロクロ	砂粒少量混・良好
31	141	26	１区	F-15　攪乱	須恵器	壺？				5.5	ロクロ / ロクロ	緻密・良好
31	142	26	１区	I-15　攪乱	須恵器	甕				11.2	ロクロ / ロクロ	粗砂混・良好・外面に波状沈線文
31	143	26	１区	G-15　攪乱	須恵器	甕				8	ロクロ / ロクロ	細砂混・普通・外面に波状沈線文
31	144	26	１区	H-21　攪乱	須恵器	甕				12	アテ / タタキ	砂粒混・白色粒・良好・RP12
31	145	26	２区	K-13　攪乱	須恵器	甕				6	アテ / タタキ	砂粒混・良好・RP74・外面付着物・灰かぶり
31	146	26	１区	M-20　攪乱	須恵器	甕				11	アテ / タタキ	粗砂混・良好・RP30
31	147	26	１区	M-20　攪乱	須恵器	甕				9	アテ / タタキ	砂粒混・普通・RP29（147b）
31	148	26	１区	M-20　攪乱	須恵器	甕				15	カキメ / ケズリ	細砂混・やや不良
31	149	26	１区	F-20　攪乱	須恵器	壺？				7.5	ロクロ・ナデ / カキメ・ロクロ・ナデ	砂粒混・良好
31	150	26	２区	表土	須恵器	甕				7	アテ / タタキ・ハケメ	粗砂混・良好
31	151	26	１区	J-22　攪乱	須恵器	甕				3.8	アテ / タタキ	砂粒混・良好・RP14
31	152	26		県試掘 T9	土師器	甕		(98)		5.5	磨滅 / 磨滅 / 木葉痕	粗砂混・良好

表７　陶磁器・土製品観察表１

図版番号	遺物番号	写真図版	地区	出土地点	種類	器種	生産地	計測値（mm）			調整・成形	胎土 / 焼成 / 備考
								口径	底径	器厚	内面 / 外面 / 底部	
27	65	22	１区	SD2-F1-G10	陶器	小坏		(58)		4.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 普通 / 透明釉・18 ～ 19C
27	70	22	１区	SD8-F	瓷器系陶器	甕				13.5	ナデ / ナデ	粗砂混・白色粒 / 良好 / 越前の可能性あり・中世
28	85	23	１区	SE4-F2	瓷器系陶器	甕				12	ナデ / ナデ	砂粒混 / 良好 /RP37･95 と同一個体か・中世
28	86	23	１区	SE4-F4	須恵器系陶器	甕				9	タタキ / アテ	粗砂少量混 / 良好 / 中世
28	87	23	１区	SE4-F7	瓷器系陶器	甕				13	ナデ / ナデ	砂粒混 / 良好 / 中世
29	93	24	１区	SE7-F2	瓷器系陶器	擂鉢			(132)	18	ナデ / ナデ	粗砂・礫・石英粒 / 良好 / 内面磨滅・RP57・中世
29	94	24	１区	SE7	須恵器系陶器	甕				11	アテ / タタキ	砂粒混 / 良好 /RP32・13C 頃
29	95	24	１区	SE7-F2	瓷器系陶器	甕				10.5	ナデ / ナデ	砂粒混 / 良好 /13C 頃
29	104	24	１区	SD8-F	瓷器系陶器	甕				10	ナデ / ケズリ	粗砂混 / 良好 / 中世
29	105	24	１区	SD8-F	陶器	擂鉢				9.5	卸目・ロクロ / ロクロ	砂粒混 / 良好 / うすい鉄釉 (内外面)・18C
31	153	26	１区	M-20	青磁	碗	中国龍泉窯			3.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 鎬蓮弁文 (外面)・青磁釉・RP1・14 世紀頃
31	154	26	１区	H-14 攪乱	青磁	碗	中国龍泉窯			5.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 劃花文 (内面)・貫入・13C
31	155	26	１区	N-23 攪乱	青磁	碗	中国龍泉窯			5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 劃花文 (内面)・青磁釉・RP27・13C
31	156	26	１区	L-20 攪乱	青磁	碗	中国			7.4	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 青磁釉・貫入・RP9・15 ～ 16C

表８　陶磁器・土製品観察表２

図版番号	遺物番号	写真図版	地区	出土地点	種類	器種	生産地	計測値（mm）			調整・成形	胎土 / 焼成 / 備考
								口径	底径	器厚	内面 / 外面 / 底部	
31	157	26	1 区	L-18 攪乱	青磁	碗	中国			9.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 青磁釉・貫入・13C 頃か
31	158	26	1 区	M-23 攪乱	須恵器系陶器	甕				8.5	アテ / タタキ	砂粒混 / 良好 /RP62・中世
31	159	26	1 区	表土	瓷器系陶器	鉢				12.3	ロクロ・ナデ / ロクロ・ナデ	粗砂混 / 良好 / 中世
31	160	26	1 区	P-23 東端壁	瓷器系陶器	甕？	越前			12.5	ナデ・指頭圧痕	砂粒少量混 / 良好 / 灰釉（外面）・中世
31	161	26	1 区	I-16 攪乱	瓷器系陶器	甕	越前			14	ナデ / ナデ	緻密 / 良好 / 印花 (外面)・RP64・13C 頃
31	162	26	1 区	H-14 攪乱	瓷器系陶器	甕	越前			8	ナデ / ナデ	砂粒混 / 良好 / 中世
32	163	27	1 区	L-17 攪乱	陶器	皿	肥前		(66)	11	ロクロ / ロクロ	細砂混 / 良好 / 灰釉・RP4・16C 末～17C 前半
32	164	27	1 区	西辺溝	陶器	碗	肥前			5.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 灰釉・17C ～ 18C 前半
32	165	27	1 区	G-15 攪乱	陶器	皿？				3.5	ロクロ・目跡 / ロクロ	緻密 / 良好 / 鉄絵？ (内面)・灰釉・19C ？
32	166	27	1 区	F-19 攪乱	陶器	皿				7.5	ロクロ / ロクロ	細砂・黒色粒少量 / 良好 / 近世
32	167	27	1 区	表土	陶器	皿				5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 透明釉・19C ？
32	168	27	1 区	K-16 攪乱	陶器	小坏？				3	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 口紅 (外面)・灰釉 (内外面)・19C
32	169	27	1 区	F-14 攪乱	陶器	壺？				4.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 灰釉 (外面)・内面無釉・RP23・近世
32	170	27	1 区	E-16 攪乱	陶器	土瓶？			(60)	5	ロクロ / ロクロ / ケズリ	緻密 / 普通 / 透明釉・19C
32	171	27	1 区	I-15	陶器	徳利		(40)		3	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 白化粧土・透明釉・RP17・近代
32	172	27	2 区	表土	陶器	徳利			(90)	10	ロクロ / ロクロ / ヘラ削り	砂粒混 / 良好 / 藁灰釉 (外面)・鉄釉 (内面)・19C
32	173	27	1 区	D-15 攪乱	陶器	火入		(144)		6	ロクロ / ロクロ	砂粒混 / 良好 / 鉄釉・近世
32	174	27	1 区	F-11 攪乱	陶器	切立	成島		(136)	11.5	ロクロ / ロクロ / ケズリ	砂粒混 / 良好 / 鉄釉 (内外面)・19C
32	175	27	1 区	J-19 攪乱	陶器	擂鉢				7.5	卸目 / ロクロ	細砂混 / 良好 / 鉄釉・RP28・17C 代
32	176	27	1 区	XO	陶器	擂鉢	成島か			9.5	卸目 / ロクロ・ケズリ	砂粒混 / 良好 / 鉄釉 (内外面)・19C
32	177	27	1 区	表土	陶器	擂鉢				9	卸目 / ロクロ	細砂多量混 / 良好 / 鉄釉・19C
32	178	27	1 区	G-16	磁器染付	皿	肥前			2.7	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 /1820 ～ 60 年代
32	179	27	1 区	SD1- Ⅱ b-J12	磁器染付	碗				2.7	ナデ / ロクロ	緻密 / 良好 /1820 ～ 60 年代
32	180	27	1 区	G-17 攪乱	磁器染付	皿				4	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 草花文？ (外面)・18C ？
32	181	27	1 区	表土	磁器染付	碗？				3.2	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 草花文 (外面)・圏線 (内面)・近世？
32	182	27	1 区	表土	磁器染付	碗				7.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 型紙摺絵 (外面)・圏線 (内面)・明治期
32	183	27	2 区	H-7 攪乱	磁器染付	碗				4.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 型紙摺絵 (外面)・明治
32	184	27	1 区	F-9 攪乱	磁器色絵	小坏			(26)	5.5	ロクロ / ロクロ	緻密 / 良好 / 赤絵 (外面)・明治以降
32	185	27	1 区	J-21 攪乱	磁器染付	蓋				3.5	ロクロ / ロクロ	細砂混 / 良好 / 草花文？ (外面)・明治期
32	186	27	1 区	西辺溝	土器	焜炉？				12.2	ナデ / ミガキ	砂粒混 / 普通 / 縦方向の隆帯 (外面)・近世？
32	187	27	1 区	G-15 攪乱	土器	土人形		長 33	幅 19.5	13	型打整形	緻密 / 普通 / 近世

表９　木製品観察表１

図版番号	遺物番号	写真図版	品名	地区・出土地点	遺物番号	大きさ（mm）				残存・破損状況・備考
						長さ（直径）・長軸	幅・短軸	高さ	厚さ	
33	188a	28	曲物側板	1 区 SE7-Y	RW79	102	100	68	4.5	ほぼ完形
33	188b	28	曲物底板	1 区 SE7-Y	RW79	93.5	90.5		7	完形
33	189	28	曲物底板	1 区 SE7-Y		241	84		6	４割程度残る、２片に割れる
33	190a	28	曲物側板	1 区 SE7-Y	RW97	212	210	112	7	2/3 程度の残存

表 10　木製品観察表２

図版番号	遺物番号	写真図版	品名	地区・出土地点	遺物番号	大きさ（mm）				残存・破損状況・備考
						長さ（直径）・長軸	幅・短軸	高さ	厚さ	
33	190b	28	曲物底板	１区 SE7-Y	RW97	204	200		7	２片に破損後にあけられた補修のための孔が２対あり
34	191a	29	曲物底板	１区 SE7-Y	RW98	236	212		17.5	９割残る
34	191b	30	曲物底板	１区 SE7-Y	RW98	227	225		13	完形・側面に釘穴あり、黒色付着物と把手状の痕跡あり
35	192a	29	曲物側板	１区 SE7-Y	RW101	203	196	92	6	ほぼ完形、内面に黒色付着物
35	192b	29	曲物底板	１区 SE7-Y	RW101	196	177		7.5	９割残る、２片に割れる。内面に黒色付着物、側面に釘穴あり。
35	193a	30	曲物側板	１区 SE7-Y	RW102	236		101		破損し５割程度残存、やや腐食、内面に黒色付着物。
35	193b	30	曲物底板	１区 SE7-Y	RW102	228	227		12	完形、中央に２ヵ所、周辺部に６ヵ所の穿孔あり。
36	194a	31	曲物側板	１区 SE7-Y	RW103	210		104	8	ほぼ完形、内面に黒色付着物、斜方向の切れ込み
36	194b	31	曲物底板	１区 SE7-Y	RW103	197	194		12	完形・内面に黒色付着物、外面に黒変あり、側面に釘穴あり。
36	195	31	曲物底板	１区 SE7 井戸枠内 F		213	159.5		12	７割残る、少し腐食、内外面に直線的な傷が多数あり。
36	196	31	角材	１区 SE7 井戸枠内 F		195	65		30	二辺欠く、少し腐食
37	197	32	角材	１区 SE7 井戸枠内 F		264.5	92		39	一端を欠く、腐食
36	198	31	板材	１区 SE7 井戸枠内 F	RW78	525	118.5		32.5	一端を欠く、腐食
37	199	32	板材	１区 SE7-Y	RW104	395	80		16	二辺欠ける、やや腐食
37	200	32	板材	１区 SE7 井戸枠内 F		667.5	82.5		20	一端を欠く、腐食
37	201	32	板材	１区 SE7 井戸枠内東南		833	131		19	一端を欠く
37	202	32	角材	１区 SE7 南東隅柱	RW141	1242	119		97	一端を欠く
38	203	33	角材	１区 SE7 北西隅柱	RW151	1184.5	122.5		96.5	一端腐食し欠く
38	204	33	角材	１区 SE7 北東隅柱	RW152	1172	110		85	一端腐食し欠く
38	205	33	角材	１区 SE7 南西隅柱	RW122	1216	98		59	一端腐食し欠く
39	206	34	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW128	283	252		13	両端欠く、腐食
39	207	34	楔	１区 SE7 東面井戸枠	RW140	81	35		19	完形
39	208	34	角材	１区 SE7 東面井戸枠横材？	RW80	681	29.5		24.5	両端を欠く、全体に腐食
39	209	34	角材	１区 SE7 東面井戸枠上段横桟	RW116	773	75		32	完形
39	210	34	角材	１区 SE7 東面井戸枠下段横桟	RW142	930	67		46	完形、楔打ち込みで両端割れる
39	211	34	板材	１区 SE7 東面井戸枠横材上	RW126	860	80		11	一端を欠く、破片１点あり
39	212	34	板材	１区 SE7 東面井戸枠横材下	RW127	895	72		23	一端を欠く
40	213	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW129	965.5	97		13	一端を欠く
40	214	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW130	950	97		8	一端腐食し欠く、割れる
40	215	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW131	1057	129.5		8.5	一端を欠く、中央に割れあり
40	216	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW139	805	133		14	一端を欠く、割れあり
40	217	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW138-2	831	128		7	一端を欠く、３片に割れる
40	218	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW138-3	628	121		8	一端を欠く、割れあり
40	219	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW138-1	916.5	133		11.5	一端を欠く、割れあり
40	220	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW137	1072	125		11	一端を欠く、腐食の穴あり
40	221	35	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW136	1170.5	114		14.5	一端を欠く
41	222	36	板材	１区 SE7 東面井戸枠縦板	RW136	1093	125		13	一端を欠く
41	223	36	板材	１区 SE7 東面井戸枠２列目縦板		918	122		14	一端を欠く、中央に穴あり
41	224	36	板材	１区 SE7 東面井戸枠２列目縦板		1187	146		17.5	一端腐食し欠く
41	225	36	板材	１区 SE7 東面井戸枠２列目縦板		1105	105		12	一端腐食し欠く
41	226	36	板材	１区 SE7 北面井戸枠上部横材？	RW81	701	55.5		12.5	３辺を欠く、腐食
41	227	36	角材	１区 SE7 北面井戸枠上段横桟	RW153	765	58		45	完形、中央に割れあり
41	228	36	角材	１区 SE7 北面井戸枠下段横桟	RW154	921	67		35	完形、一端に楔が残存
41	229	36	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW149	416	254		24	一辺欠く
42	230	37	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW150	241	184		16.5	二辺欠く、やや腐食

表 11　木製品観察表３

図版番号	遺物番号	写真図版	品名	地区・出土地点	遺物番号	大きさ（mm）				残存・破損状況・備考
						長さ（直径）・長軸	幅・短軸	高さ	厚さ	
42	231	37	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW148-2	982	130		10	一端を欠く
42	232	37	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW148-1	834	131		11	一端を欠く
42	233	37	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW147	838	130		10	一端を欠く
42	234	37	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW146	879	153		23	一端を欠く
42	235	37	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW145	912	133		8	一端を欠く
42	236	37	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW144	900	131		10	一端を欠く、縦に割れる
42	237	37	板材	１区 SE7 北面井戸枠縦板	RW143	831	133		11	一端を欠く
43	238	38	板材	１区 SE7 北面井戸枠２列目縦板		921	117		6	一端を欠く、割れあり
43	239	38	板材	１区 SE7 北面井戸枠後２列目西から２縦板		1020	136.5		10	一端を欠く、、割れあり
43	240	38	板材	１区 SE7 北面井戸枠後２列目西から３縦板		1166	144		11	一端を欠く、曲がる
43	241	38	板材	１区 SE7 北面井戸枠後井戸枠２列目西から４縦板		1016	119		5	一端を欠く
43	242	38	板材	１区 SE7 北面井戸枠２列目西から４縦板		830	122		8	一端を欠く
43	243	38	板材	１区 SE7 北面井戸枠後２列目西から１縦板		729	140.5		8	一端を欠く
43	244	38	楔	１区 SE7 西面井戸枠	RW115	135	37		20	完形
43	245	38	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW117	322	142		25	一端を欠く、腐食
43	246	38	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW119	456	128.5		7	一端を欠く、少し腐食
43	247	38	角材	１区 SE7 西面井戸枠１段目横桟	RW114	776	60		35	完形
44	248	39	角材	１区 SE7 西面井戸枠二段目横桟	RW135	928	43		46	完形、両端に楔が残る
44	249	39	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW113	914	98		26	一端を欠く
44	250	39	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW120	679	122		11	一端腐食し欠く
44	251	39	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW121	512	119.5		8.5	一端を欠く、中央に割れあり
44	252	39	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW133 裏側	770	92		11	一端を欠く
44	253	39	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW133	972	152		29	一端を欠く
44	254	39	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW134-1	632	135		10	一端を欠く
44	255	39	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW134-2	621.5	132.5		9.5	一端を欠く
44	256	39	板材	１区 SE7 西面井戸枠縦板	RW134-3	620	56		6	一端を欠く
44	257	39	楔	１区 SE7 南面井戸枠二段目西側	RW124	77	25.5		19	一辺磨滅する
45	258	40	楔	１区 SE7 南面井戸枠二段目横桟東側	RW125	114	40		19	完形
45	259	40	角材	１区 SE7 南面井戸枠上段横桟		780	70		32	完形、中央に割れあり
45	260	40	板材	１区 SE7 南面井戸枠二段目横桟	RW123	923	81		38.5	完形、両端割れる
45	261	40	板材	１区 SE ７南面井戸枠縦板 - 東２		420	180.5		15	一端を欠く、少し腐食
45	262	40	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東		423	385		17	一片を欠く、腐食穴あり
45	263	40	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 10		818	120		7	一端を欠く
45	264	40	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 4		1080	138		16	一端を欠く
46	265	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 6		880.5	87		12.5	二辺欠く、曲がる
46	266	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 8		863	107.5		21	一端を欠く、破片１片あり
46	267	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 9		868	123		6	一端を欠く、割れあり
46	268	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 11		893	119		9	一端を欠く、曲がる

表 12　木製品観察表４

図版番号	遺物番号	写真図版	品名	地区・出土地点	遺物番号	大きさ（mm）				残存・破損状況・備考
						長さ（直径）・長軸	幅・短軸	高さ	厚さ	
46	269	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 12		926	100		8.5	一端を欠く、割れあり
46	270	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 13		870.5	85.5		12	一端を欠く
46	271	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 14		1026	137		14	一端を欠く、割れあり
47	272	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 16		971	135		19	一端を欠く
47	273	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 17		800	125.5		9	一端を欠く
47	274	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 18		1013	140		15	一端を欠く、割れあり
47	275	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 19		884	126		13	一端を欠く、破片２、接合せず
47	276	41	板材	１区 SE7 南面井戸枠縦板 - 東 15		1025	142		18	一端を欠く
47	277	41	板材	１区 SE9-F7		339	93		20	一端を欠く

表 13　金属製品観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種類	地区	出土地点	計測値（mm）			備考
						長さ・直径	幅	厚さ	
48	278	43	刀子か	１区	J-22 Ⅱ b	46	11	4	RM13・鉄製品
48	279	43	煙管	１区	J-22 攪乱	5.5	12	13	青銅製か
48	280	43	釘	１区	H-20 攪乱	71	17	95	鉄製品
48	281	43	釘	１区	O-22 攪乱	97	15	5	鉄製品
48	282	43	不明金属製品	１区	D-16 攪乱	40	45	10	鉄製品

表 14　石製品観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種類	地区	出土地点	計測値（mm）			備考
						長さ	幅	厚さ	
48	283	43	砥石	１区	SD8-F	68	30	20	磨面は表・裏の２面あり
48	284	43	砥石	１区	SK22-F	9	4	17	RQ19・磨面は１面のみ・磨滅
48	285	43	板碑		XO	391	256	137	参考資料・凝灰岩製、基部を欠く

※須恵器・土師器・陶磁器観察表の計測値で、（　）内の値は復原による推定値、〔　〕内の値は残存値を示す。

Ⅳ　理化学分析

1　放射性炭素年代測定（1）

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・小林克也

A　はじめに

山形県東置賜郡川西町に位置する元宿北遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、一部の試料について樹種同定が行われている（樹種同定の項参照）。

B　資料と方法

試料は、井戸跡である SE7 の井戸枠板材（スギ）1 点（試料 No.1：PLD-25201）、井戸跡の可能性が考えられている SE9 の板材（スギ）1 点（試料 No.2：PLD-25202）、土坑である SK3 の生の種実（試料 No.3：PLD-25203）の 3 点である。試料 No.1 と 2 は最終形成年輪が確認できなかった。発掘調査所見では、SE7 は中世、SE9 は奈良・平安時代または中世、SK6 は時期不明であると考えられている。測定試料の情報、調製データは表 15 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

C　結　　果

表 16 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、1950 年の大気の ^{14}C 濃度を 1 として計算した試料の ^{14}C 濃度を表す F^{14}C 値を、第 49 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

表 15　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-25201	調査区：1 区 遺構：SE7 位置：南辺　東 1 試料 No.1 （第 45 図 262）	種類：生材（スギ） 試料の性状：部位不明 器種：井戸枠板材 部位：外側 5 年輪分 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-25202	調査区：1 区 遺構：S E 9 位置：F7 試料 No.2 (第 47 図 279)	種類：生材（スギ） 試料の性状：部位不明 器種：板材 部位：外側 2 年輪分 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-25203	調査区：1 区 遺構：SK6 層位：黒色土層 試料 No.3	種類：生の種実 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13、1950 年以降の試料については Post-bomb atmospheric NH2）を使用した。なお、1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

D　考　　察

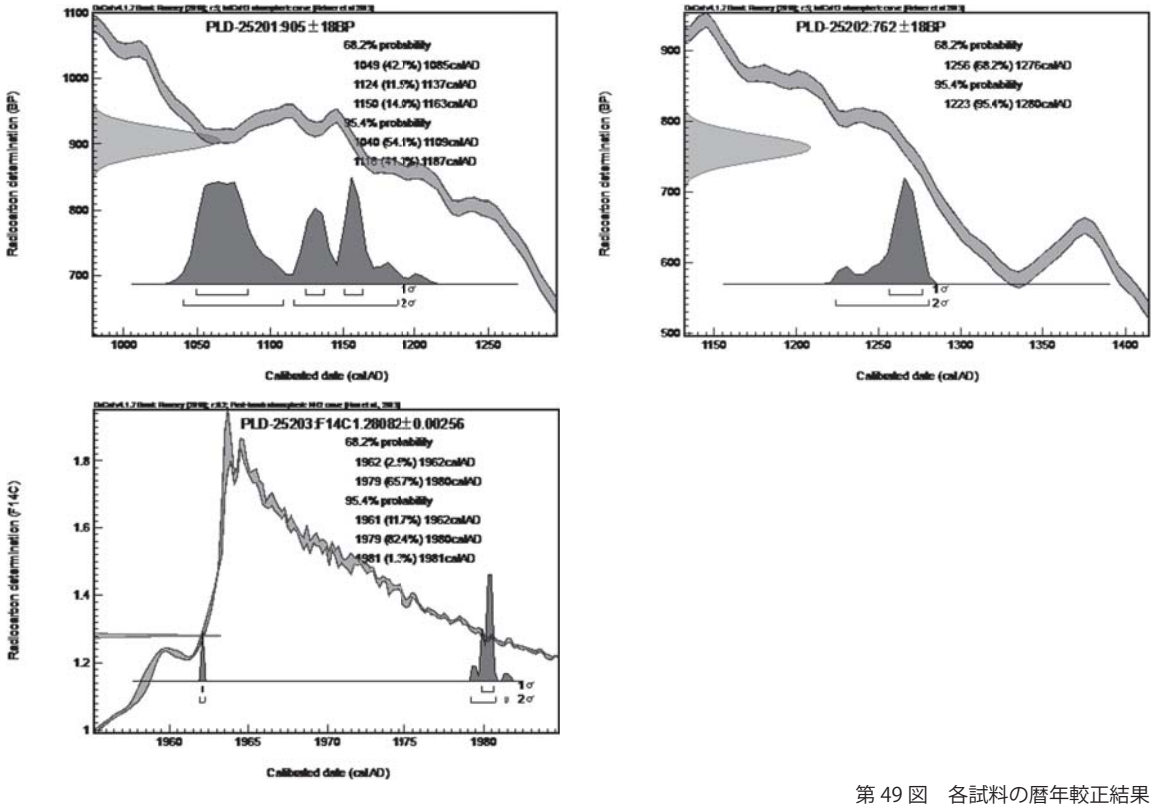
以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して、結果を整理する。

SE7 から出土した試料 No.1（PLD-25201）は、1040-1109 cal AD（54.1%）および 1116-1187 cal AD（41.3%）を示し、11 世紀前半～ 12 世紀後半となった。これは、平安時代に相当する。発掘調査所見では、SE7 は中世であると考えられているが、測定結果では平安時代となった。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もし

表 16　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	F^{14}C	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-25201 試料 No.1	-26.16±0.21	905±18	905±20	-	1049AD(42.7%)1085AD 1124AD(11.5%)1137AD 1150AD(14.0%)1163AD	1040AD(54.1%)1109AD 1116AD(41.3%)1187AD
PLD-25202 試料 No.2	-27.65±0.15	762±18	760±20	-	1256AD(68.2%)1276AD	1223AD(95.4%)1280AD
PLD-25203 試料 No.3	-29.70±0.19	-1988±16	-1990±15	1.2808±0.0026	Post-bomb NH2: 1962AD(2.5%)1962AD 1979AD(65.7%)1980AD	Post-bomb NH2: 1961AD(11.7%)1962AD 1979AD(82.4%)1980AD 1981AD(1.3%)1981AD



第 49 図　各試料の暦年較正結果

くは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料 No.1（PLD-25201）は最終形成年輪の測定が行われていないことから、古木効果の影響を受けた、または井戸枠板材には転用材が用いられており、想定年代よりも古い測定結果となった、などの可能性が考えられる。

SE9 から出土した試料 No.2（PLD-25202）は、1223-1280 cal AD（95.4%）を示し、13 世紀前半～後半となった。これは、鎌倉時代に相当する。

しかし試料 No.2（PLD-25202）では、最終形成年輪の測定が行われていない。古木効果の影響で実際の伐採年代よりも古い年代を示している可能性があり、注意が必要である。発掘調査所見では、SE9 は奈良・平安時代または中世と考えられていたが、測定結果によって、鎌倉時代以降の遺構であると絞り込みができた。

SK6 から出土した試料 No3（PLD-25203）は、1961-1962 cal AD（11.7%）、1979-1980 cal AD（82.4%）、1981-1981 cal AD（1.3%）を示し、20 世紀後半となった。これは、現代に相当する。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C.　2009　Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
Hua, Q., Barbetti, M. Rakowski, A.Z.　2013　Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950–2010. Radiocarbon, 55(4), 1-14.
中村俊夫　2000　「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」』p.3 ～ p.20　日本第四紀学会
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.　2013)　IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

2　出土木製品の樹種同定（1）

小林克也（パレオ・ラボ）

A　はじめに

松川と元宿川との間に形成された河岸段丘の北側に位置する元宿北遺跡では、井戸跡などから出土した木製品の樹種同定を行なった。なお、一部の試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

B　試料と方法

試料は、井戸跡である SE7 から 3 点、井戸跡の可能性が高いと考えられている SE9 から 1 点の、計 4 点の出土木製品である。時期については、発掘調査の所見では SE7 は中世、SE9 は奈良・平安時代または中世であると考えられている。なお、放射性炭素年代測定の結果では、試料 No.1 が平安時代、試料 No.2 が鎌倉時代であった。

生材の樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

C　結　　果

同定の結果、いずれも針葉樹のスギであった。同定結果を表 17 に示す。次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) スギ　Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don　スギ科

第 50 図　1a-1c(No.1)、2a-2c(No.4)、3a-3c(No.5)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、1 ～ 10 細胞高となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加

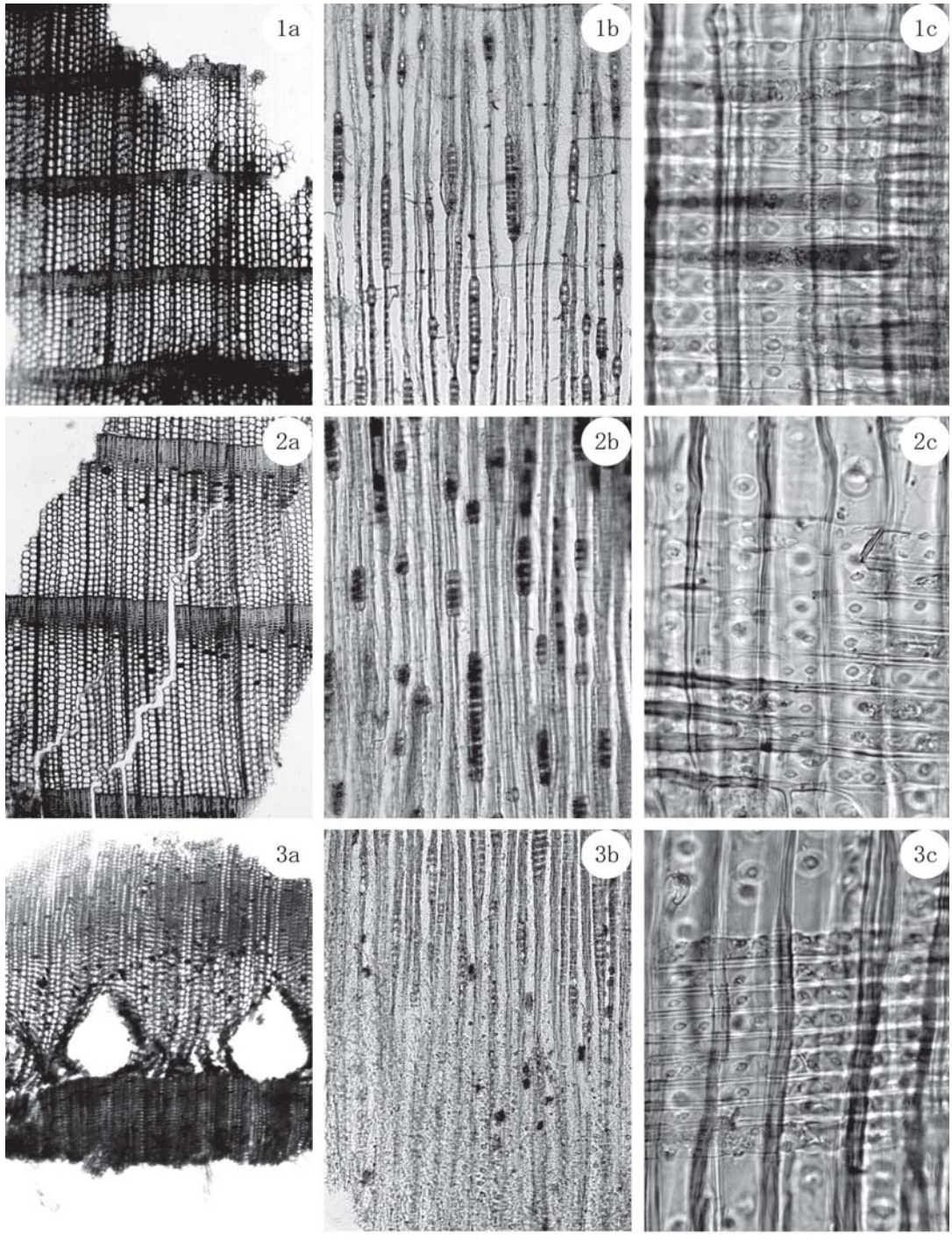
表 17　木製品樹種同定 1

試料 No.	地区	遺構	器種	樹種	年代測定番号
1（第 45 図 262）	1 区	SE7	井戸枠側板	スギ	PLD-25201
2（第 47 図 277）	1 区	SE9	板材	スギ	PLD-25202
4（第 37 図 202）	1 区	SE7	井戸枠隅柱	スギ	
5（第 37 図 205）	1 区	SE7	井戸枠隅柱	スギ	

工が容易な材である。

D　考　　察

SE7 で出土した井戸枠の側板と隅柱は、いずれもスギであった。スギは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良いという材質を持つ（伊東ほか，2011）。そのため



1a-1c. スギ (No.1)、2a-2c. スギ (No.4)、3a-3c. スギ (No.5)
a: 横断面 (スケール =500 μm)、b: 接線断面 (スケール =200 μm)、c: 放射断面 (スケール =50 μm)

第 50 図　木製品の光学顕微鏡写真 1

井戸枠として選択的に利用されていた可能性がある。

南陽市の鵜ノ木館跡で検出された、中世と考えられる井戸跡の井戸枠にはマツ属複維管束亜属とクリ、モクレン属が利用されており（パリノ・サーヴェイ株式会社，2006）、遺跡周辺に生育していた樹木を利用していたと考えられている。また鵜ノ木館跡では花粉分析も行なわれており、遺跡周辺にはブナ属やナラ類を主体とする冷温帯落葉広葉樹林が広がっていたと推測され、スギは顕著に生育していなかったと考えられる（パリノ・サーヴェイ株式会社，2006）。

元宿北遺跡の SE7 と SE9 から出土した井戸枠および板材はいずれもスギで、鵜ノ木館跡とは用材傾向は異なっていた。元宿北遺跡では、遺跡周辺に生育していた樹木ではなく、他地域から持ち込まれた材を利用していた可能性が高い。

引用・参考文献

パリノ・サーヴェイ株式会社　2006 「自然科学分析」『鵜ノ木館跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 150 集 p,159-p,185

3　出土木製品の樹種同定（2）

株式会社吉田生物研究所

A　試　　料

試料は山形県元宿北遺跡から出土した容器８点、建築部材６点の合計 14 点である。

B　観 察 方 法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

C　観 察 方 法

樹種同定結果（針葉樹２種、広葉樹１種）の表 18 と顕微鏡写真を示し（第 51 ～ 56 図　使用顕微鏡 NikDS-Fi1）、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ヒノキ科アスナロ属（Thujopsis sp.）

（遺物 No.1A・1B・2A・2B・３～６・８）

（写真 No.1A・1B・2A・2B・３～６・８）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

２）スギ科スギ属スギ（Cryptomeria japonica D.Don）

（遺物 No. ９～ 14）

（写真 No. ９～ 14）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

３）ブナ科クリ属クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）

（遺物 No. ７）

（写真 No. ７）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～ 500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは２～３個集まって火炎

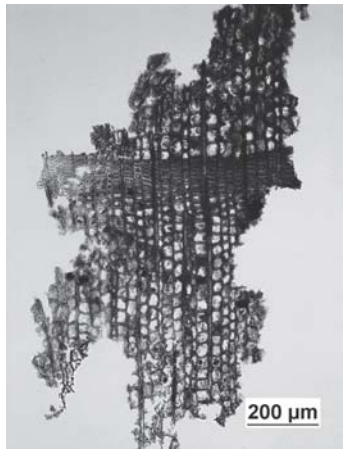
表 18　木製品樹種同定２

No	図版番号	遺物番号	品　　名	樹　　種
1A	第 33 図 188b	RW79	A 曲物 (底板)	ヒノキ科アスナロ属
1B	第 33 図 188a		B　〃 (側板)	ヒノキ科アスナロ属
2A	第 33 図 190b	RW97	A 曲物 (底板)	ヒノキ科アスナロ属
2B	第 33 図 190a		B　〃 (側板)	ヒノキ科アスナロ属
3	第 35 図 193b	RW102	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
4	第 36 図 194b	RW103	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
5	第 35 図 192b	RW101	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
6	第 36 図 195		曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
7	第 34 図 191a	RW98	曲物底板	ブナ科クリ属クリ
8	第 34 図 191b	RW98	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
9	第 39 図 210	RW142	角材 (井戸枠横浅)	スギ科スギ属スギ
10	第 41 図 228	RW154	角材 (井戸枠横浅)	スギ科スギ属スギ
11	第 44 図 248	RW135	角材 (井戸枠横浅)	スギ科スギ属スギ
12	第 41 図 227	RW153	角材 (井戸枠横浅)	スギ科スギ属スギ
13	第 45 図 259		角材 (井戸枠横浅)	スギ科スギ属スギ
14	第 43 図 247	RW114	角材 (井戸枠横浅)	スギ科スギ属スギ

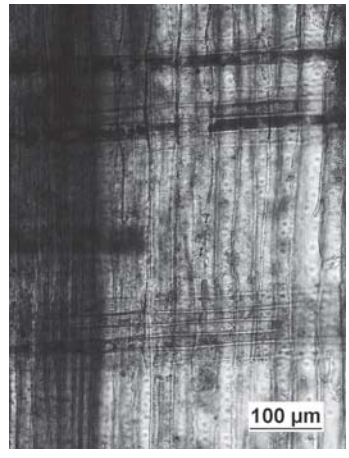
状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

引用・参考文献

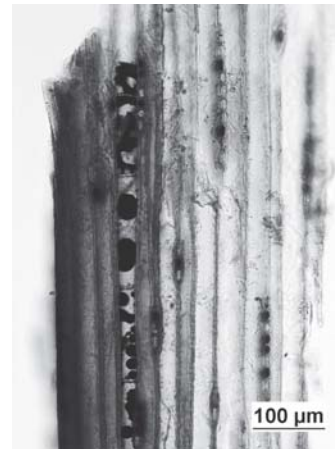
林 昭三　1991『日本産木材顕微鏡写真集』 1991　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』京都大学木質科学研究所
北村四郎・村田 源　1979 『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』 保育社
島地 謙・伊東隆夫　1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版
奈良国立文化財研究所　1985 『奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇』
奈良国立文化財研究所　1993 『奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇』



木口

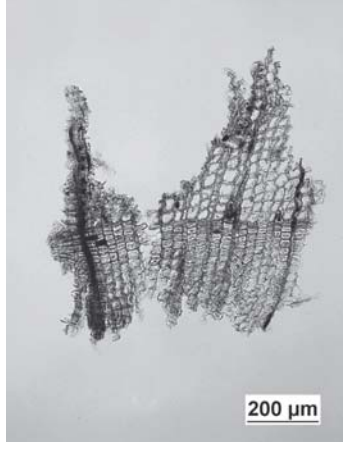


柾目

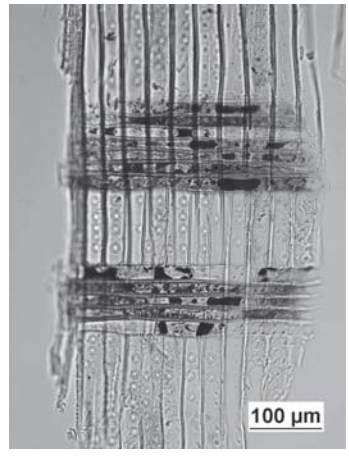


板目

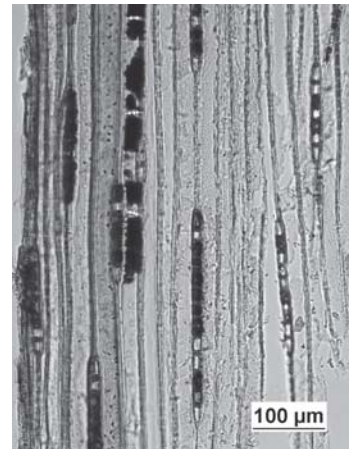
No.1A（188b）ヒノキ科アスナロ属



木口



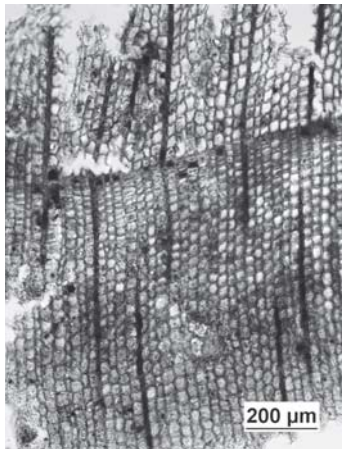
柾目



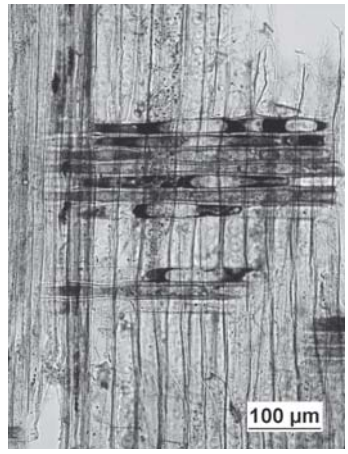
板目

No.1B（188a）ヒノキ科アスナロ属

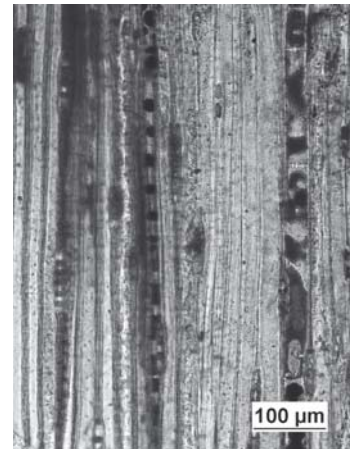
第 51 図　木製品の光学顕微鏡写真 2



木口



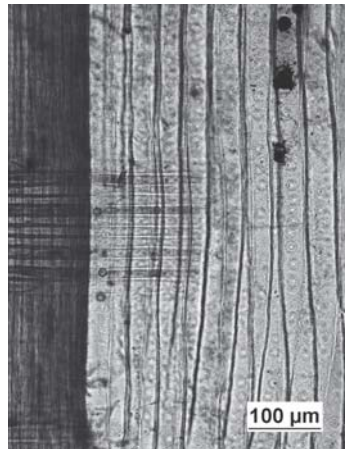
柾目



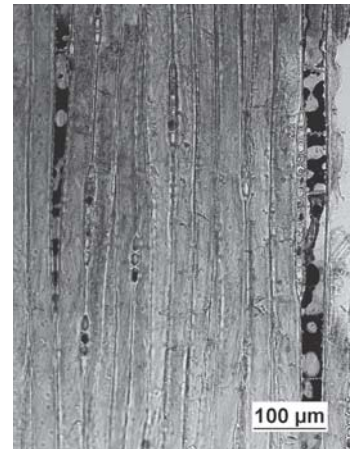
板目

No. 2 A（190b）ヒノキ科アスナロ属

木口

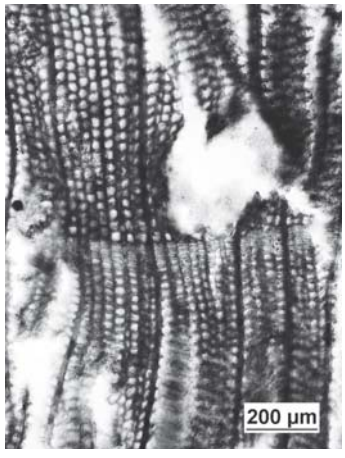


柾目

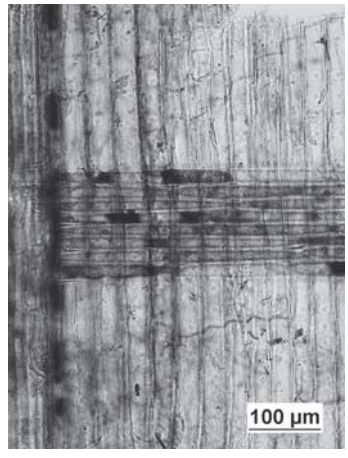


板目

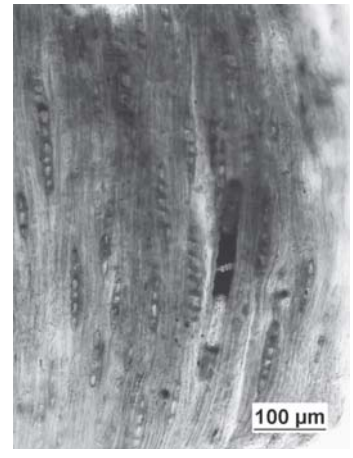
No. 2 B（190a）ヒノキ科アスナロ属



木口



柾目

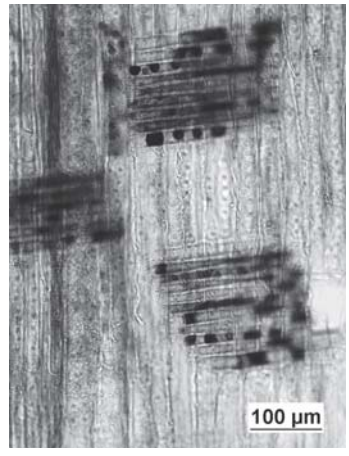


板目

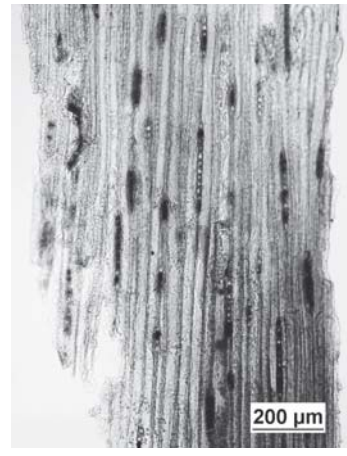
No. 3 （193b）ヒノキ科アスナロ属

第 52 図　木製品の光学顕微鏡写真 3

木口



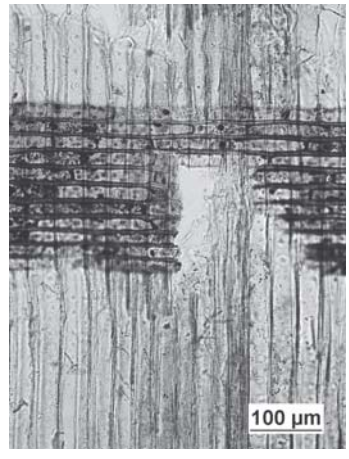
柾目



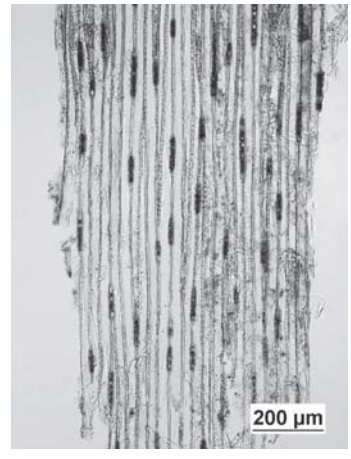
板目

No. 4（194b）ヒノキ科アスナロ属

木口

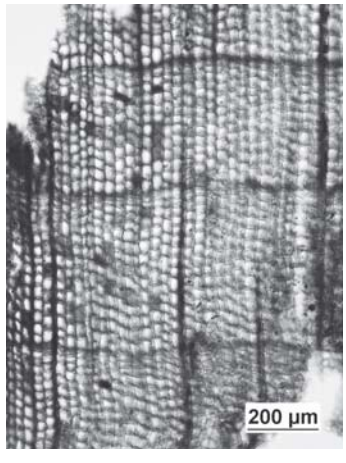


柾目

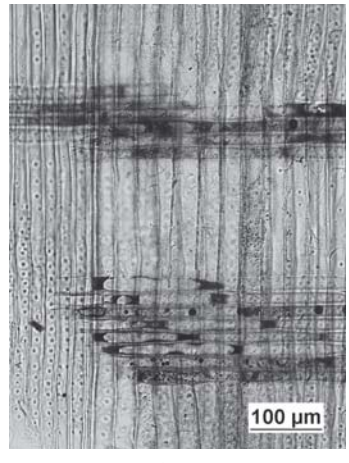


板目

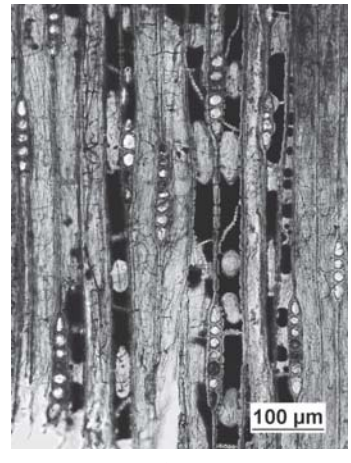
No. 5（192b）ヒノキ科アスナロ属



木口



柾目



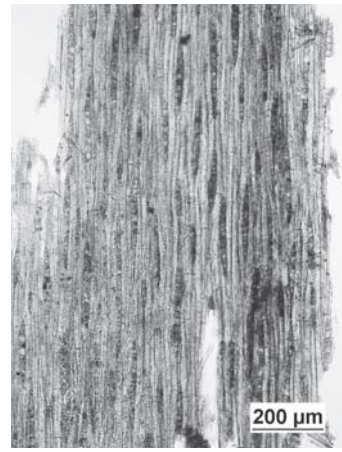
板目

No. 6（195）ヒノキ科アスナロ属

第 53 図　木製品の光学顕微鏡写真 4

木口

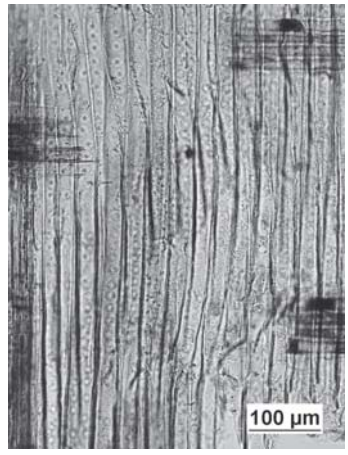
柾目



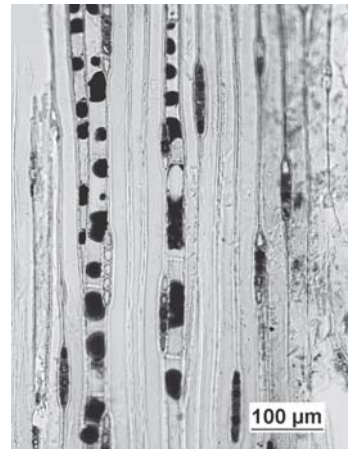
板目

No. 7（191a）ブナ科クリ属クリ

木口

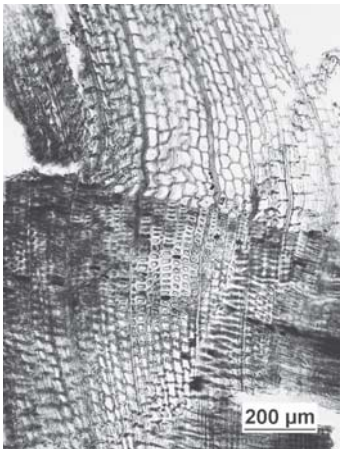


柾目

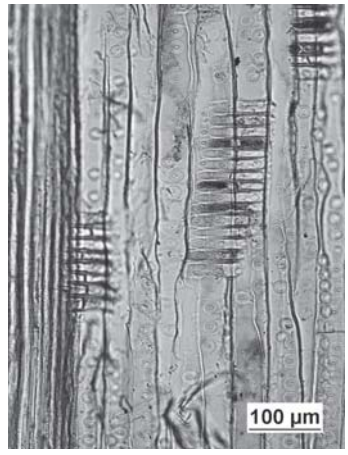


板目

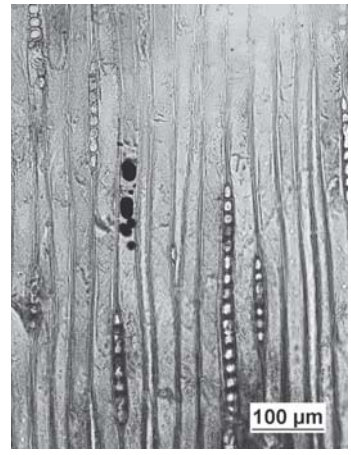
No. 8（191b）ヒノキ科アスナロ属



木口



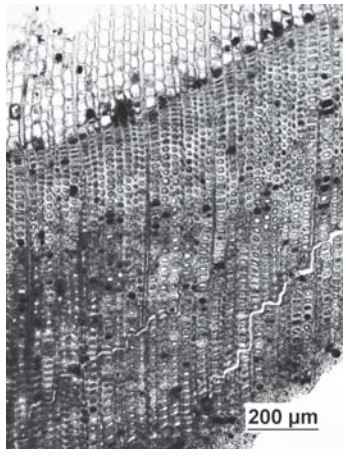
柾目



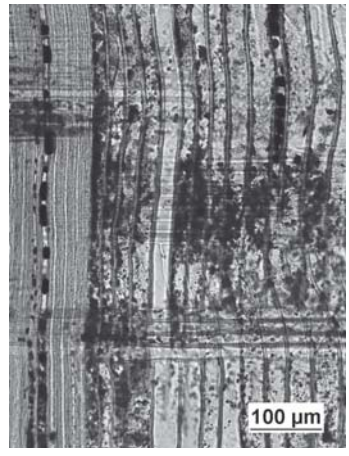
板目

No. 9（210）スギ科スギ属スギ

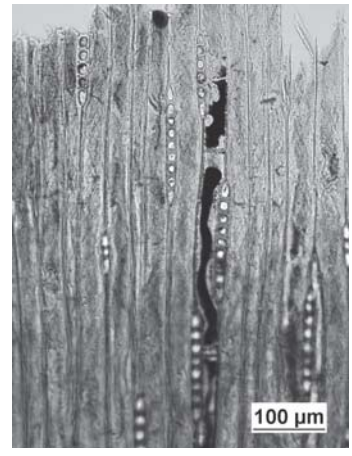
第 54 図　木製品の光学顕微鏡写真 5



木口



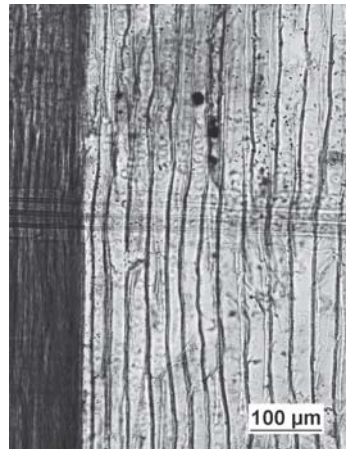
柾目



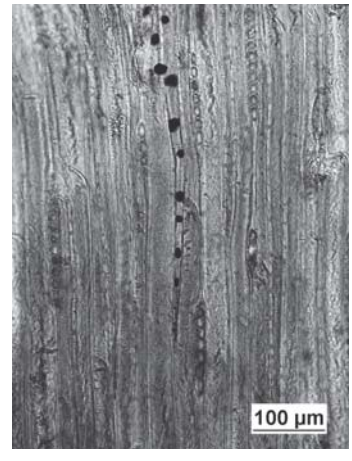
板目

No.10（228）スギ科スギ属スギ

木口

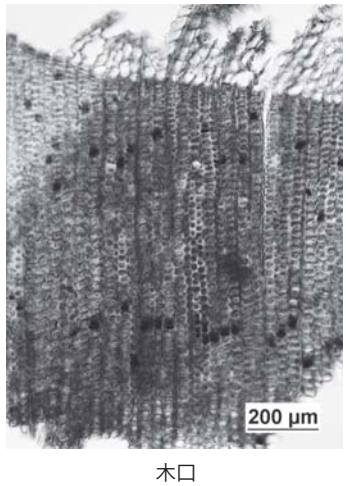


柾目

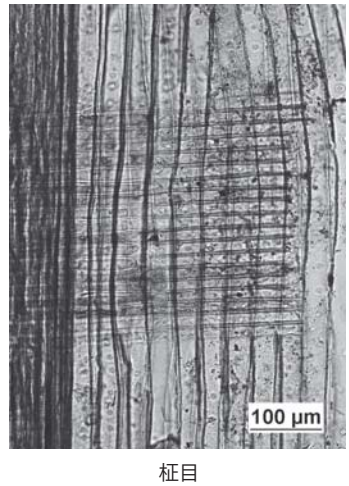


板目

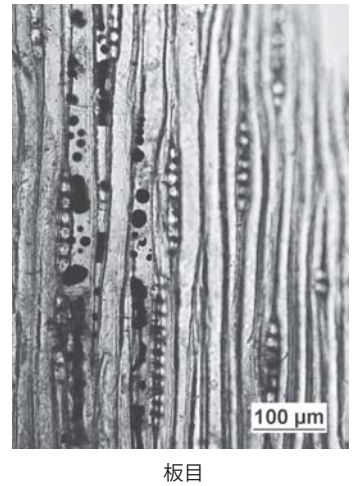
No.11（248）スギ科スギ属スギ



木口



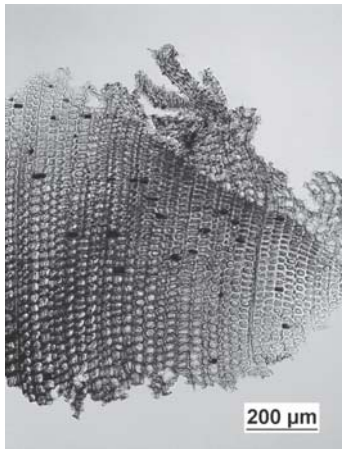
柾目



板目

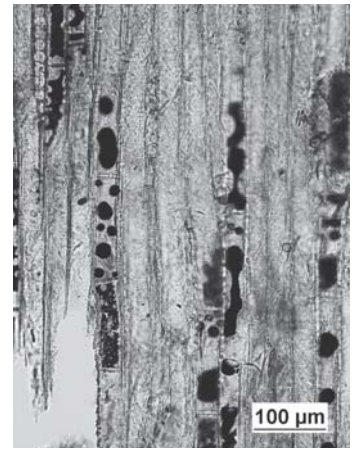
No.12（227）スギ科スギ属スギ

第 55 図　木製品の光学顕微鏡写真 6



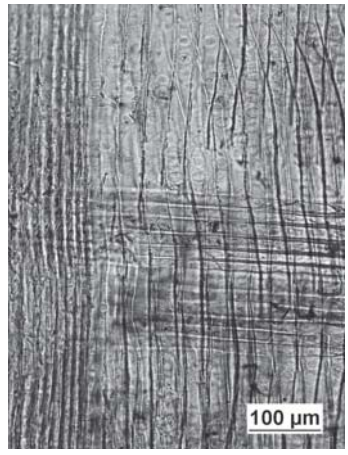
木口

柾目

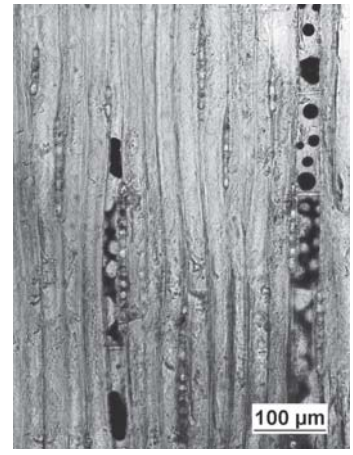


板目

No.13（259）スギ科スギ属スギ



柾目



板目

No.14（247）スギ科スギ属スギ

第 56 図　木製品の光学顕微鏡写真 7

4　出土木製品の樹種同定（3）

株式会社東都文化財保存研究所

A　試　　料

試料は、1 区 SE7 の井戸の構築部材 10 点（委託№1・2・4～11）と 1 区 SE9 から出土した板材 1 点（委託№3）の合計 11 点である。

B　分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Richter 他（2006）を参考にする。

C　結　　果

樹種同定結果を表 19 に示す。井戸の構築材および板材は、全て針葉樹で、3 分類群（スギ・アスナロ・ヒノキ科）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（Cryptomeria japonica（L. f.）D. Don）
スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められ、接線方向に揃う傾向がある。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 ～ 4 個。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

・アスナロ（Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.）

ヒノキ科アスナロ属

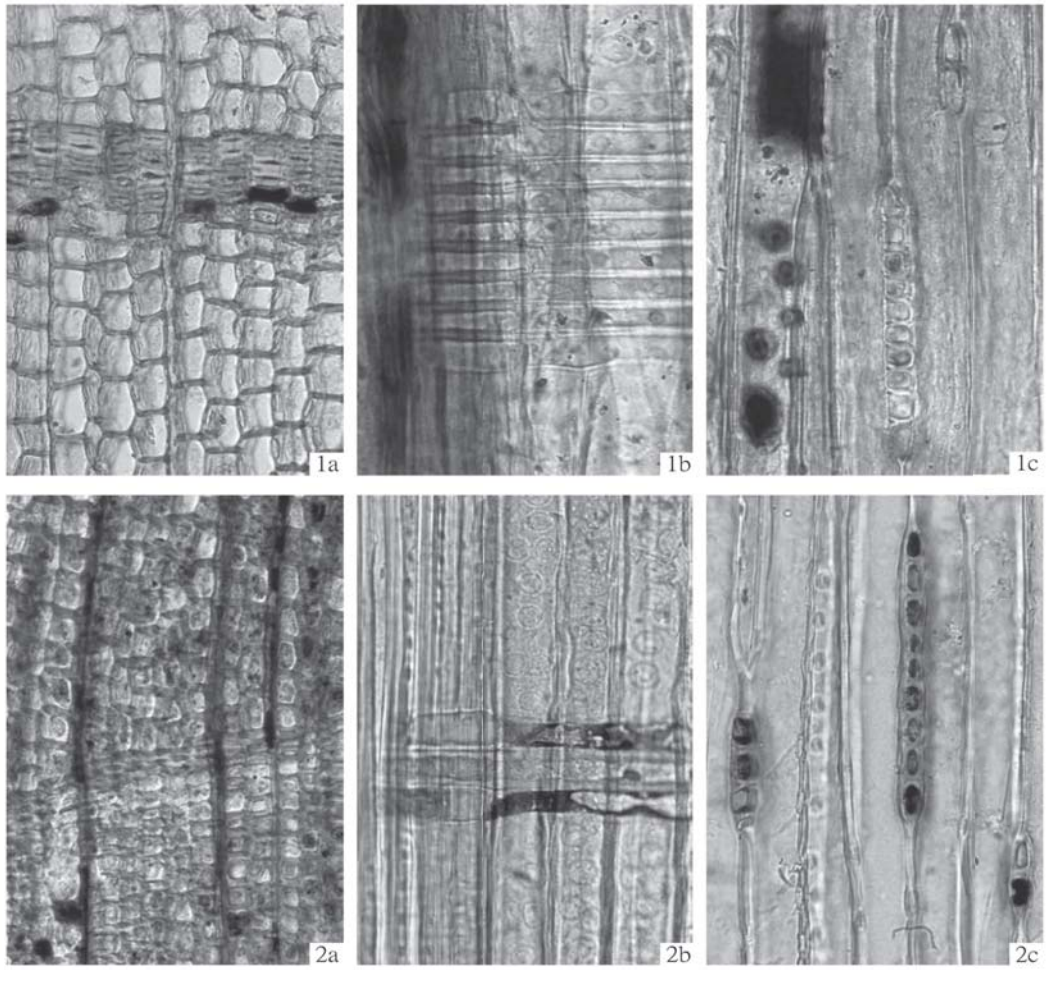
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められ、接線方向に揃う傾向がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、内部には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 1 ～ 4 個。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管

表 19　木製品樹種同定表 3

No.	図版番号	遺物番号	地区・遺構	遺物名	種類
1	第 41 図 229	RW149	1 区 SE7	板材 (井戸枠材)	スギ
2	第 39 図 206	RW128	1 区 SE7	板材 (井戸枠材)	スギ
3	第 47 図 277		1 区 SE9-F7	板材	スギ
4	第 45 図 261		1 区 SE7	板材 (井戸枠材)	スギ
5	第 33 図 189		1 区 SE7	曲物底板	アスナロ
6	第 38 図 203	RW151	1 区 SE7	角材 (井戸隅柱)	スギ
7	第 37 図 202	RW141	1 区 SE7	角材 (井戸南東隅柱)	ヒノキ科
8	第 38 図 204	RW152	1 区 SE7	角材 (井戸隅柱)	スギ
9	第 45 図 260	RW123	1 区 SE7	角材 (井戸枠横桟)	スギ
10	第 38 図 205		1 区 SE7	角材 (井戸隅柱)	スギ
11	第 39 図 209	RW116	1 区 SE7	角材 (井戸枠横桟)	スギ



1. スギ（委託 No. 4）

2．アスナロ（委託 No. 5）　　a：木口　b：柾目　C: 板目

100 μm:a

100 μm:b,c

第 57 図　木製品の光学顕微鏡写真 8

の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

上記アスナロを含むヒノキ科のいずれかであるが、保存状態が悪いため、種類は不明である。

引用文献

島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』 地球社
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 『広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修） 海青社［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］

5　放射性炭素年代測定（2）

パリノ・サーヴェイ株式会社

A　はじめに

今回の分析調査では、元宿北遺跡の井戸跡等の遺構から出土した、木材および炭化材を試料として放射性炭素年代測定を行うことにより、各試料が出土した遺構の年代資料を作成する。

B　試　　料

試料は出土遺物等から中世の井戸跡とされている SE7 出土木材 1 点と、平安時代の土坑とされている SK19 出土炭化材 1 点の計 2 点である。試料には、それぞれ試料番号 1 、試料番号 2 が付されている。試料番号 1 の木材は芯持材であり、樹種はクマヤナギ属に同定された。試料番号 2 の炭化材はミカン割状を呈し、樹種はブナ属に同定された。

C　分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HC l により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC l によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。
試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ^{13}C/^{12}C の測定も行うため、この値を用いて δ^{13}C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730±40 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB REV7.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ、2σ 双方の値を計算する。σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、σ、2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、

1 年単位で表された値を記す。

D　結果および考察

同位体効果による補正を行った測定結果を表 20 に示す。試料番号 1 は 3,760±30BP であり、試料番号 2 は 860±20BP を示す。各試料の較正暦年代を表 21 に示す。測定誤差を σ の年代でみると、試料番号 1 は calBC2,271-2,138 となり、試料番号 2 は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃までとなる。

試料番号 1 は、中世の井戸とされた SE7 から出土した木材試料とされているが、較正暦年代は縄文時代後期初頭頃（小林編（2008）などによる）に相当するものであった。この試料は、出土状況の詳細が不明なためその原因はわからない。しかし、この結果から見る限り、地山に含まれた古材が混入したことや、井戸枠等への古材の利用等も示唆される。出土状態の再確認を経て、井戸跡との関連性を検証する必要があろう。

一方試料番号 2 で得られた較正暦年代は、およそ平安時代末から鎌倉時代初期頃に相当するものであり、土坑 SK19 の時代を平安時代とする発掘調査所見を支持する結果と言える。

表 20　放射性炭素年代測定

試料番号	種類	形状	樹種	出土地点	補正年代	δ13 C	測定年代	Code No.
					BP	(‰)	BP	
1	木材	芯持材	クマヤナギ属	1 区 SE7-Y	3,760 ± 30	-31.32 ± 0.43	3,870 ± 30	IAAA-140781
2	炭化材	ミカン割状	ブナ属	1 区 SK19-F1	860 ± 20	-28.89 ± 0.40	920 ± 20	IAAA-140782

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表 21　暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)		暦年較正年代												相対比	Code No.
1	3,763± 28	σ	cal	BC	2,271	-	cal	BC	2,259	cal	BP	4,221	-	4,209	0.088	IAAA-140781
			cal	BC	2,206	-	cal	BC	2,138	cal	BP	4,156	-	4,088	0.912	
		2σ	cal	BC	2,286	-	cal	BC	2,246	cal	BP	4,236	-	4,196	0.152	
			cal	BC	2,243	-	cal	BC	2,239	cal	BP	4,193	-	4,189	0.004	
			cal	BC	2,235	-	cal	BC	2,129	cal	BP	4,185	-	4,079	0.751	
			cal	BC	2,087	-	cal	BC	2,048	cal	BP	4,037	-	3,998	0.092	
2	857± 20	σ	cal	AD	1,168	-	cal	AD	1,178	cal	BP	782	-	772	0.240	IAAA-140782
			cal	AD	1,181	-	cal	AD	1,211	cal	BP	769	-	739	0.760	
		2σ	cal	AD	1,154	-	cal	AD	1,225	cal	BP	796	-	725	0.981	
			cal	AD	1,231	-	cal	AD	1,245	cal	BP	719	-	705	0.019	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、2σ は 95% である
5）相対比は、σ、2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

6　須恵器・中世陶器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

A　はじめに

河川跡や井戸跡等の遺構から出土した、古代須恵器および中世陶器の材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、その産地に関わる資料を作成する。

B　試　　料

試料は、古代の須恵器 5 点と中世の陶器 3 点の計 8 点である。そのうち須恵器は高台坏、蓋、壺、こね鉢、甕の各器種に分類されており、中世陶器のうち 1 点は擂鉢である。中世陶器には試料番号 3 ～ 5、須恵器には試料番号 6 ～ 10 が付されている。各試料の試料番号、器種、出土地点および遺物番号を一覧として、表 22 に示す。

C　分析方法

これまで当社では、山形盆地や庄内平野に分布する遺

跡から出土した須恵器の胎土分析を行ってきた。高温焼成と胎土中の砂粒が少ないという須恵器の胎土の特性により、分析手法は薄片作製観察と蛍光Ｘ線分析を併用し、両結果を合わせて解析を行っている。今回は、中世陶器については薄片作製観察と蛍光Ｘ線分析を併用し、須恵器については蛍光Ｘ線分析を用いる。以下に各分析方法を述べる。

表 22　胎土分析試料一覧

試料番号	図版番号	種類	出土地点	蛍光Ｘ線分析	薄片作製観察
3	第 29 図 93	中世陶器擂鉢	1 区 SE7-F2	1	1
4	第 27 図 70	中世陶器	1 区 SD8-F	1	1
5	第 28 図 85	中世陶器	1 区 SE4-F2	1	1
6	第 24 図 10	須恵器高台坏	2 区 SD1-F1	1	
7	第 25 図 21	須恵器蓋	1 区 SD1	1	
8	第 25 図 36	須恵器壺	2 区 SD1-F1a	1	
9	第 27 図 62	須恵器こね鉢	1 区 SD1-F1a	1	
10	第 26 図 39	須恵器甕	1 区 SD1-F1b	1	
			計	8	3

表 23　ガラスビード作成条件

溶融装置	自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）
溶剤及び希釈率	融剤（Spectroflux 100B）5.000g: 試料 0.500g
剥離剤	LiI（溶融中 1 回投入）
溶融温度	1200℃（約 7 分）

表 24　蛍光Ｘ線装置条件

ターゲット	Rh
管電圧 (KV)	50
管電流 (mA)	50
試料マスク	30mmφ
試料スピン	ON
ダイアフラム	30mmφ
測定雰囲気	真空

（1）蛍光Ｘ線分析

リガク製波長分散型蛍光X線分析装置（ZSX PrimusⅢ+）を用い、ガラスビード法により分析を実施した。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムのFP定量法を使用し、SiO_2,TiO_2,Al_2O_3,Fe_2O_3,MnO,MgO,CaO,Na_2O,K_2O,P_2O_5の主要10元素およびRb,Sr,Y,Zr,Baの微量5元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料(JA-1,JA-2,JA-3,JB-1a,JB-2,JB-3,JCh-1,JF-1,JF-2,JG-1a,JG-2,JG-3,JGb-1,JGb-2,JH-1,JLk-1,JR-1,JR-2,JR-3,JSd-1,JSd-2,JSd-3,JSl-1,JSl-2,JSy-1)を用いた。

1）装置

（株）リガク製 走査型蛍光Ｘ線分析装置 ZSX Primus Ⅲ +（FP 定量法アプリケーション）

2）試料作製

機械乾燥（110℃）した試料を、振動ミル（平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器）で粉砕・混合し、ガラスビードを表 23 の条件で作製した。

3）測定条件

上記作製したガラスビードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光Ｘ線分析装置（（株）リガク製 ZSX Primus Ⅲ +)を用い、表 23・24 の条件で測定を実施した。

（2）薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれ

表 25　蛍光Ｘ線定量測定条件

測定元素	測定スペクトル	1 次フィルタ	アッテネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		角度 (deg)			計測時間 (s)	
							LL	UL	Peak	+BG	-BG	Peak	BG
SiO_2	Si-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO_2	Ti-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al_2O_3	Al-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	-	40	20
Fe_2O_3	Fe-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step)	41.50-42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na_2O	Na-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K_2O	K-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	280	136.674	-	142.00	40	20
P_2O_5	P-Kα	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	26.598	25.60-25.80 (0.10step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step)	25.60-25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.30-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-Lα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

る鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。ここでは、薄片観察結果を松田ほか（1999）の方法に従って表記する。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下にその手順を述べる。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

D　結　　果

（1）蛍光 X 線分析

各試料の化学組成は、表 26 に示す通りである。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した（第 58 図）。

a）化学組成中で最も主要な元素である SiO_2 と Al_2O_3。

b）粘土の母材を考える上で、長石類 (主にカリ長石、斜長石) の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素である CaO、Na_2O、K_2O の 3 者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合（$Na_2O + K_2O$）/（$CaO + Na_2O + K_2O$）を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 K_2O/（$Na_2O + K_2O$）を縦軸とする。

c）輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、TiO_2、Fe_2O_3、MgO を選択し、Fe_2O_3 を分母とした TiO_2、MgO の割合を見る。

d）各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-Sr と Zr-Ba の 2 通りとする。

今回作成した 5 つの散布図を概観すると、以下のような各試料間の組成の類似性と異質性を見出すことができる。

3 点の中世陶器の間では、試料番号 3 と 5 の類似性とこれら 2 点に対する試料番号 4 の異質性が、5 つの散布図を通して明瞭に認められる。

須恵器の 5 点の間では、試料番号 8 と 9 の類似性が、5 つの散布図を通して明瞭に認められる。これら 2 点から見ると、試料番号 6 はどの散布図においても離れた位置にあり、試料番号 8、9 との異質性が指摘できる。試料番号 7 と 10 については、SiO_2-Al_2O_3 図では試料番号 8、9 と近接しており、長石類主要元素図においては試料番号 8、9 と試料番号 6 との間に位置し、有色鉱物主要元素図では試料番号 7 も 10 も、試料番号 6 と同程度に試料番号 8、9 から離れた位置にあり、かつ試料番号 7 と 10 との間も離れている。Rb-Sr 図でも試料番号 7 と 10 は、試料番号 6 と同程度に試料番号 8、9 から離れた位置にあるが、試料番号 7 と 10 は近接している。Zr-Ba 図では、試料番号 10 は試料番号 8、9 に近接するが、試料番号 7 は試料番号 6 と同程度に離れている。

中世陶器と須恵器との関係をみると、中世陶器の試料番号 3、5 と須恵器の試料番号 8、9 とは、Zr-Ba 図ではやや近接するものの、他の 4 つの図では明瞭に離れた位置にある。中世陶器の試料番号 4 は、SiO_2-Al_2O_3 図と有色鉱物主要元素図においては、中世陶器の試料番号 3、5 と須恵器の試料番号 8、9 との中間に位置し、長石類主要元素図と Rb-Sr 図では須恵器の試料番号 8、9 に近接した位置にある。須恵器の試料番号 6 は、5 つの図を通して、中世陶器 3 点と試料番号 4 以外の須恵器 4 点との位置関係よりも離れた位置にある。須恵器の試料番号 7 と 10 は、中世陶器試料との位置関係が図によって異なるということがその特性になると言える。

（2）薄片作製観察

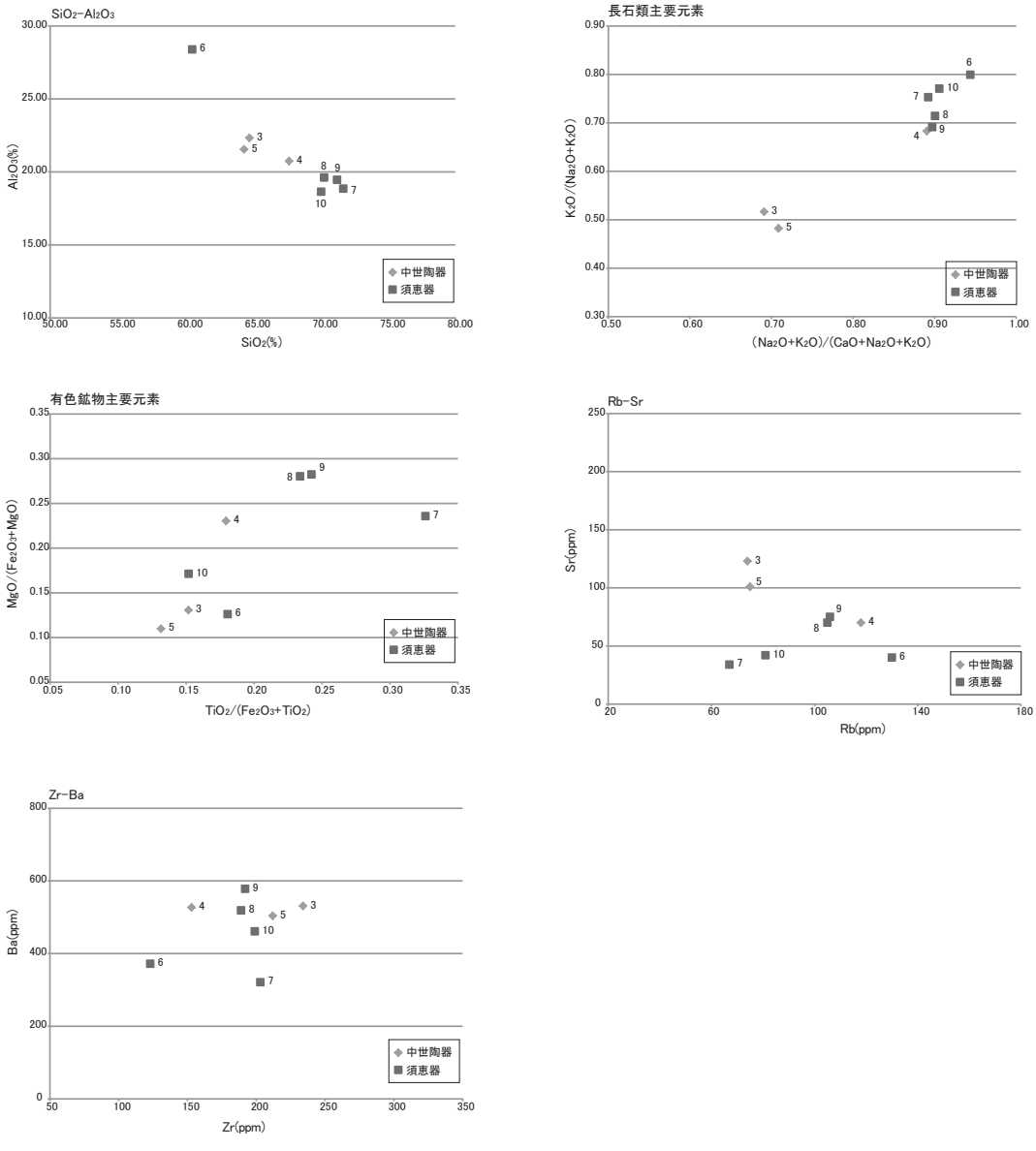
観察結果を表 27、第 59･60 図に示す。以下に、鉱物・岩石組成、粒径組成、砕屑物・基質・孔隙の順に各試料の特徴を述べる。

1）鉱物・岩石組成

3 試料は、ほぼ同様の組成を示す。砂粒の主体は石英と斜長石の鉱物片であり、これに少量の多結晶石英と花

表 26　蛍光Ｘ線分析結果

試料	主要元素（%）															Total
番号	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Rb	Sr	Y	Zr	Ba	(%)
3	64.76	1.00	22.33	5.59	0.05	0.84	1.36	1.47	1.57	0.05	74	123	19	234	531	99.12
4	67.69	0.73	20.74	3.34	0.03	1.00	0.45	1.16	2.50	0.04	118	70	21	153	527	97.77
5	64.36	1.02	21.55	6.73	0.06	0.83	1.04	1.31	1.22	0.09	75	101	21	212	504	98.30
6	60.52	1.10	28.39	4.99	0.01	0.72	0.16	0.54	2.15	0.02	130	40	37	123	372	98.67
7	71.71	0.91	18.85	1.88	0.01	0.58	0.21	0.43	1.31	0.05	67	34	17	203	321	96.00
8	70.29	0.87	19.61	2.85	0.02	1.11	0.34	0.88	2.20	0.04	105	70	40	189	519	98.30
9	71.25	0.87	19.46	2.72	0.02	1.07	0.36	0.97	2.17	0.11	106	75	38	192	578	99.10
10	70.07	0.65	18.64	3.63	0.02	0.75	0.24	0.53	1.78	0.11	81	42	21	199	461	96.50



第 58 図　胎土化学組成散布図

崗岩類の岩石片が伴われ、他に微量のカリ長石や斜方輝石、黒雲母などの鉱物片と微量または少量の珪質頁岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイトなどの岩石片と火山ガラスが含まれる。

詳細にみれば、試料番号３と５では石英と斜長石は同量程度であるが、試料番号４は石英に比べて斜長石が有意に少なく、また多結晶石英と花崗岩類の岩石片がやや多い。なお、３点ともに長石類の溶融が認められ、斜長石には微細なムライトが生成しているが、試料番号３と５についてはさらに基質の非晶質化も認められている。

2）粒径組成

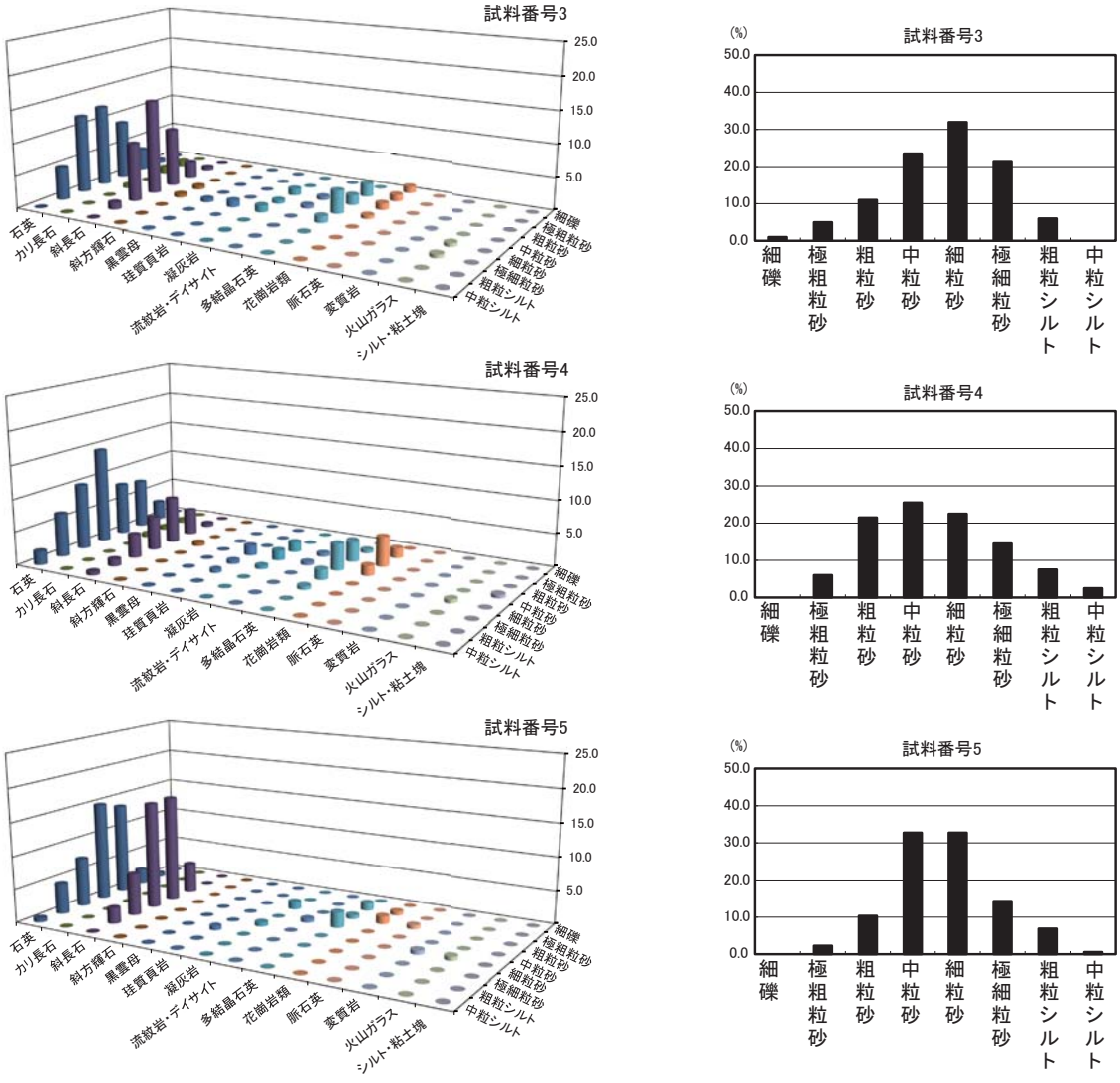
試料番号３は細粒砂をモードとし、試料番号４は中粒砂、試料番号５は中粒砂と細粒砂の両者をモードとする組成である。

3）砕屑物・基質・孔隙の割合

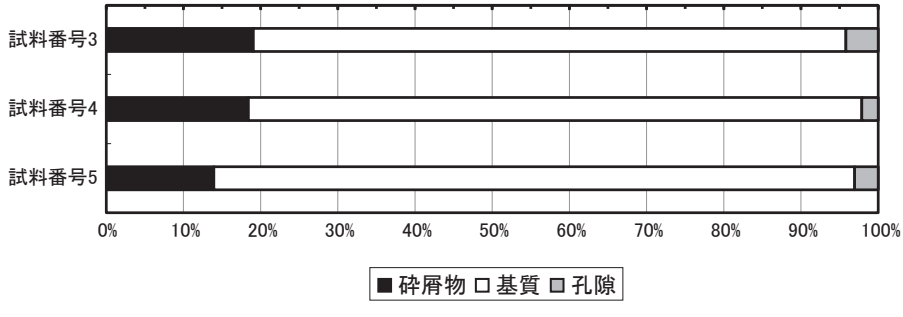
砕屑物の割合をみると、試料番号３・４の２点は20%程度であるが、試料番号５は15%程度とやや少ない。

表 27　剥片観察結果

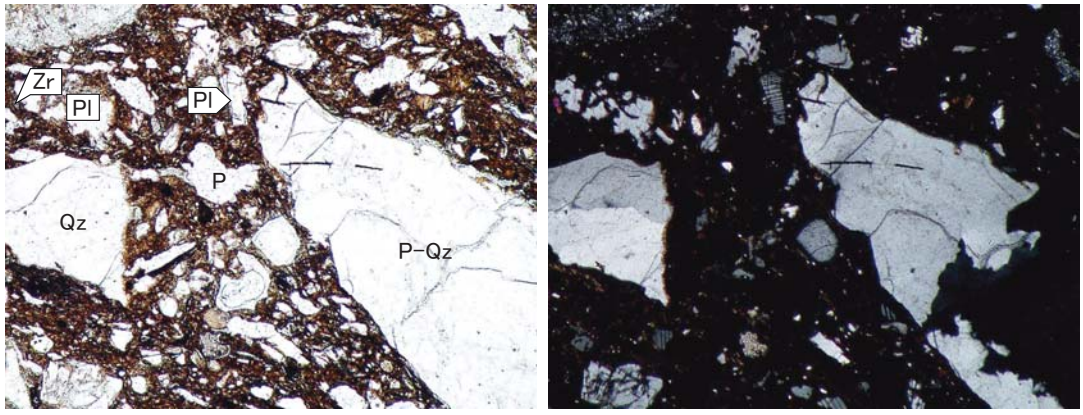
試料番号	砂粒区分		砂粒の種類構成														
			鉱物片					岩石片							その他		
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	黒雲母	珪質頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	脈石英	変質岩	火山ガラス	シルト・粘土塊	合計
3 (93)	砂	細礫										2					2
		極粗粒砂	1	2	1						4	2					10
		粗粒砂	7	2	5				2	1	3	2					22
		中粒砂	18		18	1			1	1	7	1					47
		細粒砂	25	1	29	1	1	2	2		2				1		64
		極細粒砂	24		18										1		43
		粗粒シルト	10		2												12
		中粒シルト															0
	基質																806
	孔隙																44
	備考		カリ長石、斜長石は溶融しており、斜長石には微細な針状ムライトが生成している。基質は雲母鉱物質で、非晶質化が進んでいる。														
4 (70)	砂	細礫															0
		極粗粒砂	6	1	1						1	3					12
		粗粒砂	15	1	8				3	1	6	9					43
		中粒砂	16	1	14	1		3	3	1	8	3				1	51
		細粒砂	29		10			1	1		3				1		45
		極細粒砂	20		7			1			1						29
		粗粒シルト	13		2												15
		中粒シルト	4		1												5
	基質																863
	孔隙																23
	備考		カリ長石、斜長石は溶融しており、斜長石にはきわめて微細なムライトが生成している。基質はややシルト質で、雲母鉱物、石英、長石類などから構成される。														
5 (85)	砂	細礫															0
		極粗粒砂	1								2	1					4
		粗粒砂	4		8				2		1	2	1				18
		中粒砂	24		28					1	4						57
		細粒砂	26		28				1					1	1		57
		極細粒砂	13		11			1									25
		粗粒シルト	8		4												12
		中粒シルト	1														1
	基質																1037
	孔隙																38
	備考		カリ長石、斜長石は溶融しており、ガラス化しているものが多く認められる。斜長石にはきわめて微細なムライトが生成している。基質は非晶質化して酸化鉄が生成し、褐色を呈する。														



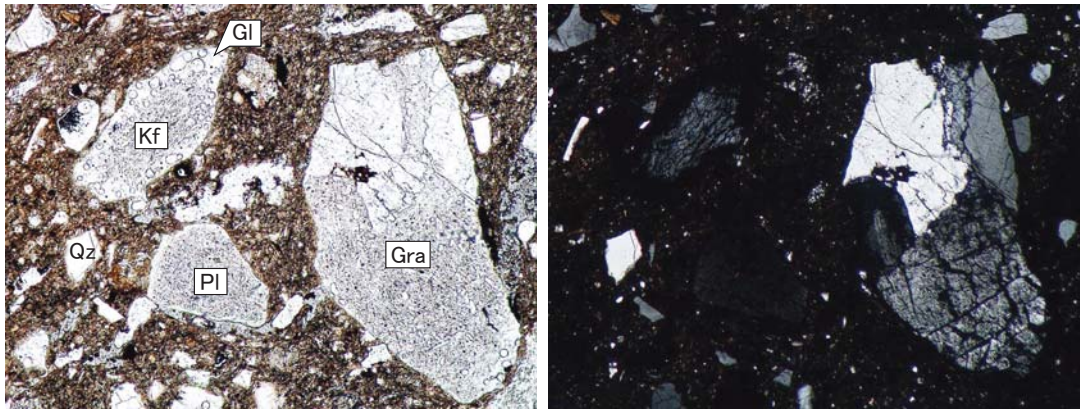
第 59 図　中世陶器胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成



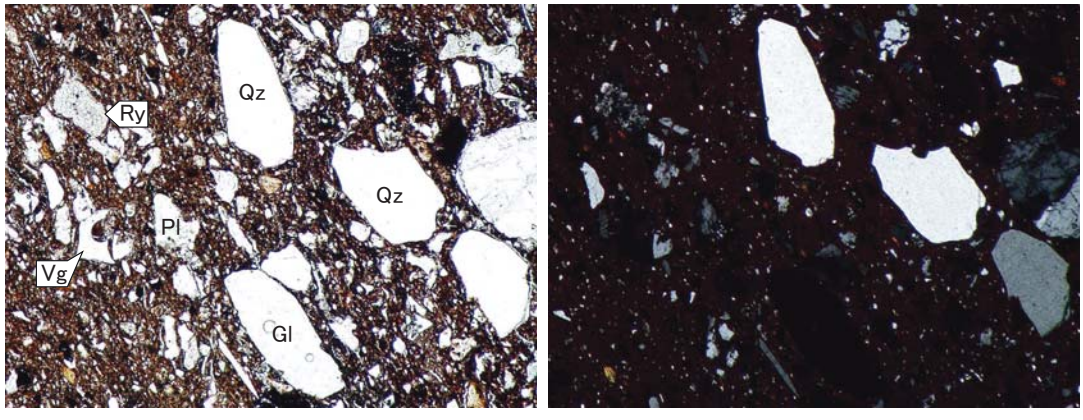
第 60 図　中世陶器胎土の破屑物・基質・孔隙の割合



1.試料番号3(中世陶器擂鉢　1区SE7-F2　93)



2.試料番号4(中世陶器　1区SD8-F　70)



3.試料番号5(中世陶器　1区SE4-F2　85)

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Zr:ジルコン. Ry:流紋岩. P-Qz:多結晶石英.
Gra:花崗岩. Vg:火山ガラス. Gl:溶融ガラス. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第 61 図　胎土剥片顕微鏡写真

E　考　　察

（1）中世陶器について

３試料（試料番号３～５）の薄片観察結果によると、鉱物と岩石の種類がほぼ共通していることが確認された。胎土中に含まれる鉱物および岩石の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土を採取した地域の地質学的背景を反映する可能性が高いことから、３試料は共通する地質学的背景を有する地域内で採取された砂や粘土を材料としたと考えられる。

本遺跡の位置する米沢盆地の地質学的背景は、大沢ほか（1986・1988）や日本の地質「東北地方」編集委員会（1989）、久保ほか（2003）などに詳しい。それによれば、盆地周囲の山地を構成する地質の主体は、頁岩、珪質頁岩、凝灰岩を主要な構成要素とする新第三紀中新世の堆積岩類からなり、また同時期の流紋岩・デイサイトからなる溶岩も分布している。さらに、これら新第三紀の地質の分布する背後には、白亜紀～古第三紀に貫入した花崗岩類の分布も記載されている。米沢盆地の堆積物は、そのような多種の地質が分布する山地を流下した河川が運んできた砕屑物により構成されているから、堆積物中には上述した多種の地質に由来する岩石片が混在している。

３試料に認められた岩石片の種類構成は、米沢盆地の地質学的背景とほぼ一致することから、米沢盆地内の堆積物を材料としている可能性がある。ただし、上述した米沢盆地の地質学的背景は、最上川沿いに分布する山形盆地から新庄盆地を経て庄内平野に至る、各盆地および平野の地質学的背景ともなっている。したがって、薄片観察結果における鉱物・岩石組成のみからは、山形盆地から庄内平野に至る堆積物を材料としている可能性も同程度にあると考えられる。

そこで薄片観察結果を仔細にみると、試料番号４では他の２点とは異なる特徴として、石英と斜長石の量比や基質の非晶質化の程度の違いなどが捉えられている。これは、下記の蛍光Ｘ線分析による化学組成の違いとも整合しており、今後の産地を示す指標になる可能性がある。

ところで、蛍光Ｘ線分析による化学組成の違いは、産地の違いを反映する可能性のあることが期待されるが、現時点では山形県内では中世陶器の分析事例は乏しく、南陽市天王遺跡出土の中世陶器３点の分析事例がある。同遺跡の事例では、本分析結果同様２つの組成に分類されており、今回の試料番号３、５に近似する組成が看取された（パリノ・サーヴェイ株式会社 2010）。しかし、試料番号４に近似する組成は見られないことから、米沢盆地で出土する中世陶器には、少なくとも３箇所の窯産の製品が混在することが示唆される。今後、最上川流域の各盆地および平野において、中世陶器の窯跡試料の薄片観察結果と化学組成を蓄積することにより、今回の試料の産地についても再評価が可能になると期待される。

（2）古代の須恵器について

蛍光Ｘ線分析による古代の須恵器の分析事例では、庄内平野に位置する鶴岡市荒沢遺跡、酒田市泉森南窯跡、山形盆地西部に位置する寒河江市平野山窯跡、山形盆地東部に位置する天童市二子沢古窯跡、山形盆地南縁の丘陵部に位置する山形市小松原窯跡、山形市オサヤズ窯跡、山形市三本木窯跡、そして長井盆地に位置する長井市蛇崩窯跡と米沢盆地北部に位置する南陽市平野古窯跡の各遺跡がある。現時点では、各窯跡試料とも分析試料数が少ないため、同一窯跡出土試料間の組成のばらつき状況が明瞭でない部分もあるが、散布図上での分布範囲を比較すると、庄内平野の窯跡産の組成は、他の地域の窯跡産の組成との差異が認められるが、山形盆地と米沢盆地の窯跡産との化学組成の違いは、散布図上からは区別することは難しい。

このような状況下で、今回の試料の化学組成を比べてみると、試料番号６、試料番号８・９、試料番号７・10に分類できる。

試料番号８、９はやはり庄内平野の窯跡産とは異なる組成であると判断され、山形盆地および米沢盆地の窯跡産の試料との近似性が窺える。したがって、試料番号８、９については、山形盆地あるいは米沢盆地に分布する窯跡産である可能性が高いと考えられる。

試料番号６は、上述した窯跡の分析事例の中に類似する組成が認められない。しかし Rb-Sr 図では、試料番号６は庄内平野の窯跡試料に近似する位置にあることから、庄内平野の窯跡産であることが示唆される。

試料番号７と10は、SiO_2-Al_2O_3 図、長石類主要元素

図および Zr-Ba 図では山形盆地および米沢盆地の窯跡試料に近似するが、Rb-Sr 図では庄内平野の窯跡試料にも近似することから、その評価は現時点では定まらない。今後とも、山形盆地、米沢盆地および庄内平野に分布する窯跡出土試料の分析事例を蓄積することができれば、より詳細な窯跡の推定が可能になると期待される。

引用文献

小林達雄編　2008 『小林達雄先生古希記念企画　総覧　縄文土器』 株式会社アム・プロモーション
久保和也・柳沢幸夫・山元孝広・駒澤正夫・広島俊男・須藤定久　2003 『20 万分の 1 地質図幅「福島」』産総研地質調査総合センター
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高　1999 「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－」『日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集』p.120 ～ p.121
日本の地質「東北地方」編集委員会　1989 『日本の地質 2　東北地方』 共立出版
大沢穠・三村弘二・久保和也・広島俊男・村田泰章　1986 『20 万分の 1 地質図幅「仙台」』 地質調査所
大沢穠・広島俊男・駒沢正夫・須田芳朗　1988 『20 万分の 1 地質図幅「新庄および酒田」』 地質調査所
パリノ・サーヴェイ株式会社　2010 「土器の胎土分析」『天王遺跡第 1・2 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 186 集　p.54 ～ p.60

Ⅴ　調査のまとめ

1　奈良・平安時代の様相

元宿北遺跡では奈良・平安時代、中世・近世の遺構と遺物が確認された（第 62 図）。各時代にわけて考察を述べたい。

奈良・平安時代の遺構であるが、SD1 河川跡、SX3 竪穴状遺構、SE4 井戸跡、SK5・10・17・18 ～ 21・25 土坑が該当する。調査区西側を北流すると考えられる SD1 は、奈良・平安時代には概ね埋没し浅い湿地のような状態であったと思われる。当河川跡には不要になった須恵器・土師器が廃棄されていた。河川跡の東側には土坑や竪穴状遺構が分布し、集落の一部として利用されていたものと思われる。井戸跡の存在より建物跡も存在した可能性は否定できないが後世の撹乱により消失したと推測され確認されていない。

次に、奈良・平安時代の遺物について検討する。第 63 図に須恵器の出土分布状況、第 64 図に土師器の出土分布状況を示した。最も出土量が多い遺物は須恵器である。第 63 図の出土状況では、SD1 河川跡の北東岸、I ～ K － 11 ～ 13、E － 10 グリッドからの出土が最も多い。また、SE4 井戸跡や SE7 井戸跡も出土量が多く、周辺でも少量ながら須恵器の出土が確認される。また、河川跡東側の SX3 や土坑群と周辺から、量は多くないものの広範囲に分布が認められる。第 64 図の土師器の出土状況であるが、出土量は須恵器より大分少ないが分布傾向は概ね同様の傾向がうかがわれる。

SD1 河川跡からは須恵器がまとまって出土し、少量の土師器が伴う（第 66 図）。須恵器は、坏、高台坏、稜碗、双耳坏、蓋、鉢、甕、壺、捏鉢、円面硯の器種が確認される。土師器は坏、甕、堝、支脚が出土している。須恵器坏は底部が回転ヘラ切りで、切り離し後にナデなどの再調整を行う個体が主体である。底部が回転糸切りの個体は認められない。また、高台が付く器種はほとんどが稜碗と考えられる。全体の器形が復元できる個体はないが、底部は回転ヘラ切りで切り離し後にナデによる再調整で底面を平滑に仕上げている。蓋はツマミ部の中央が窪むものと、窪むツマミの中心が少し突出するものがある。縁のカエリは直に明瞭に作出されるものと不明瞭なものがある。天井部は回転ヘラ切りと思われ、ナデやケズリの再調整が入る。河川跡出土資料のため一括資料といい難い面があるが、河川跡北側のブロックはまとまった出土状況を示す。坏や稜碗の特徴から判断すると、時期的に川西町壇山窯跡や米沢大神窯跡出土須恵器に対比される資料と考えられる（阿部・水戸 1999）。

米沢市大神窯跡、川西町壇山窯跡は、元宿北遺跡の南約 8.7km に位置する。大神窯跡は米沢市大字下小菅字大神に所在し、米沢市街地の北西部、川西町の境界と隣接する成島丘陵の山麓に立地する。平成 5 年に米沢市教育委員会による発掘調査が行われ、 2 基の窯跡、土坑、排水溝が検出された（米沢市教委 1998）。また、川西町壇山窯跡であるが、虚空蔵山から張り出した舌状丘陵に沿って東西 360 m、南北 420 mの範囲に分布する須恵器窯跡群で、昭和 41 年に山形大学の柏倉亮吉氏らによって調査が実施された。中郡村史の報告によると、大神窯跡の存在する箇所は、柏倉氏が確認した第 7 地点の可能性があるため、大神窯跡も広義の壇山窯跡群の範疇に含まれる可能性が高いとしている。（米沢市教委 1998）

このうち、大神窯跡の BN2 窯跡、灰原、DY3 土坑出土須恵器について当遺跡 SD1 出土須恵器と検討を行った。BN2 は稜碗、坏、蓋、壺、甕などの須恵器器種が出土している。稜碗・碗類はロクロ調整が荒く器面の砂粒が目立つ。底部切り離しは回転ヘラ切りであるが、底部の切り離し痕がそのまま残り、底部中央のヘラ切り痕を調整せずに盛り上がった状態のままになる個体が多い。胎土には白色の粒子が多く含まれる傾向がある。稜碗の高台は高く外側に開く形態で、元宿北遺跡出土遺物はそれよりも高台は低いようである。蓋は、ツマミ部縁辺の仕上げはやや尖った形状でカエリ部分のすぐ内側に平坦な面が形成されるものが大部分であるが、元宿北資料には認められない。元宿北遺跡 SD1 出土資料は大神窯跡 BN2 出土資料に該当するとは言い難い。

一方、BN2 窯跡よりも時期的に先行すると報告されている灰原および DY3 土坑出土資料を検討したところ、稜碗は高台がやや低く、底面の回転ヘラ切りの痕を二次調整のヘラケズリやナデによって平滑に仕上げる傾向が認められた。この傾向は元宿北遺跡の坏・稜碗に類似する。

以上より元宿北遺跡 SD1 出土資料は大神窯跡 BN2 に先行する灰原、DY3 出土資料や、壇山窯跡出土資料の年代に相当する可能性が高いと思われ、８世紀後葉頃と考えたい。

次に、他の遺構やグリッド出土の須恵器を検討する。SE4 井戸跡からは SD1 に次いで須恵器等の出土が多いが、覆土中に中世陶器が混入したり、底部がヘラ切りで二次調整がある須恵器坏 71 や底径がやや小さく回転糸切りとなる 74 などが出土しており時期的なまとまりに欠ける。また、90 や遺構外の 123 ～ 125 など、底部が回転糸切り調整の須恵器坏、130 など底部回転糸切りの高台付坏が出土している。これらは９世紀前半代に位置づけられると思われるが、まとまった出土状況を呈していない。遺跡内の撹乱で破壊された遺構や別地点での活動に由来する可能性も考えられる。

生産地については、同時期に操業していたと考えられる大神窯跡に由来するとは言えなかったが、壇山窯跡や遺跡北方の長井市の窯跡群との対比などによる生産地の検討が必要と思われる。なお、出土須恵器の胎土の内容も一律ではなく、須恵器の胎土分析の報告（第Ⅳ章第６節）では分析資料に生産地の違いがある可能性が指摘されている。

周辺の奈良・平安時代の遺跡について触れたい。遺跡の南西 250 m、元宿川の対岸の位置に八幡一遺跡がある（山形県埋文 2014）。当遺跡で検出された河川跡は元宿北遺跡の SD1 河川跡に続くと思われる。出土遺物では平安時代の須恵器・土師器などが出土し、「佛法為」の刻書が入った須恵器壺底部が出土している。しかし建物跡等は検出されていない。

遺跡の南側に隣接する治兵衛館遺跡では、平安時代の遺構として、竪穴住居跡が１棟、溝跡、土坑、柱穴が検出されている（川西町教委 1999）。平安時代の遺物は概ね９世紀前半代に収まるとされる。元宿北遺跡の時期と一部重なり、SD1 河川跡に遺物を廃棄した集落跡もこの遺跡に存在していた可能性があると思われる。また八幡一遺跡とも同時期であったと考えられる。

元宿北遺跡での遺物組成内容を概観すると、須恵器の出土重量が８割、土師器が２割と須恵器が占める割合が高い（表 28）。坏や稜碗などが 25％、蓋 9.8％と供膳具が一定の割合を占める（表 29）。また、円面硯が３点出土している。組成や硯の出土などから、一般的な集落跡の遺物出土様相とやや異なると考えられる。ただし検出遺構から明確な遺跡の性格づけを行うのは困難であるため、なお周囲の遺跡の調査状況を踏まえて検討が必要と思われる。

２　中世・近世の様相

中世に帰属すると考えられる遺構として、SE7 井戸跡、SE9 井戸跡がある。SE7 は、井戸跡が機能を失って埋戻された覆土中より 13 世紀代の中世陶器が出土した。また、井戸枠材の放射性年代測定では 11 世紀前半～ 12 世紀後半という所見が得られている。ただし、この年代に関連すると思われる陶磁器等は遺跡内から出土していないこと、井戸枠材は転用材を使用している可能性もあることを考慮し、平安時代末あるいは鎌倉時代に使用され、中世には廃絶されたと考えたい。また、SE9 は素掘りの井戸と思われ、底面からの出土木製品は放射性炭素年代測定で 13 世紀代という結果が得られている。井戸跡周囲には、中世の屋敷跡が存在していたと思われるが、削平のためか建物の柱穴は確認されなかった。

当遺跡の中世の遺物として、貿易陶磁の青磁、国産陶器では越前焼・須恵器系陶器・産地不明の瓷器系陶器が出土している（第 66 図）。

青磁は鎬蓮弁文が施される青磁碗（153）、小破片であるが内面に劃花文が施される青磁碗（154・155）、無文の体部破片が認められる。鎬蓮弁文の青磁は 13 世紀後半から 14 世紀頃、劃花文の青磁は 13 世紀代と考えられる。この他、無文の体部破片 156 は胎土・焼成があまり良好ではなく時期的に後出と思われる。

須恵器系陶器は、86（SE4-F4）・94（SE7-F）・158（遺構外）の体部破片のみが出土し、13 世紀頃かそれ以後と考えられる。

越前焼は甕 160（遺構外）・162（遺構外）が出土した [1)]。体部破片のため詳細な年代観は不明である。161

は越前焼に類似する瓷器系陶器甕の体部破片で平行線と×を組み合わせるスタンプ文が認められる。福井県西山窯跡群出土の越前焼に類似するスタンプ文があるが全く同一ではない。西山窯跡群の資料は主に13世紀後半時期と考えられ（福井県埋文1999）、これに近い年代の可能性も考えられる[2)]。

この他、甕85（SE4-F2）・93（SE7-F2）・104（SD8）・鉢95（SE7-F2）・159（遺構外）が出土している。93は胎土に小礫や白色の粒子が入る。生産地は不明であるが北陸方面の窯跡の可能性もある[3)]。

中世陶磁器は、13世紀代を中心とする遺物群が比較的出土している。それ以後の時期は青磁片などがあるが点数が少ない。第65図に中世陶器の出土重量分布を示した。出土地点は限られており、SE4やSD9とその東側のグリッド、SE7などに確認される。

周囲の中世の遺跡としては治兵衛館遺跡（川西町教委1999）がある。当館跡の築城者は那須治兵衛、戦国期の時期とされる（山形県教委1995）。発掘調査では掘跡の一部や、中世に帰属する可能性がある井戸跡などが確認されている。遺物は内耳土鍋や瓦質の擂鉢などが出土しており15～16世紀代と思われる。

元宿北遺跡の中世遺構や出土遺物の時期は、鎌倉期にさかのぼるものであり、報告書に掲載されている遺物等から判断する治兵衛館よりも古い時期となる。

また、元宿川の西側対岸である八幡一遺跡では、中世の井戸跡や柱穴群が検出された。13～14世紀代と考えられる青磁や陶器なども出土している（山形県埋文2014）。元宿北遺跡の同時期に存在した集落跡と考えてもよさそうである。

鎌倉時代の当地域は伊達氏侵攻以前の長井氏の支配下にあったと考えられる。また遺跡に近い大塚城は大塚氏を城主とする鎌倉期の築城とされ、元宿北遺跡は大塚地区や周辺の在地の領主に帰属する集落の一つに帰属されるものと思われる。なお、周辺遺跡の調査の進捗を含め、周辺城館や集落との関係を検討する必要がある。

近世以降の様相であるが、この時期に帰属する遺構はSD2溝跡がある。建物などは検出されていない。主に耕作地として利用されていたと考えられる。陶磁器であるが、出土状況にまとまりは認められず、ほとんどが遺構外出土である。

江戸時代に帰属する陶磁器であるが、肥前系陶磁器では、江戸前期頃と思われる陶器皿（163）や、17世紀後半～18世紀前半頃の陶器碗（164）、磁器染付碗（178）がある。産地不詳であるが、17世紀代と思われる擂鉢（175）がある。その他産地不明の陶磁器は、陶器（168）、陶器土瓶（170）、陶器徳利（172）、磁器染付碗（179）が認められるが江戸後期や終末のものと思われる。成島焼（174）もこの時期に伴うと思われる。

註

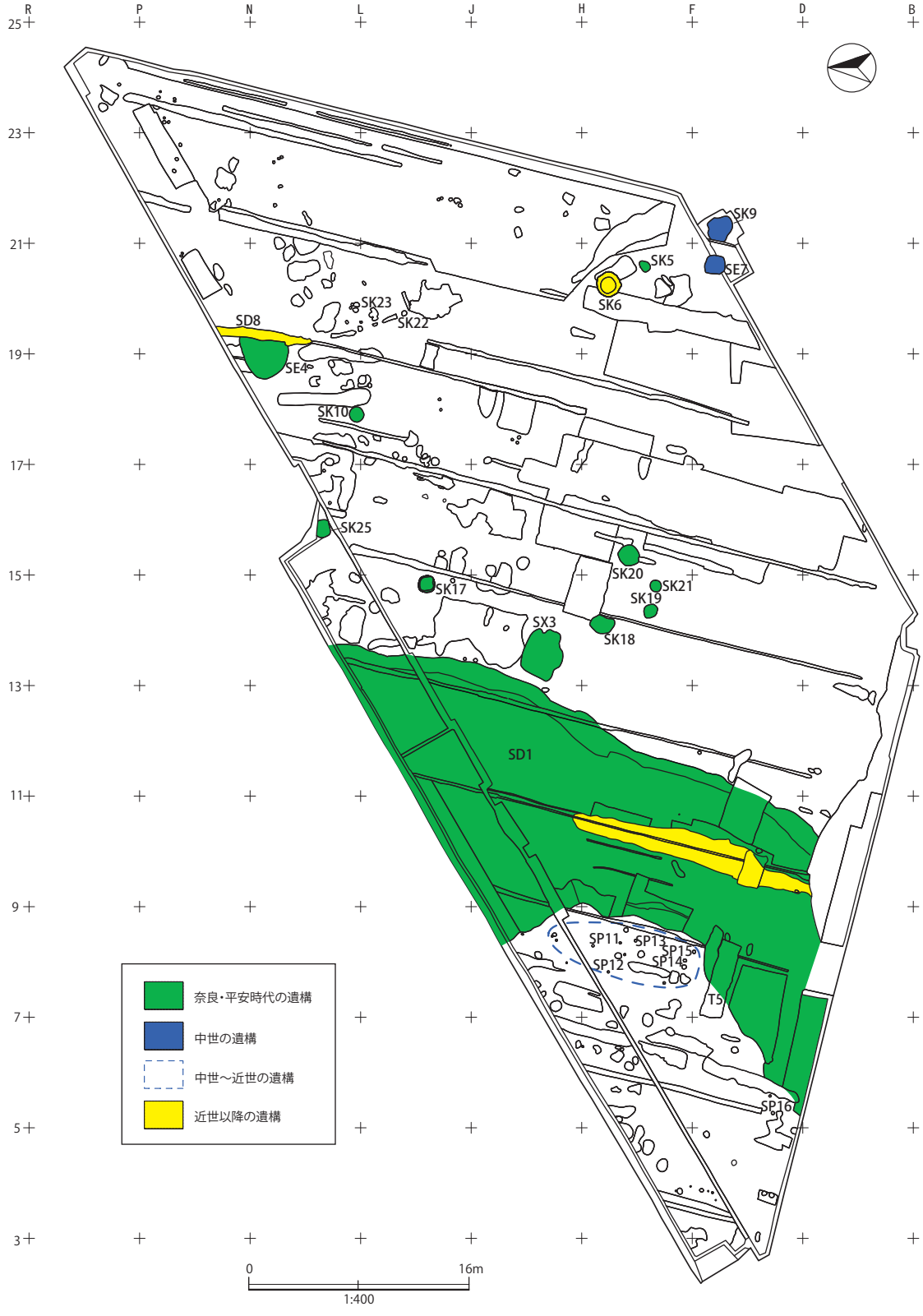
1）　福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにおける資料比較検討で越前焼との所見をいただいた。

2）　福井県西山窯跡群で報告されているスタンプ文には類似する資料はあるが平行線文が縦方向になることや、胎土の含有物の相違などがあり、越前焼に類似するが断定できないという見解をとることとした。

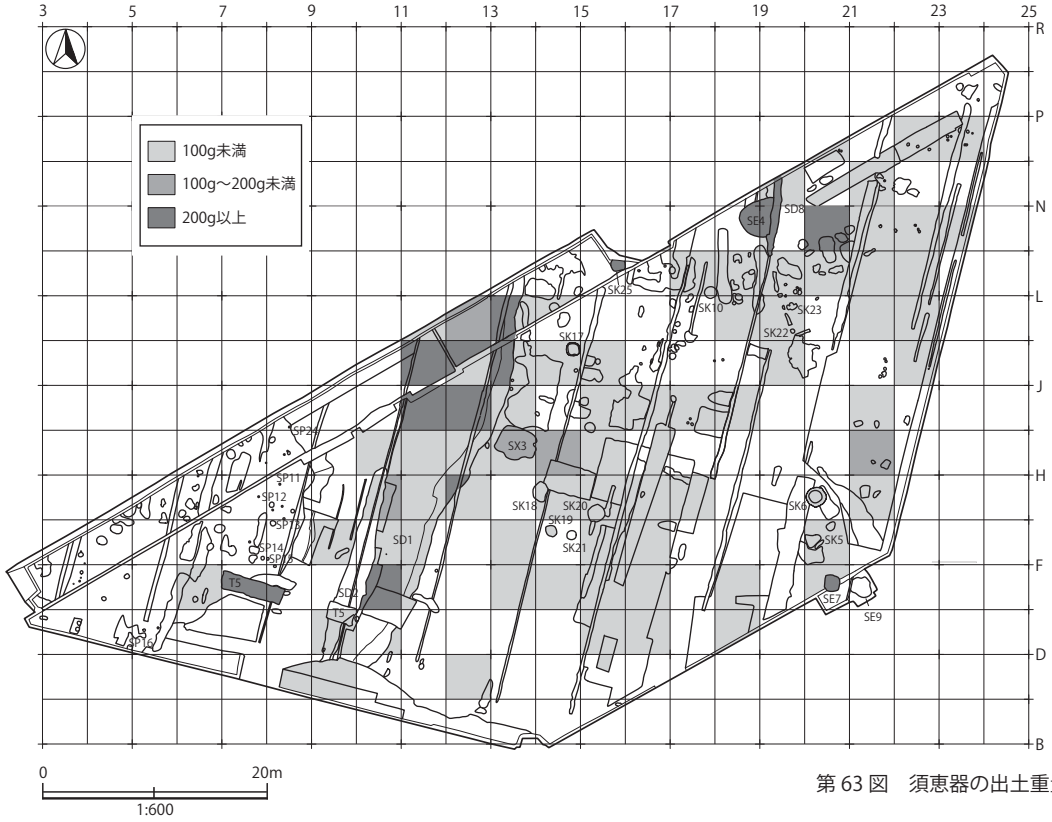
3）　新発田市教育委員会で新発田城跡出土の中世陶器や新発田市内の窯跡出土遺物に該当するものがあるかどうか比較検討を行った。その結果、元宿北遺跡の産地不明の瓷器系陶器は胎土に白色の小礫をやや多く含み、笹神窯の製品に類似するものがあるが底部の作り出しが相違する点などが認められることから笹神窯の製品と断定はできないものの、未知の北陸産陶器の可能性も否定できないという結果であった。市教育委員会の鶴巻氏によれば、笹神窯の可能性がある資料としては、南陽市上野遺跡第１次調査の資料が該当するという（山形県埋文2006・報告書第39図34・38・40）。13世紀後半と考えられる時期で、胎土に荒い石英や長石粒が多く、口縁の上段に段を設けるのも特徴として認められる（第39図38）。新潟県埋蔵文化財センターが調査を行った赤坂窯（新潟県埋蔵文化財センター2002）がこの遺物と類似している。赤坂窯は笹神窯群の南限にあたり、阿賀野市（旧安田町）に所在する。

引用・参考文献

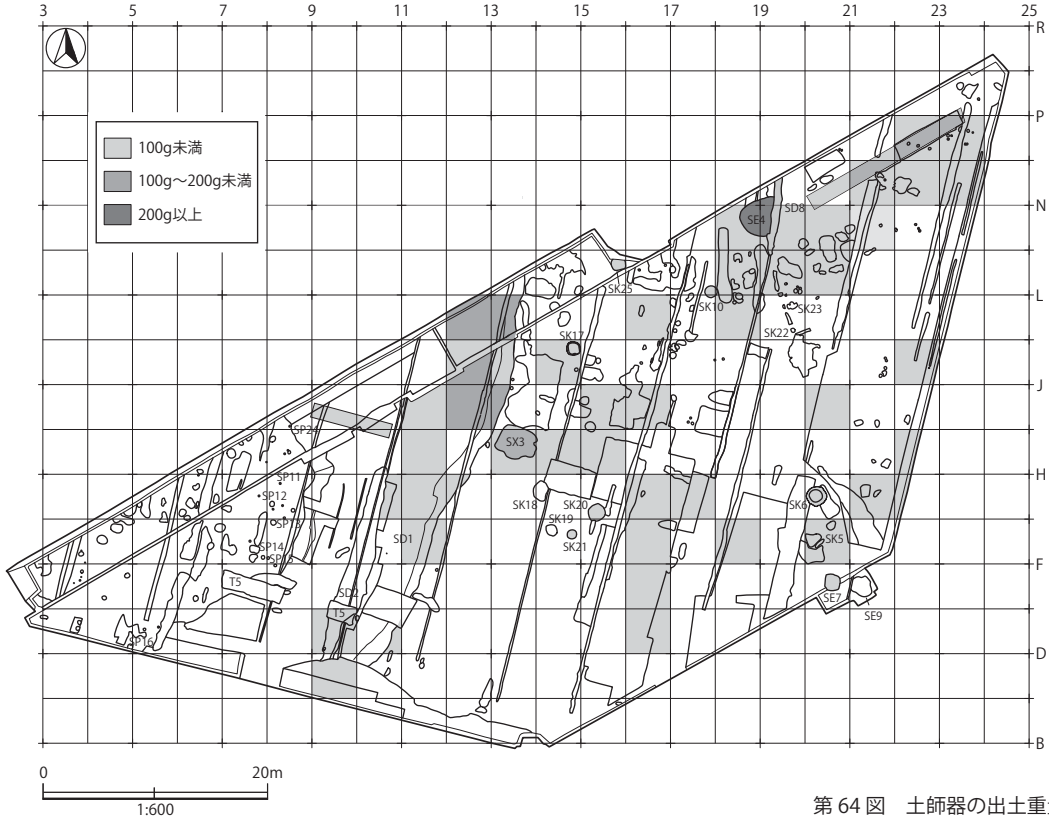
阿部明彦・水戸弘美　1999 「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』p.63～p.112　古代城柵官衙遺跡検討会
川西町教育委員会　1999 『治兵衛館遺跡発掘調査報告書』 川西町埋蔵文化財調査報告書第17集
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　2014 『八幡一遺跡発掘調査説明資料』
福井県教育庁埋蔵文化財センター　1999 『西山窯跡群』 福井県埋蔵文化財調査報告第45集
山形県教育委員会　1995 『山形県中世城館遺跡調査報告書第1集（置賜地域）』
米沢市教育委員会　1998 『大神窯跡発掘調査報告書』 米沢市埋蔵文化財報告書第57集



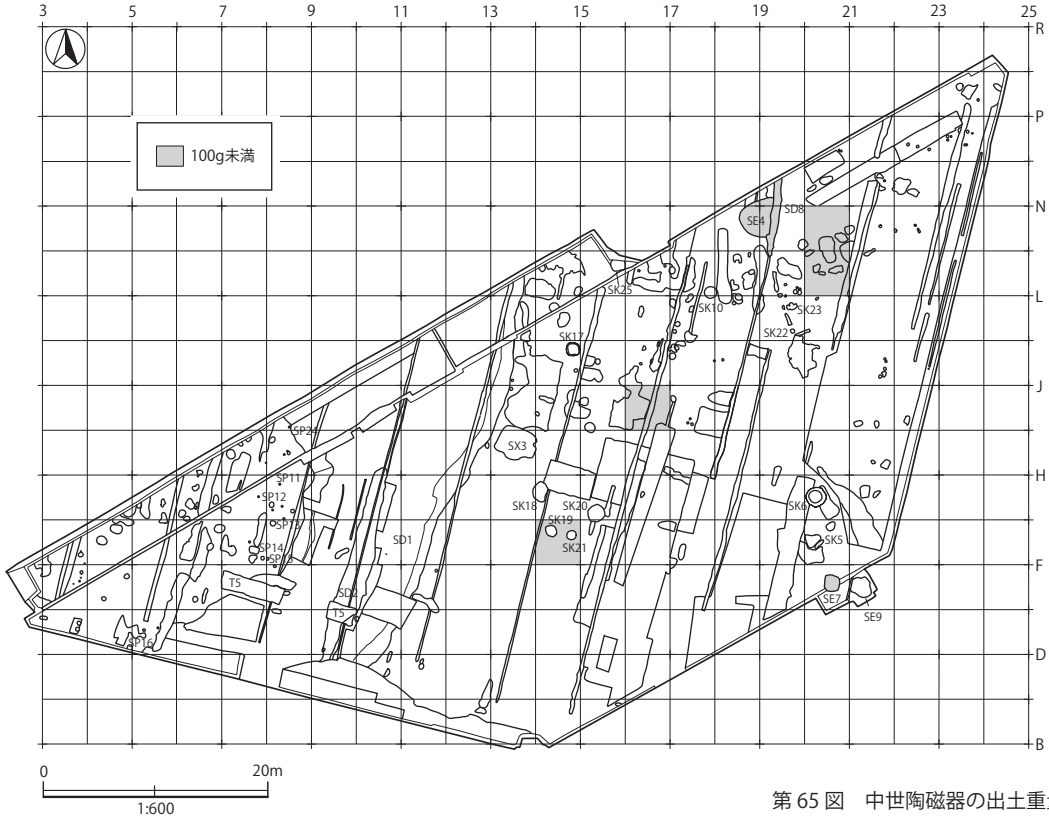
第 62 図　時期別遺構分布



第 63 図　須恵器の出土重量分布



第 64 図　土師器の出土重量分布



第 65 図　中世陶磁器の出土重量分布

表 28　SD1 出土須恵器・土師器重量

	重量（g）	%
須恵器	4,874	83.67
土師器	951	16.33
合計	5,825	100.00

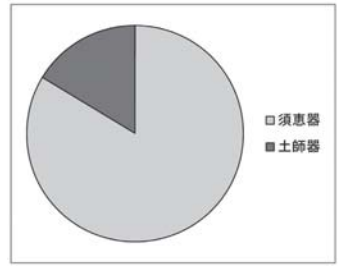
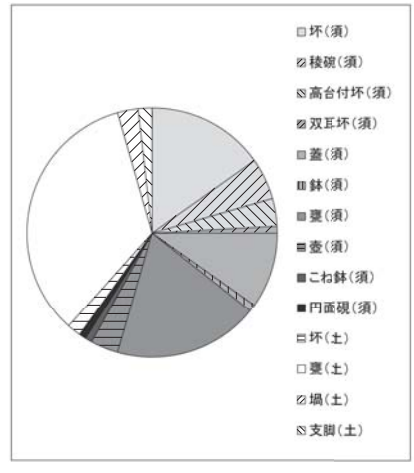
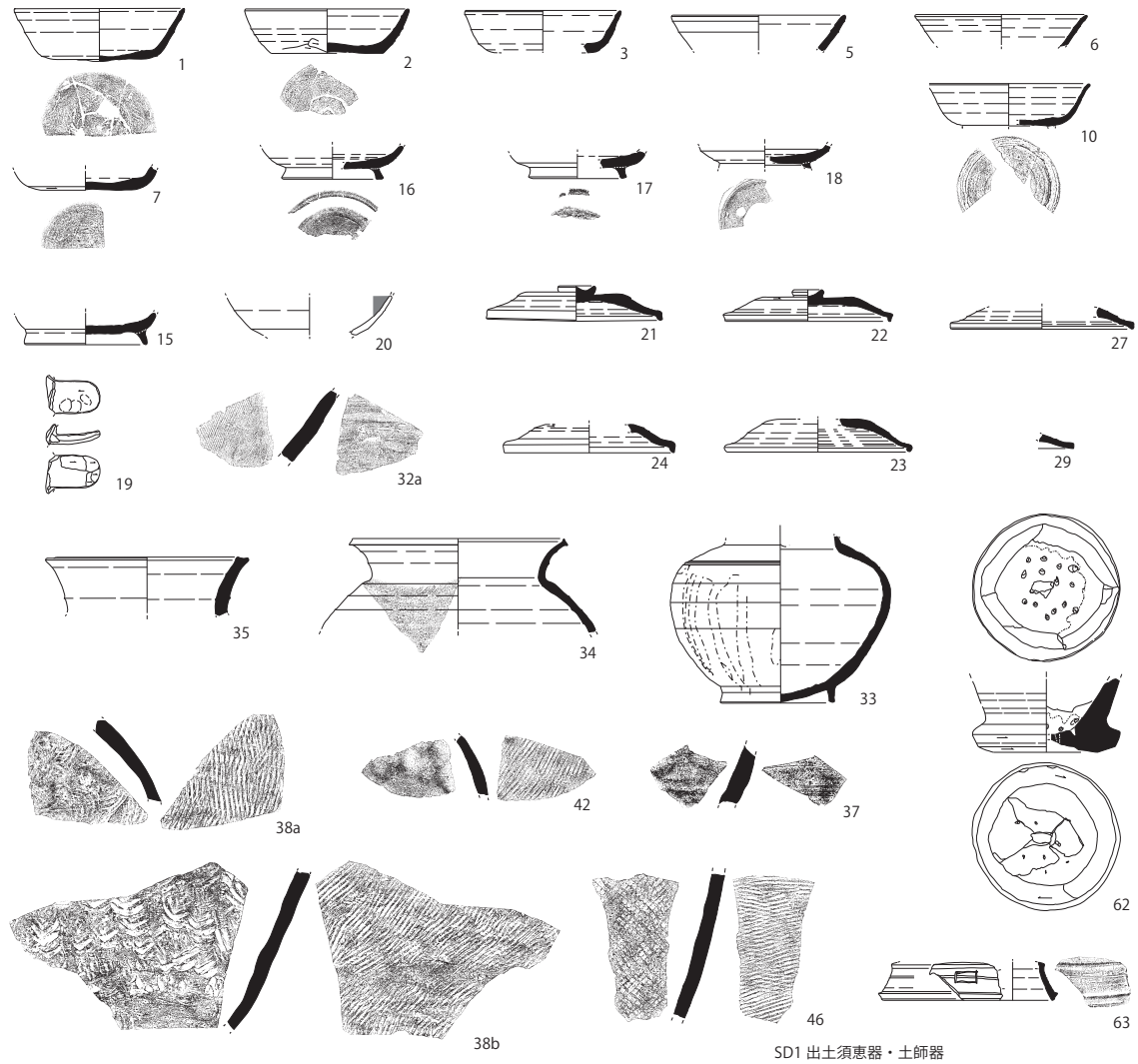


表 29　SD1 出土須恵器・土師器出土点数

種別	器種	掲載遺物		掲載外遺物		合計	%
		口縁	その他	口縁	その他		
須恵器	坏	6	3	5	3	17	15.18%
	稜碗	0	6	0	0	6	5.36%
	高台付坏	1	2	0	1	4	3.57%
	双耳坏	0	1	0	0	1	0.89%
	蓋	9	2	0	0	11	9.82%
	鉢	0	1	0	0	1	0.89%
	甕	3	14	0	4	21	18.75%
	壺	2	1	0	1	4	3.57%
	こね鉢	0	1	0	0	1	0.89%
	円面硯	1	0	0	0	1	0.89%
土師器	坏	1	0	0	1	2	1.79%
	甕	0	6	2	30	38	33.93%
	堝	1	0	0	2	3	2.68%
	支脚	0	2	0	0	2	1.79%
		24	39	7	42	112	100.00%



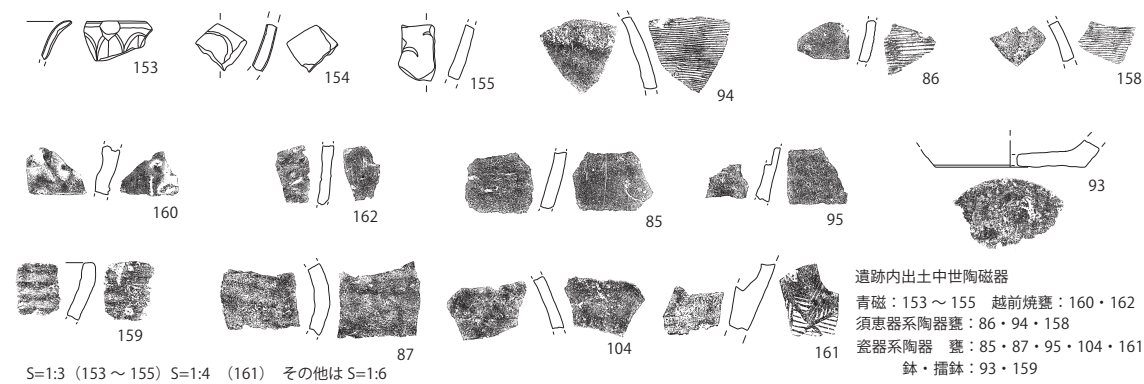


SD1 出土須恵器・土師器

須恵器　坏：1～3・5～7　稜碗：16～18
高台付坏：10・15　双耳坏：19　鉢：32
蓋：21～24・27・29　壺：33～35
甕：37・38・42・46　こね鉢：62
円面硯：63

土師器　坏：20　甕：54　鍋：53　支脚：60

S=1:6



遺跡内出土中世陶磁器

青磁：153～155　越前焼甕：160・162
須恵器系陶器甕：86・94・158
瓷器系陶器　甕：85・87・95・104・161
鉢・擂鉢：93・159

S=1:3（153～155）S=1:4　（161）　その他は S=1:6

第 66 図　SD1 出土須恵器・土師器・遺跡内出土中世陶磁器集成図

写真図版

遺跡遠景（北東から）

調査区全景（北西から）

調査区近景（調査前：西から）

1 区表土除去（北から）

1 区面整理作業（北から）

1 区 SE4 精査状況（南西から）

SE7 井戸枠取り上げ作業

1 区北西壁西端断面（西から）

1 区北西壁中央部断面（西から）

1 区北西壁東端断面（南西から）

1 区遺構検出状況（南西から）

1 区 SD1 河川跡検出状況（南西から）

1 区完掘状況（北から）

1 区東側完掘状況（北から）

2 区 SD1 河川跡検出状況（南西から）

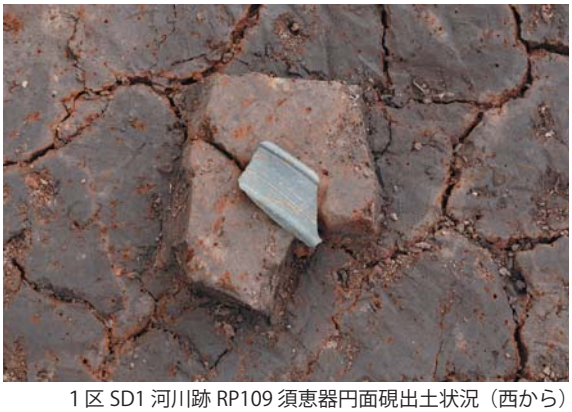
1 区北西壁断面（南東から）

1 区 SD1 河川跡南側断面（南西から）

1 区 SD1 河川跡 RP43 ～ 45 須恵器蓋出土状況（北東から）

1 区 SD1 河川跡 RP110 須恵器こね鉢出土状況（西から）

1 区 SD1 河川跡 RP61 須恵器壺出土状況（北東から）



1 区 SD1 河川跡 RP109 須恵器円面硯出土状況（西から）

1 区 SD1 河川跡遺物出土状況（北東から）

1 区 SD1 河川跡遺物出土状況（北東から）

1 区 SD1 河川跡完掘状況（北東から）

1 区 SE4 井戸跡断面（西から）

1 区 SE4 井戸跡断面（北から）

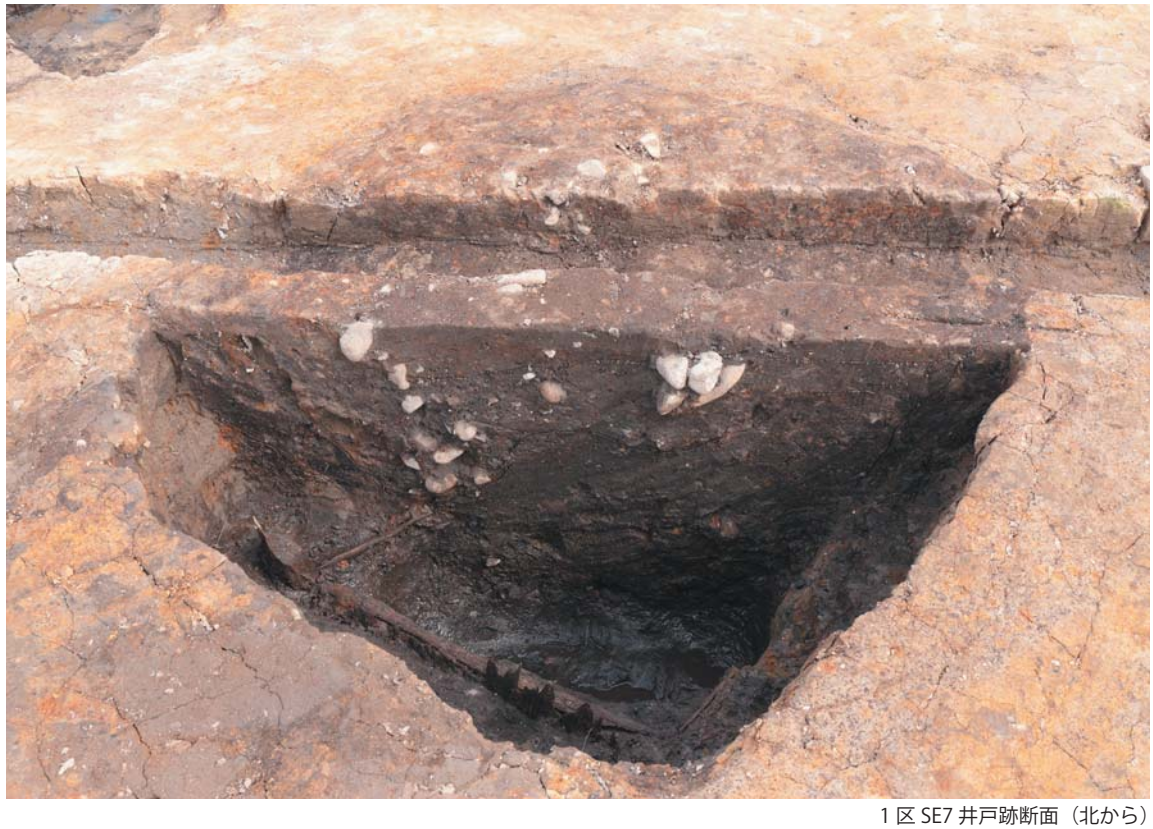
1 区 SE4 井戸跡完掘状況（西から）

1 区 SE4 井戸跡 RP33 須恵器坏出土状況（北から）

1 区 SE4 井戸跡 RP58 須恵器坏出土状況（西から）

1 区 SX3 竪穴状遺構遺物出土状況（北西から）

1 区 SX3 竪穴状遺構完掘状況（西から）



1 区 SE7 井戸跡断面（北から）

1 区 SE7 井戸跡 RP32 須恵器系陶器出土状況（西から）

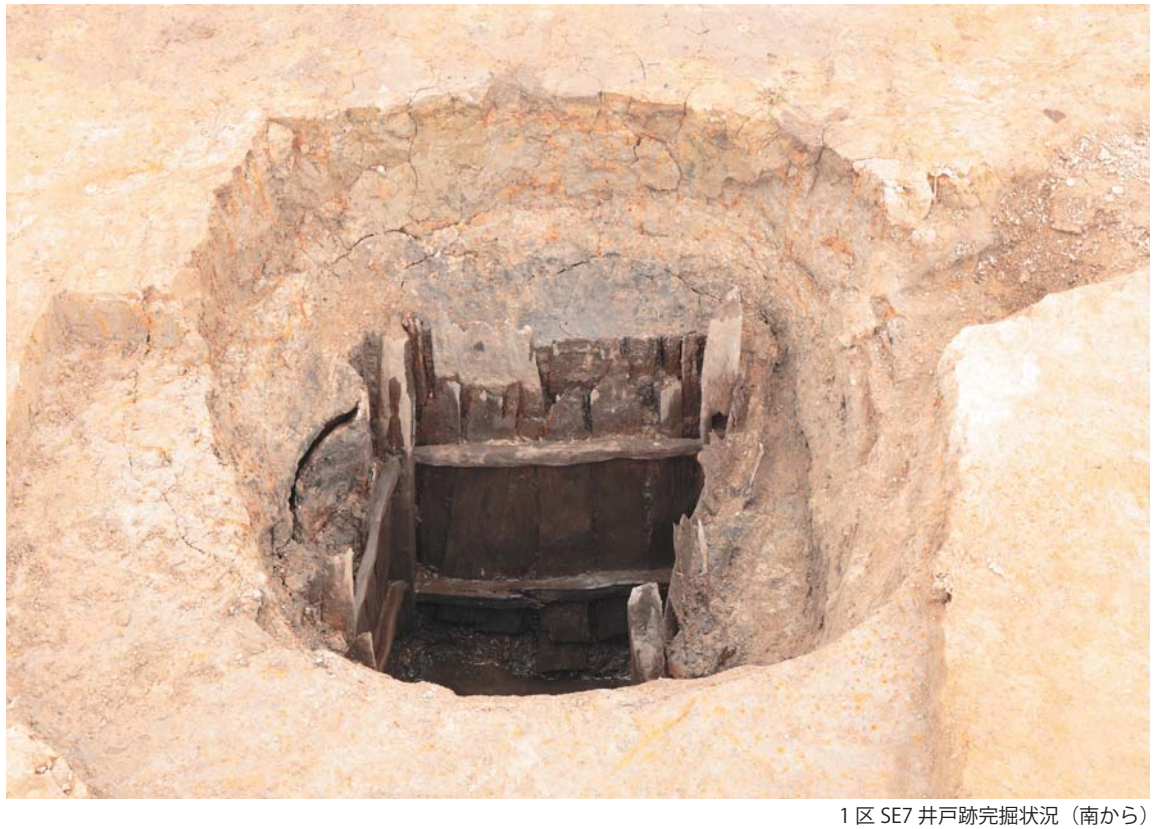
1 区 SE7 井戸跡内木製品出土状況（南東から）

1 区 SE7 井戸跡精査状況（西から）

1 区 SE7 井戸枠断面（南から）

1 区 SE7 井戸跡曲物出土状況（西から）

1 区 SE7 井戸跡 RW103 出土状況（南から）



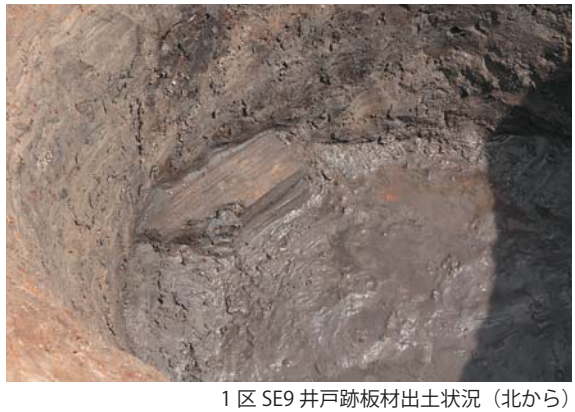
1 区 SE7 井戸跡完掘状況（南から）

1 区 SE7 井戸跡西面井戸枠（東から）

1 区 SE9 井戸跡断面（南から）

1 区 SE9 井戸跡完掘状況（北から）

1 区 SE7・9 井戸跡完掘状況（北から）



1 区 SE9 井戸跡板材出土状況（北から）

1 区 SE9 井戸跡精査状況（北から）

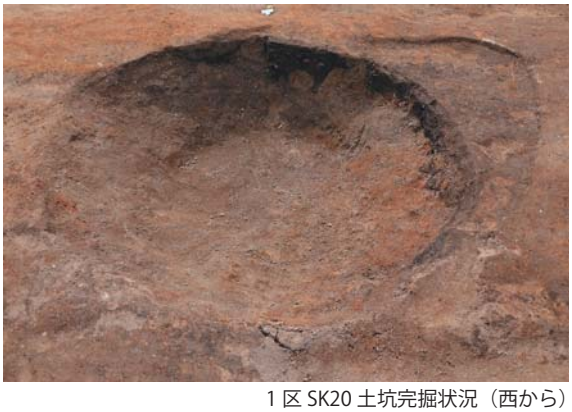
1 区 SK5 土坑断面（南東から）

1 区 SK5 土坑完掘状況（西から）

1 区 SK19 土坑断面（南から）

1 区 SK19 土坑完掘状況（西から）

1 区 SK20 土坑断面（南から）



1 区 SK20 土坑完掘状況（西から）

1 区 SK21 土坑断面（北西から）

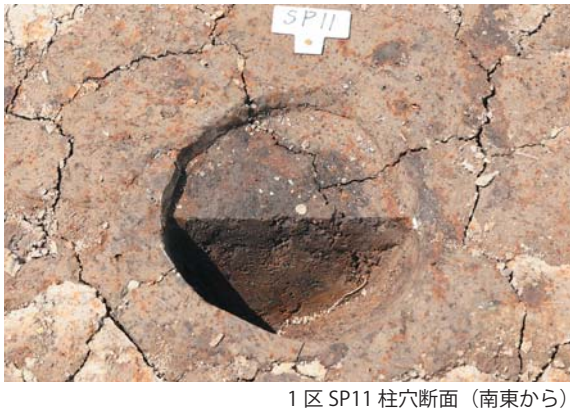
1 区 SK21 土坑完掘状況（北から）

1 区 SK22 土坑 RQ19 砥石出土状況（東から）

1 区 SK23 土坑断面（東から）

1 区 SK25 土坑断面（北西から）

1 区 SK25 土坑完掘状況（西から）



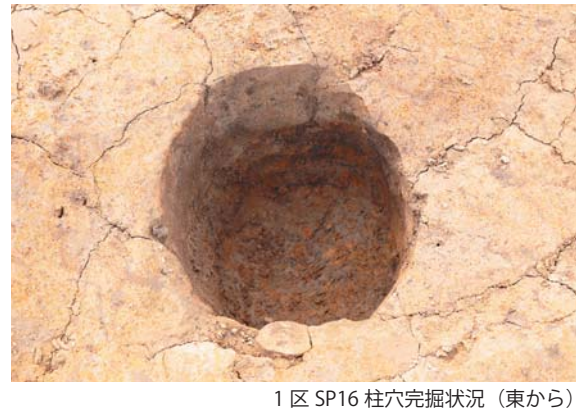
1 区 SP11 柱穴断面（南東から）

1 区 SP12 柱穴断面（南東から）

1 区 SP13 柱穴完掘状況（南東から）

1 区 SP14 柱穴断面（南東から）

1 区 SP15 柱穴断面（南東から）



1 区 SP16 柱穴完掘状況（東から）

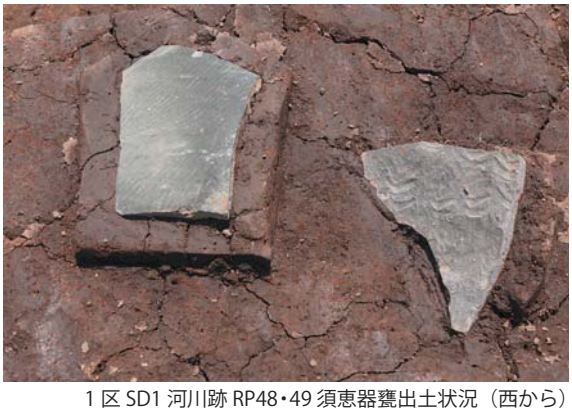
1 区 SP24 柱穴断面（南東から）

1 区 RP1 青磁出土状況（南東から）

1 区 RP12 須恵器甕出土状況（北東から）

1 区 SD1 河川跡 RP68 土師器甕出土状況（南から）

1 区河川跡 SD1RP40~42・112 須恵器壺出土状況（北東から）



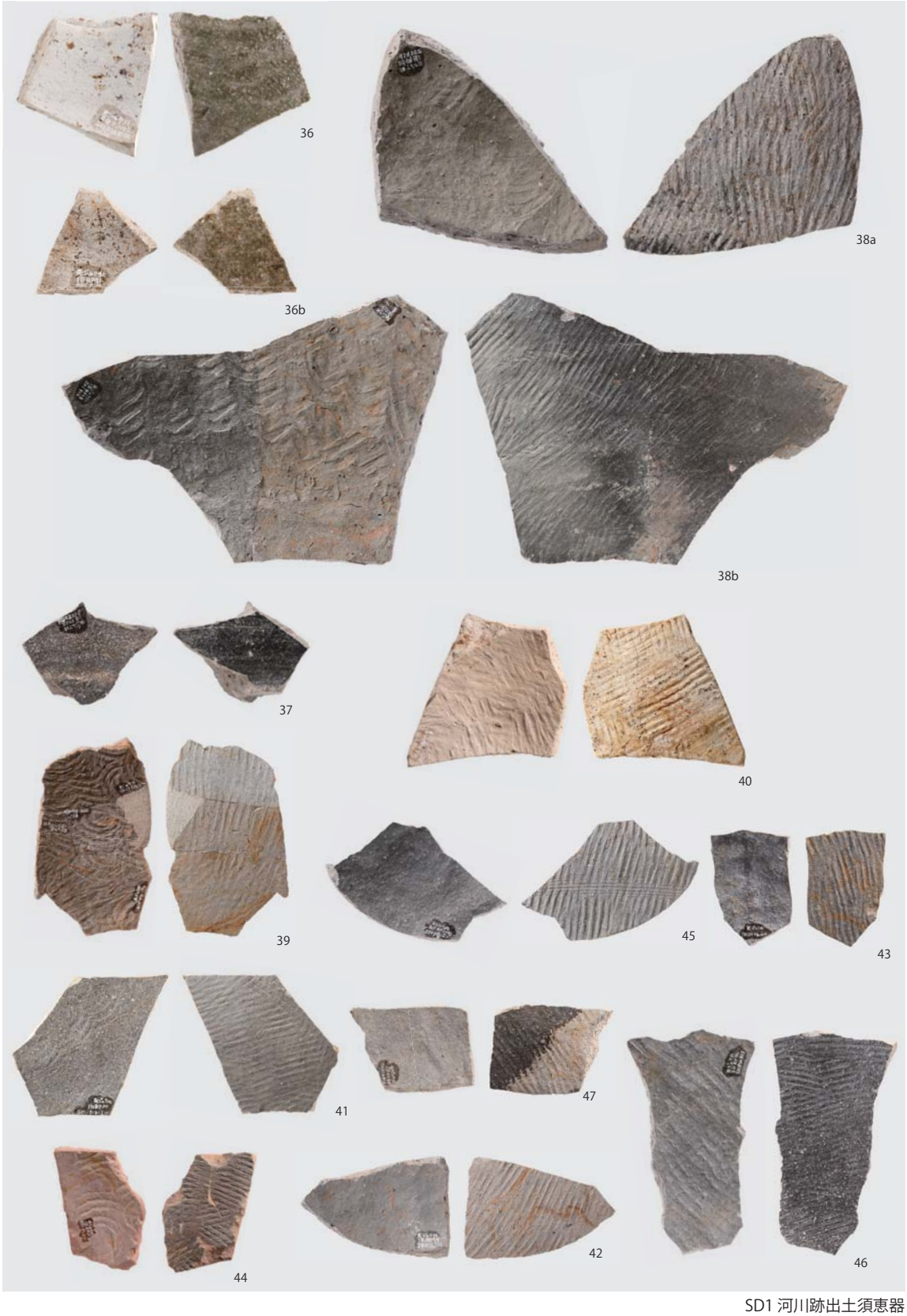
1 区 SD1 河川跡 RP48・49 須恵器甕出土状況（西から）

2 区 SD1 河川跡 RP88 須恵器甕出土状況（北から）

1 区 SD1 河川跡 RP132 須恵器稜碗出土状況（北から）

SD1 河川跡出土須恵器

SD1 河川跡出土須恵器



SD1 河川跡出土須恵器

SD1 河川跡・SX3 竪穴状遺構・SD8 溝跡出土須恵器・土師器・陶器

SE4・7 井戸跡・SK5 土坑出土須恵器・土師器・陶器

SE7・9 井戸跡・SD8 溝跡・SK18・20・23・25 土坑出土須恵器・土師器・陶器

SK25 土坑・遺構外出土須恵器・土師器

遺構外出土須恵器・土師器・陶磁器

遺構外出土陶磁器・土器・土製品

188a

188b

189

190a

190b

SE7 井戸跡出土木製品（曲物）

191a

192a

191b

SE7 井戸跡出土木製品（曲物）

192b

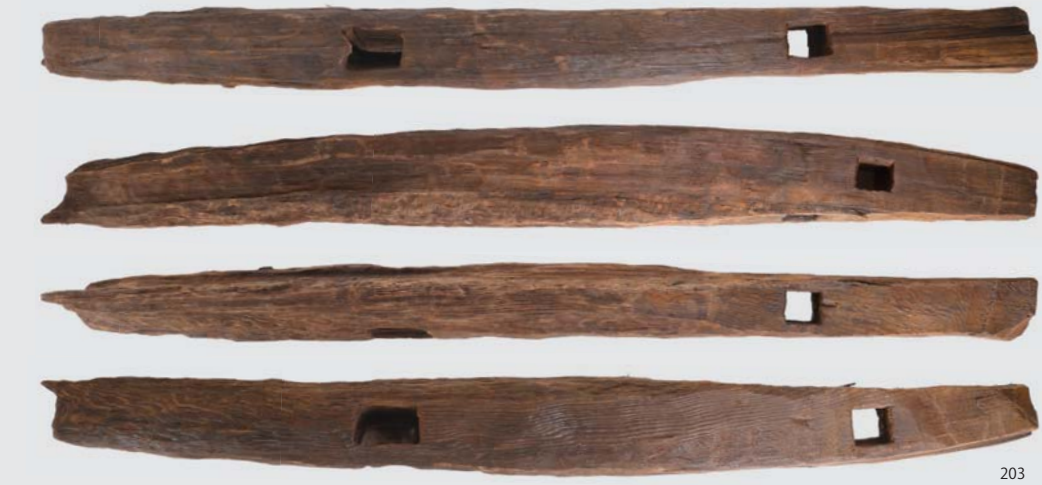
193a

193b

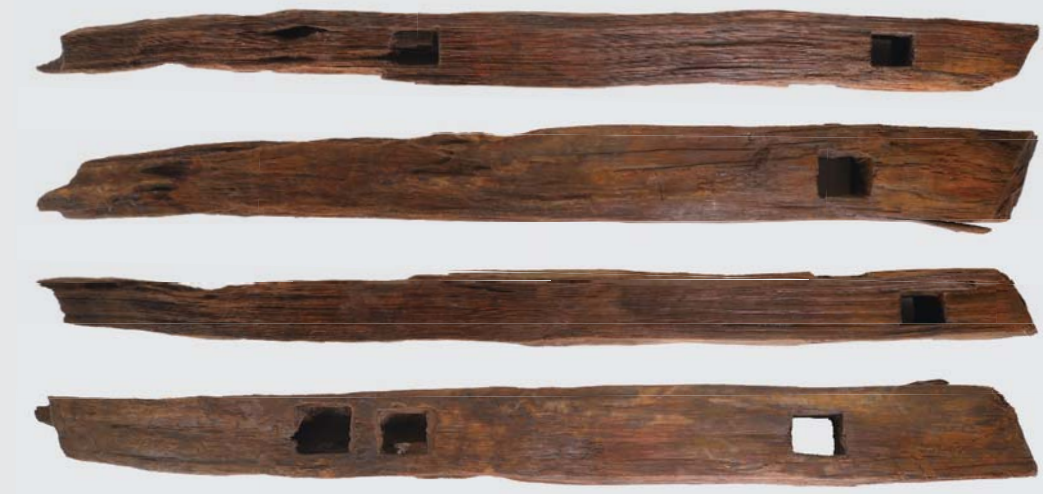
SE7 井戸跡出土木製品（曲物）

SE7 井戸跡出土木製品（曲物・加工材・板材）

SE7 井戸跡出土木製品（板材・井戸枠材）



203



204

205

SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）

SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）

SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）

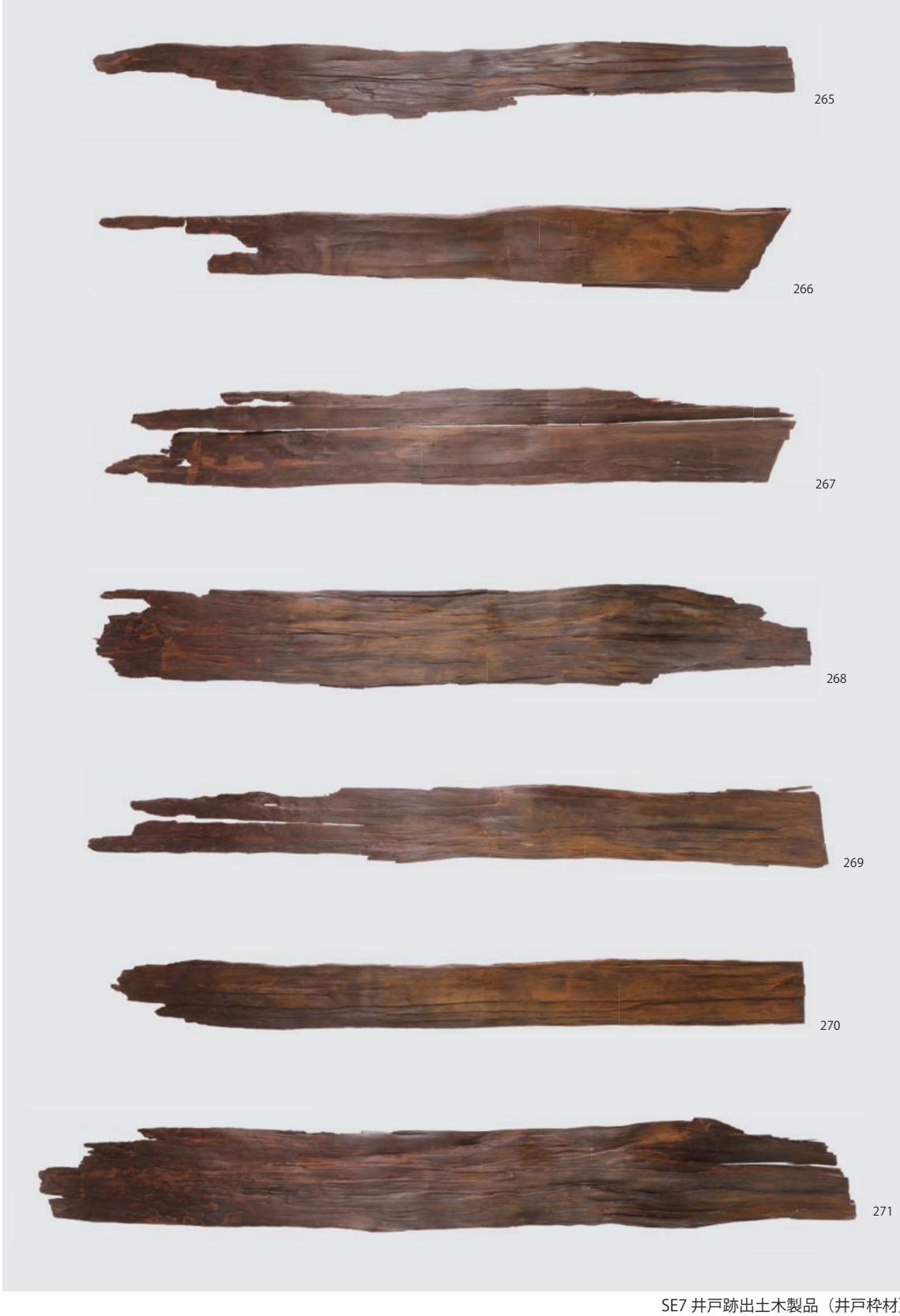
SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）

SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）

SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）

SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）

SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）



SE7 井戸跡出土木製品（井戸枠材）

SE7・9 井戸跡出土木製品（井戸枠材・板材）

金属製品・石製品

報告書抄録

ふりがな	もとじゅくきたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	元宿北遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第223集
編著者名	菅原哲文　髙柳俊輔
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3246　山形県上山市中山字壁屋敷5608番地　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
もとじゅくきた 元宿北 いせき 遺跡	やまがたけん 山形県 かわにしまち 川西町 おおあざにしおおつか 大字西大塚 あざもとじゅくきた 字元宿北	6382	382-193	38°　2′　45″	140°　4′　4″	20130520 ～ 20130920	3,000	一般国道113号梨郷道路事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
もとじゅくきた 元宿北 いせき 遺跡	集落跡	奈良・平安時代	井戸跡　1 河川跡　1 土坑　9 竪穴状遺構　1	須恵器 土師器	奈良・平安時代の河川跡を中心に8世紀後葉の土器がまとまって出土。3点の円面硯なども出土した。中世では、2基の井戸跡が検出され、SE7には井戸枠が残されていた。 （文化財認定箱数：21）
		中世	井戸跡　2 河川跡　1 柱穴	陶磁器 木製品 石製品	
		近世	溝跡	陶磁器 木製品 石製品	

要約

最上川に合流する元宿川の東岸の谷底平野に立地する。標高は約206ｍを測る。奈良･平安時代、中世、近世の複合遺跡である。

奈良・平安時代では、河川跡１条、井戸跡１基、竪穴状遺構１基、土坑などが検出された。河川跡には、８世紀後葉の須恵器がまとまって廃棄され、河川跡の東側には土坑や竪穴状遺構が分布する。また、３点の円面硯が出土し、官衙や寺院などに関連する施設が付近に存在する可能性が考えられる。

中世は鎌倉時代頃と推定される２基の井戸跡が検出された。SE7には井戸枠が良好な状態で残され、曲物などの木製品も出土した。遺物は、青磁や須恵器系陶器、越前焼などが出土した。調査事例が少ない当地域の中世集落の様相や陶磁器の流通の一端を明らかにすることができた。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 223 集

元宿北遺跡発掘調査報告書

2015 年 3 月 31 日発行

発行　公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地
電話　023-672-5301
印刷　株式会社アサヒ印刷
〒 990 - 2251　山形県山形市立谷川 2 丁目 486-14
電話　023-686-4331